

埼玉県春日部市
神明貝塚総括報告書

2018

春日部市教育委員会



1. 神明貝塚空中写真（平成21年11月撮影、貝層範囲を加筆）



1. 神明貝塚空中写真（昭和23年12月撮影）
（出典：国土地理院、USA-R2232-72を加工して利用）



2. 神明貝塚空中写真（昭和31年3月撮影）
（出典：国土地理院、USA-M331-91を加工して利用）



1. 地表面における貝層散布状況



2. 貝層堆積状況（11次調査）



1. 7号住居跡 (11次調査)



2. 5号人骨 (12次調査)

序

関東平野のほぼ中央に位置する春日部市は、西方に大宮台地が、そして東方には下総台地と呼ばれる二つの台地面が控え、その狭間には関東平野最大で最も低位な沖積地である中川低地が広がります。約6,000年前の縄文海進では中川低地に奥東京湾の入り江が深く進入し、海産資源の恵みによって多数の貝塚とムラが築かれました。その後に生じた海退現象の頃に人々の営みと生業が織りなす暮らしの舞台となったのが、下総台地上に占地した、この神明貝塚です。本貝塚は奥東京湾の最奥地に築かれ、現在もなお、その形状をほぼ完全に残す台地に刻まれた貴重な文化遺産であり、埼玉県重要遺跡の一つとしても、長らく注目されてきました。

春日部市教育委員会では、このような神明貝塚の重要性を鑑み、良好に保存された状態を末永く恒久的に維持することを目的に、平成21年度から8ヵ年にわたって保存目的の調査に取り組みました。今回、これまでの調査成果を総合的に分析し、神明貝塚の実態と重要性を明確にした総括報告書を刊行する運びとなりました。本書が神明貝塚を具象化し、奥東京湾の貝塚研究と埋蔵文化財の保護を一層図るための資料として活用されることを切に願っております。

最後に総括報告書の刊行に至るまで、文化庁文化財部記念物課ならびに埼玉県教育委員会をはじめ、土地所有者の方々と、数多くの関係者の皆さまからのご協力とご理解を賜り、心から感謝申し上げます、本書の序といたします。

平成30年3月23日

春日部市教育委員会

教 育 長 植 竹 英 生

例 言

1. 本書は、埼玉県春日部市西親野井字神明647番外に所在する神明貝塚について、これまでの調査成果を総括した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 神明貝塚が所在する埼玉県北葛飾郡庄和町は隣接する春日部市と市町合併（新設）を実施し、平成17年10月1日に新たな春日部市が成立したため、本書で遺跡の所在を示す際に「北葛飾郡庄和町(村)」と「春日部市」が混在する場合がある。
3. 神明貝塚における、これまでの調査の概要は、下記のとおりである。2・4次調査は庄和町費で実施し、3・5～12次調査は各年度の国庫・県費補助事業として実施した。

【発掘調査】

- | | | |
|------|--------------------------------------|-------------------------|
| 1次調査 | 調査期間：昭和36年8月9日～昭和36年8月13日 | 調査面積：約60㎡ |
| | 所在地：埼玉県北葛飾郡庄和村大字西親野井字神明647番付近（詳細は不明） | |
| | 調査機関：埼玉県立浦和第一女子高等学校郷土研究部 | |
| | 調査担当者：柳田 敏司、小林 茂 | |
| 2次調査 | 調査期間：昭和40年8月10日～昭和40年8月16日 | 調査面積：171㎡ |
| | 所在地：埼玉県北葛飾郡庄和町大字西親野井字神明646番1外 | |
| | 調査機関：庄和町教育委員会 | |
| | 調査担当者：柳田 敏司、早川 智明、横川 好富、小林 達雄 | |
| 3次調査 | 調査期間：昭和54年2月20日～昭和54年3月20日 | 調査面積：810㎡ |
| | 所在地：埼玉県北葛飾郡庄和町大字西親野井字神明373番外 | |
| | 調査機関：庄和町教育委員会 | 調査担当者：庄野 靖寿 |
| 4次調査 | 調査期間：平成14年12月2日～平成15年1月29日 | 調査面積：229.5㎡ |
| | 所在地：埼玉県北葛飾郡庄和町大字西親野井字神明624番外 | |
| | 調査機関：庄和町教育委員会 | 調査担当者：荏原 淳、長谷川 清一、鬼塚 知典 |
| 5次調査 | 調査期間：平成22年2月1日～平成22年3月30日 | 調査面積：272㎡ |
| | 所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明653番外 | |
| | 調査機関：春日部市教育委員会 | 調査担当者：中野 達也、鬼塚 知典、越智 俊夫 |
| 6次調査 | 調査期間：平成23年1月11日～平成23年3月11日 | 調査面積：356㎡ |
| | 所在地：埼玉県春日部市西親野井647番外 | |
| | 調査機関：春日部市教育委員会 | 調査担当者：中野 達也、鬼塚 知典、越智 俊夫 |
| 7次調査 | 調査期間：平成23年10月3日～平成23年12月8日 | 調査面積：244㎡ |
| | 所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明627番外 | |
| | 調査機関：春日部市教育委員会 | 調査担当者：中野 達也、鬼塚 知典、越智 俊夫 |
| 8次調査 | 調査期間：平成24年10月1日～平成24年10月9日 | 調査面積：約1,000㎡ |
| | 所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明650番外 | |
| | 調査機関：春日部市教育委員会 | 調査担当者：中野 達也、鬼塚 知典、越智 俊夫 |
| 9次調査 | 調査期間：平成26年1月14日～平成26年2月14日 | 調査面積：100㎡ |
| | 所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明623番2外 | |

調査機関：春日部市教育委員会 調査担当者：中野 達也、鬼塚 知典、越智 俊夫
10次調査 調査期間：平成26年 6 月23日～平成26年10月30日 調査面積：144㎡

所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明647番外

調査機関：春日部市教育委員会 調査担当者：中野 達也、鬼塚 知典、越智 俊夫
11次調査 調査期間：平成27年 7 月21日～平成27年12月25日 調査面積：168㎡

所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明647番外

調査機関：春日部市教育委員会 調査担当者：中野 達也、森山 高、越智 俊夫
12次調査 調査期間：平成28年 5 月23日～平成28年10月31日、平成29年 1 月23日～平成29年 2 月21日
調査面積：344㎡

所在地：埼玉県春日部市西親野井字神明654番

調査機関：春日部市教育委員会 調査担当者：中野 達也、森山 高、越智 俊夫

【整理作業・報告書刊行】

期 間：平成22年度～平成29年度

調査機関：春日部市教育委員会

担 当 者：中野 達也、森山 高、鬼塚 知典、越智 俊夫、岡本 直也

4. 本書の執筆は、中野、森山、越智、岡本が担当し、文責については各々文末に記した。なお、下記のとおり、第V章自然科学分析の一部について、その分析及び原稿執筆を外部の方々に依頼し、玉稿を賜った（代表者・敬称略）。

第3節 脊椎動物遺体 植月 学（弘前大学）

第5節 人骨 (1) 奈良 貴史（新潟医療福祉大学）、(2) 安達 登（山梨大学）、(3) 米田 穰（東京大学総合研究博物館）

第6節 土器付着炭化物 吉田 邦夫（東京大学総合研究博物館）

第7節 赤色付着物 本多 貴之（明治大学）

第8節 灰状物質 阿部 芳郎（明治大学）

第9節 沖積層 (2) 遠藤 邦彦（日本大学）、(3) 能城 修一（明治大学黒耀石研究センター）、(4) 工藤 雄一郎（国立歴史民俗博物館）、(5) 吉川 昌伸（古代の森研究舎）、(6) 佐々木 由香（明治大学黒耀石研究センター）、(7) 能城 修一

5. 下記のとおり、自然科学分析の業務委託を行い、その成果の一部について第V章に掲載した。

オールコアボーリング調査（平成25年度） 服部地質調査株式会社

ボーリング採取試料科学分析（平成25年度） パリノ・サーヴェイ株式会社

土壌・灰状物質科学分析（平成25年度） パリノ・サーヴェイ株式会社

土壌サンプル堆積物微細形態分析（平成26年度） パリノ・サーヴェイ株式会社

貝殻成長線分析（平成26年度、平成29年度） 株式会社パレオ・ラボ

炭化種実及び炭化材の同定並びに年代測定（平成27年度、平成28年度） 株式会社パレオ・ラボ

6. 神明貝塚における現況測量調査は、昭和53年度に中央航業株式会社、平成21年度に株式会社東京航業研究所に委託した。

7. 本書に掲載した実測図は、1～4次調査については、再実測が必要なものを除き、既刊報告書等をスキャンし、Adobe社製Photoshop CS6を用いて加工した。5～12次調査については、遺構は原図をスキャン

し、Adobe社製Illustrator CS6を用いてトレースを行った。遺物は、担当者及び作業員による実測・トレースを行った。

8. 本書に掲載した写真は、遺構については各調査担当者が、遺物については越智が撮影した。なお、遺構写真については35mmモノクロフィルム及びリバーサルフィルムを用い、必要に応じてデジタルカメラでも随時撮影した。遺物写真はデジタルカメラを用いて撮影した。
9. これまでの発掘調査に伴う出土遺物及び記録類等は春日部市教育委員会で保管している。なお、2次調査出土の人骨については、新潟大学で保管している。
10. 現地での調査から本書刊行に至るまで次の機関、諸氏よりご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である。(順不同、敬称略)

文化庁、埼玉県教育委員会、埼玉県立歴史と民俗の博物館、埼玉県立さきたま史跡の博物館、埼玉県立浦和第一女子高等学校、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、東部地区文化財担当者会、さいたま市教育委員会、さいたま市遺跡調査会、松伏町教育委員会、川口市教育委員会、富士見市教育委員会、野田市教育委員会、市川市教育委員会、袖ヶ浦市教育委員会、北区教育委員会、一戸町教育委員会、横須賀考古学会、禰宜田 佳男、水ノ江 和同、森先 一貴、小倉 均、青木 秀雄、杉崎 茂樹、中村 誠二、書上 元博、村田 章人、佐藤 康二、君島 勝秀、栗島 義明、吉田 稔、渡辺 清志、島村 薫、田中 和之、奥野 麦生、小宮 雪晴、磯野 治司、斉藤 成元、青木 文彦、吉岡 卓真、和田 晋治、高田 和徳、領塚 正浩、野内 秀明、天野 賢一、野坂 知弘、村澤 正弘、小川 勝和、中村 哲也、馬場 信子、鈴木 直人、安武 由利子、山本 華、早坂 仁敬、田中 大介、目黒 まゆ美、須賀 博子、西野 雅人、関根 俊雄、河井 伸一、田中 祐樹、戸谷 敦司、黒住耐二、樋泉 岳二、吉田 讓、野口 真利江、一木 絵里、坪田 弘子、大熊 佐智子、小栗 信一郎、中村 幹夫、斎藤 あや、横川 貴男、中島 広顕、掛谷 崇、亀田 直美

11. 発掘調査及び整理事業にあたっては、次の方々の参加を得た。

【1次調査】吉田 金一、吉田 勝彦、宮島 秀夫、九里 幾久雄、新田 純弘、川村 道子、古山 千紗子、斎藤 由美子、島田 多喜子、島村 勝巳、高橋 八代恵、田口 和子、中村 幸子、奈良部 泰子、峰島 琇、吉原 美智子、高山 世子、山崎 祐子、横田 節子、中島 裕子、藤原 玲子、岩本 亮子、花垣 トシ子、寺田 照子、日向 道子、関根 三千代、長須 孝子

【2次調査】金子 浩昌、小片 保、稲岡 嘉彰、末岡 熙彰、田畑 美津子、安孫子 昭二、谷本 鋭次、大場 範久、可児 通宏、中村 貞史、西脇 俊郎、橋本 正、中山 公子、河野 実、西家 稔、埼玉県立春日部女子高等学校郷土研究部、庄和町立葛飾中学校社会クラブ

【3次調査】針谷 浩一、仲野 紀己子、池田 国蔵、山口 とし、大久保 とき、大久保 勝江、名倉 いち、斎藤 敏子、川島とい、島村 もと、小林 なか、白石 よね、加藤 圭子、加藤 なみ子、草野 恵、島村 薫、野口 真由美、大野 静香

【4次調査】渥美 あき子、今関 ゆかり、佐藤 重男、佐藤 雄治、野島 美智子、松岡 光子、渡辺 美智子

【5～12次調査・整理事業】今関 ゆかり、遠藤 幸雄、大上 薫、大久保 明夫、押野 美恵子、加瀬 正義、小林 英美子、小林 秀樹、作山 智子、桜井 光二、佐藤 けい子、柴田 鎮夫、芝田 武、下川 政子、鈴木 真美子、高橋 利己、根本 八重子、野島 美智子、野原 忠男、淵上 加代子、増澤 勝実、安井 陽子、山崎 玲子、坂本 匠、岡本 樹、岸田 快生、友野 嵩也、大鐘 直人、寺田 圭介

調査組織

春日部市教育委員会（平成21～29年度）

教 育 長 植竹 英生（平成21年度～）

社会教育部長 河井 輝久（～平成21年度）、高橋 時夫（平成22・23年度）、木村 浩巳（平成24・25年度）、大山 祐二（平成26年度～）

社会教育部次長 本田 次男（～平成22年度）、大山 祐二（平成23～25年度）、白石 雅昭（平成26～28年度）、関根 敦夫（平成29年度～）

文化財保護課長 井上 修（～平成22年度）、大塚 武（平成23年度）、中野 達也（平成24年度～）

文化財担当主幹 大塚 政孝（～平成23年度）、中野 達也（～平成23年度）、長谷川 清一（平成21年度～）、森山 高（平成29年度～）

文化財担当主査 徳島 延幸（平成23年度）、成川 雅夫（平成24・25年度）、鬼塚 知典（平成24年度～）、森山 高（平成25～28年度）、越智 俊夫（平成27年度～）

文化財担当主任 根本 崇（～平成22年度、26年度～）、鬼塚 知典（～平成23年度）、森山 高（～平成24年度）、越智 俊夫（平成23～26年度）、村井 幸子（平成24～27年度）、藤原 宏行（平成24～26年度）、高橋 憲和（平成27・28年度）、須賀 千春（平成28年度～）

文化財担当主事 越智 俊夫（～平成22年度）、岡本 直也（平成29年度～）

調査指導者

（順不同、敬称略）

小林 達雄（平成22年度～、國學院大學名誉教授、考古学）

阿部 芳郎（平成27年度～、明治大学文学部教授、考古学）

横川 好富（平成22年度～、春日部市文化財保護審議会会長、考古学）

金子 直行（平成22年度～、（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団、考古学）

平社 定夫（平成22年度～、春日部市文化財保護審議会委員、地質学）

植月 学（平成24年度～、弘前大学准教授、動物考古学）

凡 例

1. 第1、3図は、国土地理院公表の地図データ（1：色別標高図、3：淡色地図）を加工して作成した。
2. 第2図は、（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団より提供を受けた図面を加工して作成した。
3. 第4、6図は、春日部市発行の地図を加工して作成した。
4. 第5、162図は、千葉県袖ヶ浦市教育委員会より提供を受けた図面「第2図 東京湾と貝塚の分布 2016『山野貝塚総括報告書』袖ヶ浦市教育委員会」及び国土地理院公表の地図データ（許可番号：平成29年4月5日付け袖教生15号）を加工して作成した。
5. 第7図は、現況測量調査の成果物を加工して作成した。
6. 第156、159、160、161図は、樋泉岳二 1999「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民俗博物館研究報告』81（国立歴史民俗博物館）掲載図を加工して作成した。
7. 図版類の方位は地図類が真北（T.N.）を、遺構図は座標北（G.N.）を示す。
なお、抄録掲載の経緯度は世界測地系に基づくものである。
8. 断面図中のレベル数値はすべて標高（単位：m）を表す。
9. 挿図の縮尺は原則的に以下のとおりとするが、個別にもスケールを付して表示した。
遺構 …… 住居跡、土坑：1/60 焼土跡、灰溜り、墓：1/30
遺物 …… 土器：1/4 その他の遺物：1/2、1/3
10. 挿図中のスクリーントーンは下記のような状況を表す。

(土層)								
暗褐色土	褐色土	明褐色土	埋戻土	黒褐色土	黄褐色土	暗黄褐色土	暗灰褐色土	灰褐色土
灰	硬化面	赤褐色土	朱色焼土	灰混	焼土混	炭混	炭化材	
完形貝 微量	完形貝 少量	完形貝 中量	完形貝 多量	破碎貝 微量	破碎貝 少量	破碎貝 中量	破碎貝 多量	(遺物) 繊維

目次

口 絵

序

例 言

調査組織

調査指導者

凡 例

目 次

第I章 総括報告書の目的

第1節 保存目的の調査の必要性……………1

第2節 調査から総括報告書作成までの経緯…2

第II章 立地と環境

第1節 立地と地理的環境……………3

第2節 歴史的環境……………7

第III章 調査の沿革

第1節 神明貝塚の概要……………13

第2節 調査の概要……………16

第IV章 貝塚の調査

第1節 貝層分布範囲の確認調査……………23

第2節 貝塚北部、中央部、開口部の調査……………27

第3節 貝塚東部の調査……………71

第4節 貝塚南部の調査……………89

第5節 貝塚西部の調査……………152

第V章 自然科学分析

第1節 分析の概要……………155

第2節 貝類……………157

第3節 脊椎動物遺体……………170

第4節 植物遺体……………177

第5節 人骨……………205

第6節 土器付着炭化物……………224

第7節 赤色付着物……………230

第8節 灰状物質……………236

第9節 沖積層……………244

第VI章 神明貝塚の特徴と重要性

第1節 大型環状貝塚の形成……………307

第2節 灰層を伴う燃焼遺構の特徴……………312

第3節 焼失住居跡及び床面被熱住居跡の
検討……………325

第4節 汽水域における資源利用と
生産活動……………329

第5節 神明貝塚の重要性……………338

写真図版……………347

報告書抄録

図版目次

第1図	遺跡位置図	3	第34図	東部調査区全体図	72
第2図	遺跡周辺の地形図	4	第35図	4号住居跡及び炉跡、7号土坑	73
第3図	宝珠花支台周辺の縄文集落	7	第36図	6号土坑	74
第4図	神明貝塚と周辺の遺跡群	8	第37図	東部4次調査(外周部)出土土器	75
第5図	奥東京湾周辺の縄文時代後晩期の 主な遺跡	10	第38図	東部7次調査(外周部)出土土器	76
第6図	遺跡範囲図	14	第39図	東部5、7次調査(内周部)出土土器	77
第7図	神明貝塚調査地点図	17	第40図	東部7次調査(内周部)出土土器	78
第8図	貝層範囲確認調査地点	24	第41図	東部9次調査(内周部)出土土器	80
第9図	2、3号住居跡、出土土器	26	第42図	東部出土石器(1)、 その他の出土遺物(1)	81
第10図	北部～開口部調査区全体図	29	第43図	東部出土石器(2)	82
第11図	12次調査基本土層(1)	31	第44図	東部出土石器(3)	85
第12図	12次調査基本土層(2)	32	第45図	東部出土石器(4)、 その他の出土遺物(2)	86
第13図	12次調査第1～3面検出遺構	35	第46図	南部調査区全体図	91
第14図	12次調査焼土跡(1)	36	第47図	11次調査第1面遺構配置図	93
第15図	12次調査焼土跡(2)	37	第48図	11次調査第2面遺構配置図	95
第16図	12次調査焼土跡(3)、灰溜り	39	第49図	11次調査第3面遺構配置図	97
第17図	12次調査墓	41	第50図	11次調査第4面遺構配置図	99
第18図	12次調査住居跡、土坑	43	第51図	11次調査基本土層(1)	101
第19図	12次調査住居跡炉跡、土坑	47	第52図	11次調査基本土層(2)	103
第20図	北部12次調査A区西出土土器(1)	49	第53図	11次調査焼土跡(1)	109
第21図	北部12次調査A区西出土土器(2)	50	第54図	11次調査焼土跡(2)	110
第22図	北部12次調査A区東出土土器(1)	52	第55図	11次調査焼土跡(3)	111
第23図	北部12次調査A区東出土土器(2)	53	第56図	11次調査焼土跡(4)、灰溜り(1)	112
第24図	北部12次調査B区西出土土器(1)	55	第57図	11次調査灰溜り(2)	113
第25図	北部12次調査B区西出土土器(2)	56	第58図	2次調査住居跡、墓	116
第26図	北部12次調査B区東出土土器	58	第59図	7号住居跡	118
第27図	北部12次調査C区出土土器	60	第60図	9号住居跡	120
第28図	北部12次調査C～G区出土土器	61	第61図	5、8号住居跡炉跡、1～3、 9号土坑	122
第29図	北部出土石器(1)	63	第62図	南部11次調査出土土器(1)	124
第30図	北部出土石器(2)、 その他の出土遺物(1)	64	第63図	南部11次調査出土土器(2)	125
第31図	北部出土石器(3)	66	第64図	南部11次調査出土土器(3)	126
第32図	北部出土石器(4)	67	第65図	南部11次調査出土土器(4)	127
第33図	北部出土石器(5)、 その他の出土遺物(2)	68	第66図	南部11次調査出土土器(5)	128

第67図	南部11次調査出土土器 (6) ……………129	第98図	11次調査出土炭化材の走査型 電子顕微鏡写真 (1) ……………182
第68図	南部11次調査出土土器 (7) ……………130	第99図	11次調査出土炭化材の走査型 電子顕微鏡写真 (2) ……………183
第69図	南部10次調査出土土器 (1) ……………132	第100図	神明貝塚から出土した炭化種実 (1) ……191
第70図	南部10次調査出土土器 (2) ……………133	第101図	神明貝塚から出土した炭化種実 (2) ……192
第71図	南部2次調査出土土器 (1) ……………135	第102図	出土炭化材のウィグルマッチング 結果……………199
第72図	南部2次調査出土土器 (2) ……………136	第103図	年代測定を行った木材と 年輪計測結果……………201
第73図	南部2次調査出土土器 (3) ……………137	第104図	出土炭化種実の暦年校正結果……………203
第74図	南部6次調査出土土器 ……………138	第105図	神明貝塚3号人骨……………206
第75図	南部1次調査出土土器 ……………139	第106図	神明貝塚3号人骨残存部位……………206
第76図	南部出土石器 (1)、 その他の出土遺物 (1) ……………141	第107図	神明貝塚4号人骨……………208
第77図	南部出土石器 (2)、 その他の出土遺物 (2) ……………142	第108図	神明貝塚4号人骨残存部位……………208
第78図	南部出土石器 (3) ……………143	第109図	神明貝塚5号人骨……………209
第79図	南部出土石器 (4) ……………145	第110図	神明貝塚5号人骨残存部位……………209
第80図	南部出土石器 (5) ……………146	第111図	Multiplex M- I およびN- I の結果 ……215
第81図	南部出土石器 (6) ……………147	第112図	Multiplex N- III の結果 ……………215
第82図	南部出土石器 (7)、 その他の出土遺物 (3) ……………148	第113図	神明貝塚出土人骨の炭素・窒素同位 体比と日本列島の代表的な食料資源 から期待される範囲の比較……………219
第83図	西部調査区全体図 ……………153	第114図	神明貝塚出土人骨3点の 校正放射性炭素年代……………220
第84図	西部5次調査出土遺物 ……………154	第115図	神明貝塚及び東京湾東岸の 縄文時代後期人骨における 炭素・窒素同位体比の比較……………222
第85図	ヤマトシジミ (左殻) 殻長計測結果 ……162	第116図	神明貝塚安定同位体測定結果グラフ…226
第86図	貝殻成長線分析における二枚貝の 計測点と切断箇所 ……………163	第117図	西根遺跡のC/N比と土器容量 ……………228
第87図	Walford法による各年齢における 殻高サイズ ……………165	第118図	資料No. 1 のPy-G C/MS測定結果 ……231
第88図	Walford法による分析試料の 各年齢における殻高サイズ ……………166	第119図	資料No. 1 のED-XRF測定結果 ……………232
第89図	サンプル別の採集季節 ……………167	第120図	資料No. 2 (赤色部) の ED-XRF測定結果 ……………233
第90図	殻長・殻高によるサンプル別の 年齢分布 ……………168	第121図	資料No. 2 (白色部) の ED-XRF測定結果 ……………233
第91図	サンプル別の採集年齢 ……………169	第122図	資料No. 2 (茶色部) の ED-XRF測定結果 ……………233
第92図	現地採取 脊椎動物遺体組成 ……………172		
第93図	現地採取 魚類遺体組成 ……………173		
第94図	現地採取 哺乳類遺体組成 ……………173		
第95図	コラムサンプル 脊椎動物遺体組成 ……174		
第96図	コラムサンプル 魚類遺体組成 ……………175		
第97図	コラムサンプル 魚類遺体組成 ……………175		

第123図	資料No. 3 (赤色部) の ED-XRF測定結果 ……………234	第143図	春日部市西宝珠花No. 1, No. 2 コアと 周辺地域との地質層序の比較……………275
第124図	資料No. 3 (黒色部) の ED-XRF測定結果 ……………234	第144図	ボーリングコアにおける分析試料の 位置……………279
第125図	資料No. 4 のED-XRF測定結果 ……………234	第145図	¹⁴ C年代測定結果の暦年較正年代 プロット図……………283
第126図	7号住居跡炉の灰サンプル採取位置…237	第146図	神明貝塚の周辺のボーリングコア 採取地点……………285
第127図	炉内灰の上位層中の珪藻化石の 顕微鏡写真……………240	第147図	神明貝塚コアの地質柱状図と 分析試料採取層準……………286
第128図	神明貝塚の竪穴住居炉内出土の 微小貝付着の珪藻化石……………241	第148図	神明貝塚のNo. 1 コアの 主要花粉分布図……………290
第129図	ボーリング位置図……………244	第149図	神明貝塚のNo. 2 コアの 主要花粉分布図……………292
第130図	ボーリング柱状図と分析層準 ……………245	第150図	神明貝塚から出現した花粉化石……………297
第131図	No. 1 の主要珪藻化石群集 ……………257	第151図	神明貝塚のボーリングコアから 出土した大型植物遺体……………303
第132図	No. 2 の主要珪藻化石群集と 硫黄分析……………262	第152図	集落の変遷……………308
第133図	No. 1 の主要花粉化石群集 ……………264	第153図	住居構造の変化……………310
第134図	No. 2 の主要花粉化石群集 ……………266	第154図	後期前葉の炉跡……………318
第135図	No. 1 地点の環境変遷 ……………267	第155図	焼土跡及び灰溜りの分布……………321
第136図	No. 2 地点の環境変遷 ……………267	第156図	後期前半における東京湾岸貝塚の 貝類組成……………330
第137図	珪藻化石……………268	第157図	神明貝塚石器組成……………332
第138図	花粉化石……………269	第158図	神明貝塚剥片石器石材組成……………332
第139図	春日部市域およびその周辺の地形 分類図・ボーリングコアの位置図……270	第159図	日本列島における縄文貝塚の分布……339
第140図	Sh-1～Sh-6テフラの層位を示す 柱状図……………272	第160図	東京湾域における縄文貝塚数の変化…339
第141図	Sh-1～Sh-6テフラの火山ガラス 主成分化学組成の散布図……………273	第161図	東京湾と貝塚分布の変遷……………340
第142図	U GおよびSh-1～Sh-6テフラの鉱物と テフラの産状……………274	第162図	縄文時代後晩期の貝塚……………342

表 目 次

第1表	神明貝塚周辺の遺跡 (春日部市域) …… 9	第7表	主要貝類の分布と棲息環境 ……………158
第2表	貝塚北部 その他の出土遺物観察表 ……69	第8表	出土貝類同定結果集計 (1) ……………159
第3表	貝塚東部 その他の出土遺物観察表 ……87	第9表	出土貝類同定結果集計 (2) ……………160
第4表	貝塚南部 その他の出土遺物観察表……150	第10表	出土貝類同定結果集計 (3) ……………161
第5表	貝塚西部 その他の出土遺物観察表……152	第11表	分析試料の詳細 ……………164
第6表	検出動物種名一覧 ……………157	第12表	日周線による季節区分 ……………165

第13表	分析結果	166	第45表	前処理と元素分析の結果	218
第14表	サンプル別の各年齢の殻高値	167	第46表	安定同位体比測定の結果	219
第15表	サンプル別の季節性	167	第47表	放射性炭素年代測定の結果	220
第16表	サンプル別の採集年齢	168	第48表	海洋リザーバ効果の補正なしで 推定される較正年代	220
第17表	出土脊椎動物遺体一覧	170	第49表	海洋リザーバ効果を補正して 推定される較正年代	221
第18表	現地採取の脊椎動物遺体	171	第50表	安定同位体分析結果	225
第19表	コラムサンプルの脊椎動物遺体	174	第51表	西根遺跡の安定同位体分析結果	228
第20表	遺構別の同定結果	177	第52表	今回分析した部位の色と検出元素	231
第21表	樹種同定結果一覧 (1)	178	第53表	珪藻分析を行った試料とその詳細	238
第22表	樹種同定結果一覧 (2)	179	第54表	炉内灰および灰上堆積物の 珪藻化石産出表	239
第23表	樹種同定結果一覧 (3)	180	第55表	分析試料の一覧	246
第24表	11次調査から出土した炭化種実 (1)	185	第56表	珪藻の生態性	247
第25表	11次調査から出土した炭化種実 (2)	185	第57表	放射性炭素年代測定結果	252
第26表	11次調査から出土した炭化種実 (3)	186	第58表	暦年較正結果	252
第27表	11次調査から出土した炭化種実 (4)	186	第59表	No. 1 の珪藻分析結果 (1)	253
第28表	11次調査から出土した炭化種実 (5)	187	第60表	No. 1 の珪藻分析結果 (2)	254
第29表	12次調査から出土した炭化種実 (1)	187	第61表	No. 1 の珪藻分析結果 (3)	255
第30表	12次調査から出土した炭化種実 (2)	188	第62表	No. 1 の珪藻分析結果 (4)	256
第31表	12次調査から出土した炭化種実 (3)	188	第63表	No. 2 の珪藻分析結果 (1)	258
第32表	12次調査から出土した炭化種実 (4)	189	第64表	No. 2 の珪藻分析結果 (2)	259
第33表	12次調査から出土した炭化種実 (5)	189	第65表	No. 2 の珪藻分析結果 (3)	260
第34表	ヒエ属炭化種子 (穎果) の大きさ	193	第66表	No. 2 の珪藻分析結果 (4)	261
第35表	ウィグルマッチング測定試料 および処理	197	第67表	No. 1 の花粉分析結果	263
第36表	D区SI-7、P-2出土炭化材の放射性 炭素年代測定、暦年較正、ウィグル マッチングの結果	198	第68表	No. 2 の花粉分析結果	265
第37表	A区SI-6、P-3出土炭化材の放射性 炭素年代測定、暦年較正、ウィグル マッチングの結果	198	第69表	硫黄分析結果	266
第38表	測定試料および処理	202	第70表	Sh-1~Sh-6テフラの諸特徴	272
第39表	放射性炭素年代測定および 暦年較正の結果	203	第71表	Sh-1~Sh-6テフラの火山ガラス 主成分化学組成分析結果	272
第40表	頭骨計測値・示数	211	第72表	神明貝塚のボーリングコアから 採取した花粉分析試料、大型植 物試料、年代測定試料の対応表	280
第41表	歯冠計測値	211	第73表	分析試料および ¹⁴ C年代測定結果一覧	282
第42表	四肢骨計測値・示数	212	第74表	神明貝塚のコア試料の堆積物の特性	287
第43表	頭蓋形態小変異の出現状況	212	第75表	神明貝塚のNo. 1 コアより出現した 花粉化石の一覧表 (1)	288
第44表	分析試料	217			

第76表	神明貝塚のNo. 1 コアより出現した 花粉化石の一覧表 (2) ……………	289	第82表	東京湾東岸の灰の生成と その出土状況 ……………	313
第77表	神明貝塚のNo. 2 コアより出現した 花粉化石の一覧表 ……………	291	第83表	東京湾西岸の灰の生成と その出土状況 ……………	314
第78表	神明貝塚のNo. 1 コアの 大型植物遺体 ……………	299	第84表	奥東京湾内陸部の灰の生成と その出土状況 ……………	315
第79表	神明貝塚のNo. 2 コアの 大型植物遺体 ……………	300	第85表	神明貝塚の灰の生成とその出土状況 ……	316
第80表	12次調査の層序と主たる 出土土器型式 ……………	307	第86表	神明貝塚検出住居跡炉跡に伴う灰層と その検出状況 ……………	317
第81表	住居構造の違い ……………	309	第87表	神明貝塚検出の焼土跡及び 灰溜り遺構、灰塊の分類 ……………	320
			第88表	神明貝塚周辺の後晩期の貝塚 ……………	338

口絵目次

口絵 1	1. 神明貝塚空中写真 (平成21年11月撮影)	口絵 3	1. 地表面における貝層散布状況
口絵 2	1. 神明貝塚空中写真 (昭和23年12月撮影)		2. 貝層堆積状況 (11次調査)
	2. 神明貝塚空中写真 (昭和31年3月撮影)	口絵 4	1. 7号住居跡 (11次調査)
			2. 5号人骨 (12次調査)

写真図版目次

写真図版 1 ……………	348	13. 出土遺物 (2)	
1. 1次調査 調査風景		14. 出土遺物 (3)	
2. 住居跡貝層断面		15. 出土遺物 (4)	
3. 住居跡炉跡		写真図版 2 ……………	349
4. 住居跡		1. 出土遺物 (5)	
5. 出土遺物 (1)		2. 1号人骨	
6. 出土遺物 (2)		3. 2号人骨	
7. 2次調査 調査地点遠景 (東方の江戸川堤防か ら)		4. 3次調査 調査地点近景	
8. 1号住居跡		5. 第6トレンチ全景	
9. 1号住居跡貝層断面		6. 第12トレンチ全景	
10. 1号住居跡炉跡断面		7. 2号住居跡	
11. 1～3号土坑		8. 4号土坑	
12. 出土遺物 (1)		9. 5号土坑	
		10. 4次調査 拡張前調査区全景	

11. 4号住居跡	
12. 4号住居跡貝層	
13. 4号住居跡貝層断面(1)	
14. 4号住居跡貝層断面(2)	
15. 4号住居跡炉跡	
写真図版3	350

1. 6号土坑	
2. 6号土坑断面	
3. 7号土坑	
4. 5次調査 調査風景(1)	
5. 調査風景(2)	
6. 調査風景(3)	
7. 検出貝層	
8. 出土遺物	
9. 6次調査 調査風景	
10. 貝層断面	
11. 1号住居跡再検出状況	
12. 出土遺物	
13. 7次調査 調査風景	
14. 検出貝層	
15. 検出遺構	

写真図版4	351
-------	-----

1. 出土遺物	
2. 遺物内灰状物質	
3. 8次調査 調査風景	
4. 9次調査 調査風景	
5. 検出遺構	
6. 出土遺物	
7. 10次調査 調査風景	
8. 調査区全景	
9. 中央トレンチ全景	
10. 中央トレンチ貝層断面	
11. 7号住居跡床面	
12. 7号住居跡ピット断面(1)	
13. 7号住居跡ピット断面(2)	
14. 出土遺物(1)	
15. 出土遺物(2)	

写真図版5	352
-------	-----

1. 11次調査 調査風景	
2. 調査区全景(北西から)	
3. A区第1面全景(西から)	
4. B区第1面全景(西から)	
5. C区第1面全景(西から)	
6. D区第1面全景(東から)	
7. E区第1面全景(東から)	
8. F区第1面全景(東から)	
9. B区第3面全景(西から)	
10. D区第3面全景(東から)	
11. E区第3面全景(東から)	
12. F区第3面全景(東から)	
13. A区第4面全景(西から)	
14. B区第4面全景(西から)	
15. C区第4面全景(西から)	

写真図版6	353
-------	-----

1. D区第4面全景(東から)	
2. E区第4面全景(東から)	
3. F区第4面全景(南から)	
4. C区西壁断面	
5. B区西壁断面	
6. A区西壁断面	
7. A区東壁断面	
8. B区東壁断面	
9. C区東壁断面	
10. F区西壁断面	
11. E区西壁断面	
12. D区西壁断面	
13. D区東壁断面	
14. E区東壁断面	
15. F区東壁断面	

写真図版7	354
-------	-----

1. A区北壁断面	
2. D区北壁断面	
3. D区南壁断面	
4. A区南壁断面	
5. B区北壁断面	
6. E区北壁断面	

7. E区南壁断面	3. 9号焼土跡断面
8. B区南壁断面	4. 10号焼土跡
9. C区北壁断面	5. 1号灰溜り
10. F区北壁断面	6. 1号灰溜り断面
写真図版8355	7. 2号灰溜り
1. F区南壁断面	8. 2号灰溜り断面
2. C区南壁断面	9. 3号灰溜り
3. 5号住居跡 (B区)	10. 3号灰溜り断面
4. 5号住居跡炉跡断面	11. 19号土坑
5. 6号住居跡 (D区)	12. 遺跡近景
6. 7号住居跡 (A・B・D・E区)	13. 12次調査 調査風景
7. 7号住居跡焼土上の青色灰	14. A区西ローム面全景 (北から)
8. 7号住居跡炉跡断面	15. A区東第3面全景 (南から)
9. 1号灰溜り出土遺物	写真図版11358
10. 8号住居跡 (E区)	1. A区東ローム面全景 (南から)
11. 8号住居跡炉跡断面	2. B区西ローム面全景 (南から)
12. 8号住居跡出土遺物	3. B区東ローム面全景 (南から)
13. 9号住居跡 (A区)	4. C区ローム面全景 (東から)
14. 9号住居跡焼土・炭化材 (A区)	5. D区ローム面全景 (西から)
写真図版9356	6. E区ローム面全景 (東から)
1. 9号住居跡焼土・炭化材 (B区)	7. F区ローム面全景 (南から)
2. 9号住居跡出土炭化材 (クリ)	8. G区ローム面全景 (南から)
3. 9号住居跡焼土・炭化材断面	9. A区西 北壁断面
4. 9号住居跡炉跡断面	10. A区東 北壁断面
5. 9号住居跡出土遺物 (1)	11. B区西 北壁断面
6. 9号住居跡出土遺物 (2)	12. B区東 北壁断面
7. 2号焼土跡	写真図版12359
8. 3号焼土跡	1. C区西半 北壁断面
9. 4号焼土跡	2. C区東半 北壁断面
10. 4号焼土跡断面	3. 14号住居跡 (A区東)
11. 4号焼土跡火床面	4. 14号住居跡炉跡
12. 4号焼土跡掘り方	5. 14号住居跡炉跡断面
13. 4号焼土跡埋設土器	6. 20号住居跡 (B区東)
14. 5号焼土跡断面	7. 20号住居跡炉跡断面
15. 6号焼土跡断面	8. 21号住居跡 (C区)
写真図版10357	9. 22号住居跡 (D・E区)
1. 8号焼土跡	10. 32号土坑
2. 8号焼土跡出土炭化材 (オニグルミ・クリ)	11. 13~17号焼土跡

12. 13・14号焼土跡断面	8. 北部(12次A区東)出土土器 (3)
13. 12号焼土跡断面	写真図版16363
14. 15・16号焼土跡断面 (1)	1. 北部(12次A区東)出土土器 (4)
写真図版13360	2. 北部(12次A区東)出土土器 (5)
1. 15・16号焼土跡断面 (2)	3. 北部(12次B区西)出土土器 (1)
2. 19・20号焼土跡	4. 北部(12次B区西)出土土器 (2)
3. 19号焼土跡断面	5. 北部(12次B区西)出土土器 (3)
4. 20号焼土跡断面	6. 北部(12次B区西)出土土器 (4)
5. 21号焼土跡	7. 北部(12次B区西)出土土器 (5)
6. 21号焼土跡断面	8. 北部(12次B区西)出土土器 (6)
7. 21号焼土跡埋設土器	写真図版17364
8. 21号焼土跡埋設土器断面	1. 北部(12次B区西)出土土器 (7)
9. 23・24号焼土跡	2. 北部(12次B区東)出土土器 (1)
10. 23・24号焼土跡断面	3. 北部(12次B区東)出土土器 (2)
11. 3・4号墓 (左: 4号、右: 3号人骨)	4. 北部(12次B区東)出土土器 (3)
12. 3号墓出土遺物	5. 北部(12次C区)出土土器 (1)
13. 5号墓 (5号人骨)	6. 北部(12次C区)出土土器 (2)
14. 5号人骨貝輪装着	7. 北部(12次C区)出土土器 (3)
15. 5号人骨耳栓装着	8. 北部(12次C区)出土土器 (4)
写真図版14361	写真図版18365
1. 5号墓覆土上層出土土偶	1. 北部(12次C~F区)出土土器
2. 包含層出土遺物 (1)	2. 北部(12次F~G区)出土土器
3. 包含層出土遺物 (2)	3. 北部その他の出土遺物 (1)
4. 包含層出土遺物 (3)	4. 北部その他の出土遺物 (2)
5. 包含層出土遺物 (4)	5. 北部その他の出土遺物 (3)
6. 調査区基本層序 (D区)	6. 北部その他の出土遺物 (4)
7. 貝塚北部その他の出土遺物 (1)	7. 北部その他の出土遺物 (5)
8. 貝塚北部その他の出土遺物 (2)	8. 北部その他の出土遺物 (6)
9. 貝塚北部その他の出土遺物 (3)	写真図版19366
10. 貝塚南部その他の出土遺物	1. 北部その他の出土遺物 (7)
写真図版15362	2. 東部(4次)出土土器 (1)
1. 北部(12次A区西)出土土器 (1)	3. 東部(4次)出土土器 (2)
2. 北部(12次A区西)出土土器 (2)	4. 東部(4次)出土土器 (3)
3. 北部(12次A区西)出土土器 (3)	5. 東部(4次)出土土器 (4)
4. 北部(12次A区西)出土土器 (4)	6. 東部(4次)出土土器 (5)
5. 北部(12次A区西)出土土器 (5)	7. 東部(7次)出土土器 (1)
6. 北部(12次A区東)出土土器 (1)	8. 東部(7次)出土土器 (2)
7. 北部(12次A区東)出土土器 (2)	写真図版20367

1. 東部(7次)出土土器 (3)	3. 南部(11次)出土土器 (16)
2. 東部(7次)出土土器 (4)	4. 南部(11次)出土土器 (17)
3. 東部(7次)出土土器 (5)	5. 南部(11次)出土土器 (18)
4. 東部(7次)出土土器 (6)	6. 南部(11次)出土土器 (19)
5. 東部(7次)出土土器 (7)	7. 南部(11次)出土土器 (20)
6. 東部(7次)出土土器 (8)	8. 南部(11次)出土土器 (21)
7. 東部(7次)出土土器 (9)	写真図版25372
8. 東部(7次)出土土器 (10)	1. 南部(11次)出土土器 (22)
写真図版21368	2. 南部(11次)出土土器 (23)
1. 東部(7次)出土土器 (11)	3. 南部(11次)出土土器 (24)
2. 東部(7次)出土土器 (12)	4. 南部(10次)出土土器 (1)
3. 東部(7次)出土土器 (13)	5. 南部(10次)出土土器 (2)
4. 東部(7次)出土土器 (14)	6. 南部(10次)出土土器 (3)
5. 東部(9次)出土土器 (1)	7. 南部(10次)出土土器 (4)
6. 東部(9次)出土土器 (2)	8. 南部(10次)出土土器 (5)
7. 東部その他の出土遺物 (1)	写真図版26373
8. 東部その他の出土遺物 (2)	1. 南部(10次)出土土器 (6)
写真図版22369	2. 南部(10次)出土土器 (7)
1. 東部その他の出土遺物 (3)	3. 南部(10次)出土土器 (8)
2. 東部その他の出土遺物 (4)	4. 南部(10次)出土土器 (9)
3. 東部その他の出土遺物 (5)	5. 南部(2次)出土土器 (1)
4. 南部(11次)出土土器 (1)	6. 南部(2次)出土土器 (2)
5. 南部(11次)出土土器 (2)	7. 南部(2次)出土土器 (3)
6. 南部(11次)出土土器 (3)	8. 南部(2次)出土土器 (4)
7. 南部(11次)出土土器 (4)	写真図版27374
8. 南部(11次)出土土器 (5)	1. 南部(2次)出土土器 (5)
写真図版23370	2. 南部(2次)出土土器 (6)
1. 南部(11次)出土土器 (6)	3. 南部(2次)出土土器 (7)
2. 南部(11次)出土土器 (7)	4. 南部(2次)出土土器 (8)
3. 南部(11次)出土土器 (8)	5. 南部(2次)出土土器 (9)
4. 南部(11次)出土土器 (9)	6. 南部(2次)出土土器 (10)
5. 南部(11次)出土土器 (10)	7. 南部(2次)出土土器 (11)
6. 南部(11次)出土土器 (11)	8. 南部(2次)出土土器 (12)
7. 南部(11次)出土土器 (12)	写真図版28375
8. 南部(11次)出土土器 (13)	1. 南部(2次)出土土器 (13)
写真図版24371	2. 南部(2次)出土土器 (14)
1. 南部(11次)出土土器 (14)	3. 南部(2次)出土土器 (15)
2. 南部(11次)出土土器 (15)	4. 南部(6次)出土土器 (1)

5. 南部(6次)出土土器 (2)

6. 南部(6次)出土土器 (3)

7. 南部(6次)出土土器 (4)

8. 南部(1次)出土土器 (1)

写真図版29376

1. 南部(1次)出土土器 (2)

2. 南部(1次)出土土器 (3)

3. 南部(1次)出土土器 (4)

4. 南部(1次)出土土器 (5)

5. 南部(1次)出土土器 (6)

6. 南部(1次)出土土器 (7)

7. 南部その他の出土遺物 (1)

8. 南部その他の出土遺物 (2)

写真図版30377

1. 南部その他の出土遺物 (3)

2. 南部その他の出土遺物 (4)

3. 南部その他の出土遺物 (5)

4. 南部その他の出土遺物 (6)

5. 南部その他の出土遺物 (7)

6. 南部その他の出土遺物 (8)

7. 南部その他の出土遺物 (9)

8. 南部その他の出土遺物 (10)

写真図版31378

1. 南部その他の出土遺物 (11)

2. 西部(5次)出土土器 (1)

3. 西部(5次)出土土器 (2)

4. 西部その他の出土遺物

5. 出土貝類

第 I 章 総括報告書の目的

第 1 節 保存目的の調査の必要性

埼玉県春日部市に所在する神明貝塚は、縄文時代後期前半に営まれた集落を含む馬蹄形貝塚である。貝塚の存在は大正13年（1924）の郷土誌の記載が初出となるが、学界上では昭和3年（1928）の『日本石器時代遺物発見地名表』が初見となる。貝塚での発掘調査は、昭和36年（1961）の埼玉県立浦和第一女子高等学校郷土研究部を皮切りに、庄和町教育委員会が組織した学術機関や県立高等学校教諭による調査、そして、公共工事に伴う記録保存を目的とする緊急発掘調査を経て、平成21年度からは春日部市教育委員会による末永く後世へ保存するための範囲内容確認を目的とする調査が平成28年度までの足掛け8ヵ年間、継続して行われ、貝塚の実態と内容、その特徴を把握した。

本貝塚の特徴をまとめると、①日本列島最大の大型貝塚密集地帯である東京湾岸域のうち、南端では千葉県袖ヶ浦市山野貝塚が、その北端では神明貝塚で特徴を良好に示していること、②集落の存続期間が縄文時代後期前半に限られることから、他の大型貝塚の形成過程を紐解く端緒をもつこと、③貝塚構成の貝種からは奥東京湾最奥部の汽水域の営みを顕著に表わし、湾奥部の後期貝塚群の実態究明に大きく寄与すること、④貝塚自体がほぼ完全な保存状態にあること、以上がその特記点として挙げられる。

本貝塚の地理的環境については後章で詳述するが、縄文時代後期の貝塚が密集する奥東京湾から東京湾内湾部において、その最奥部に現存する大型貝塚である。これまでに東京湾内湾部を主とする多数の貝塚の調査によって貝塚の実態究明が進められ、縄文時代の資源利用、社会や集落の動態など、様々な先行研究が展開されてきたものの、遺跡の保存も儘ならず開発の急伸によって消滅の一途を辿ってきた。そのような中、本貝塚は大型貝塚密集地帯の最奥部に唯一完全な形態で現存する大型貝塚であり、前掲した4点の特徴からも日本列島に展開した1万年もの長期間にわたって営まれた縄文時代を紐解く上で必要不可欠かつ重要な貝塚である。このような重要性を踏まえ、春日部市では平成20年度に策定した市の最上位計画である「春日部市総合振興計画」のはぐくみの施策の中で、神明貝塚の保護保存に努め、国史跡への指定化に向けた様々な調査を進めることを前期基本計画で、さらに続く平成25年度からの後期基本計画ではその歩みを進め、神明貝塚の保護保存に努め、文化庁や埼玉県とともに国史跡への指定化に取り組むと、将来にわたる保存を明確化した。これにより、平成21～28年度にかけて貝塚の現況測量をはじめ、範囲確認調査等について国庫補助事業として、文化庁記念物課と埼玉県教育委員会の指導を受けながら実態解明のための調査を実施してきた経緯にある。そして、保存目的の調査を完了した平成29年3月には国史跡への指定と将来にわたる保存について春日部市での政策決定を仰いだ。これにより、平成29年度にはこれまでの調査成果を総括し、神明貝塚の奥東京湾における特徴や実態を究明し、学術的な価値を明らかにするために総括報告書を作成した。

（中野）

第2節 調査から総括報告書作成までの経緯

神明貝塚では前掲したように、昭和36年（1961）の高等学校郷土研究部の部活動の一環で実施された1次調査を皮切りに、公共工事に先立つ緊急発掘調査、そして一連の保存目的の調査と、これまでに12次にわたる調査履歴を積み上げてきた。本節では調査に関わる経緯について整理し、総括報告書作成までの足跡を取りまとめることとする。なお、調査の方法や各調査の成果に纏わる概要、及び課題は第三章で記述する。

さて、調査の皮切りとなった、昭和36年の1次調査に関わる記録が部活動の研究発表要旨に限られるため、どのような発端で調査に至ったのか、その詳細は言及し難い。埼玉県内の動向では時を同じくして行われた「埼玉県遺跡地名表」の作成の時期と一致し、これにより保存が良好で調査履歴のない未知の貝塚であったことから、神明貝塚を調査地とした可能性も推察できる。また、同年には町域のほぼ中央にあたる米島貝塚で緊急発掘調査を行ったものの、遺跡範囲の大部分が宅地造成によって失われた事例があることから、昭和40年（1965）の2次調査は将来にわたって保存措置を図ることを前提にした点で画期となる調査であった。この当時、庄和町教育委員会には埋蔵文化財の担当職員が配置されていなかったために学術機関を主とする調査体制を採り、多様な領域による総合研究を束ねる報告書が刊行された。この2回の発掘調査から既に50年以上もの歳月が経過しているが、調査を実際に間近に見た地区住民にとっては、3,800年前にこの地に暮らした生の遺跡である住居跡や2体の人骨は鮮明に記憶に刻まれており、現在でも生き生きとその感動が語られている。そして、昭和44年（1969）に末永く保存すべき遺跡として「埼玉県重要遺跡」に選定された。これを契機に、国または県史跡への指定に向けて、昭和51年（1976）8月、さらには昭和53年（1978）12月と、町教育委員会では地元関係者への説明会を重ねた。しかしながら、史跡案の面積が約4万㎡と広大なために範囲を狭めて欲しいとの要望があがり、昭和54年（1979）2月に貝塚の範囲を明確にすることを目的に実施したのが3次調査であった。しかし、史跡化への動きはこの調査以降、途絶えることとなった。その後、神明貝塚の周知の遺跡範囲では、ビニールハウスや専用住宅の建設工事等に先立つ所在確認調査を行ったが、盛土保存の措置や遺構の所在もなく、記録保存の発掘調査には至らなかった。昭和60年代に入り、町の最上位計画である「庄和町基本構想」の中で、文化財の保護の施策で神明貝塚の保存について課題があること、神明貝塚一帯を公園化することによって保存に努めることが盛り込まれ、以降の基本計画や総合振興計画でも神明貝塚の保存が再度、施策化された。そのような中、平成14年12月に公共工事に伴う記録保存の緊急発掘調査の4次調査が、さらに平成15年3月には文化庁記念物課の現地視察があり、将来への保存のための検討が促された。そして平成17年10月1日に春日部市と庄和町との一市一町の合併を迎え、事務事業の摺り合わせにおいて市民の文化的向上に資するために神明貝塚の保存及び必要な措置を講じることを確認した。平成18年4月には文化庁記念物課による再度の現地視察が行われ、将来にわたる保存と活用を進めるために市全体で取り組み、文化遺産としての価値づけを一刻も早く着手するよう要望された。平成20年に「春日部市総合振興計画」が策定され、平成24年までの5ヵ年の前期基本計画では「縄文時代の大規模貝塚である『神明貝塚』については、埼玉県を代表する貝塚であることから、保護保存に努め、文化庁や埼玉県とともに国史跡への指定に向けた様々な調査を進めます」と、施策の中で明確化し、平成21年2月に「保存目的の範囲確認調査に関わる事業計画」を策定した。同年5月16日に調査範囲の地権者を対象とした、「神明貝塚の保存目的の範囲確認調査に関わる説明会」を開催し、調査目的及びその着手のための土地の立ち入り等を提案、各地権者との承諾を経て、平成21年度より、本格的に保存目的の調査に着手した。

（中野）

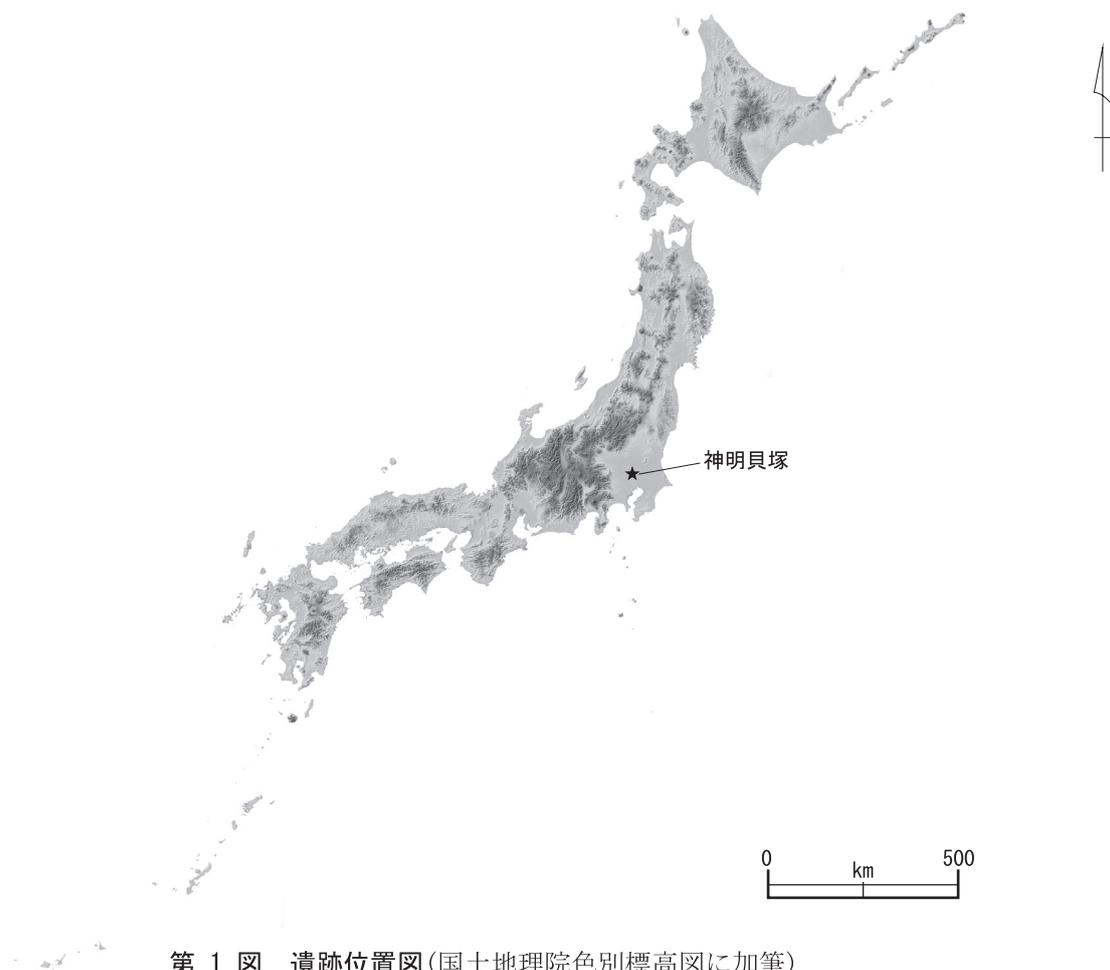
第Ⅱ章 立地と環境

第1節 立地と地理的環境

神明貝塚は、東武野田線（アーバンパークライン）南桜井駅から北方へ約6.5kmの、埼玉県春日部市西親野井地内に所在する縄文時代後期の貝塚遺跡である。現在の江戸川河口からは、北方へ直線距離で約43kmを測る内陸部に位置しており、現存する縄文時代後期の貝塚としては、後述する「奥東京湾」沿岸の貝塚の中でも最大級の規模を測り、さらにはその最奥部に位置する貝塚としての評価がなされている。

（1）県域及び市域の地形

埼玉県は関東地方の中央部から西部に位置する内陸県で、総面積は3,797.75km²を測る。東側は千葉県、北東側は茨城県と栃木県、北側は群馬県、南西側は長野県と山梨県、南側は東京都と接している。県域の地勢は、「八王子構造線」と呼称される地形不連続線を境に、西側の山地と東側の平地に大別され、平地がおおよそ6割を占めている。県域の西部に広がる山地は関東山地の北部にあたり、一般的には「秩父山地」と呼称されている。秩父山地の中央には凹地形である山中地溝帯と秩父盆地が形成されており、秩父山地は、この



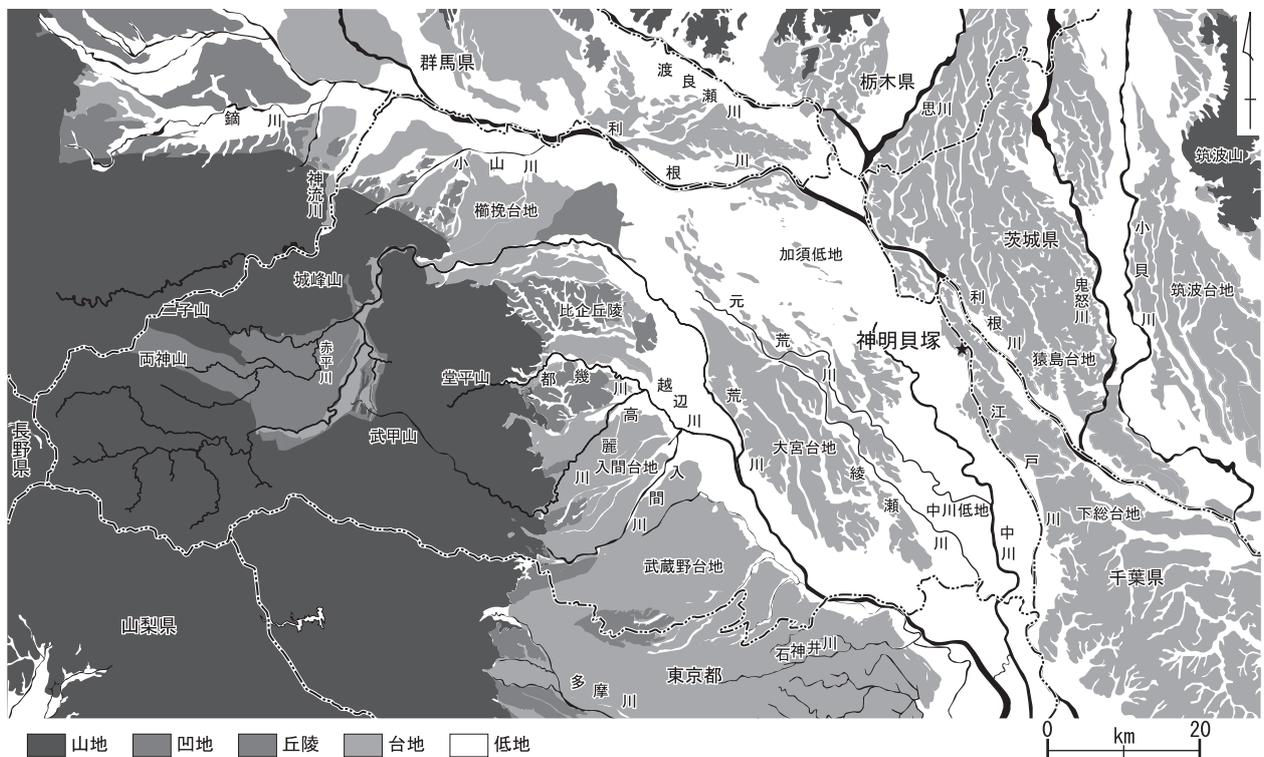
第1図 遺跡位置図(国土地理院色別標高図に加筆)

凹地形を境に、南西部の奥秩父山地、北部の上武山地、東部の外秩父山地に細分される。

一方、山地の東側には、関東平野の西部にあたる平地が広がっており、県域については「埼玉平野」とも呼称されている。埼玉平野では、台地や低地が発達しているほか、西縁の構造線に沿って丘陵が分布している。なお、関東平野においては、段丘面の区分が主に多摩川周辺で進められてきた経緯があり、高位面から多摩面・下末吉面・武蔵野面・立川面の4面に区分されており、この区分が他の段丘面においても準用されている。

丘陵は、山地が平地に移行する最初の地形である。埼玉平野の丘陵は、北から南に向かって、上武山地沿いの児玉丘陵と松久丘陵、荒川を挟んで外秩父山地沿いの比企丘陵・吉見丘陵・岩殿丘陵・毛呂山丘陵・高麗丘陵・加治丘陵、山地から離れた位置の狭山丘陵といった9ヵ所で確認されている。形態的には山地から平地に向かって半島状に突き出たものと、平地に残丘状に孤立したものとに大別されるが、いずれの丘陵も、開析が進み、谷地形が発達しているという特徴がある。なお、西側の山地に向かうほど頂面の標高が高く、概ね北東方向に低くなる傾向を示している。

台地は、丘陵と低地の間にある地形である。丘陵よりも形成時期が新しいため、あまり開析が進んでおらず、平坦な頂面を残している地形であり、低地との比高差は数m以上を測ることが一般的である。埼玉平野の台地は、西から東に向かって、平野西部の台地群、中央部の大宮台地、東縁の下総台地に大別され、それぞれの間には低地を挟んでいる。丘陵に連なる平野西部の台地群は、北から南に向かって、比企丘陵以北の本庄台地・櫛引台地・江南台地、比企丘陵と都幾川に挟まれた東松山台地、岩殿丘陵に連なる高坂台地、岩殿丘陵と入間川に挟まれた入間台地（毛呂台地・坂戸台地・飯能台地）、埼玉県南部～東京都にかけて広がる武蔵野台地（県域では川越台地・野火止台地）が確認されている。いずれも扇状地性の段丘として形成さ



第2図 遺跡周辺の地形図(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団作成図を改変)

れたものであるが、下末吉面～立川面相当の異なる段丘面が分布していることから、各台地の形成は一様ではなく、それぞれ異なる時期に形成されたものと考えられる。平野中央部の大宮台地は、平野内に孤立して低地に囲まれた島嶼状の地形を呈している。標高は北西端の北本市付近で30m以上と最も高く、桶川市～上尾市にかけて約20m、さいたま市では約15mと最も低位となり、南東端の川口市付近で20m前後と高くなり、北西部と南東部で高く、中央部で低いといった傾向にあり、標高の高い北西部と南東部は下末吉面に、その他は武蔵野面に相当する。また、台地内を元荒川や綾瀬川、芝川等が流下しているため、これら河川の開析により台地本体から分離した支台群が形成されており、それぞれ大宮主台、蓮田・岩槻支台、白岡支台、慈恩寺支台、鳩ヶ谷支台（安行支台）等と呼称されている。大宮台地の南部は段丘崖を形成し、低地との比高差が明瞭であるが、北部及び北東部は台地面が徐々に低くなり、北方の加須低地の中に埋没していく状況にある。この埋没台地については、新第三紀から現在に至るまで続く「関東造盆地運動」と呼称される関東平野の沈降運動によって形成された特異的な地形として認識されており、埋没以前の大宮台地は群馬県側の邑楽台地と連なり赤城山麓から半島状に続く「大宮～館林台地」を構成していたと推定されている。さて、平野東縁の下総台地は、利根川を挟んで北側に広がる常陸台地と併せて「常総台地」とも呼称されている。西側は江戸川、北側は利根川、南側は東京湾、そして東側は九十九里低地に囲まれた広大な台地面であり、台地縁辺に多数の開析谷が発達するため急崖な地形を呈し、さらに台地頂部は平坦面が連続する等がその特徴となっている。標高は南東端の長生郡付近で約100mと最も高く、東端の銚子付近で約50m、北西部の松戸市付近で25～30m、柏市～我孫子市にかけて20m、野田市付近で15m前後となっており、関東造盆地運動の影響を受けて北西方向への傾斜が捉えられている。埼玉平野でみられる下総台地は、江戸時代初期の江戸川の開削によって、台地本体から切り離された最西端の部分であり、北側の台地は宝珠花支台、南側は金杉支台と呼称されており、いずれも武蔵野面相当の段丘面である。これら両支台の標高は10～12mを示し、江戸川対岸の野田市側より低位となっている。また、両支台は、縁辺部が中川低地に接しているため、河川の浸食作用で樹枝状の開析谷が発達しているほか、支台本体からも切り離され、低地の中で島状に取り残された部分もみられる。

埼玉平野の低地は、大宮台地の西側に広がる荒川低地、同台地の東側の中川低地、県域北部の利根川中流域の妻沼低地と加須低地に大別される。このうち、荒川低地と中川低地は、後述するように、海進期の海成層を主体に海退期の土砂の堆積によって形成されたものであり、妻沼低地は概ね新期荒川扇状地としての性格を帯びている。加須低地は、関東造盆地運動と利根川の流路変遷等により形成されたと考えられており、低地の内部には埋没台地を含み、西側で接する妻沼低地、南側の中川低地とは、埋没台地の有無によって区分されている。

さて、神明貝塚が所在する春日部市は、埼玉県東部に位置する市で、総面積は66.00km²を測り、平均標高は約6.4m（最高値19.49m、最低値3.94m）と低位で、その大部分が中川低地に立地している。市域の北西部と西部には大宮台地の慈恩寺支台、さらに北東部と南東部には下総台地の宝珠花支台・金杉支台が中川低地に向かって樹枝状に伸びている。神明貝塚は、標高約10mを測る下総台地の宝珠花支台に所在しており、中川低地から北方に向かって伸びる開析谷の最奥部の西側に位置する立地環境にあり、文化的にも下総台地の特徴を示していることが特筆される。

（2）埼玉平野の地理的環境の変遷

今から12.5万年前の間氷期には、「下末吉海進」と呼称される海水面の上昇によって、関東平野全体が内湾浅海の「古東京湾」に覆われていた。その後、約7万年前の最終氷期に入ると海水面が低下し始め、最寒

冷期の約2万年前には海水面が100m以上低下したと考えられている。これにより、海岸線が現在の浦賀水道より外側まで退いたため、東京湾全体が陸化に至った。陸化した東京湾に流下する複数の河川は、次第に1本の流れへと合流し、湾底に「古東京川」と呼称される河川が形成された。この古東京川に向かって上流から河川が流れ込む過程で、現在の荒川低地では、荒川等が合流した利根川の浸食作用で深い峡谷が形成され、中川低地でも、思川等が合流した渡良瀬川の浸食作用により下刻が進むこととなった。すなわち、今から約2万年前の埼玉平野では、北方の山地から半島状に突き出た大宮～館林台地を挟んで、東西に2筋の深い峡谷が刻まれていた景観を復元し得る。最寒冷期を過ぎると、地球は温暖化に向かい、氷河の縮小によって海水面が上昇することとなった。この「有楽町海進」と呼称される海水面の上昇は、約6,000年前の縄文時代前期中葉にピークを迎えることから、「縄文海進」とも呼称されている。この頃の海水面は、現在より2～3m高かったものと推定されており、埼玉平野では、前述した2つの峡谷を遡るように海が進入し、大宮～館林台地を挟んで、西側に「古入間湾」、東側に「奥東京湾」と呼称される2つの入り江が形成された。なお、海進のピーク時には、奥東京湾は埼玉県域を抜け、現在の栃木県栃木市の南部、渡良瀬遊水地付近にまで達していたものと推定されている。県域では、これら東西の入り江に沿うように縄文時代の貝塚が形成され、さらには貝塚の分布状況や各地におけるボーリング調査の成果から、縄文時代各時期における海岸線の復元作業が行われてきた経緯がある。それらの成果を鑑みると、約5,300年前に海水面の低下が始まり、約4,500年前には現在の草加市北部付近まで海岸線が退いたと考えられている。4,500年前～3,500年前の間には、海水面の変動が停滞、もしくは僅かな海進があったと推定されている。その後、約3,500年前になると再び海水面の低下が始まり、約2,000年前には現在の海水面－2mまで低下し、約1,800年前に現在の海岸線の位置まで戻り、古東京湾は消滅することとなった。すなわち、神明貝塚が営まれていた縄文時代後期前半、今から約3,800年前の海岸線は、現在の草加市付近にあったと考えることができる。海岸線から遠く離れることとなった古入間湾や奥東京湾の湾奥部～湾中部では、河川の氾濫原として土砂の堆積が進んだ結果、沖積地化が進み、遠浅の汽水域が形成されていったものと考えられる。このことは、神明貝塚を構成する貝類がヤマトシジミを主体とすることとも整合し、神明貝塚の周辺には砂質の干潟が広がっていた地理的環境を復元し得よう。

(越智)

第2節 歴史的環境

神明貝塚が所在する下総台地宝珠花支台周辺では、台地上を中心として、縄文時代各時期の遺跡が数多く分布している。また、対岸の大宮台地まで視野を広げると、貝塚形成の最盛期である縄文時代前期と比較すると数は減少するものの、神明貝塚と同時期に形成された貝塚を確認することができる。

(1) 縄文時代早期

支台上で7遺跡が確認されている。住居跡は未検出であるが、埼玉県幸手市の横野地北遺跡、埼玉県北葛飾郡杉戸町の向山遺跡・木津内貝塚・宮の腰遺跡・堀口遺跡・向台遺跡、春日部市の陣屋遺跡で該期の炉穴が検出されている。向台遺跡では、ハイガイを主体とする炉穴内廃棄の貝塚がみられるが、奥東京湾側で恒常的に海産資源を利用し得た環境にあったとは考え難い。なぜなら、埼玉平野における該期の貝塚の分布は、



第3図 宝珠花支台周辺の縄文集落

(野田市史編さん委員会2005、埼葛地区文化財担当者会2007、埼玉県埋蔵文化財調査事業団2016、国土地理院淡色地図を基に作成)



第 4 図 神明貝塚と周辺の遺跡群

第1表 神明貝塚周辺の遺跡（春日部市域）

遺跡名	所在地	種別	時期
神明貝塚	西親野井字神明	集落跡（縄文前・後、古墳後）、貝塚（縄文前・後）	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（後）
塚崎遺跡	塚崎字狐塚	集落跡（古墳後、奈良、平安）、貝塚（縄文）	縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（前・後）、奈良、平安
浅間下遺跡	西親野井字浅間下	集落跡（縄文中・後）	縄文（早・前・中・後）、平安、近世
貝の内遺跡	西宝珠花字貝ノ内	集落跡（縄文前・中・後、古墳後、奈良、平安）、貝塚（縄文前・中）	旧石器、縄文（草創・早・前・中・後）、古墳（後）、奈良、平安
陣屋遺跡	西宝珠花字陣屋	集落跡（縄文早・中、古墳後、奈良、平安）	縄文（早・中）、古墳（後）、奈良、平安
町道遺跡	西宝珠花字町道	集落跡（縄文前、平安）、貝塚（縄文前）、生産遺跡（平安）	縄文（前）、奈良、平安
町通中遺跡	西宝珠花字町通	集落跡（縄文中）、貝塚（縄文中）	縄文（前・中）、奈良、平安

古入間湾奥部を中心とすることから、奥東京湾よりも古入間湾の形成が先行したと推察される。この背景として、利根川によって形成された西側の峡谷と、渡良瀬川による東側の峡谷を比較すると、流量の優劣から西側の方がより深く浸食されていたと推定されており、海進時に海水がより深い方の峡谷に向かって先に進入したことが考えられる。

（2）縄文時代前期

早期と比較すると、遺跡数は大きく増加し、支台上で15遺跡が確認されている。幸手市では榎野地北遺跡・榎野地原遺跡、杉戸町では向山遺跡・木津内貝塚・宮前遺跡・東通貝塚・登戸遺跡・正明寺貝塚・中原遺跡・宮の腰遺跡・鷺巣前原遺跡・向台遺跡、春日部市では神明貝塚・貝の内遺跡・町道遺跡で該期の遺構が検出されている。宮の腰遺跡と神明貝塚を除く13遺跡で、アサリ・ハマグリ・マガキ等を主体とする貝塚がみられる。支台上の該期の遺跡は、縄文海進ピーク時に相当する前期前葉～中葉（関山式期～黒浜式期）が大半を占める一方で、海進ピークの前後にあたる前期初頭（花積下層式期）や前期後半（諸磯式期）には、遺構の検出事例が限られていることから、集落の形成が海進・海退の状況に顕著な影響を受けていたことが窺える。なお、埼玉平野における該期の貝塚は、早期～前期前半にかけては古入間湾沿岸に分布の主体があり、前期中葉以降には奥東京湾沿岸に分布の主体が移る傾向にあり、奥東京湾よりも古入間湾側の海退が先行したことが推察されている。この背景として、該期においても、古入間湾に流れ込む利根川の流量が優勢であったため、奥東京湾よりも先に古入間湾の埋積が進行した結果、海岸線が退いたことや、前節で述べた関東造盆地運動と呼ばれる地殻の変動によって、奥東京湾側が緩やかに沈降を続ける過程で、奥東京湾の海水量が相対的に増加した一方、古入間湾の海水量が減少した可能性等が考えられよう。

（3）縄文時代中期

前期と比較すると、遺跡数は大きく減少し、支台上で4遺跡が確認されている。いずれも春日部市の遺跡で、浅間下遺跡・貝の内遺跡・陣屋遺跡・町通中遺跡で中期後半（加曾利E式期）の遺構が検出されている。貝の内遺跡と町通中遺跡では、マガキ・ハマグリ・ヤマトシジミ等を主体とする貝塚もみられる。支台上では、北方の幸手市域や杉戸町域で、貝塚を含め該期遺構の検出事例がみられなくなったことから、海産資源の利用限界が春日部市域まで南下してきたことが推察され、前期と同様に、集落の形成が海退の状況に顕著な影響を受けていたと考えられる。なお、埼玉平野における該期の貝塚は、前期と比較して数を大きく減らしており、台地縁辺部における海産資源の利用から、台地平坦部における陸産資源の利用へと、生活の基盤が移っていったことが推察される。また、古入間湾側や前期に盛行した奥東京湾側の大宮台地内陸部に形成された貝塚では、汽水性のヤマトシジミを主体としており、湾奥部から汽水域が徐々に拡大してきた様相にあったことが窺えるが、大宮台地慈恩寺支台先端部や下総台地金杉支台で確認された貝塚では、鹹水性の貝



第 5 図 奥東京湾周辺の縄文時代後晩期の主な遺跡

地図は国土地理院色別標高図、土地条件図、国土交通省土地分類図、袖ヶ浦市2016を基に作成
遺跡分布は袖ヶ浦市2016、さいたま市立博物館2006、2014、春日部市史編さん委員会2012、埼玉地区文化財担当者会2007
品川区立品川歴史館2007、上高津貝塚ふるさと歴史の広場2000、2015を参照

類が主体を占めていることから、奥東京湾の海退も一様ではなく、大宮台地側から埋積が進んだ結果、下総台地側の海退が遅れた可能性が指摘できよう。

(4) 縄文時代後期

中期から減じて、支台上で3遺跡での確認となる。いずれも春日部市の遺跡で、浅間下遺跡で後期初頭(称名寺式期)、貝の内遺跡で後期前半(堀之内式期)、神明貝塚で後期前半～中葉(堀之内式期～加曾利B式期)の遺構が検出されている。神明貝塚出土の貝類がヤマトシジミを主体とすることから、春日部市域を含む奥東京湾の湾央部でも、土砂の堆積が進んだ結果、沖積地化が進み、遠浅の汽水域が広がる環境にあったことが推察される。

さて、縄文時代後期には、やや温暖化が進んだ結果、海退の停滞、もしくは規模の小さな海進に転じたと考えられている。しかしながら、後期海進は前期海進ほど規模の大きいものではなく、海水の進入は奥東京湾口部に限定され、後期前半の海岸線は、中川低地東部では流山市～草加市北部を結ぶ付近に、低地西部では草加市南部～川口市を結ぶ付近にあったと推定されている。この段階で、中川低地の大部分、換言すれば、奥東京湾の湾奥部～湾央部にかけて沖積地化が進み、湾央部では広大な汽水域が広がっていたと推察される。このように海岸線が後退した時期にあっても、中川低地周辺では、神明貝塚を含め、該期にも貝塚の形成がみられるとともに、それらの貝塚は環状もしくは馬蹄形を呈し、大規模化する傾向にある。

奥東京湾の最奥部に位置する後期貝塚としては、茨城県猿島郡五霞町の冬木A・B貝塚、千葉県野田市の内町貝塚が挙げられる。冬木A・B貝塚は、土地区画整理事業に伴って、昭和54年度に発掘調査が実施されており、後期前半の遺構とともに埋葬人骨18体が検出されている。貝塚は地点貝塚状の分布を示すが、調査地点以外の削平が著しく、詳細は不明である。出土した貝類はシジミが主体を占め、僅かにタニシとカワナがみられ、概ね淡水性の環境にあったことが窺える。一方、内町貝塚は、昭和40年代に群馬大学による発掘調査や、昭和57年度に当時の関宿町教育委員会によって範囲確認調査が実施されており、後期～晩期中葉にかけての遺構と遺物が検出されている。貝塚は馬蹄形を呈すが、江戸川の改修工事により、一部が堤防の下に埋没しており、全容については不詳である。出土した貝類は汽水性のヤマトシジミが主体を占めている。

神明貝塚は、内町貝塚から南方へ約4.2kmの位置に所在しており、ヤマトシジミを主体とする後期前半～中葉の馬蹄形貝塚であることは、前述したとおりである。

神明貝塚以南の後期貝塚の様相についてであるが、まず、湾央部の東側、すなわち下総台地に所在するものとして、野田市の東金野井貝塚・岩名貝塚・野田貝塚・山崎貝塚、埼玉県北葛飾郡松伏町の栄光院貝塚等が挙げられる。東金野井貝塚は、後期前半～晩期前半にかけて形成された馬蹄形貝塚で、ヤマトシジミを主体とする。岩名貝塚・野田貝塚は、後期～晩期中葉の馬蹄形貝塚で、ヤマトシジミを主体とし、僅かに鹹水性の貝類もみられる。国指定史跡である山崎貝塚は、中期後半～晩期中葉の馬蹄形貝塚で、中期～後期前半の貝層は鹹水性のハマグリやシオフキ等を主体とするのに対し、後期後半以降の貝層はヤマトシジミが主体を示すようである。栄光院貝塚は、江戸川の改修工事により東半部が削平されているが、ヤマトシジミを主体とする後期前半～中葉の馬蹄形貝塚である。

湾央部の西側、大宮台地に所在する後期貝塚として、埼玉県南埼玉郡宮代町の西光院遺跡、埼玉県さいたま市裏慈恩寺遺跡・平林寺西遺跡・真福寺貝塚等が挙げられる。西光院遺跡では、後期前半に形成されたと推定されるヤマトシジミを主体とする小規模な地点貝塚が確認されている。裏慈恩寺遺跡では後期～晩期前半の、平林寺西遺跡でも後期前半のヤマトシジミを主体とする地点貝塚が確認されているが、いずれの貝塚でもハマグリ等が一定量みられる。国指定史跡である真福寺貝塚は、後期前半～晩期前半を主体とする遺跡

で、台地上の集落跡と低地に形成された泥炭層遺跡から構成されている。台地上の集落跡は、低地を取り囲むように盛土状の高まりがみられ、住居跡等の遺構や地点貝塚が分布している。出土した貝類はヤマトシジミが主体を占めるものの、ハマグリ等も多くみられる特徴がある。

湾口部の東側、下総台地に所在する後期貝塚として、千葉県流山市の上新宿貝塚・上貝塚貝塚・三輪野山貝塚等が挙げられる。上新宿貝塚は、後期前半～晩期前半にかけて形成された貝塚で、北西側と南側に弧状の貝層が、貝層が途切れる北東部にもブロック状の貝層が点在している。出土した貝類は、北西側貝層がヤマトシジミを主体とするのに対し、南側貝層はマガキ・ハマグリ等を主体としており、貝層の形成時期の差異に関連するものであると推察されている。上貝塚貝塚も、後期前半～晩期前半の馬蹄形貝塚で、後期前半まではハマグリを主体とするのに対し、後期後半以降になると主体がヤマトシジミへと移っていくようである。三輪野山貝塚は、後期初頭～晩期中葉の馬蹄形貝塚で、所謂「環状盛土遺構」と複合する拠点集落と位置付けられている。主体となる貝類は、ハマグリ・マガキ等から、やはり後期後半以降にヤマトシジミへと移る様相が捉えられている。

湾口部の西側、大宮台地南端に所在する後期貝塚として、埼玉県川口市のト伝遺跡・宮合貝塚・新郷貝塚・猿貝塚・石神貝塚等が挙げられる。なお、埼玉県域では、縄文時代前期に貝塚形成のピークを迎えるのが一般的であるが、川口市域では後期中葉以降に貝塚数が増加し、そして大規模化する傾向にあることから、海退期になって漸く貝類採集の適地になったことが窺える。ト伝遺跡では、ハマグリ・マガキを主体とし、ヤマトシジミもみられる後期前半の地点貝塚が、宮合貝塚でもハマグリ・オキシジミを主体とする後期～晩期中葉の地点貝塚が確認されている。新郷貝塚は、後期～晩期中葉にかけて形成された馬蹄形貝塚で、ヤマトシジミを主体とし、ハマグリ・オキシジミ等もみられる。安行式土器の標式遺跡である猿貝塚では、遺跡内2ヵ所で貝層の分布が確認されており、ヤマトシジミ・ハマグリ・マガキを主体とするようである。石神貝塚は、「北貝塚・西貝塚・東貝塚」と呼称される貝層の分布が3ヵ所で確認されており、概ね環状貝塚であると認識されている。出土した貝類は、ヤマトシジミを主体とし、ハマグリ・マガキ等もみられる。

ここまで概観してきたように、中川低地周辺に分布する縄文時代の貝塚は、海進・海退現象に呼応して、その数や規模、貝種組成に変化がみられることが判明している。神明貝塚が営まれた縄文時代後期には、中川低地の大部分が淡水～汽水域化したものと推定されるが、下総台地や大宮台地南端に形成される貝塚は、環状もしくは馬蹄形を呈し大規模化する傾向にある。神明貝塚とこれらの貝塚を比較すると、共通性が多くみられる一方で、神明貝塚の特徴ともいべき事象も抽出することができ、それらは概ね以下の2点に集約される。1点目として、神明貝塚の営まれた期間が、縄文時代後期前半～中葉の約330年間に限定されているということが挙げられる。これについては、神明貝塚以外の環状・馬蹄形貝塚の大半が、晩期に至るまで長期間にわたり形成されたものであることを勘案すれば、神明貝塚における馬蹄形貝塚の形成が短期間に行われたものであることを示している。そして2点目としては、神明貝塚の残存状況が良好であることが挙げられる。奥東京湾最奥部に位置する後期貝塚として、冬木A・B貝塚と内町貝塚が挙げられるが、前者は土地区画整理事業によって削平され、後者は江戸川の堤防下に一部が埋没している。それに対して、神明貝塚は、遺跡範囲の大部分が農地として利用されており、東西160m・南北140mを測る貝層の範囲についてはほぼ完全な形で残されており、奥東京湾最奥部の汽水域における後期集落の全体像を復元するためには欠かせない遺跡であるといえよう。

(越智)

第三章 調査の沿革

第1節 神明貝塚の概要

(1) 黎明期の市域の貝塚調査

春日部市内には平成29年12月現在、29ヵ所で貝塚が所在し、神明貝塚が立地する下総台地宝珠花支台では本貝塚を含め5ヵ所が周知の埋蔵文化財包蔵地として確認している。さて、市域貝塚の学史上の登場は、戦前の土器型式編年研究で縄文時代前期初頭の標式遺跡に位置付けられた花積貝塚が挙げられる。近世末に編さんされた『新編武蔵風土記稿』では、「高さ四、五尺庚塚と云、この外西北に登り五丈計り屈曲せる坂あり、そこより貝殻多くいずれば貝殻坂とよべるなり」と記載され、市域でも沖積地との比高差が視認できる大宮台地慈恩寺支台斜面の切り通しに貝殻の露出を読み取ることができる。その学史上の初出は、明治26年(1893)の阿部正功による「埼玉県下の遺跡」で花積地区に所在する貝塚の存在が紹介され、『日本石器人民遺物発見地名表第2版』では「南埼玉郡豊春村花積貝塚」と具体的に表記された。

昭和に入ると、大山史前学研究所による一連の貝塚調査を報告した、昭和8年(1933)刊行の『東京湾に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年学的研究予報(第一編)』では、昭和3年(1928)の花積貝塚での初めての本格的な発掘調査によって、上部貝層では勝坂式、下部貝層には蓮田式の包含を確認し、「蓮田式の古く、勝坂式は新しい」層位事実が確認された。続く昭和10年(1935)には、甲野勇の『縄紋式石器時代文化の変遷』の中で、蓮田式に含めた花積貝塚下部貝層出土の繊維土器を「花積下層式土器」と分類し、子母口式、茅山式に後続し、蓮田式、黒浜式に先行する土器型式に位置付け、概ね今日の縄文時代前期前半の土器型式学の骨子が確立する役割を花積貝塚が担ったといえる。なお、昭和15年(1940)には、酒詰仲男による踏査が花積貝塚を含む周囲でも行われ、貝塚の詳細な分布が「酒詰仲男ノート(仮称)」には地形と共に克明に記録されている。一方、本貝塚が所在する下総台地での事例は乏しいが、その中でも昭和36年(1961)の宅地造成に伴う米島貝塚での緊急発掘調査が挙げられる。僅か15日間と限られた期間でありながら、縄文時代前期中葉に帰属する10軒もの住居跡を完掘し、現在でも下総台地西縁部のメルクマールとなる前期中葉の黒浜式土器の内容を明らかにした調査として学史的にも著名である。そして、この調査以降、学術的な発掘調査から開発に先立って行われる緊急発掘調査へと変移したのは市域に限らず、全国的な動向であった。

(2) 神明貝塚の研究史

本貝塚は、現在、畑地や陸田の農地が広がる農業振興地域に指定されており、畑地や陸田上面に夥しい量のヤマトシジミの貝殻が散布する有り様は、旧来から貝塚の存在を広く知らしめている。しかし、近世古文書類の現存が少ない西親野井地区にあっては、大正13年(1924)発刊の郷土誌『寶珠花之今昔』が神明貝塚に関する唯一の文献資料となっている。その冒頭には「大字西親野井に貝塚あり」、さらに江戸川及びその沿革の項には「住民は魚介を取り生活を助けしことは今尚本村大字西親野井に貝殻の堆積層をなしてあるをもって証する」と記され、西親野井地区に貝塚が存在することが読み取れる。そして地味と地勢の項では「地面は洪積層の赤、黒土の混和、肥沃でなく、平坦、西北に高く、東南に低く中央の低地を水田とする、水田は灌漑に乏しく」との記述からは、地区中央に谷地が入込む景観が描写されており、本貝塚東側に進入する開析谷を指すものとみられる。このように郷土誌での記載でありながらも、貝塚の存在に加え、西親野



第 6 図 遺跡範囲図

井地区に洪積層である関東ローム層が広がり、さらには開析谷を含む地形面にまで記述がおよび、土器や石器等の人工遺物の散布を指す記載がないものの、概ね大正の頃には貝塚の存在が周知されていたことが窺える。学史では、昭和3年（1928）の東京帝國大学発行の『日本石器時代遺物発見地名表』が最初の記載で、貝殻の散布や土器をはじめ、打製石斧や磨製石斧の採集が記されている。しかし、この頃、関東地方の貝塚の調査に邁進した大山柏が主宰した大山史前学研究所の調査対象からは神明貝塚が欠落したことによって、学界中央への周知が遅れてしまったものと推察される。ただし、昭和10年（1935）田沢金吾が『ドルメン第4巻第6号』の中で姥山貝塚の調査成果を基にした、住居跡廃絶後に貝殻が遺棄され、「幾度となく繰返さるゝ結果貝殻は環状に台地上に堆積して貝塚が築成されてゐる」とし、市川市姥山貝塚や曾谷貝塚と共に「西親野井貝塚」の名を挙げており、環状に貝塚が巡ることが初めて紹介されている。

一方で昭和22年（1947）9月に未曾有の被害を巻き起こしたカスリーン台風により、西親野井地区の集落は江戸川堤防の改修に伴って移転を余儀なくされた。旧来の集落は、旧堤防に沿って展開していたが、台風を契機に計画された引堤工事により、昭和26年（1951）に着手された宝珠花村市街地の移転事業とともに、昭和25年から28年にかけて、貝塚周辺へも家屋が移転する景観に至った。これにより、貝塚周辺の原野や山林が開墾され、畑地や陸田に様変わりした。このような自然災害を発端に、貝塚周囲が集落の一部へと変貌し、山林で覆われた貝塚が開墾によって露わになった結果と相俟って、昭和26年の埼玉県による『埼玉縣史第一巻 先史原始時代』に「親野井貝塚」の名称として概要が紹介され、貝塚の存在、土器や打製石斧、磨製石斧、獣骨の採集が挙げられている。さらに昭和34年（1959）、土曜会発行の酒詰仲男による『日本貝塚地名表』には「西親野井貝塚」、異称として「親野井貝塚」、「神明耕地貝塚」の遺跡名で紹介され、「神明」の小字を冠した貝塚名での記載は初現となる。また、地元では戦前から貝塚の貝殻を養鶏用の飼料や住宅の基礎材の一部として用いられ、貝の抜取りが古くから行われていることから、貝塚の存在は前掲の大正末期の郷土誌同様に広く周知されていた様相にある。

そして昭和44年（1969）には「各時代の性格を代表する遺跡」、「形態・構造がよく保存されている遺跡」、「群として価値の高い遺跡」、「地域的に特色のある遺跡」の4項目の基準によって埼玉県教育委員会から埼玉県重要遺跡に選定された。この時に示された範囲は貝層の散布が視認される馬蹄形貝塚の本体に止まらず、貝塚の形成やその立地にも関連性が内包する東側の開析谷を含み、西側に接する杉戸町域にまでおよぶ南北約460m、東西約305mと広大なものであった。さらに昭和48年（1973）には埼玉県教育委員会によって埋蔵文化財の保護のための基礎資料として埼玉県遺跡地名表の作成が昭和36年度に引き続き行われた。昭和46年度から2ヵ年で県下の分布調査が、昭和48年度からの2ヵ年にわたる補足調査の結果、神明貝塚では先の埼玉県重要遺跡に選定された範囲からは開析谷が除かれたものの、馬蹄形貝塚本体をほぼ中央とし、杉戸町にまで跨る南北約460m、東西約290mの約133,400㎡の範囲が、文化財保護法第95条の規定による周知の遺跡として現在に至っている。

（中野）

第2節 調査の概要

神明貝塚では、昭和36年の学術的な調査を皮切りに、保存目的の調査、さらには範囲確認調査、そして記録保存を目的とする緊急発掘調査と、様々な目的による調査が行われた平成14年までの41年間と、さらに本格的に史跡化に取り組む保存目的の調査へ移行した平成21年以降の調査と、概ね2期に大別できる動向にある。以下、各調査の概要や成果について記述する。

(1) 1次調査

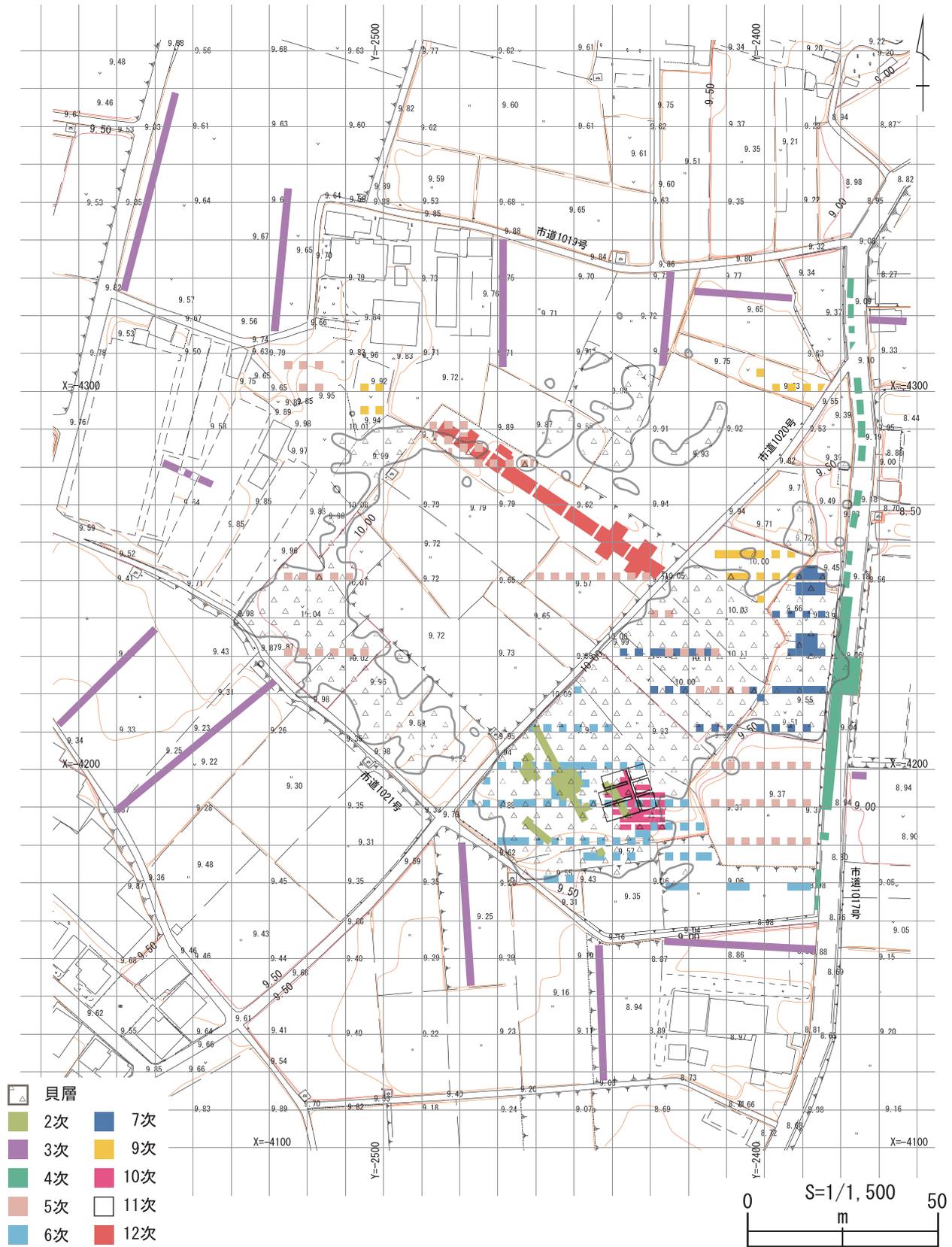
昭和36年(1961)に埼玉県立浦和第一女子高等学校郷土研究部の部活動の一環で実施された調査である。残された記録も限られるため、後年に行われた2次調査の報文からは貝塚南東部及び東部の境付近に調査地点が推察される。僅か5日間の調査期間であったが、3本のトレンチから4軒の住居跡を確認し、うち2軒を完掘した。調査の特記事項として、貝塚の堆積状況では純貝層、混土貝層、混貝土層に三分類されるが、層厚は一樣ではないこと、貝の廃棄は住居跡の窪地を利用し、堆積途上に新たな住居を築く重複住居跡であること、遺物は表土下の混土貝層に多く含まれ、純貝層や混貝土層とローム直上の堆積層には減ずることが挙げられる。さらに住居跡では、純貝層や混貝土層の下には堅緻に踏み固められた床面が存在し、方形と円形の2種の平面形態があること、うち1軒では炉跡の上部に灰層が伴うことが確認できる。出土遺物には縄文時代後期前半の堀之内式土器を主体とし、完形の注口土器や多数の深鉢形土器や甕形土器が、石器では打製石斧3点、磨製石斧1点、石錘12点、凹石3点が、自然遺物ではヒトの幼児骨や胎児骨の他、イノシシ、シカ、キジ、クロダイ、スズキ等の魚骨が挙げられている。

(2) 2次調査

1次調査から4年後の昭和40年(1965)、庄和町教育委員会では神明貝塚の永久的な保存を見据えることを目的に、計7日間の調査を行った。貝塚現地での調査に際しては、環状貝塚であることを前提とし、1次調査の成果を踏まえ、貝層の高まりが視認される貝塚南部に計4本のトレンチを設定した。検出遺構は後期前半の堀之内式期の住居跡1軒、土坑3基、埋葬人骨が2体であった。調査の特記事項としては、住居跡は円形を呈し、赤化した炉跡内部には白色の灰層が充填し、規模が他時期に比べて大型であることから、その機能面に関して特異性が指摘されている。また、貝層の堆積状況、特に混土貝層の在り方からも重複住居跡の存在が示唆されている。さらに埋葬人骨にあっては、廃絶された住居跡が埋積する過程で埋葬され、1号人骨は住居跡の可能性が指摘される覆土中に南方位に頭部を向けた屈葬、2号人骨は1号住居跡の南西壁にやや張り出す掘込みで、南方位に頭部を向けた伸展葬であり、埋葬場所と頭位には共通性がみられた。出土遺物では、住居跡の帰属時期にある堀之内式から後期中葉の加曾利B式土器を主に、石器では磨製石斧や打製石斧、石皿・凹石、磨石、浮子、骨角器、装身具と多岐にわたり、神明貝塚を表徴する生産活動が窺われる。この調査成果は、市教育委員会が後に繰り返し実施した保存目的の調査の示標となった。

(3) 3次調査

2次調査で貝塚がもつ実態の一端が把握されたことを受けて、昭和54年(1979)には、貝の散布によって貝塚が視認できる地域を除き、その外縁部で判然としない地域の実態を明らかにすることを目的に計13本のトレンチを設定し、ローム面までの掘り下げを行った。その結果、貝層外縁部には貝塚形成期の遺構の所在は認められず、縄文時代前期と古墳時代後期の住居跡が各1軒と、他時期の遺構が希薄に点在することを捉えた。また、東側に控える沖積地際へのトレンチ調査では遺構もなく、遺物も希薄であったが、今後、将来にわたって保存すべき範囲に開析谷を意識した最初の動向になったことは当時としては大きな一歩となった。



第7図 神明貝塚調査地点図

さらに貝層の範囲を明確化するためにハンド・ボーリング調査が全域で行われ、東西約150m、南北約120mの規模で貝層が広がり、北東部に開口部をもつことが初めて明確化された。特に総括として、耕作土上に散布する貝と地表下の分布では相違があること、北東部や北部の2ヵ所に空白部をもち、環状に巡ること、貝層の厚い地点で約30cm、薄い地点で10～20cmにあり、貝層全域の広がりが初めて図化され、以降の調査への礎が築かれた。

(4) 4次調査

平成14年には遺跡範囲の東縁を南北に走る農道において庄和町による道路拡幅事業が計画され、所在確認調査の結果、現状保存が適わないために本貝塚における初めての記録保存目的の緊急発掘調査となったのが4次調査であった。調査では1m四方のグリッドを基調に計19ヵ所でトレンチを設け、遺物量やローム面の状況、及び遺構の確認に応じて拡張を図ったところ、3次調査で貝層の所在が確認された貝層範囲東端で縄文時代後期前葉の堀之内1式期の住居跡1軒、土坑2基を検出した。住居跡は円形を呈し、覆土上層に混土貝層を含む堆積状況にあり、ピットの配列や深度、さらには覆土の堆積からは2軒の重複が示唆された。また、土坑上部に築かれた炉跡には焼土主体層を覆う灰層が認められ、2次調査で指摘された住居跡の炉跡の特徴が本調査でも追認された。出土遺物では、貝塚形成期以前の旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代早期から後期前半の土器群をはじめ、動物遺存体では主要貝種であるヤマトシジミが99.8%を占め、マガキ、フトヘナタリ、ハマグリ、シオフキ、ハイガイが付随する、汽水域や内湾種の組成であることを遺構内貝層の全量採取によって明らかにした。

(5) 4次調査までの諸課題

昭和36年の1次調査を皮切りに、史跡指定を見据えた内容把握や範囲確認、さらには4次の緊急発掘調査と、様々な調査目的の調査を41年の間で実施してきた。ここでは、これら4次にわたる調査で得られた課題について整理してみることにする。まず、本貝塚の全容であるが、1次の埼玉県立浦和第一女子高等学校の調査では調査地点が明確ではないが、昭和40年度の2次がその西側へとトレンチを設定したとあり、貝塚東部、あるいは南部に調査地点が推察される。さらに昭和53年度の3次に際して併せて実施した、1mボーリング棒による貝塚範囲の確認調査では、北方、北東、そして幅狭ながら南方の3ヵ所で貝塚が途切れる開口部の存在を捉えると共に、概ね環状に貝塚が巡ることが確認された。2次では貝層は環状に連なっており、その結果として中央部が皿状に窪み、貝層部との比高差約50cmを測ることが示唆された。貝層が環状に厚く堆積した結果、外観上は窪地地形を呈すことに起因し、ベースのローム層は窪まず平坦であって何ら変化するものではないことが調査でも確認された。さらに貝層が途切れ、貝層南西部において中央窪地が開口するが、この開口部も開析谷の谷頭に直接接続するものではないといった見解も提示された。続く3次では貝塚外縁部を主にトレンチが設けられ、貝塚形成期の後期帰属の遺構は検出されず、ボーリング調査の結果によると東西約150m、南北約120mと、地表面上の貝殻が散布する範囲から狭まることが明らかになった。さらに各地点で貝層の層厚は異なり、東側から南側と西側が層厚約50cm程度と厚く、北側では約10～20cmと薄い堆積状況にあり、貝層の平面的な幅は層厚が厚い調査で幅広く45mを測り、貝層の薄い北側で10mと極端に狭まることが綿密なボーリングの探査によって捉えられた。さらに2次の報告に際して指摘された外観上の皿状の窪みに関しては、東西約80m、南北約56mの窪地が貝塚中央部に存在し、1mボーリング棒ではローム面に達しないが、低位部分と、貝塚の最高値部分では、比高差0.75mを測ることを測量調査で明らかにすると共に、その中央部は集落に付随する広場的な空間へ位置付けた。この他、貝塚形成期の住居跡が貝層の外側には存在しない点、西方の杉戸町には2地点の子貝塚の存在の可能性が結語に加えられている。これに

については、平成12年度に杉戸町史編さん事業に伴う分布調査に際して、市町境で貝の散布と層厚の厚い貝層の存在がボーリング棒による調査でも追認され、僅かな後期土器片の散布とヤマトシジミ主体の貝種に着眼すると神明貝塚本体と時期差はなく、環本体の外径がさらに東西方向へ広がる様相が指摘されている。

このように2、3次の報告に際して言及される幾つかの諸課題がある。1点目として、北部で幅約20m、北東部で幅約30m、さらに2次調査の西方に幅約7～17mの貝層が途切れる開口部の存在が3次でも指摘されている。2点目として、環状に巡る貝層内部の窪地地形の存在を、2次ではローム面の変化はなく、厚く貝層が環状へ巡った結果、その内部に比高差が生じたために生成した、見かけ上の窪地へ帰結している。これに対して3次ではローム面からの地形比高差は捉えられなかったものの、測量調査の比高差からは環状に巡る貝層内部に明らかな窪地地形の存在を強調し、広場へと位置付けた。3点目として、3次で捉えられた貝塚形成期にあたる縄文時代後期の遺構が貝層外側に存在しない。この他に、環状を呈す親貝塚の他に子貝塚と称された地点貝塚の存在や地表面上に散布する貝殻と、地表下に堆積する貝層の実態に差異がある点が、これまでの支柱的な課題として集約できる。さらに2、4次検出の遺構覆土に堆積する貝層について着目すると、いずれも堀之内式期に帰属する1号住居跡（2次）、4号住居跡（4次）では共に覆土上～中層に貝層の堆積を確認することができる。土坑においても1号土坑（2次）、6号土坑（4次）も同様な在り方であり、ある程度の土壌の堆積が進行し、皿状に窪んだ遺構凹部への貝の廃棄行為に共通性が見出される。また、7号土坑（4次）が埋戻され、その上面に4号住居跡の炉跡の構築例に加え、2次及び4次で調査された2軒の住居跡でも住居跡の重複が示唆されていることから、縄文人自らの埋戻し行為の可能性が見出されている。いずれの住居跡も被熱が顕著な炉跡に灰層が伴っており、2次の報文のように、「炉と呼ばれているものとは機能的な面で異なるのかもしれない」と、貝塚と遺構に纏わる課題が抽出され、以降の調査に説明が引き継がれた。

（6）5次調査

平成21年度からは国史跡化を目指した保存目的の調査に着手し、平成28年度まで年次的に実施した。調査にあたっては年度毎に次数を付して呼称した。21年度では、空中測量による現況測量図の作成を手始めに行った後、昭和53年の3次で得られた貝層範囲の再確認を主眼に、公共座標に基づき、約18,000㎡を対象に2m間隔でボーリングステッキによって貝層確認を北東部及び西部で実施した。この調査は単年度での完了が困難であったため、以降、4年間をかけて地域毎に行った。北東部では陸田に用いられている土地が主体であったことから、土壌が固く締まり、ボーリング棒の刺突に困難を極めたが、総じて現地表面下20cmと浅い深度で貝層が、西部では畑地や休耕地が多く、密度の濃い貝層が地表下15～25cmで確認することが適った。これに加え、北部、西部、東部、南部、そして中央部で計8筆の土地を対象に、2m四方のグリッドを2m間隔に設置し、耕作土を掘り下げて貝層の平面範囲の検証を行った。この結果は昭和53年に図化された貝層範囲に概ね合致し、貝層の残存が良好であること、但し、疎密の差があること、ボーリング調査と同様に深度が20cm程度から確認できること、中には貝層上面から一括性のある遺物の出土状況もあること、中央部では遺物が希少で浅い深度でローム面に至ること等が把握された。また併せて地権者や地元住民への現地説明会を開催し、調査成果の還元を図った。

（7）6次調査

平成21年度に引き続き、馬蹄形貝塚の南部から東部にかけて、約9,000㎡を対象にボーリングステッキによる貝層確認を行った。3次で貝層を確認した範囲に加え、中央部に接する東部内周で新たな貝層の広がりや地点貝塚のような小規模貝層の分布が認められた。また、南部で計6筆の土地を対象に試掘坑を設定して

掘り下げたところ、2次で完掘した1号住居跡を検出し、これによって2次の調査地点の一部を明らかにし得た。さらに、この時点では貝塚形成期の所産と断定し得なかったが、耕作土以下の混貝土層上面に焼土と灰層の浅い皿状の焼土跡が点在した。調査終盤には保存目的に関わる指導者の招へいや地権者、地元住民への現地説明会を設け、21年度に比べ多数の見学者が来訪された。

(8) 7次調査

平成23年度では、これまで調査の手がおよばなかった馬蹄形貝塚の東部、及び4次に接する東部外周の計6筆の土地を対象に試掘坑を設定して掘り下げを行った。この調査では、貝層の混入が希薄である混貝土層をどのように評価するかを検証することを目的に入念な観察の上で混貝土層を掘り下げ、一段階、調査の歩みを進めた。その結果、耕作土直下、あるいは現地表面から始まる混貝土層に疎密が認められ、遺物の集中出土は少なく、貝の含有量が増加する混土貝層へ変移して住居跡の覆土と断定できるケース、あるいは混貝土層が薄い層厚で消失してしまうケースが認められた。東部外周では3軒の円形を呈す住居跡が確認され、うち2軒は重複関係にあり、その確認面上からは土器内部に灰塊を充填した堀之内1式の深鉢形土器が出土した。調査終盤には22年度に続き、指導者の招へいと現地説明会を開催した。

(9) 8次調査

平成24年度では、馬蹄形貝塚中央部の約1,000㎡を対象にボーリング調査を行ったが、小規模な地点貝塚の存在も確認されず、また、ローム面までの深度も観察したが、総じて平坦な地形面を示すものであった。また、1次調査を行った埼玉県立浦和第一女子高等学校で出土遺物を含めた資料の所在確認調査を行ったところ、当時の写真フィルムのネガを確認し、同校からの寄贈を受けた。

(10) 9次調査

平成25年度においては、これまで農作物により未着手であった貝塚東部の352㎡を対象にボーリングステッキによる貝層確認、ならびに馬蹄形貝塚の開口部、さらに西部外縁にて掘り下げを行った。その結果、東部内周で疎らな混貝土層を覆土にもつ4軒からなる重複する住居跡と灰溜りが、開口部では貝層の広がりはないものの、土坑状の掘り込みを確認した。また、ボーリングステッキによる貝層確認は本年度で完了し、3次調査の再検証に加え、新たな範囲の加筆が適った。この他に貝塚の東方に伸びる開析谷の最奥部と開口部の2ヵ所に深度30mのオールコア採取のボーリング調査、ならびにボーリング採取試料の自然科学分析を実施した。

(11) 10次調査

平成26年度からは、貝塚の実態を明らかにすることを目的に遺構内部の調査に取り組んだ。その初年度として、過去の調査で住居跡が調査された2次や6次で貝層の広がりや層厚が顕著に認められた貝塚南部を対象とした。今般の調査では2mグリッドを基調に掘り下げ、状況に応じて拡張した結果、トレンチ調査に至った。検出した遺構は、南北に重複する堀之内1式期の住居跡2軒で、住居跡のほぼ中央を一筋のトレンチで掘り抜き、うち1軒では床面に焼土が堆積し、炉跡にも灰を含むといった特徴が見出された。また、このトレンチ壁面や床面を対象にした立体剥ぎ取りを実施し、将来への展示公開に備える措置を講じた。調査終盤には指導者の招へいと現地説明会を開催し、この調査からは広く一般への公開を開始した。

(12) 11次調査

10次で検出した住居跡の全貌や貝塚の構造的な把握、さらには貝塚の形成過程の解明を目的に、平成27年度では、前年度に2軒の住居跡を検出した周囲を掘り下げた。調査にあたっては10次で土層観察用のベルトとして掘り残した部分を除き、面的に、かつ層位的に掘り下げた。その結果、耕作土以下30cm程から貝の分

布や堆積土壤に差異が認められ、また、混貝土層やローム漸移層と、各層にわたって焼土跡や灰溜り・灰塊が総数30ヵ所で検出され、重畳する計4面の生活面の存在が把握された。ローム面上では重複する円形や楕円形を基調とする7軒の住居跡を確認し、その中でも9号住居跡では炭化材と焼土層の重畳が、また10次で一部を検出した焼土を床面にもつ7号住居跡では壁際を除いて被熱が全面に広がり、焼土層以下のローム面の被熱状況からは現地性の燃焼行為であることを明らかにした。さらにこれらの遺構群の堆積状況からは自然堆積ではなく、継続的に破砕貝や排土を埋戻し、その窪地を利用しながら新たな遺構を築くといった縄文人の埋戻し行為を捉えた。調査終盤には指導者の招へいや現地説明会を開催し、特に地元の宝珠花小学校の4～6年生と保護者、そして県外からの来訪者もあり、これまでで最も賑わった見学会となった。

(13) 12次調査

平成26、27年度では貝層が最も広範囲に、そして濃い密度で堆積した馬蹄形貝塚南部で調査を行ったが、貝塚の構造的な解明のために貝層の範囲が変移し、かつ、貝塚中央部の様相を把握することが可能な貝塚北西部を対象として平成28年度では調査を実施した。調査では平成21年度の5次で調査した土地の形状に合わせ、4m幅、総延長70mのトレンチで貝塚北西部から中央部にかけて、面的かつ層位的に掘り下げた。その結果、現況地表面とローム上面共に馬蹄形貝塚中央へ向かって、極めて僅かな傾斜にあること、遺物や遺構及び貝層は貝塚外周に多く、馬蹄形中央に向かって希薄になること、特に貝層は、内側に向かって量を減じ、中央付近では耕作土中に止まること、検出された住居跡は12軒を数えるが、外周には円形プランを基調とする堀之内1式期が8軒、貝塚中央部寄りには方形プランを基調とする加曾利B式期が4軒と、時期を追って集落が馬蹄形内部に移行することを確認した。それと相俟って北西部外周には住居跡をはじめとする多数の遺構が複数の生活面をもって掘り込まれ、頻繁な埋戻し行為が確認できるが、中央部へ向かうにつれて遺構数の減少に伴い、埋戻し行為の沈静化と併せて生活面の単一化がみられた。貝層範囲では11次同様に各層位で焼土跡や灰溜りが生成され計16ヵ所を数えるが、11次検出の遺構と比較して被熱が弱い。また、住居跡の埋戻しの過程で3基の墓が築かれ、いずれも2次の埋葬人骨2体と同様に頭位は南を指し、その埋葬方法には共通性が垣間見られる。以上が12次の特記点である。縄文人骨の検出も含め、調査中盤に指導者の招へいや現地説明会、そして地元の宝珠花小学校や富多小学校の児童を対象とした社会科体験発掘等、様々な機会で見学会を開催し、貝塚の周知を促進した。

(中野)

参考文献

- 阿部正功 1893「埼玉県下の遺跡」『東京人類学会雑誌』8巻
 東京人類学会 1901『日本石器時代人民遺物発見地名表』第二版
 大山柏ほか 1933「縄紋式石器時代の編年学的研究予報（第一編）」『史前学雑誌』3巻6号
 甲野 勇 1940「関東地方に於ける縄文式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』7巻7号
 東京帝国大学 1928『日本石器時代遺物発見地名表』
 田沢金吾 1935「貝塚」『ドルメン』第4巻第6号
 埼玉県 1951『埼玉懸史第1巻 先史原史時代』
 酒詰仲男 1959『日本貝塚地名表』土曜会
 埼玉県立浦和第一女子高等学校郷土研究部 1961「埼玉県北葛飾郡庄和町西親野井神明貝塚の発掘概報」『ゆうかり』
 庄和町教育委員会 1970『神明貝塚』庄和町文化財調査報告第2集

第三章 調査の沿革

庄和町教育委員会 1979『神明貝塚－範囲確認調査－』

杉戸町役場 2003『杉戸町史 考古資料編』

春日部市教育委員会 2008『神明貝塚4次地点、塚崎遺跡7.8次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

第IV章 貝塚の調査

第1節 貝層分布範囲の確認調査

(1) 調査の方法

第III章で触れたように、神明貝塚は南北約460m、東西約290mの範囲が文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地として周知されている（第6図）。しかし、貝塚本体は遺跡範囲南部の直径約160mの範囲にあり、それ以外の地点では、杉戸町域で子貝塚の存在が推測されているものの、開発に伴う確認調査では、市域で貝層や遺構の所在は確認されていない。したがって、貝塚の保存を図るには、貝塚本体の範囲を確定する必要があった。調査の方法は、まず航空測量により現況地形を把握し、貝殻が地表に散布されている範囲を中心に、検土杖によるボーリング調査（3、5～9次）を行った。次に、3次調査では貝塚の周辺部に13本のトレンチを放射状に設定し、貝塚外縁部の遺構の所在確認調査を行った。さらに、4～6次調査では、北西部、北東部、南東部において、3次調査よりも内側に試掘坑を設定し、遺構の所在確認調査を実施した。

また、後節で詳述するが、ボーリング調査の結果を追認するため、5～7、9次調査では貝層及びその直近に試掘坑を設定し、表土下の貝層及び遺構の所在確認調査を行った。

(2) 現況地形（第4、6、8図）

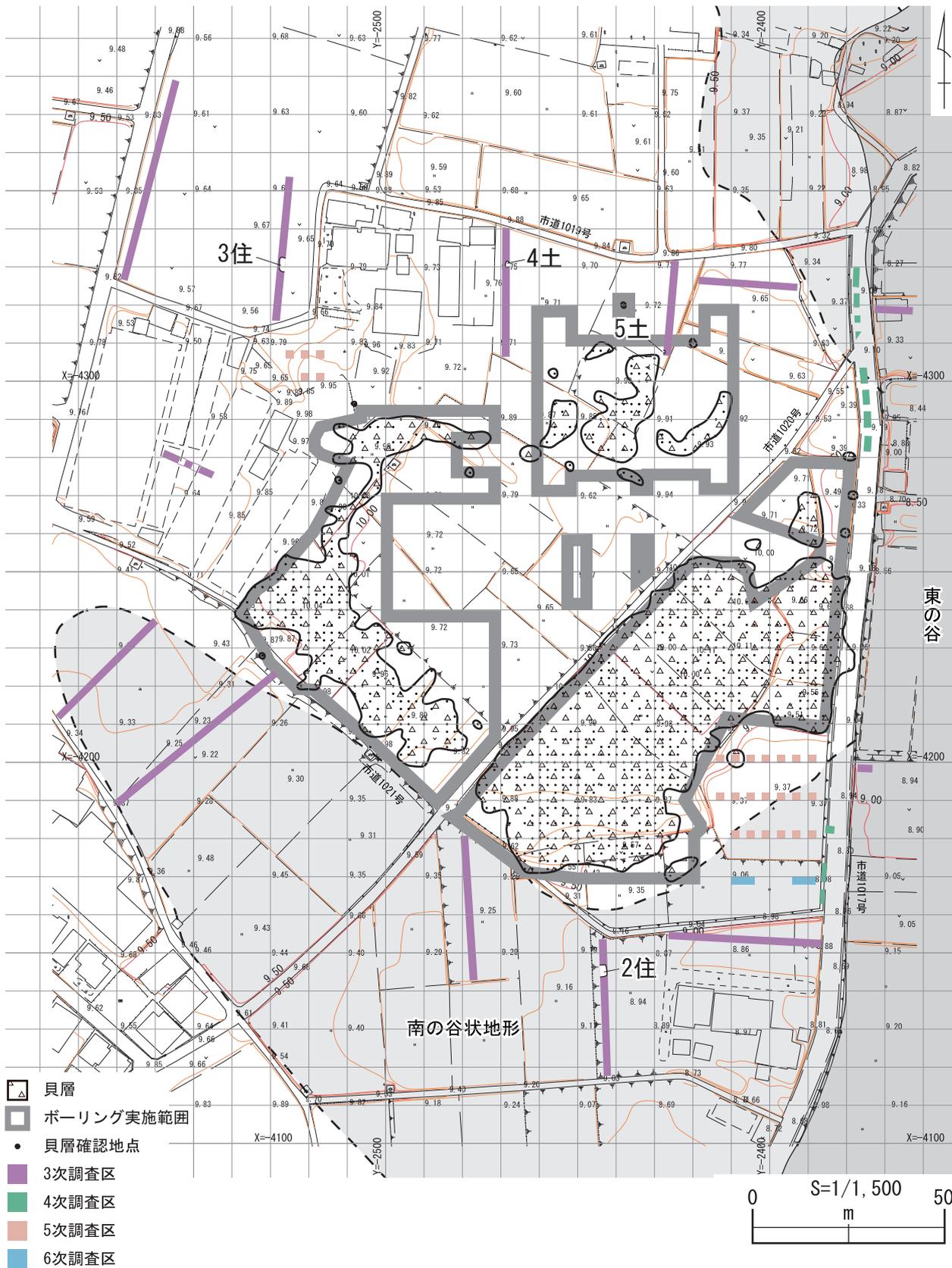
神明貝塚は下総台地宝珠花支台上にあり、中川低地から入り込む開析谷の谷頭付近にある。測量の結果、遺跡の標高は9.5m代から10.1m代の値を示し、貝層の最高地点と中央部の最低地点との比高差は最大でも54cmと、全体的に平坦な地形である。

貝塚の東端を南北に走る市道1017号線をほぼ境とし、その東側には中川低地から入り込む開析谷（以下、東の谷と呼称する）がある。現状では農地改良に伴う埋め立てが行われているため、貝塚との比高差は1～2m程度で、貝塚形成期の地形を視認できる状況ではないが、3次調査の第9、10トレンチでは、東方に緩やかに傾斜する斜面が確認されている。また、第V章で詳述するが、東の谷で行った地質調査では、谷奥は標高4m代後半の有機質シルト層の最上部から6m代前半の黒褐色シルト質泥炭層で、縄文時代前期後半から晩期後葉の年代値が得られ、基本的には沼沢域ではあるが、乾湿を繰り返す環境であったことが推察される。

貝塚の南方及び北東には、比高差50～70cmほどの浅い谷状地形の存在が確認された。3次調査の結果、南の谷状地形では現地表面からの深度30cm程度でローム面を確認しており、貝塚との高低差の要因は、ローム上面の標高と、その上に堆積する土壌の層厚の違いである。2号住居跡を検出した3次第12トレンチでは、ローム上面の標高は8.95m前後であるのに対し、付近の貝塚南部11次調査区では9.25m前後で、その差が30cm程度である。また、現地表面からローム上面までの層厚は、第12トレンチが30cm前後で、その大半が耕作土や陸田の床土であるのに対し、その北側にあたる11次調査区は貝層や遺物包含層、ローム漸位層が堆積し、50～80cmと厚い。ただし、南の谷状地形では縄文時代の生活面と考えられるローム漸位層が乏しいことから、貝塚形成期には目視できる高低差であったと推察される。

(3) 貝層の範囲（第8図）

3次調査のボーリング調査では、東西約150m、南北120m、北東部に開口部をもつ馬蹄形貝塚であることが確認された。しかし、調査から30年が経過していること、3次調査のボーリングの間隔等、調査方法の詳



第8図 貝層範囲確認調査地点

細が不明であることから、5～9次調査において改めてボーリング調査を行った。

各調査次における詳細は第三章で触れたが、調査対象は3次調査で確認された貝層範囲とその周囲とし、2m間隔で検土杖を刺突した。その結果、現地表面下から15～25cmで貝層を確認し、第8図に示したとおり、分布範囲は東西160m、南北140m、貝層の総面積は6,625.2m²を測り、東部から南部にかけては幅47m、長さ118mの範囲に分布し、最大の分布域である。西部ではやや幅狭となり、幅26m、長さ68mの带状に分布する。北部は局所的に分布し、北東部には開口部が存在する。ボーリング調査では、貝層は北部では薄く、東部から南部、西部では厚く堆積していることが確認され、貝層が広範囲の地点は層も厚い傾向にある。また、5～7、9次の試掘調査（第7図）で貝層を検出した範囲は、ボーリング調査で得られた貝層分布範囲とほぼ一致し、ボーリング調査の精度の高さが追認された。

遺物は、貝層上面や遺構確認面上から、後期前葉堀之内1式から後期中葉の加曾利B2式土器が出土し、貝塚形成期は後期前半が主体であることが窺える。詳細は後節にて報告するが、貝塚の外周では堀之内1式土器が、内周では堀之内2式～加曾利B2式土器が多く出土した。

（4）貝塚周辺部の遺構

貝塚周辺部では、3～6次のいずれの調査においても、貝層は確認されず、貝塚形成期にあたる縄文時代後期前半の遺構も乏しい。該期の遺構は貝塚の北方で土坑2基を検出したに止まり、該期集落はほぼ馬蹄形貝塚の範囲内に収斂される。該期以外の遺構では、3次調査で貝塚の北東に縄文時代前期の住居跡（3号住居跡）、貝塚の南方に古墳時代後期の住居跡（2号住居跡）を検出した。

遺物の主体は堀之内1式土器で、その他縄文時代前期中葉の黒浜式土器、前期後半の諸磯式、浮島式土器、後期初頭の称名寺式土器、前葉の堀之内式土器、中葉の加曾利B式土器、古墳時代後期から古代の土師器、須恵器が出土した。

（森山）

2号住居跡（第9図）

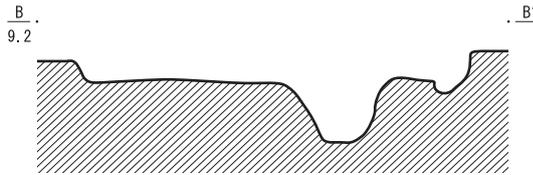
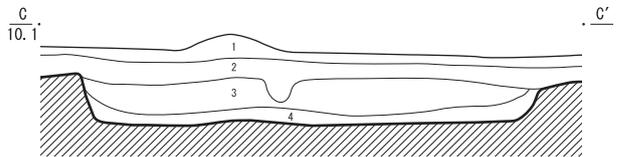
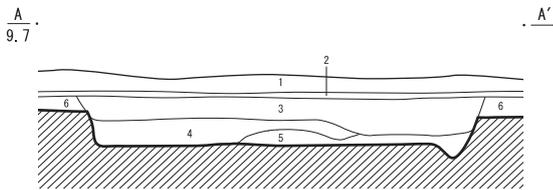
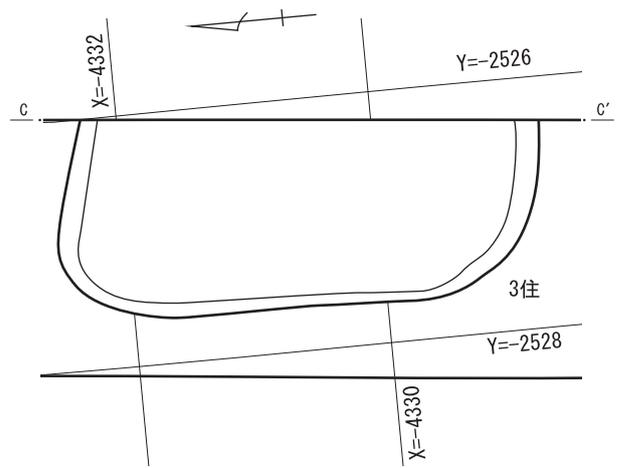
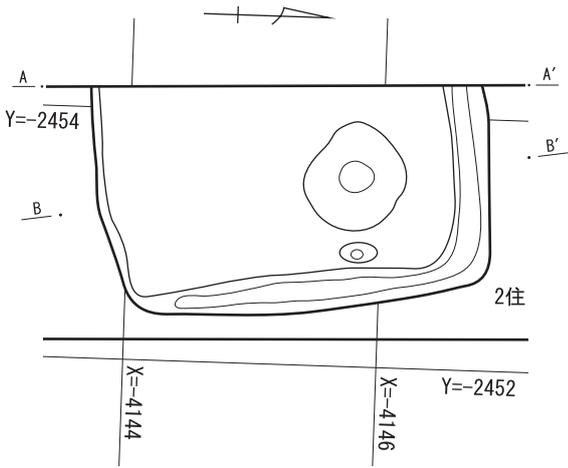
3次第12トレンチの北側に位置し、貝塚南部の外縁からは28mの地点にある。調査区内ではプランの東側半分にあたり、平面形態は隅丸方形と推定され、1本の柱穴、貯蔵穴、壁際を巡る周溝を検出した。調査し得た規模は東西180cm、南北312cm、確認面から床面の深さは30cmである。貯蔵穴は住居跡北東部に位置し、平面形態は円形を呈し、径約85cm、深さは約50cmを測り、断面形態はロート状を呈す。出土遺物では古墳時代後期の鬼高式の土師器甕が出土し、本住居跡は鬼高式期に帰属する。

3号住居跡（第9図）

3次地点第5トレンチの中央南側に位置し、貝塚北部の外縁からは47mの地点にある。調査区内ではプランの西側半分にあたり、その平面形態は隅丸方形と推定され、調査し得た規模は東西366cm、南北150cm、確認面からの深さは35cmを測る。内部施設は確認されなかった。出土遺物では縄文時代前期中葉の黒浜式と諸磯a式が各一片の出土に止まり、概ね縄文時代前期に帰属しよう。

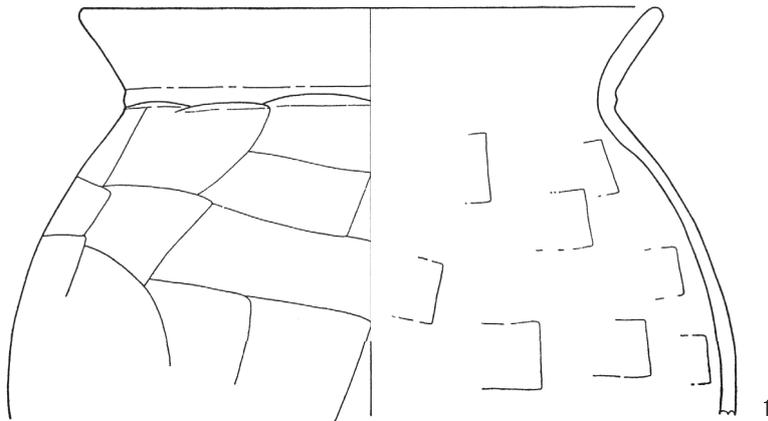
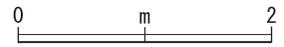
（岡本・中野）

第IV章 貝塚の調査



- 第3号住居跡
 1層：表土
 2層：赤褐色土（陸田床土）
 3層：黒褐色土
 4層：褐色土

- 第2号住居跡
 1層：表土
 2層：赤褐色土（陸田床土）
 3層：黒褐色土
 4層：黄褐色土
 5層：不明
 6層：茶褐色土



第9図 2、3号住居跡、出土土器

第2節 貝塚北部、中央部、開口部の調査

(1) 調査の概要 (第10図)

これまでの調査の結果、本貝塚は中央部に空白域を、北東部に開口部をもつ馬蹄形貝塚であることが判明し、遺構や遺物の傾向から、貝塚の外周が古く、内周が新しいことを窺い知ることができた。そこで、貝塚の構造と集落の変遷を解明することを目的として、12次調査では北西部の貝層から中央部にかけて4×70mの調査区を設定した。調査区は10mごとにベルトで区分して、北西からA区、B区、C区・・・G区と呼称した。さらにA区とB区は5mごとに東西に分割して、それぞれA区西、A区東、B区西、B区東と細分した。また、B区東では調査区外へ伸びる20号住居跡を完掘するため、北東側に拡張区を設け、B区東拡張と呼称した。表土掘削は人力で行い、層位的に遺構確認を行いながら、貝層及び遺物包含層を掘り下げた。

9次調査では、北東の開口部及び、北西の貝層外において遺構の所在確認を行ったが、遺構は確認されなかった。遺物も少量かつ細片で図示し得るものはないが、北西の貝層外では堀之内1式土器、開口部では堀之内2式土器を確認した。

(2) 貝層 (第10～12図)

本貝塚の貝層は遺構内に一括廃棄されたものを除き、基本的に土壌を主体とし、貝殻を客体的に含有する混貝土層である。本報告では、貝の含有量に応じて、混貝土層を多量(10cm四方あたりに完形貝が15個以上)、中量(同10個程度)、少量(同5個程度)、微量(同2個程度)、極微量(同1個未満)に分別した。破碎貝層は完形貝層に視覚的に準じて分別した。

地表面上では貝殻はA区西～C区に散布しているが、プライマリーな貝層は、ボーリング調査の結果と同様にA区西～B区西で確認された。ただし、ボーリング調査で確定した貝層範囲よりも広範に、貝殻の含有が微量な貝層がA区西～B区西でみられた。また、B区東拡張で20号住居跡の覆土からはブロック状の貝層を検出しており、ボーリング調査の限界も明らかとなった。

基本土層3～5

耕作により攪乱された表土貝層である。層厚は20～30cmを測り、暗褐色土を基調として破碎貝を含む。ボーリング調査の貝層範囲と一致するように、B区西を中心に貝殻の密度が濃い。C区は貝の破碎や土器の摩滅が著しいが、A区で共伴する土器は堀之内2式が主体、B区では加曾利B1式が主体であることから、平面的に大きな攪乱は受けていないものと推察される。

基本土層13、14

表土貝層下で検出された、プライマリーな貝層である。B区西に分布し、ボーリング調査で確認した貝層に該当する。層厚は10～15cmを測り、黒褐色土を基調として完形貝を含む。出土土器は堀之内2式が主体である。表土直下で検出した1号溝、P5～7、12の覆土は本貝層と同様であり、A区西においても黒褐色土を基調とした完形の貝層が存在していたことが窺われる。

(3) 遺物包含層と遺構 (第11～13図)

A区西からC区の表土下及び貝層下に、褐色土を基調とする遺物包含層が堆積する。層厚はA区で20～25cm(基本土層45、49、70、80、81、87他)、B区で10～20cm(基本土層43、44)、C区で10～25cm(基本土層118)を測る。遺構確認を行いながら掘り下げたところ、A区西～B区西では4面にわたって遺構を確認した。第1面は表土及び貝層直下で、暗褐色土を覆土とする26号土坑、2、3号溝、黒褐色土を覆土とする1号溝、P5～7、12、褐色土を覆土とするP8～11を検出した。前掲のとおり、A区西、A区東にもB区西

と同様に黒褐色土の貝層の堆積が推察され、1号溝、P5～7については、第1面の他の褐色土の遺構よりも時期的に新しい遺構と判断できる。続いて、第1面から5cmほど掘り下げた第2面で25、27号土坑、3、4号墓、12～21号焼土跡、8、9号灰溜りを、さらに第2面から10～15cm掘り下げた第3面で28号土坑、5号墓、22～24号焼土跡、6、7号灰溜りを検出した。最終的にソフトローム上面まで掘り下げ、住居跡群を検出したことから(第18図)、褐色土の遺物包含層は住居跡の覆土であり、住居跡が埋積する過程で、土坑、墓、焼土跡、灰溜り、溝、ピットが構築されたものと推察される。一方、B区東及びC区においては、遺物包含層中に土坑や焼土跡等の遺構は検出されなかった。

遺物はA区西、A区東では堀之内1～2式土器、B区西は堀之内2式土器、B区東では堀之内2式～加曾利B1式土器、C区では加曾利B1～2式が主体である。

(森山)

(4) 焼土跡

本調査区ではA区西、A区東の調査区で計13基の焼土跡を検出した。先述のとおり遺物包含層中の第2、3面にかけて構築されている。うち10基で灰層が伴っており、焼土跡に隣接する灰溜りは有機的に関連することが特徴として挙げられる。

12号焼土跡(第14図)

A区西の西部に位置し、13号焼土跡と近接し、27号土坑を切る。第2面で検出し、一部を5次のトレンチに切られる。東西82cm、南北98cm、平面形態は円形を呈し、確認面から深さは12cmを測る。上層では灰塊が含まれ、底面には弱い火床面が広がる。

13号焼土跡(第14図)

A区西の西部に位置し、12、14号焼土跡と近接する。第2面で検出し、5次トレンチに一部が切られる。調査し得た規模は南北51cm、東西69cm、平面形態は円形と推定され、確認面からの深さは27cmを測る。覆土上層に多量の焼土塊を含む暗赤褐色土、下層は灰が堆積することから、隣接する12、14号焼土跡の灰を蓄積した後、燃焼が行われたものと推測される。

14号焼土跡(第14図)

A区西のほぼ中央に位置し、第2面で検出した。遺構の北半分は5次トレンチに切れ、調査し得た規模は東西121cm、南北49cmで平面形態は楕円形と推定され、検出面からの深さは13cmを測る。覆土上層は焼土主体層で、少量の灰や炭化物を含む。遺物は堀之内式土器(第20図2)が出土した。

15・16号焼土跡(第14図)

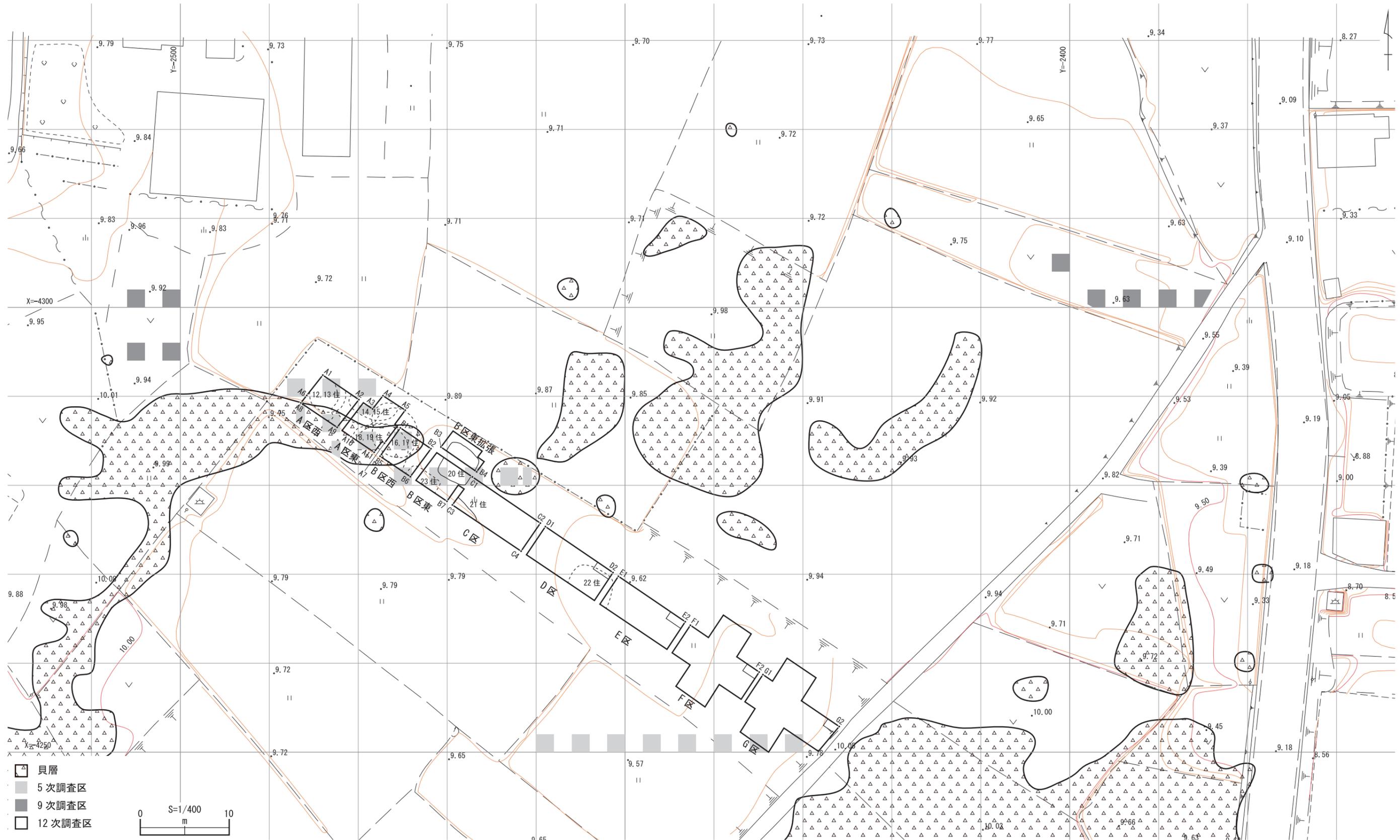
A区西の南西隅に位置し、第2面で検出した。両基南壁は調査区外へと伸び、15号が16号を切る新旧関係にある。15号の平面形態は楕円形と推定され、規模は径60cm以上、深さは約14cmを測る。覆土は上層に灰層が、下層に焼土層が堆積する。16号は方形と推定され、長軸75cm以上、深さは約25cmを測る。底面から重層的な火床面になるものと推定され、覆土中層の焼土主体層には灰を多く含む。両基が重複する位置からは時間の推移による移設も窺える。遺物は堀之内式土器(第20図3)が出土した。

17号焼土跡(第15図)

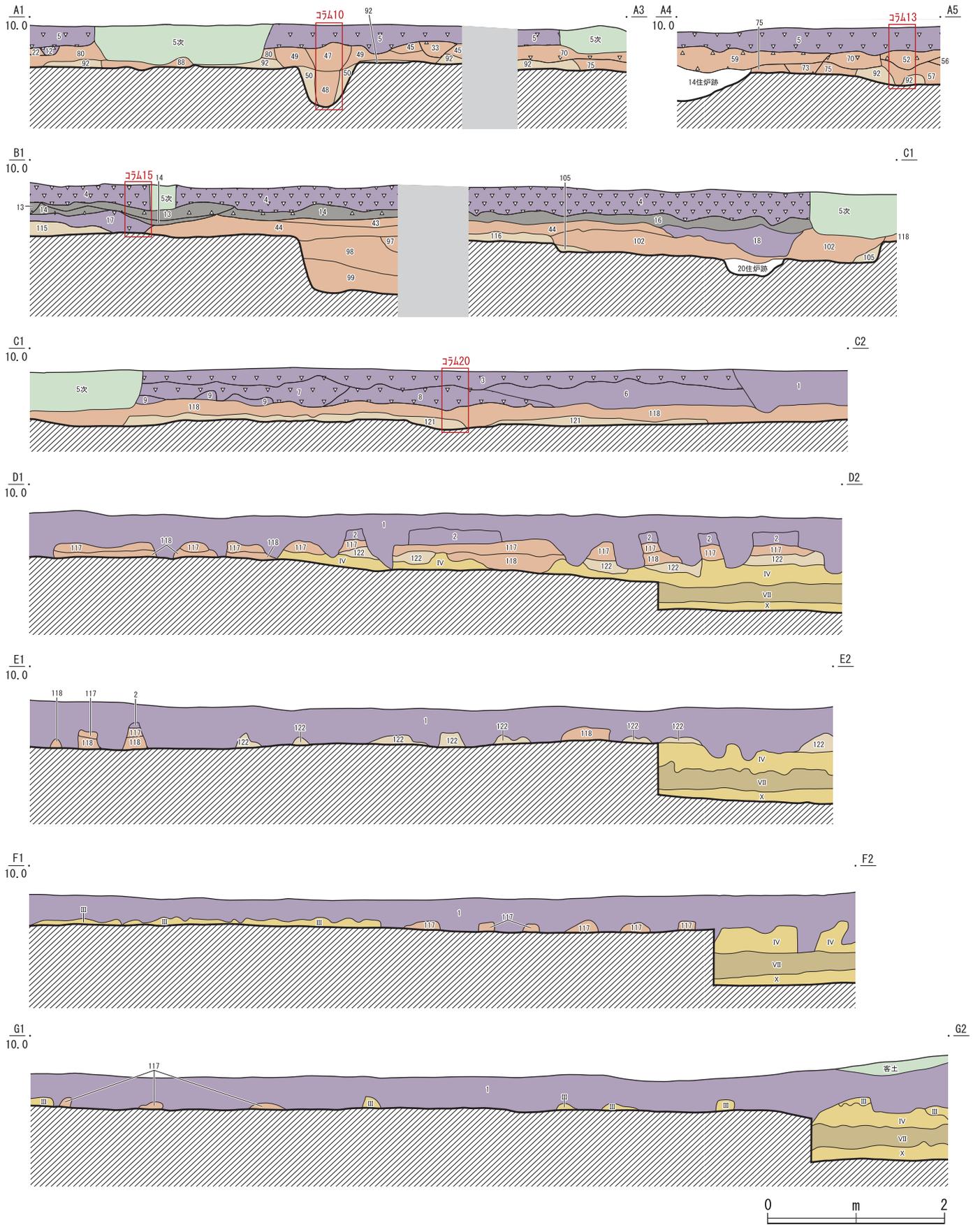
A区東の南西に位置し、8号灰溜りと近接する。第2面で検出し、平面形態は円形プランで、直径59cm、検出面からの深さは9cmを測る。火床面の被熱は弱い、覆土には多量の焼土粒子を含む。

18号焼土跡(第15図)

A区東の南部に位置し、第2面から掘り込まれ、その南壁は調査区外に伸びる。平面形態は円形と推定さ

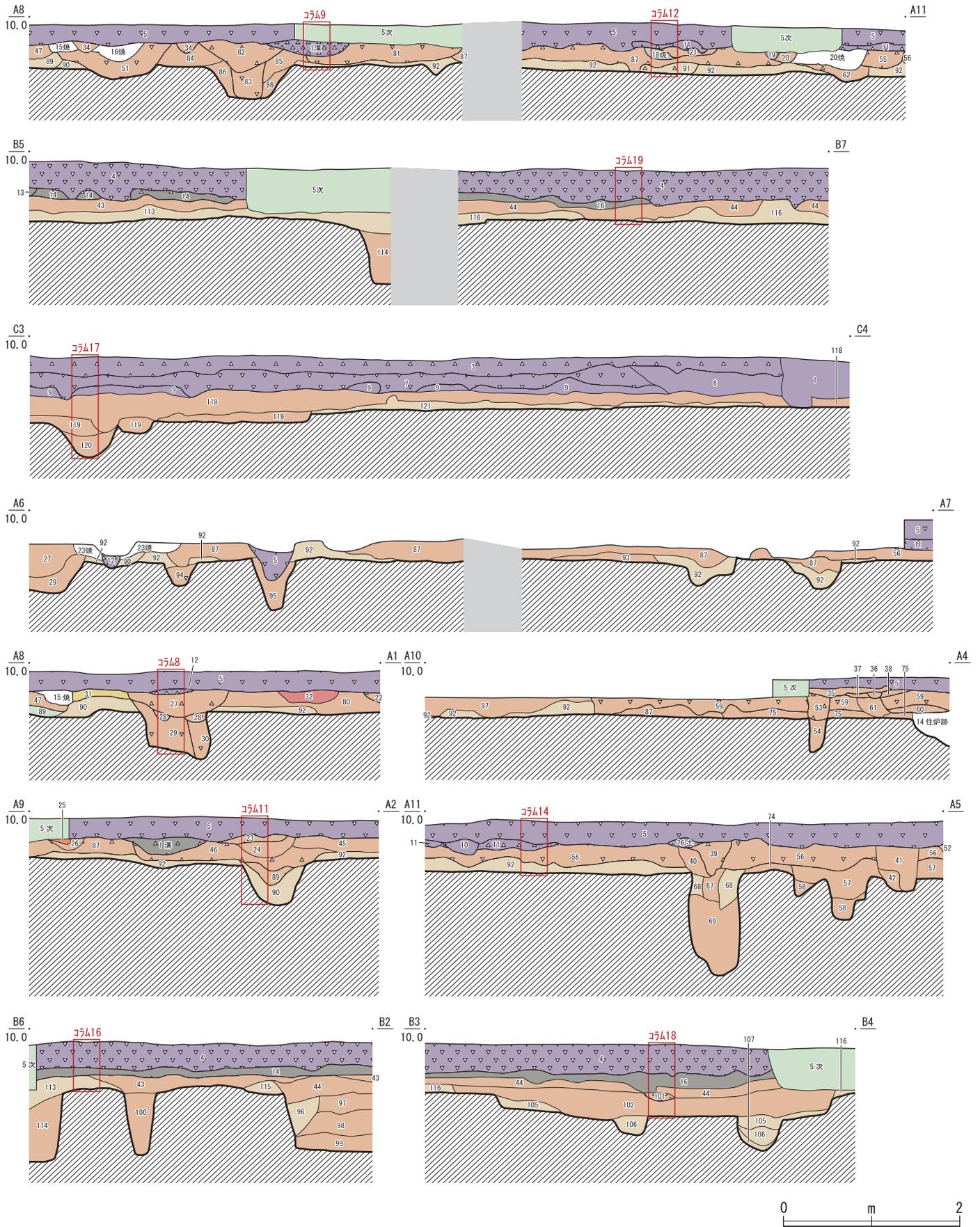


第10図 北部～開口部調査区全体図



第11図 12次調査基本土層(1)

第IV章 貝塚の調査



第12図 12次調査基本土層(2)

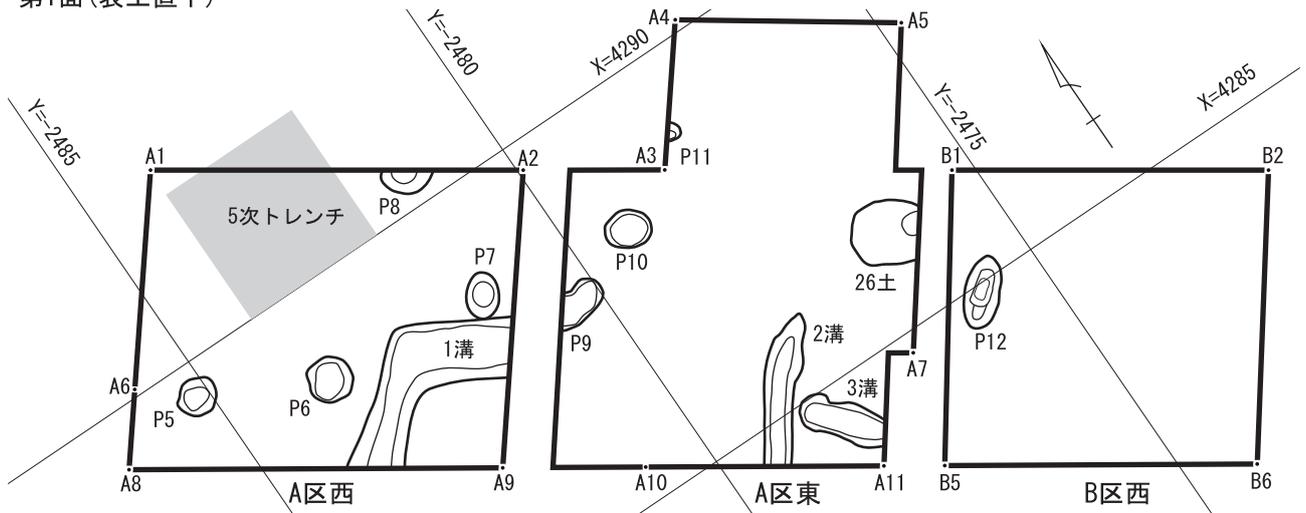
12次調査基本土層

- 1層：暗褐色土 貝なし 少量のローム粒子、塊、微量の焼土粒子を含む。表土上層
- 2層：暗褐色土 貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む。表土下層
- 3層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 4層：暗褐色土 貝あり(中量の破砕貝) 微量のローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む
- 5層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む。表土
- 6層：暗褐色土 貝なし 少量のローム漸移層粒子を含む
- 7層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の漸移層粒子を含む
- 8層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の焼土粒子を含む
- 9層：暗褐色土 貝なし 微量の焼土粒子を含む
- 10層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の炭化物を含む
- 11層：暗褐色土 貝あり(中量の完形貝) 微量のローム粒子を含む
- 12層：暗褐色土 貝あり(多量の完形貝) 微量の炭化物を含む
- 13層：黒褐色土 貝あり(少量の完形貝) 微量のローム粒子、焼土粒子を含む
- 14層：黒褐色土 貝あり(微量の完形貝) 微量の焼土粒子、ローム粒子を含む
- 15層：黒褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量のローム漸移層塊を含む
- 16層：黒褐色土 貝なし 少量の漸移層塊を含む
- 17層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
- 18層：暗褐色土 貝なし 少量のローム粒子、焼土粒子を含む
- 19層：暗褐色土 貝あり(少量の完形貝) 少量の焼土粒子、灰粒子、炭化物を含む
- 20層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、粒子、焼土粒子、炭化物を含む
- 21層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の灰粒子、焼土粒子を含む
- 22層：褐色土 貝あり(少量の完形貝) 少量の焼土粒子、炭化物を含む
- 23層：褐色土 貝あり(少量の完形貝) 少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
- 24層：褐色土 貝なし 少量の焼土粒子、炭化物、灰粒子を含む
- 25層：赤褐色土 貝なし 多量の焼土塊、粒子、少量の灰粒子を含む
- 26層：褐色土 貝なし 少量の灰粒子、焼土粒子、微量の炭化物を含む
- 27層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 少量の焼土粒子、炭化物、微量のローム塊を含む。貝のうち半数は破砕貝で、破砕貝は被熱して青灰色
- 28層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 中量の焼土粒子、微量の炭化物を含む。貝は被熱して青灰色
- 29層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
- 30層：褐色土 貝あり(極微量の破砕貝) 住居柱。少量のローム粒子、塊、微量の炭化物を含む
- 31層：黄灰褐色土 貝あり(極微量の破砕貝) 中量のローム粒子、少量の焼土粒子、灰粒子を含む
- 32層：赤褐色土 貝なし 多量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
- 33層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
- 34層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の炭化物を含む
- 35層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 36層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 37層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、焼土塊を含む。貝は青灰色被熱
- 38層：褐色土 貝あり(極微量の破砕貝) 少量の焼土塊、灰塊を含む
- 39層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 少量のローム粒子を含む
- 40層：褐色土 貝なし 少量のローム粒子を含む
- 41層：褐色土 貝なし 微量のローム粒子を含む
- 42層：褐色土 貝なし 少量のローム粒子を含む
- 43層：褐色土 貝なし 少量のローム粒子を含む
- 44層：褐色土 貝なし 微量の焼土粒子、ローム粒子を含む
- 45層：褐色土 貝なし 微量の焼土粒子を含む
- 46層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 微量のローム粒子、炭化物を含む
- 47層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 微量のローム粒子、炭化物、焼土粒子を含む
- 48層：褐色土 貝なし 中量のローム粒子、少量の炭化物を含む。炭化物の径は10mm前後
- 49層：褐色土 貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
- 50層：明褐色土 貝なし 中量のローム粒子、微量の炭化物を含む
- 51層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の焼土粒子、灰粒子、微量の炭化物を含む
- 52層：褐色土 貝あり(極微量の破砕貝) 微量のローム塊、炭化物を含む
- 53層：褐色土 貝あり(少量の完形貝) 微量の炭化物、ローム粒子を含む
- 54層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量のローム塊、微量の炭化物を含む
- 55層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 微量のローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む
- 56層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量のローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む
- 57層：褐色土 貝なし 少量のローム粒子、微量のローム塊、炭化物を含む
- 58層：褐色土 貝なし 微量のローム粒子を含む
- 59層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の炭化物、ローム塊を含む
- 60層：褐色土 貝あり(極微量の破砕貝) 微量のローム塊、焼土粒子、灰粒子を含む
- 61層：褐色土 貝なし 微量の焼土焼土粒子、灰粒子、炭化物を含む
- 62層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 少量の焼土粒子、灰粒子を含む

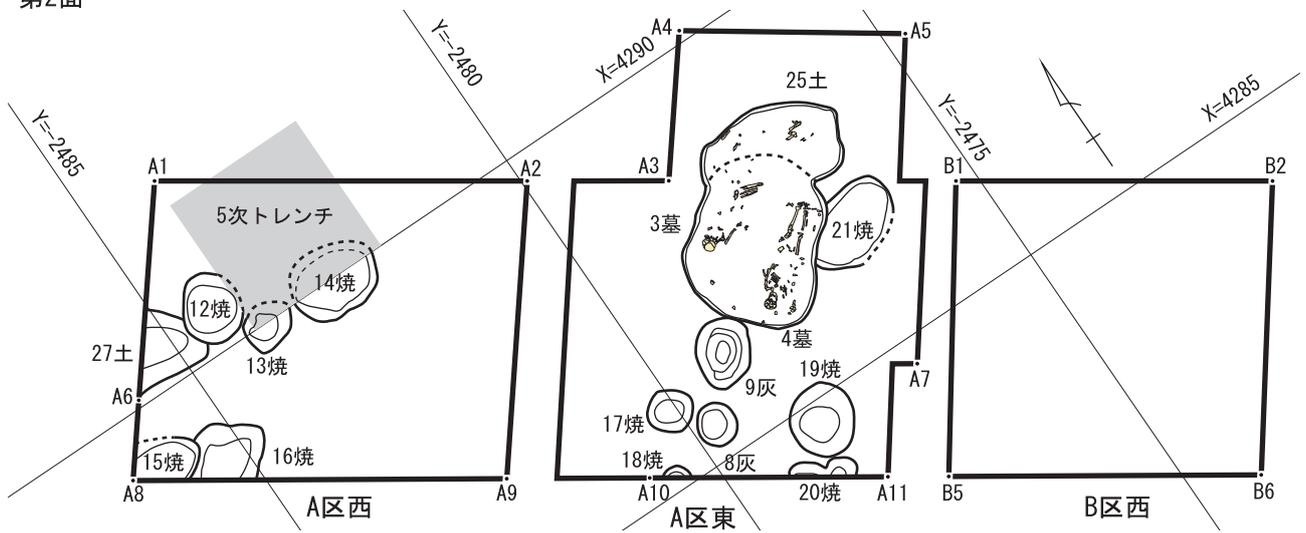
第IV章 貝塚の調査

63層：褐色土	貝あり(微量の完形貝) 少量のローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む
64層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む
65層：明褐色土	貝なし 少量のローム粒子を含む
66層：褐色土	貝なし 微量のローム粒子を含む
67層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
68層：明褐色土	貝なし 少量のローム粒子を含む
69層：褐色土	貝なし 微量のローム粒子を含む
70層：褐色土	貝あり(極微量の破碎貝) 少量のローム粒子、微量の炭化物、焼土粒子を含む
71層：明褐色土	貝なし 中量のローム粒子、微量の炭化物を含む
72層：褐色土	貝なし 少量のローム塊、粒子を含む
73層：褐色土	貝あり(微量の完形貝) 中量のローム粒子を含む
74層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子を含む。30層より多い
75層：褐色土	貝なし 少量のローム塊を含む
76層：褐色土	貝あり(微量の破碎貝) 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
77層：褐色土	貝あり(微量の完形貝) 微量の灰粒子、ローム粒子、炭化物を含む
78層：褐色土	貝あり(極微量の破碎貝) 微量のローム塊、粒子を含む
79層：褐色土	貝あり(微量の破碎貝) 微量の灰粒子を含む
80層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物、焼土粒子を含む
81層：褐色土	貝あり(微量の破碎貝) 微量のローム塊、炭化物を含む
82層：褐色土	貝あり(微量の完形貝) 微量のローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む
83層：褐色土	貝あり(微量の破碎貝) 微量のローム塊、焼土粒子、炭化物を含む
84層：褐色土	貝なし 少量のローム塊を含む
85層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
86層：褐色土	貝なし 中量のローム塊を含む
87層：褐色土	貝あり(極微量の完形貝) 少量のローム粒子、焼土粒子、微量の炭化物を含む
88層：褐色土	貝あり(極微量の完形貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
89層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
89層：明褐色土	貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物、焼土粒子を含む
90層：褐色土	貝なし 多量の灰粒子、微量の焼土粒子、炭化物を含む
91層：明褐色土	貝あり(微量の完形貝) 少量のローム粒子を含む
92層：明褐色土	貝なし 少量のローム塊、微量の炭化物を含む
93層：褐色土	貝なし 微量の焼土粒子、ローム粒子を含む
94層：褐色土	貝あり(微量の破碎貝) 微量の灰塊を含む
95層：褐色土	貝なし 微量のローム粒子、炭化物を含む
96層：明褐色土	貝なし 多量のローム塊を含む
97層：褐色土	貝なし 少量の焼土粒子、ローム塊を含む
98層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子を含む
99層：褐色土	貝なし 微量のローム塊を含む
100層：褐色土	貝なし 微量の焼土粒子、炭化物を含む
101層：褐色土	貝あり(多量の完形貝) 微量の炭化物を含む
102層：褐色土	貝なし 中量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
103層：褐色土	貝なし 微量の焼土粒子を含む
104層：褐色土	貝なし 少量のローム塊を含む
105層：明褐色土	貝なし 多量のローム粒子を含む
106層：淡褐色土	貝なし 少量のローム塊を含む
107層：明褐色土	貝なし 多量のローム塊を含む
108層：褐色土	貝なし 微量の焼土粒子を含む
113層：明褐色土	貝なし 微量の焼土粒子を含む
114層：褐色土	貝なし 微量の焼土粒子、炭化物を含む
115層：明褐色土	貝なし 多量のローム塊を含む
116層：明褐色土	貝なし 少量のローム塊を含む
117層：褐色土	貝なし 微量の炭化物、赤褐色鉄粒子を含む。陸田の床土
118層：褐色土	貝なし 少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む
119層：褐色土	貝なし 少量のローム塊、粒子を含む
120層：褐色土	貝なし 微量のローム粒子を含む
121層：明褐色土	貝なし 微量の焼土粒子を含む
122層：明褐色土	貝なし 多量のローム粒子を含む
Ⅲ層：黄褐色土	ハードロームをブロック状に含み、パミス、火山ガラスはIV層と同程度、赤褐色スコリアを微量に含む。 ソフトローム
IV層：黄褐色土	ハードロームブロック、パミス、火山ガラスを少量、赤褐色スコリアを微量に含む。ハードローム
VII層：暗褐色土	黒色粒子を少量、パミス、火山ガラスはIV層より少量、赤褐色スコリアを微量に含む。第1、第2黒色帯の融合層
X層：明黄褐色土	パミス、火山ガラスの含有はIV層よりも少量。黒色帯下のローム層

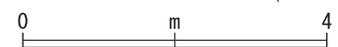
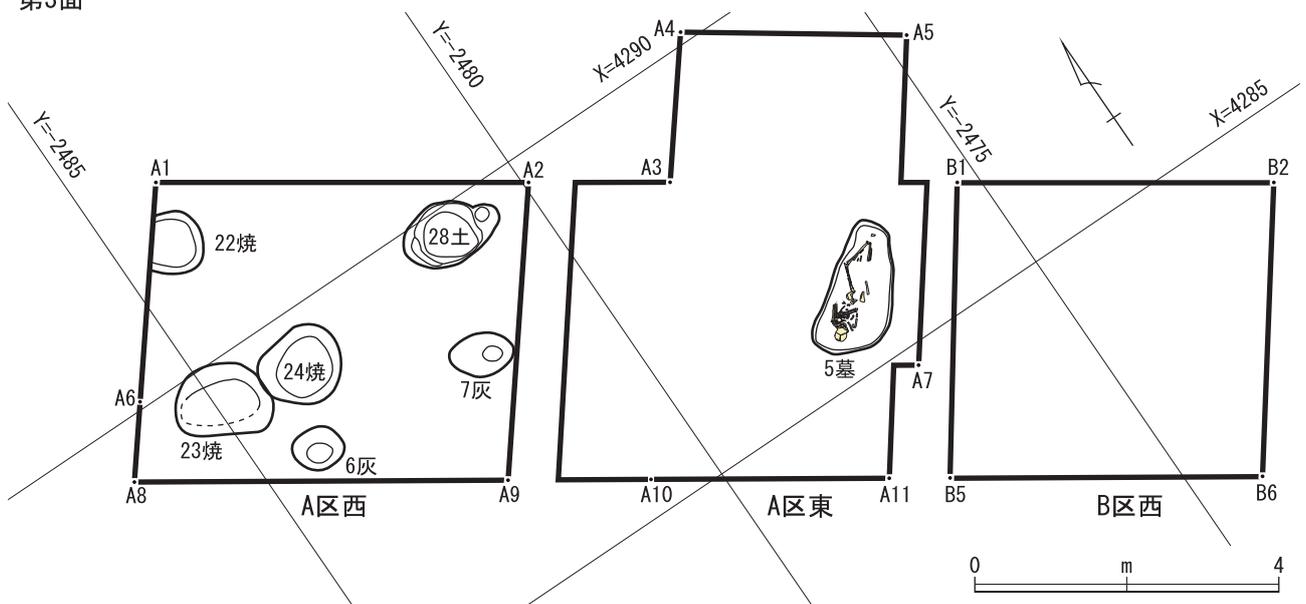
第1面 (表土直下)



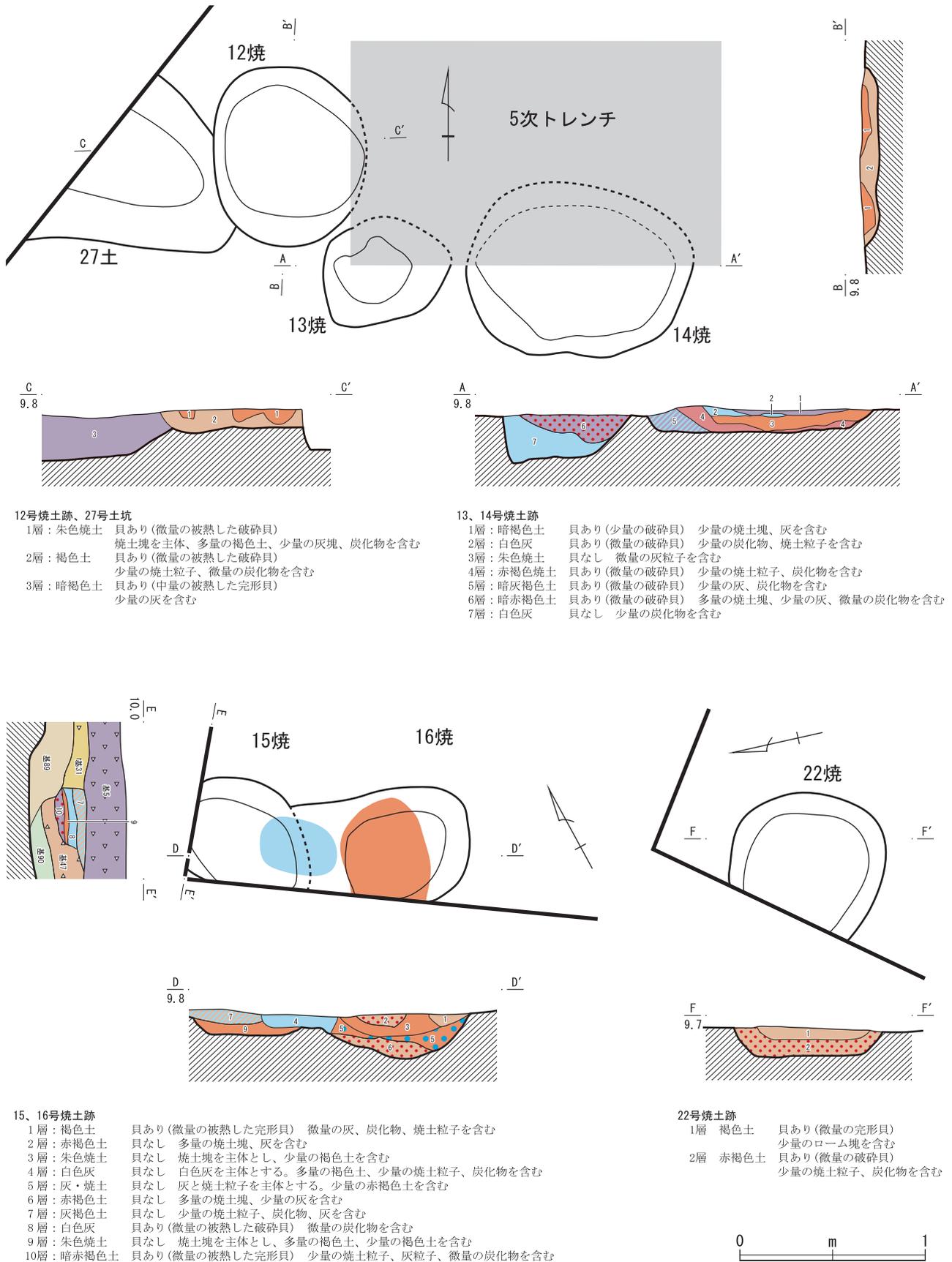
第2面



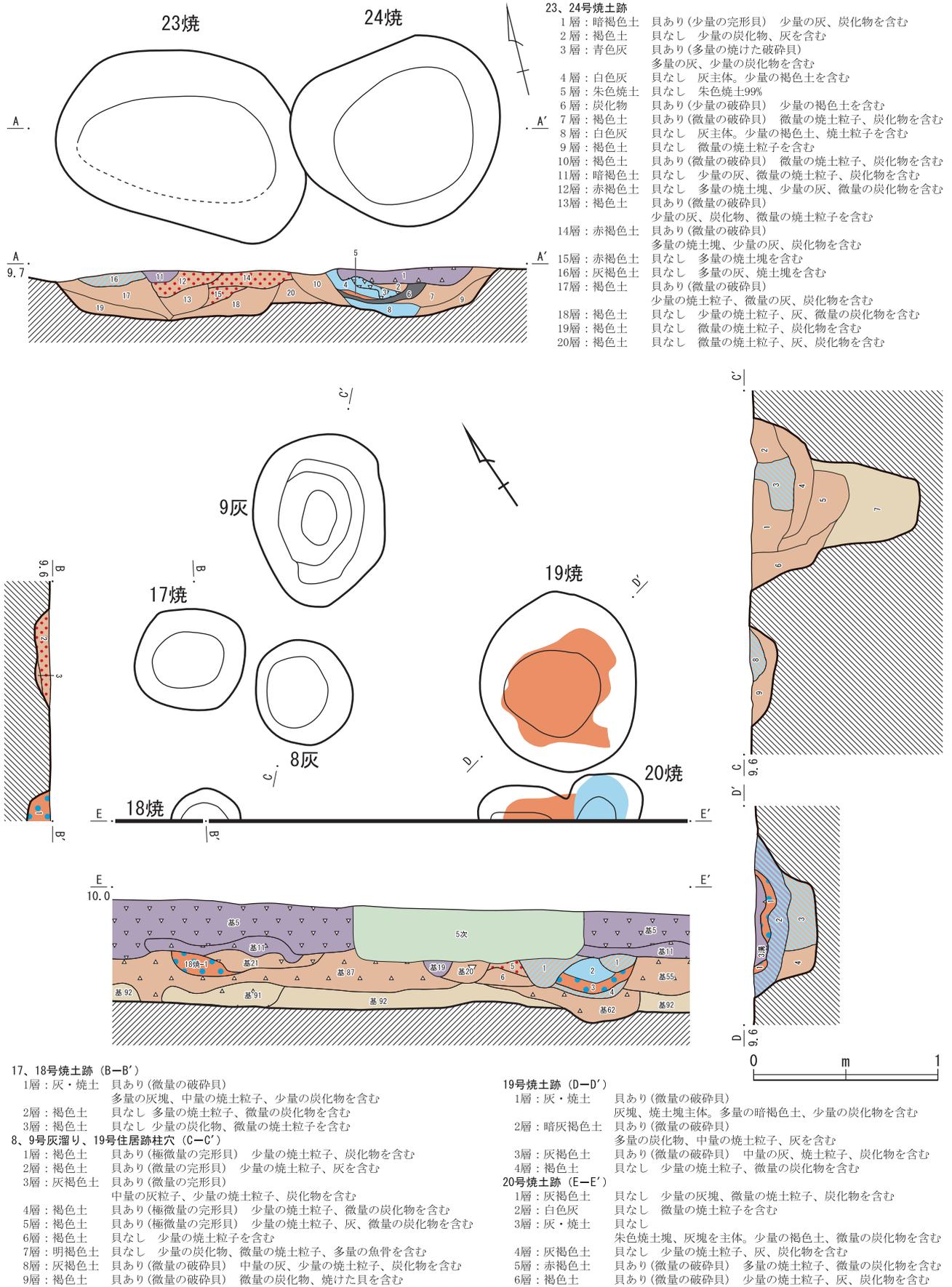
第3面



第13図 12次調査第1～3面検出遺構



第14図 12次調査焼土跡(1)



第15図 12次調査焼土跡(2)

れ、直径37cm、検出面からの深さは13cmを測る。火床面の被熱は弱い、覆土には多量の灰塊、中量の焼土粒子を含む。

19号焼土跡（第15図）

A区東の南東隅に位置し、3号溝に切られる新旧関係にあり、20号焼土跡と近接する。第2面で検出した。平面形態は円形を呈し、直径98cm、検出面からの深さ34cmを測る。断面形態は中央に向かって深くなる播鉢状を呈し、覆土上層に多量の焼土塊、灰塊が、下層に灰を多量に含む灰褐色土、暗灰褐色土が堆積することから、灰を蓄積した後、燃焼が行われたものと推測される。

20号焼土跡（第15図）

A区東の南東隅に位置し、遺構の大半は調査区外へと伸びる。第2面で検出した。2基の重複が推測され、東側が直径39cm、西側は長軸49cm、検出面から最深部で24cmを測る。東側は覆土下層に焼土、上層に多量の灰層が堆積し、西側の焼土跡で生じた灰を東側へ集積したものと推測される。

21号焼土跡（第16図）

A区東の北東に位置し、第3面の5号墓の上に構築され、第2面の4号墓によって西壁一部が、第1面の26号土坑に南壁が切られる新旧関係にある。平面形態は楕円形を呈し、長軸138cm、短軸90cm、検出面からの深さ27cmを測る。検出面で長軸66cm、短軸40cmの範囲に火床面を確認し、それを断ち割るように、底部を欠く堀之内1式の深鉢形土器（第22図4）が埋設される。埋設土器内には多量の灰塊が堆積し、灰溜りとして機能していたものと推測される。

22号焼土跡（第14図）

A区西の北西隅に位置し、西壁が調査区外へと伸びる。12号焼土跡を調査後、遺物包含層を掘り下げた第3面で検出した。平面形態は円形を呈し、直径82cm、検出面からの深さ15cmと浅く皿状の断面形態である。他の焼土跡と比較して、覆土に含まれる焼土は少なく、灰の堆積はない。

23号焼土跡（第15図）

A区西の南西に位置し、第3面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長軸140cm、短軸94cm、検出面からの深さ26cmを測る。覆土中層から上層にかけて多量の焼土塊と灰を含み、中層については焼土が掘り返された痕跡が認められることから、播鉢状の焼土跡から平面的な焼土跡へと再構築されたものと推測される。

24号焼土跡（第15図）

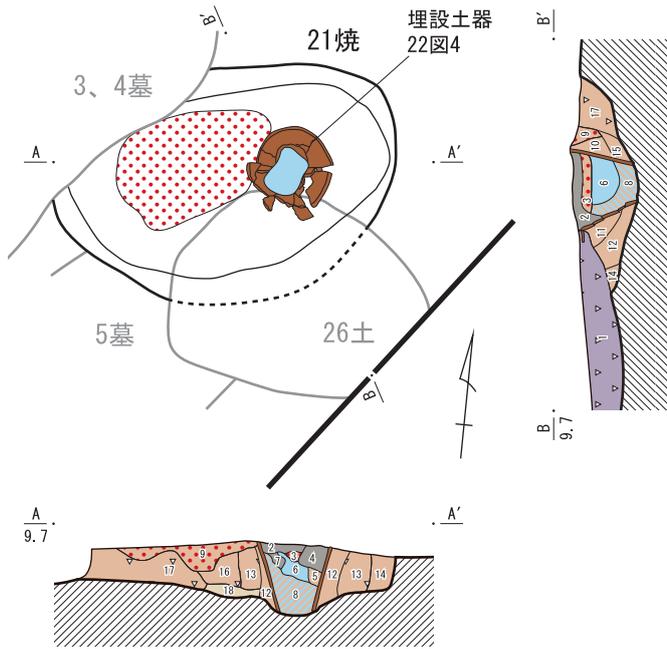
A区西の南西に位置し、23号焼土跡を切る新旧関係にある。第3面で検出した。円形を呈し、直径115cm、検出面からの深さ26cmを測る。覆土の最下層には灰が堆積することから、当初は灰溜りとして機能していたが、中層の播鉢状に堆積する炭化物とその直上に焼土、灰が連続的に堆積する状況からは、焼土跡として機能していたと判断される。遺物は堀之内2式土器（第20図4）が出土した。

（5）灰溜り

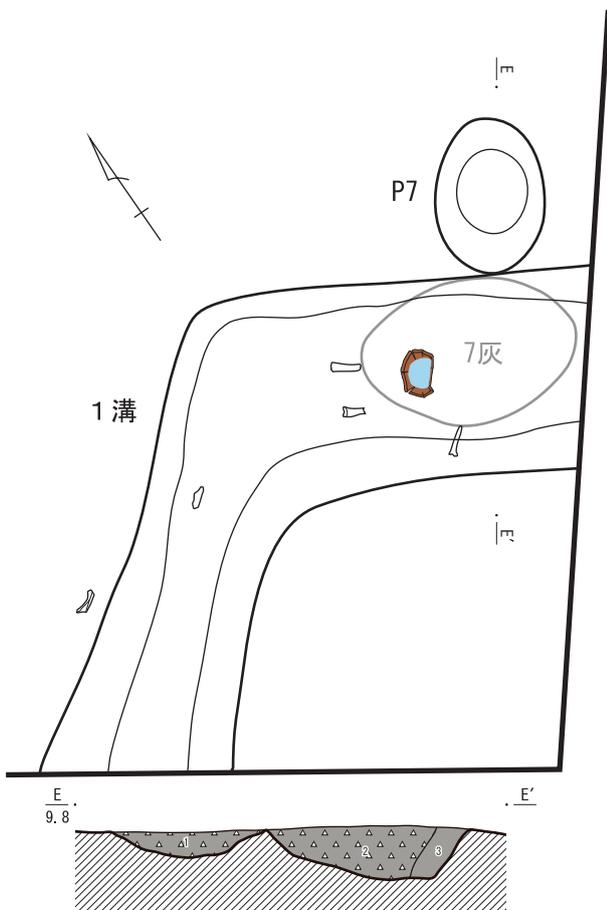
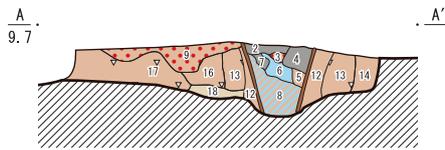
第2面、第3面からそれぞれ2基の灰溜りを確認した。いずれの灰溜りにも焼土跡が近接することから、有機的に関連する遺構群である。この他、第1面検出の1号溝底面（第16図）からは、灰が充填された深鉢形土器底部が出土しており、直下の7号灰溜りとの関連性が窺われる。

6号灰溜り（第16図）

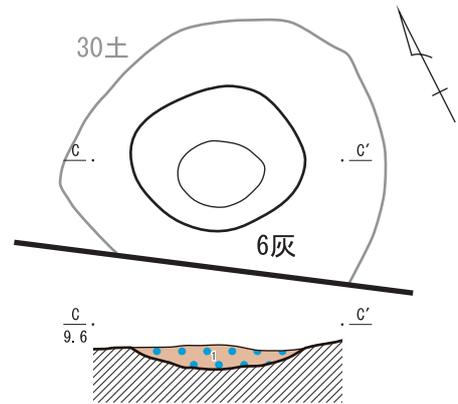
A区西の南部に位置し、23、24号焼土跡と近接する。第3面から検出し、30号土坑の埋積過程の窪地に灰や炭化物を集積したものである。平面形態は楕円形を呈し、長軸70cm、短軸58cm、深さ10cmを測る。



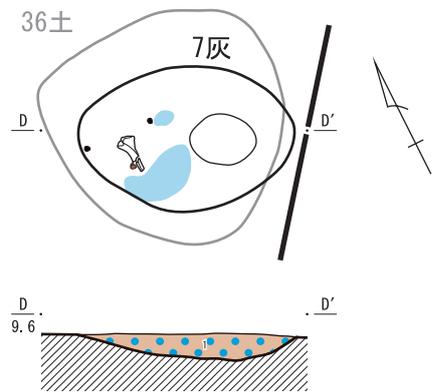
- 26号土坑
- 1層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 21号焼土跡
- 2層：黒褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の灰粒子を含む
 - 3層：赤褐色土 多量の焼土粒子、微量の灰粒子を含む
 - 4層：黒褐色土 貝なし 微量の焼土粒子、炭化物を含む
 - 5層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 中量の灰粒子を含む
 - 6層：白色灰 灰主体層。微量の焼土粒子を含む
 - 7層：黒褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の灰粒子を含む
 - 8層：灰褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 中量の灰粒子と少量のローム粒子を含む
 - 9層：赤褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 中量の焼土塊を含む
 - 10層：褐色土 貝なし 少量の焼土粒子を含む
 - 11層：褐色土 貝なし 微量の炭化物を含む
 - 12層：褐色土 貝なし 少量の焼土粒子を含む
 - 13層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 中量の焼土粒子、少量の灰を含む
 - 14層：褐色土 貝なし 微量の炭化物を含む
 - 15層：褐色土 貝なし 少量の炭化物を含む
 - 16層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、焼土粒子、炭化物を含む
 - 17層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の炭化物、焼土粒子を含む
 - 18層：明褐色土 貝なし 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む



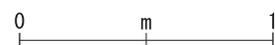
- P7
- 1層：黒褐色土 貝あり(中量の完形貝) 少量の炭化物、焼土粒子を含む
- 1溝
- 2層：黒褐色土 貝あり(中量の完形貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
 - 3層：黒褐色土 貝なし 微量の炭化物を含む



- 6号灰溜り
- 1層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、ローム粒子、微量の炭化物を含む



- 7号灰溜り
- 1層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、微量の炭化物を含む



第16図 12次調査焼土跡(3)、灰溜り

7号灰溜り（第16図）

A区西の東部に位置し、1号溝の下、第3面から検出された。36号土坑の埋積過程の窪地に灰や炭化物を集積したものである。平面形態は楕円形を呈し、長軸84cm、短軸57cm、深さ11cmを測る。

8号灰溜り（第15図）

A区東の南部に位置し、第2面で検出した。17号焼土跡と近接する。平面形態は円形を呈し、直径57cm、検出面からの深さは15cmを測り、中央に向かって深くなる播鉢状の断面形態にあり、多量の灰塊を含む。遺物は堀之内2式土器が出土した。

9号灰溜り（第15図）

A区東の中央南部に位置し、第2面で検出した。8号灰溜りと近接する。19号住居跡の柱穴の埋積過程の窪地に灰や焼土、炭化物が集積されたものである。平面形態は楕円形を呈し、長軸95cm、短軸71cm、検出面からの深さ25cmを測る。

（6）墓（第17図）

A区東の第2面から3、4号墓、第3面から5号墓を検出した。3号墓出土の人骨を3号人骨、4号墓出土を4号人骨、5号墓出土を5号人骨と呼称する。人骨はいずれも頭位が南西を指す。人骨の人類学的所見は第V章に掲載した。

3、4号墓

A区東区中央からやや北に位置し、第2面で検出した。25号土坑、21号焼土跡を切る新旧関係にある。平面形態は楕円形を基調とする2基が重複し、堆積土層からは3号墓が4号墓を切る新旧関係にある。3号は長軸210cm、短軸106cm、4号は長軸216cm、短軸78cm、検出面からの深さは20～24cmを測る。3号人骨は横臥屈葬で、その顔面は北西方位を向く。4号人骨は仰臥伸展葬にあり、暗褐色土（覆土1層）により左上半身が破壊されている。なお、3号人骨の右膝の下層から、膝を支えるように棒状礫（第30図27）が出土した。遺物は堀之内1～2式土器（第22図10～15）が出土した。

5号墓

A区東の東部、21号焼土跡の下層の第3面で検出した。平面形態は南部で膨らむ楕円形を基調とし、長軸183cm、短軸90cmで、検出面からの深さは20cmを測る。人骨は仰臥伸展葬で、両手を左胸の前で組む姿勢である。発掘調査時には右手首にサトウガイ製の貝輪（第30図20）を、人骨のクリーニング調査時には頭部右耳付近にサメ椎骨製の耳栓（第30図19）を着装した状態を確認した。また第2面を精査中に、5号人骨の右脛骨の上層から板状土偶（第30図25）が出土しており、副葬品と考えられる。21号焼土跡との新旧関係から、堀之内1式期に帰属する。

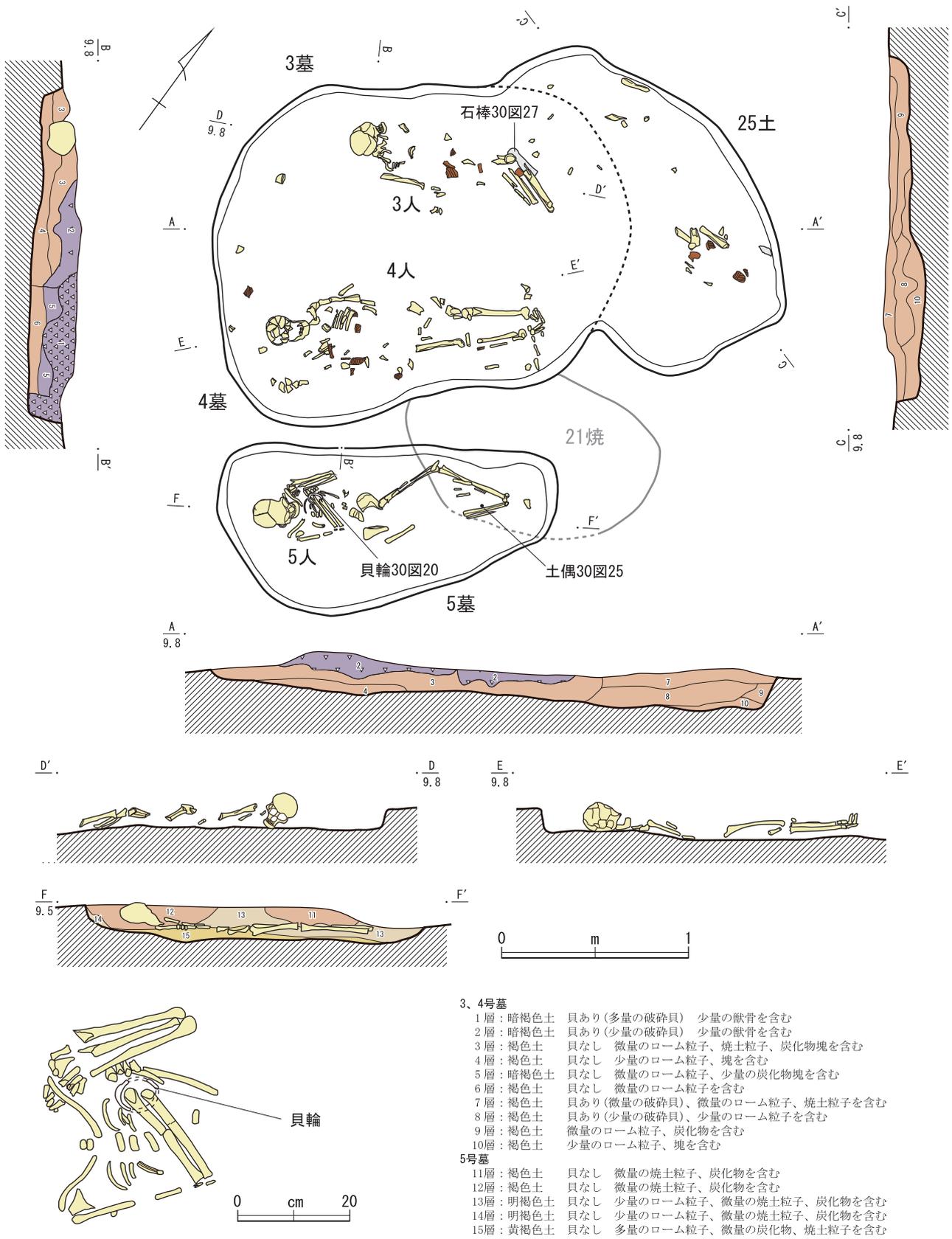
（7）住居跡（第18、19図）

12次調査では、馬蹄形貝塚の貝層下に堀之内1～2式期に帰属する円形、もしくは楕円形を呈す12～19号住居跡、馬蹄形貝塚の内側に加曾利B1式期に帰属する隅丸方形を基調とする20～23号住居跡の、計12軒の住居跡を検出した。

12号住居跡

A区西に位置し、13、15号住居跡と重複する。ソフトローム上面で、褐色土を覆土とし、弧状に連なる9本の柱穴を検出した。平面形態は円形を呈し、プランの大半である東西395cm、南北380cmを調査し得たが、炉跡は未検出である。

13号住居跡



5号人骨貝輪出土状況

第17図 12次調査墓

A区西の西側に位置する。12号住居跡と重複する。ソフトローム上面で、微量の完形貝、炭化物、ローム粒子を含む褐色土を覆土とする柱穴6本を検出した。平面形態は楕円形プランを基調とする柄鏡形と推測される。調査し得た規模は東西約420cm、張出し部を含む南北約490cmを測り、その主軸方向は概ねN-10°-Wを指す。炉跡は未検出である。遺物は堀之内1式土器（第20図1）が出土した。

14号住居跡

A区西からA区東に跨り、15号住居跡と重複し、16、17号住居跡に切られる新旧関係にある。A区西の北東からA区東の北西にかけて広がり、その平面形態は楕円形プランと推定される。ソフトローム上面で微量の貝殻を含む褐色土を覆土とする9本の柱穴を検出したが、炉跡の検出状況からは、貝を含まない遺物包含層である褐色土（基本土層75）を床面とし、微量の完形貝を含む褐色土（基本土層59）を覆土とすることが確認された。調査区内ではプラン南東の2分の1程度である東西約550cm、南北約259cmを調査し得た。炉跡は住居跡の中心よりやや東側に位置しており、平面形態は略円形プランと推定され、調査し得た規模は東西83cm、南北41cm、床面からの深さは42cmで、その断面形態は擂鉢状を呈す。底面は強く被熱しており、初期の火床面と思われ、その直上には生成された灰と焼土の混合層（第19図A断面12、18層）が堆積する。灰がある程度充満すると、炉跡の作り替えが行われ、第2期の火床面（B断面16、17層）とその生成物である灰、焼土（2～5、14、15層）、第3期の火床面（9、10層）と灰（1、6～8層）が重層的に堆積する。遺物は炉跡から堀之内1式土器（第22図3）が出土した。

15号住居跡

A区西からA区東に跨り、12、14、16～19号住居跡と重複し、南側の一部を検出したに止まる。ソフトローム上面で、少量のローム粒子、微量の炭化物、焼土粒子を含む褐色土を覆土とする5本の柱穴を検出し、平面形態は楕円形プランと推定される。調査し得た規模は東西約350cm、南北約100cmを測る。遺物は堀之内2式土器（第22図5）が出土した。

16号住居跡

A区東とB区西に跨り、14、17～19号住居跡と重複する。ソフトローム上面で、微量のローム粒子、炭化物を含む褐色土を覆土とする14本の柱穴を確認した。平面形態は円形プランと推定され、プラン北東の一部を除き大部分を検出したが、炉跡は未検出にある。調査し得た規模は東西約490cm、南北約530cmを測り、炉跡は未検出である。遺物は堀之内1式土器（第22図6）が出土した。

17号住居跡

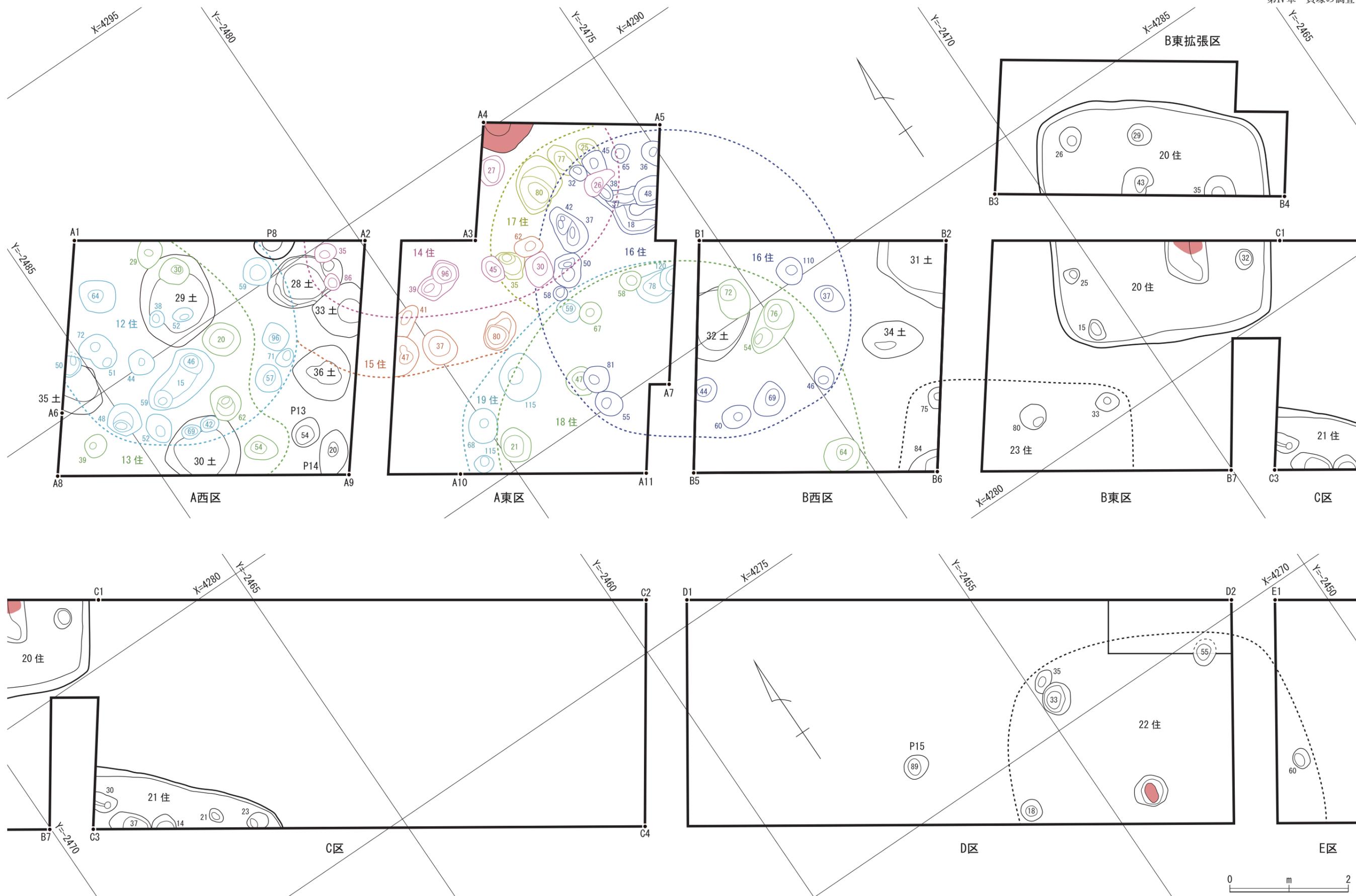
A区東の北部に位置し、14～16、18、19号住居跡と重複し、北側の一部を検出したに止まる。ソフトローム上面で、微量の炭化物を含む明褐色土を覆土とする5本の柱穴を検出し、平面形態は円形または楕円形プランと推定される。調査し得た規模は東西約340cm、南北約220cmを測る。遺物は堀之内1式土器（第22図7）が出土した。

18号住居跡

A区東及びB区西に跨り、15～17、19号住居跡と重複し、プラン北側の2分の1程度を検出した。ソフトローム上面で、微量の貝殻及びローム粒子を含む褐色土を覆土とする8本の柱穴を検出し、平面形態は円形プランと推定される。調査し得た規模は東西約570cm、南北約520cmを測り、炉跡は未検出である。

19号住居跡

A区東に位置し、15～18号住居と重複し、西側の一部を検出したに止まる。ソフトローム上面で、少量のローム粒子を含む明褐色土を覆土とする4本の柱穴を検出し、本住居跡から18号住居跡への建て替えが推察



第18図 12次調査住居跡、土坑

される。9号灰溜りの下層にある柱穴では、最下層の7層から多量の魚骨が出土した（第15図C断面）。

20号住居跡

B区東に位置し、土層観察用のベルトを除き、ほぼ全容を完掘した唯一の住居跡である。ソフトローム上面で、褐色土を覆土とする隅丸方形の掘込みを確認した。長軸410cm、短軸400cm、確認面からの深さは17～25cmを測る。床面は総じて平坦であり、一部ハードローム面ではあるが、踏み固められ固床化が顕著であった。内部施設は壁際に5本の柱穴と、中央南東寄りに炉跡、その北側に2本の柱穴を検出した。炉跡の平面形態は台形状で、長軸73cm、短軸68cm、床面からの深さ15cmを測る（第19図）。北側に多量の焼土粒子を含む赤褐色土（C断面3層）が堆積し、その上面は火床面であり、燃烧度は堀之内1式期に帰属する他の住居跡の炉跡と比較すると極めて弱く、灰も伴わない。主体となる出土遺物（第26図5～8）から、加曾利B1式期に帰属する。

21号住居跡

C区南西隅に位置し、ソフトローム上面で、褐色土を覆土とする。北壁の一部を検出し、平面形態は隅丸方形プランと推定され、調査し得た規模は東西320cm、南北102cmで、確認面から床面の深さは10～13cmを測る。床面は平坦で固床化し、内部施設は壁際を巡る5本の柱穴を検出したが、炉跡は確認できなかった。

22号住居跡

D区及びE区に跨り、馬蹄形貝塚の内側で最も中央部寄りに検出された住居跡である。ソフトローム上面で明褐色土を覆土とする5本の柱穴と、その中央で炉跡を検出した（第19図）。平面形態は隅丸方形プランと推定され、調査し得た規模は東西約490cm、南北約330cmを測る。炉跡の規模は長軸56cm、短軸54cmの円形プランで、確認面からの深さ4～5cmと浅い皿状を呈す。火床面の燃烧度は20号住居跡と同様に乏しく、灰は伴わない。

23号住居跡

B区西とB区東に跨り、20号住居跡の南方0.5mに近接する。ソフトローム上面で褐色土を覆土とする4本の柱穴を検出した。平面形態は方形プランと推定され、調査し得た規模は東西約380cm、南北約180cmを測り、床面は総じて軟弱で、炉跡は未検出である。遺物は加曾利B1式土器（第26図9）が出土した。

（8）土坑

本調査区では、第1面で1基、第2面で2基、第3面で1基、ソフトローム上面で8基の計12基の土坑を検出した。

25号土坑（第17図）

A区東の北東部に位置し、第2面で検出した。3、4号墓に西側を切られる新旧関係にある。平面形態は楕円形を呈し、長軸186cm、短軸113cm、検出面からの深さ13～22cmを測る。本地点の他の土坑と異なり、浅い掘込みで、土器片（第22図16～25）や獣骨が散乱しており、その特殊性から墓との関連性が窺われる。出土遺物から堀之内1式期に帰属する。

26号土坑（第13、16図）

A区東の東部に位置し、第1面で検出した。21号焼土跡の南壁を切る新旧関係にある。平面形態は楕円形を呈し、長軸88cm、短軸50cmの規模で調査し得た。確認面からの深さは21cmで、皿状の断面形態を呈す。埋積の過程で21号焼土跡の埋設土器の口縁部破片が流れ込む状況が確認された。

27号土坑（第14図）

A区西の北西部に位置し、第2面で検出した。12号焼土跡に切られる新旧関係にある。平面形態は楕円形

と推定され、調査し得た規模は長軸115cm、短軸82cm、検出面からの深さは24cmを測る。覆土の暗褐色土中には中量の被熱した完形貝、少量の灰粒子を含み、焼土跡との関連性が窺われる。遺物は堀之内2式土器（第20図5、6）が出土した。

28号土坑（第19図）

A区西の東隅に位置し、第3面で検出した。33号土坑に切られる新旧関係にある。平面形態は楕円形を呈し、長軸144cm、短軸82cm、検出面からの深さは40cmを測る。ヤマトシジミを一括投棄したと推測される純貝層を確認した。

29号土坑（第18図）

A区西の北部に位置し、ソフトローム上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長軸180cm、短軸119cm、検出面からの深さは35cmを測る。遺物は堀之内1式土器（第20図11）が出土した。

30号土坑（第18図）

A区西の南西部に位置し、ソフトローム上面で検出した。南側は調査区外へ伸びる。平面形態は円形を呈し、調査し得た規模は長軸123cm、短軸約95cm、検出面からの深さ35cmを測る。遺物は堀之内1、2式土器（第20図8、9）が出土した。

31号土坑（第18図）

B区西の東隅に位置し、西側の一部をソフトローム上面で検出した。平面形態は長方形もしくは楕円形と推測され、調査し得た規模は長軸112cm、短軸100cmで、検出面からの深さは69cmを測る。遺物は堀之内1式土器（第24図1）が出土した。

32号土坑（第19図）

B区西の北部に位置し、P12の下層のソフトローム上面で検出した。18号住居跡の柱穴に切られる新旧関係にある。西側は調査区ベルト下へ伸びる。平面形態は楕円形を呈し、調査し得た規模は長軸130cm、短軸115cm、検出面からの深さは50cmを測る。遺物は堀之内1式土器（第24図2）が出土した。

33号土坑（第18図）

A区西の東隅に位置し、ソフトローム上面で検出したが、第3面で検出した28号土坑を切る新旧関係にある。東壁は調査区外へと伸びるが、平面形態は円形となろう。調査し得た規模は長軸96cm、短軸78cm、検出面からの深さは46cmを測る。

34号土坑（第18図）

B区西の東部に位置し、ソフトローム上面で検出した。平面形態は楕円形プランで、長軸98cm、短軸59cm、検出面からの深さは37cmを測る。

35号土坑（第18図）

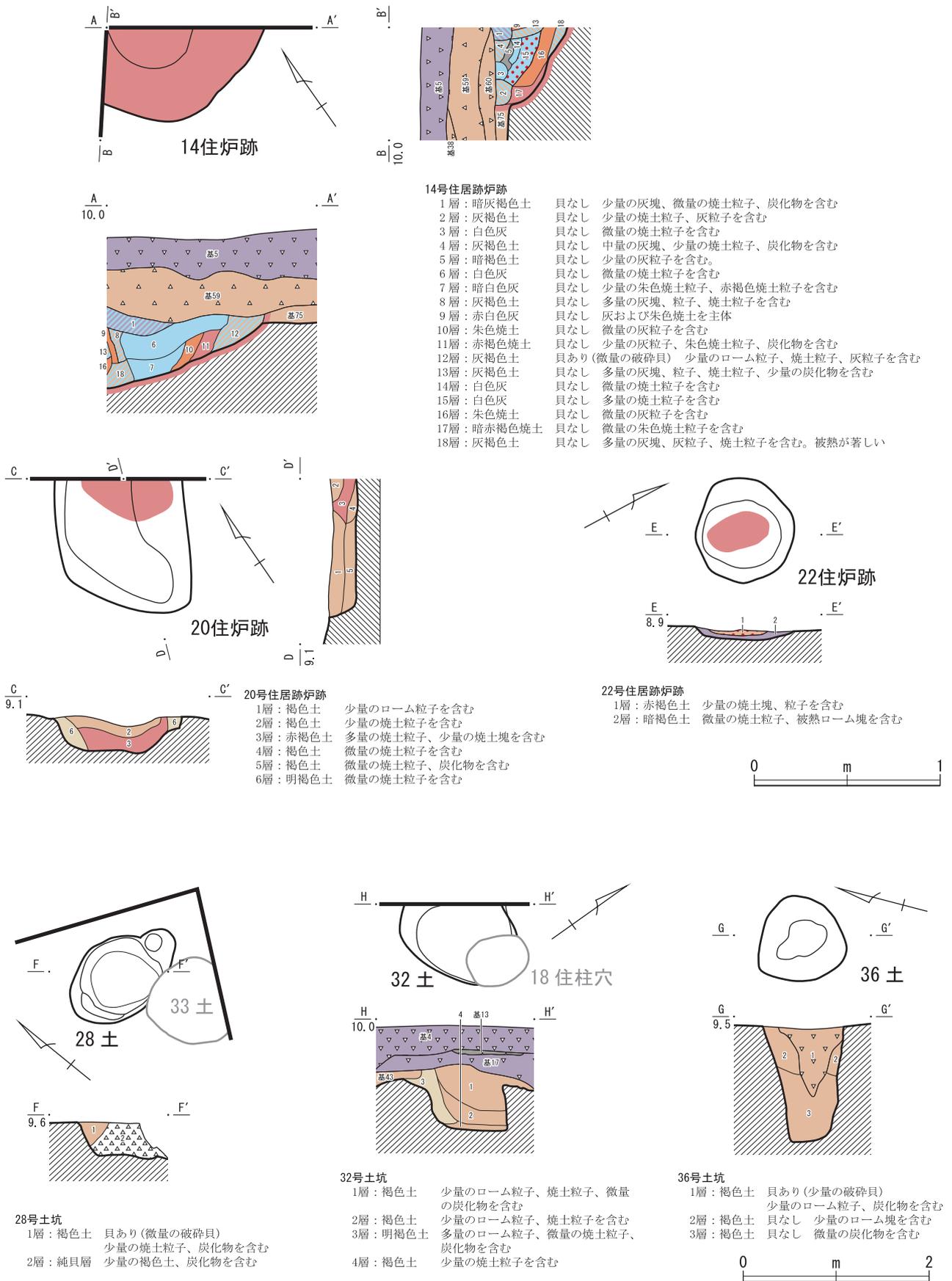
A区西の西壁際に位置し、27号土坑の下層のソフトローム上面で検出した。12号住居跡の柱穴に切られる新旧関係にある。西壁は調査区外へと伸びるが、平面形態は円形となろう。調査し得た規模は長軸78cm、短軸63cm、検出面からの深さは68cmを測る。遺物は堀之内1式土器（第20図7）が出土した。

36号土坑（第19図）

A区西の東部に位置し、ソフトローム上面で検出した。平面形態は円形を呈し、径96cm、検出面からの深さは128cmを測る。遺物は堀之内式土器（第20図10）が出土した。

（9）ピット（第13、18図）

表土直下の第1面ではA区西～B区西で8本、ソフトローム上面ではA区西で2本、D区で1本のピット



第19図 12次調査住居跡炉跡、土坑

を検出した。第1面でとらえたピットは弧状に連なるが、P5～7、12は黒褐色土、P8～11は褐色土を覆土とすることから、一つの遺構と判断するには至らず、個別のピットとして扱った。P13～15はソフトローム上面で多くの住居跡群を検出していることから、調査区外へと伸びる未検出の住居跡の柱穴の可能性はある。遺物はP9、11、12から堀之内式土器（第22図26、27、第24図3、4）が出土した。

(10) 溝（第13図）

A区西、東の両区の第1面で3条の溝を検出した。面的な掘り下げにおいて異なる色調や含有物をもつ覆土であることから遺構として捉えたが、いずれも浅い深度で不明瞭な掘込みであった。

1号溝

A区西の南部で、L字形に屈曲する溝である。東側では最大幅80cm、南側は幅56cmと狭まる。検出面からの深さは16～21cmを測るが、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は黒褐色土を主体とし、完形貝や骨片を含む。東側の底面からは灰塊が入る深鉢形土器底部が出土し、その下層にある第3面検出の7号灰溜りとの関連性が窺える。遺物は堀之内2式土器（第20図12～14、21図53）が出土した。

2号溝

A区東の南部に位置し、調査し得た規模は長さ210cm、幅は40～50cm、検出面からの深さは9～11cmである。1号溝同様に壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は暗褐色土で少量の完形貝を含む。

3号溝

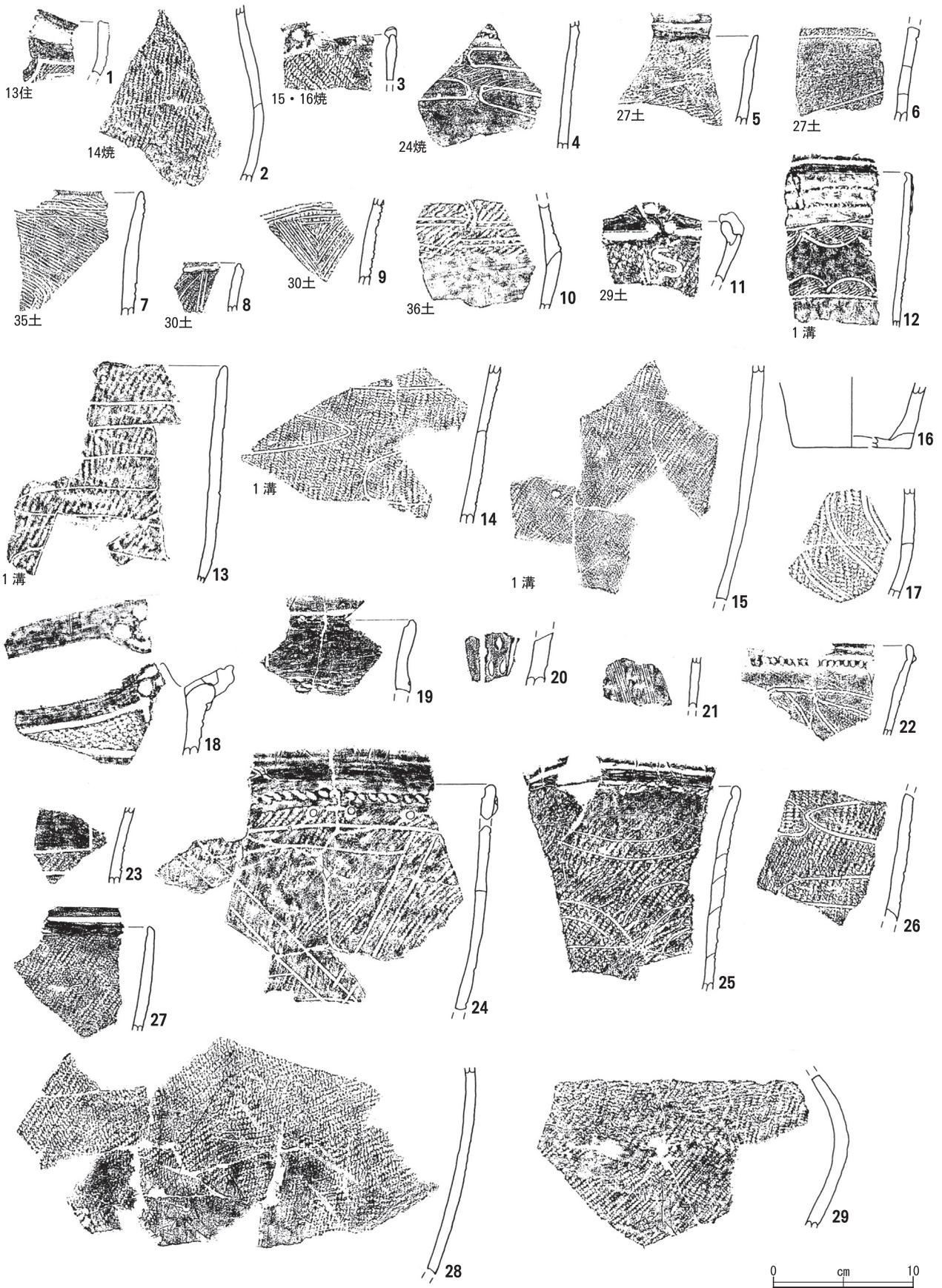
A区東の南隅に位置し、調査し得た規模は長さ112cm、幅は34～50cm、検出面からの深さは6～9cmと浅い。覆土は暗褐色土で少量の完形貝を含む。

（岡本・中野・森山）

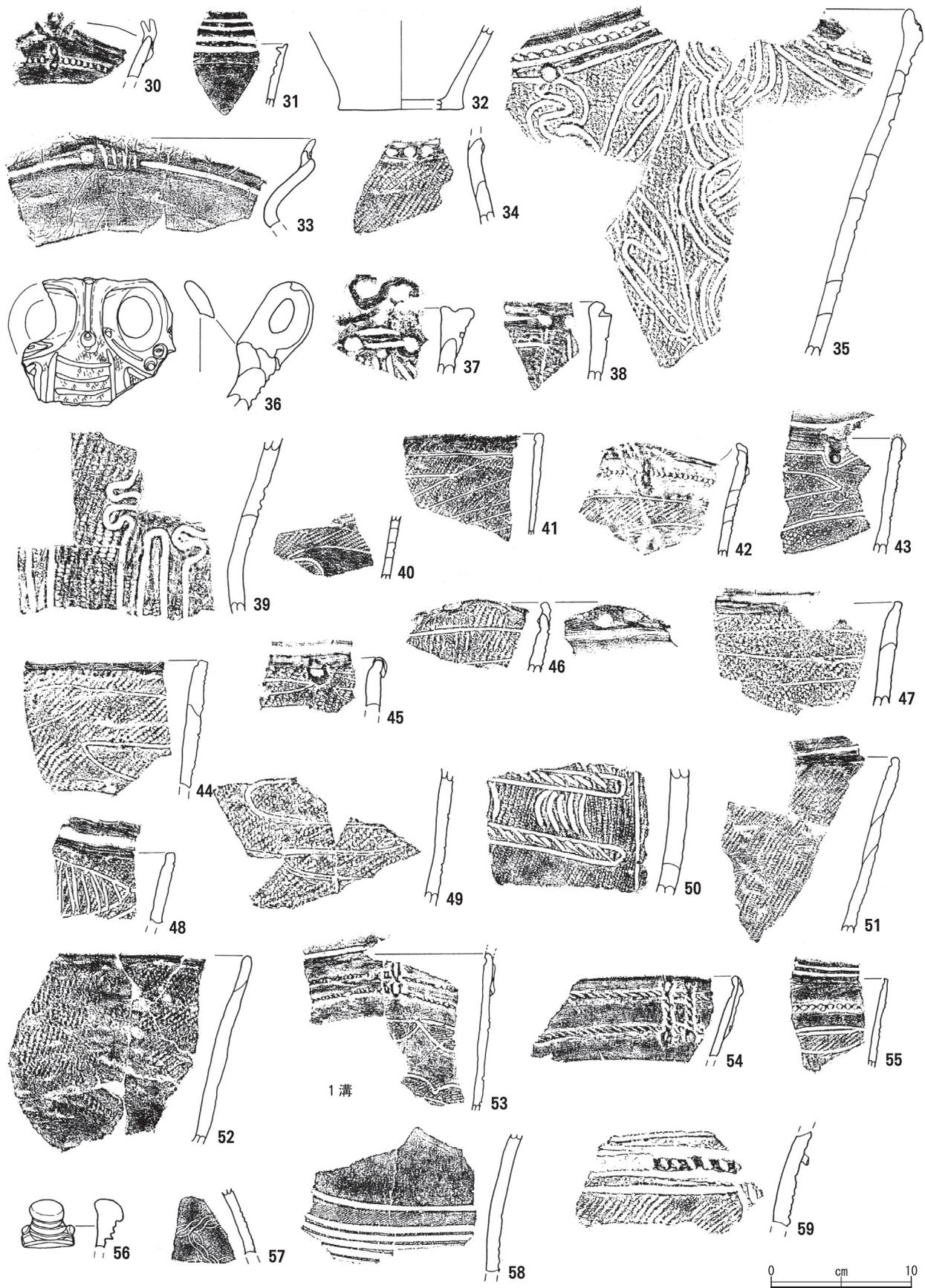
(11) 遺物

A区西出土土器（第20、21図）

後期前半の土器群である。1は13号住居跡出土の口縁部破片である。沈線で区画した縄文帯には、単節縄文LRが充填される。2は14号焼土跡、3は15、16号焼土跡、4は24号焼土跡から出土した。2は単節LR、3は単節RLの斜縄文が器面を覆い、3は口唇部上端に小突起を付す。4は沈線で長楕円もしくは蛇行沈線が描出される。5、6は27号土坑、7は35号土坑、8、9は30号土坑、10は36号土坑、11は29号土坑から出土した。5は無文の口縁部破片で、口唇部の内面には浅い沈線が巡る。6、9は菱形文や三角形等が横位に展開する。7、8、11は口縁部に凹線状の沈線が巡り、7は櫛歯状工具の蛇行沈線、8は縦位区画線、11は蕨手文が垂下する。10は単節縄文LRを地文とし、4のような長楕円文もしくは蛇行沈線が粗雑に描出される。12～16、53は1号溝から出土した。12、53は同一個体で、口縁部には8の字状の貼付文から、押捺が加えられた鎖状の微隆帯が巡り、胴部上半の文様帯には上下対向の弧線文が描出され、単節縄文LRが充填される。口唇部内面には沈線が巡る。13、14は単節縄文LRを地文とし、横長の蛇行沈線が描出される。17～32は焼土跡を検出し、12、13号住居跡の覆土にあたる遺物包含層から出土した。17は地文縄文LRに沈線が施される。18は波頂部に刺突が加えられた突起をもつ。19は口縁部の無文帯を挟み、20は縦位区画内に列点文、21は櫛描文が施文される。22～25は口縁部で三角文等が横位に展開し、22、24は鋸歯状、25は上下対向の弧線文である。24は口唇部直下に刺突が加えられた微隆帯が巡る。26は横長の蛇行沈線が垂下する。27～29は単節LRの斜縄文が器面を覆う。19、22、24、25、27は口唇部内面に沈線が巡る。30は波頂部に上方から刺突が加えられた突起を貼付し、口縁部には8の字状の貼付文から鎖状の微隆帯が巡る。31は口唇部内面に4条の沈線が巡る。



第20図 北部12次調査A区西出土土器 (1)



第21図 北部12次調査A区西出土土器 (2)

34、38、40、42、43、45～49、51、55～57は表土貝層から、33、35～37、39、41、44、50、52、58、59は5次調査の試掘坑から出土した。33は口縁部が強く外反する器形で、口唇部直下には刻目から沈線が巡る。34は単節縄文LRを地文とし、口唇部直下に指頭による押捺が巡る。35は直線的に開く器形の深鉢形土器で、内折する口唇部端部には沈線や刺突が巡る。波頂部からは入組状の弧線文が、波底部からは蛇行沈線が垂下し、両者をS字状の沈線で連結する。地文は単節縄文LRである。36、37は深鉢形土器の波頂部付近で、3つの環状の把手を付す。把手上には刺突とそれを連結する沈線が加えられ、内折する口唇部には沈線が巡る。波頂下には梯子状のモチーフが垂下する。地文は単節縄文LRである。37は波頂部にS字状の突起を付し、沈線が垂下する。38は口唇部直下に刺突が施され、沈線が垂下する。39は単節縄文LRを地文とし、蕨手文が垂下する。40、42は単節LRが充填された渦巻文が横位に展開する。42は口唇部直下に8の字状貼付文から鎖状の微隆帯が巡る。41は口縁部に三角文が横位に展開する。43～49は単節縄文LRを地文とし、横長の蛇行沈線が垂下する。48は蛇行沈線の内側に集合沈線が施される。50は列点が充填された長楕円文が多段に描出され、長楕円文間を弧状の沈線が連結する。51、52は単節LRの斜縄文が器面を覆う。54は鎖状の貼付文から刻目をもつ微隆帯が巡る。55は外面に鎖状の微隆帯と単節縄文LRが充填された横帯文が、内面に2条の沈線が巡る。56は深鉢形土器の把手である。57は螺旋状の文様が描出される。58は単節LRが充填された横帯文と多条の沈線が巡る。59は単節縄文LRを地文とし、刺突が加えられた隆帯と多条の沈線が巡り、下半には文様が垂下しよう。

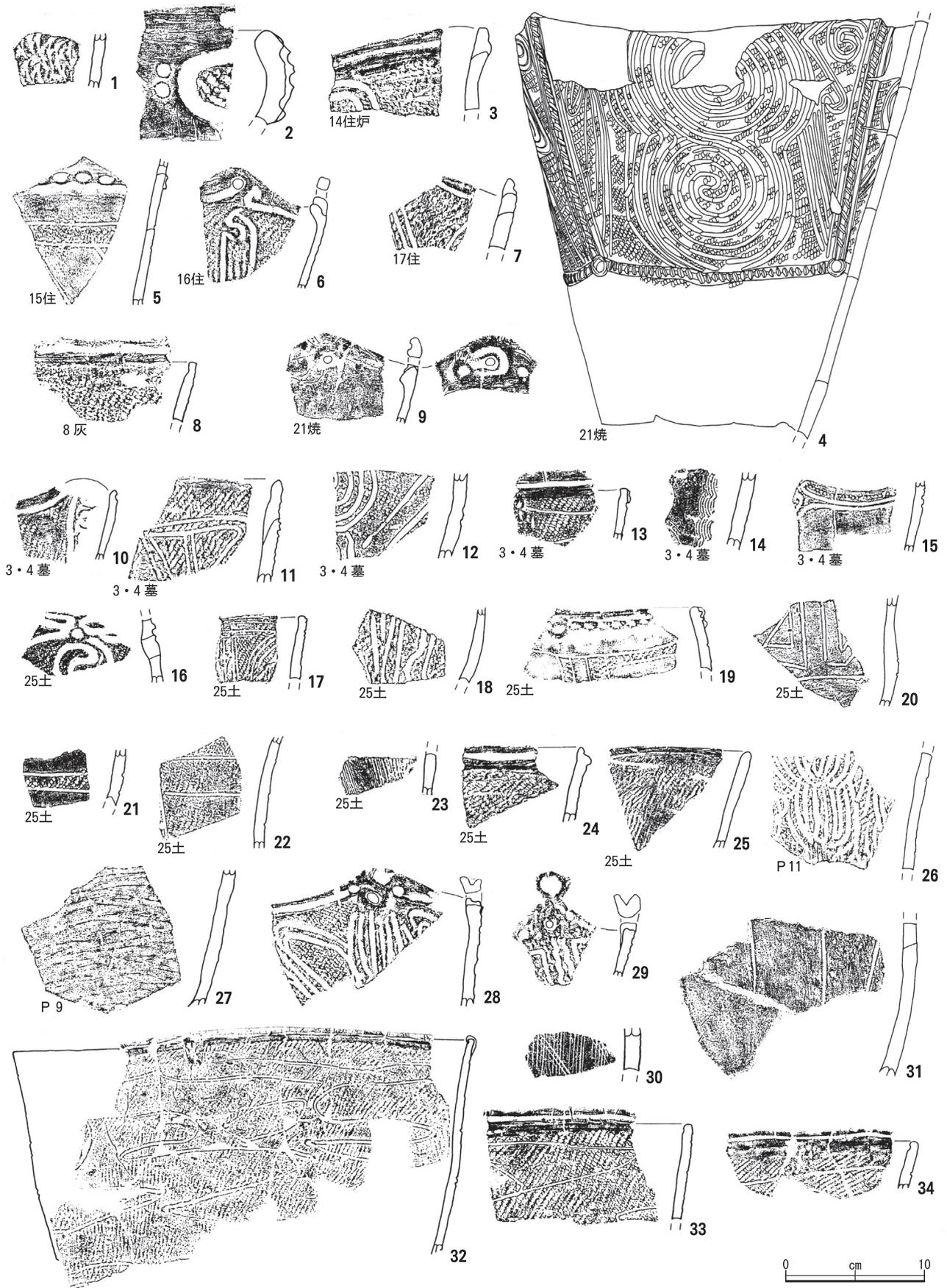
1、7、8、11、17～21、33～40、59は堀之内1式土器、4～6、9、10、12～14、22～26、41～50、53、54は堀之内2式土器で、12、53、54は加曾利B式の精製土器のように薄手で、器面は丁寧にミガキがかけられている。30、31、55～57は加曾利B式の精製土器、58は粗製土器である。その他は堀之内式土器の範疇で捉えられる。

A区東出土土器（第22、23図）

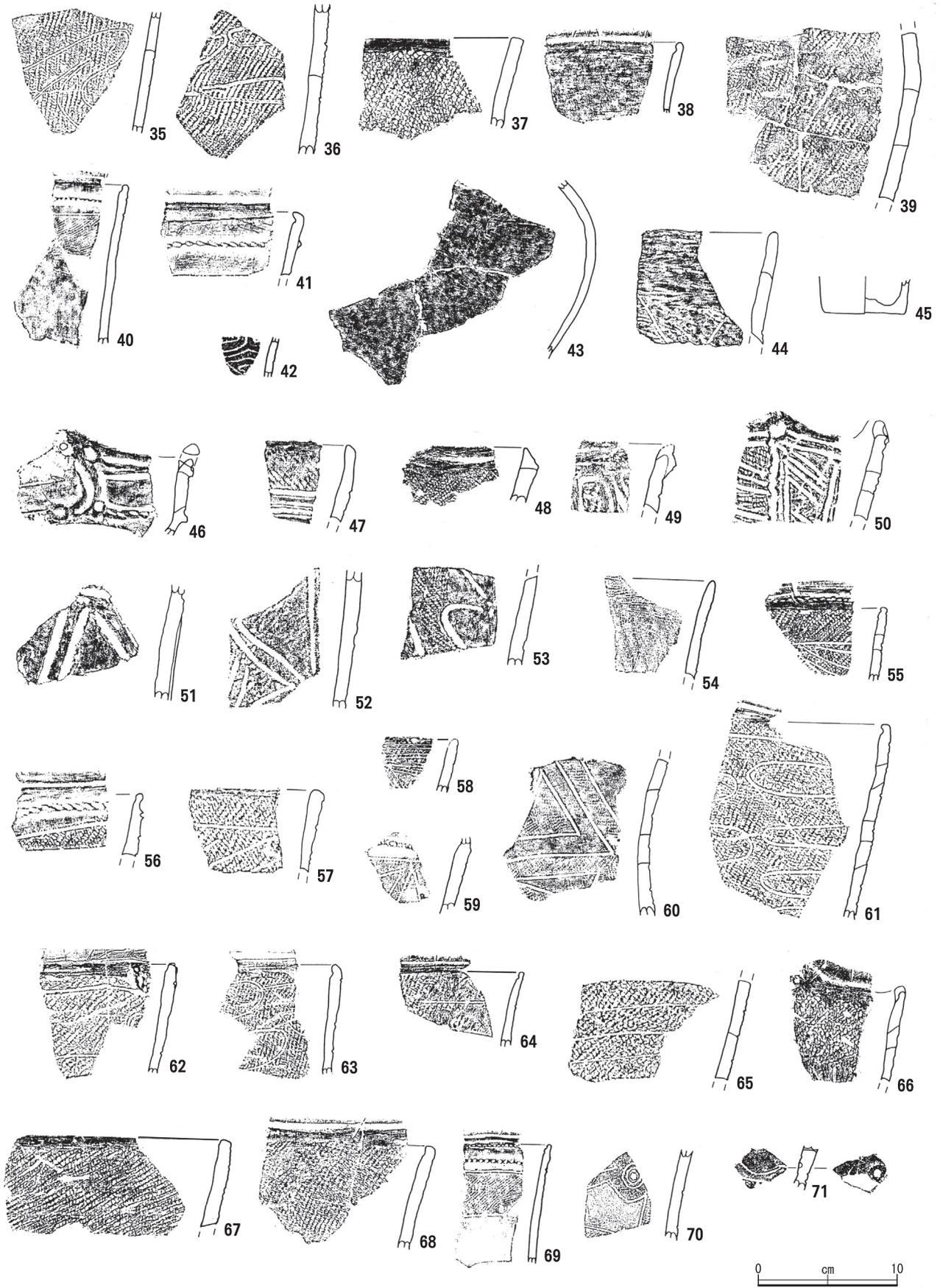
1、2は遺物包含層から出土した。1は前期後半の浮島式土器で、貝殻腹縁文が器面を覆う。2は中期後半加曾利E式土器の口縁部破片で、楕円区画文が巡る。

3～59は後期前半の土器群である。3は14号住居跡の炉跡、5は15号住居跡、6は16号住居跡、7は17号住居跡から出土した。3、6、7は口唇部直下に沈線が巡り、蕨手文等が垂下する。5は鎖状の微隆帯と、三角文が鋸歯状に横位に展開する。4、9は21号焼土跡から出土した。4は21号焼土跡に埋設されていた深鉢形土器で、口縁部及び底部を欠損する。直線的に開く器形を呈し、残存器高30.2cm、最大径29.5cmを測る。刻目をもつ隆帯で胴部上半を三単位に区画し、上下に連結する大型の渦巻文を中心に描出して、S字状文や渦巻文を間隙に充填する。地文は単節縄文LRである。9は波頂部付近で、内面には透孔を中心に刺突や沈線が施される。8は8号灰溜りから出土した口縁部破片で、単節縄文LRを地文とし、内面の口唇部直下には凹線状の沈線が巡る。

10～15は3、4号墓から出土した。10は口唇部直下に沈線が巡り、波頂部には蕨手文が垂下する。11は蛇行沈線、12は渦巻文と垂下する沈線、14は櫛描文を描出する。13は8の字状貼付文を付し、横長の蛇行沈線が施文される。15は区画文に刺突を充填する。16～25は25号土坑から出土した。16は渦巻文、17、18は蛇行沈線が描出される。19、20は口縁部から胴部上半で三角文が横位に展開するもので、21も同様であろう。19は口唇部直下に鎖状の隆帯が巡り、三角文には単節縄文LRが充填される。22は単節縄文LRを地文とし、縦横に沈線が施文される。23は櫛描文である。24、25は単節縄文LRが器面を覆う。26はP11から出土し、相対する多条の弧線文を描出する。27は無文で、指頭のナデによる器面調整を止める。



第22図 北部12次調査A区東出土土器 (1)



第23図 北部12次調査A区東出土土器 (2)

28～45は焼土跡、墓を検出し、14～19号住居跡の覆土にあたる遺物包含層から出土した。8、29は波頂部に透孔を穿ち、その両脇と上端に刺突を加え、口唇部直下に沈線が巡る。波頂下には相対する多条の弧線文や蛇行沈線が垂下する。30は櫛描文、31は沈線が施文される。32～36は単節縄文LRを地文とし、横長の蛇行沈線が垂下する。37、39は単節縄文LRが器面を覆い、38は口縁部に無文帯をもつ。40、41は口唇部直下に鎖状の微隆帯が巡り、40は単節縄文LRが充填された横帯文が加わる。42は沈線で菱形文が、44は格子目文が描出される。43は内湾する胴部破片、45は小型の底部破片である。

46～70は表土貝層から、71は5次調査試掘坑から出土した。46～48は口縁部に沈線で区画された無文帯もしくは地縄文帯をもつもので、46は波頂下にC字状の貼付文とその両端に刺突が施される。48は無文帯が幅狭である。49～52は垂下する蕨手文もしくは区画線の間を斜位沈線が連結する。53はJ字状もしくは鉤状文が描出され、単節縄文LRが充填される。54は櫛描文である。55～60は口縁部に鋸歯状の三角文が横位に展開し、55～58は単節LRの地文縄文、59、60は充填縄文である。56、59は外面、55は内面の口唇部直下に鎖状の微隆帯が巡る。61～65は単節縄文LRを地文とし、横長の蛇行沈線が垂下する。66～68は単節縄文LRが器面を覆う。69は外面には鎖状の微隆帯と単節LRが充填された横帯文が、内面には2条の沈線が巡る。70、71は単節縄文LRが充填された幾何学文や渦巻文が横位に展開する。71は内面に円形刺突を施す。

53は称名寺式土器、3、4、6、7、9～12、14、16～18、23、26、28～31、46～52、54は堀之内1式土器、5、8、13、19～22、32～36、41、55～65は堀之内2式土器、40、69は加曾利B1式の精製土器、27、44は加曾利B式の粗製土器、15、42は非常に堅緻な胎土、焼成であり、東北地方の影響を受けたものだろう。その他は堀之内式土器の範疇で捉えられる。

B区西出土土器（第24、25図）

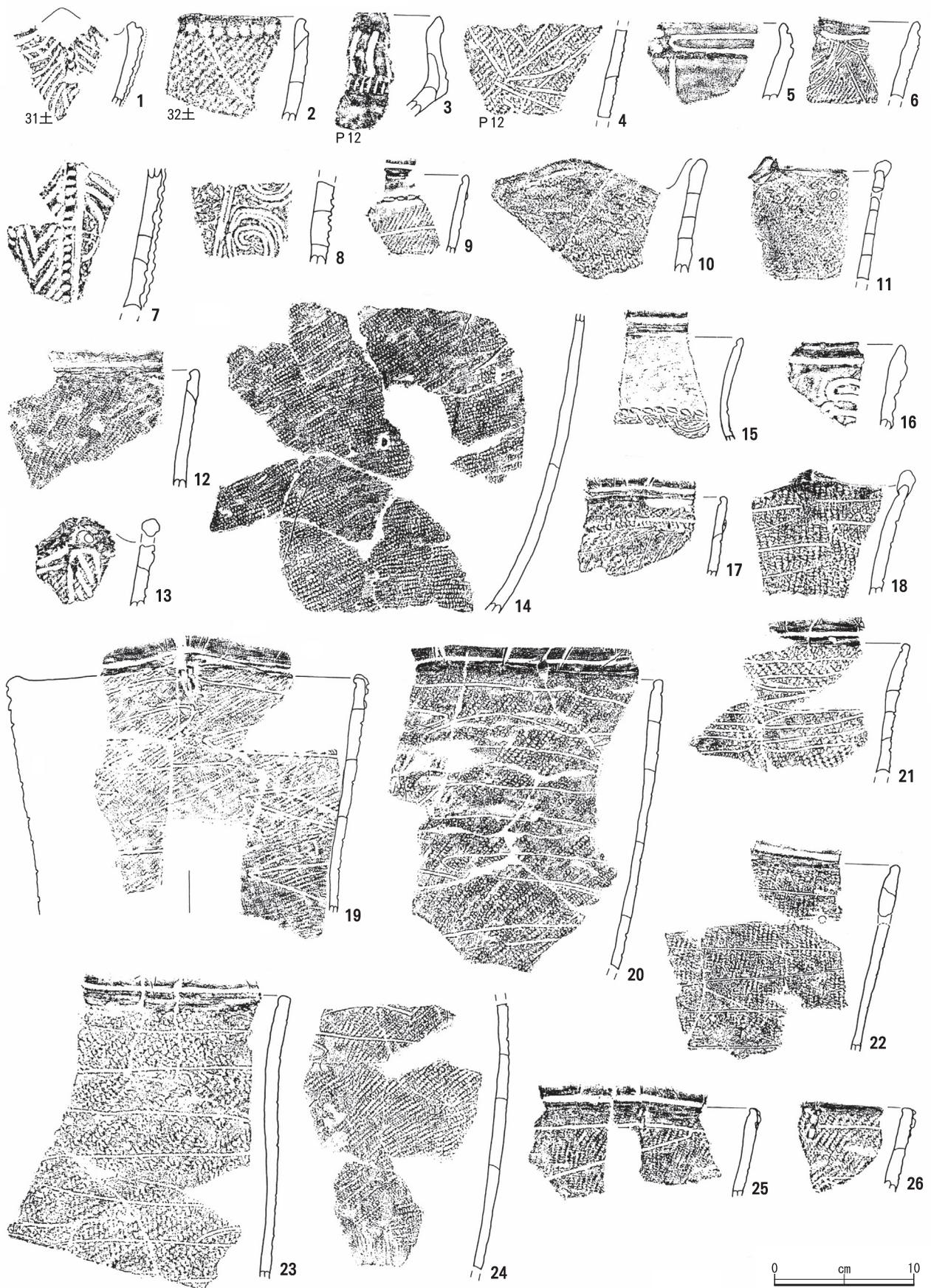
後期の土器群である。1は31号土坑、2は32号土坑、3、4はP12から出土した。1は波頂部から垂下する刻目をもつ隆帯を中心に相対する多条の弧線文が描出される。2は単節縄文LRを地文とし、口唇部直下に指頭の押捺が巡る。3は口唇部直下に条線帯が巡る。4は単節LRの地文縄文に、斜位沈線が施される。

5～14は16、18号住居跡の覆土にあたる遺物包含層から出土した。5、6、13は口唇部直下を沈線が巡り、5、13は縦位沈線が、6は多条の弧線文が垂下する。13は縦位沈線間に斜位の条線が充填される。7は1と同様のものである。8は渦巻文が描出される。9は単節縄文LRを地文とし、口唇部直下に鎖状の微隆帯が巡り、幾何学文もしくは横長の蛇行沈線が描出される。

15～24は表土貝層下のプライマリーな貝層である基本土層13、14から出土した。15は口縁部に刺突で区画された無文帯をもち、胴部上半には多条の弧線文が描出される。16は口唇部直下に沈線が巡り、蛇行沈線が垂下する。17は刻目をもつ微隆帯が口縁部を巡り、三角文が横位に展開する。18～24は横長の蛇行沈線が垂下する。

25～55は表土貝層から出土した。25、26は横長の蛇行沈線が垂下する。27～30、33、35は内面に多条の沈線が巡り、沈線間には刻目を充填するものや、区切文としてクランク文が描出されるものがある。27は口唇部直下に条線帯が巡り、28、33は口唇部上に突起を付す。31～33、35、39は単節LRが充填された横帯文が巡る。31～33は1条、34は2条の鎖状の微隆帯が巡る。36は注口土器の把手であろう。37は螺旋状文、38は長楕円区画が多段に描出される。41、42、48は単節RL、40、43～47、49、50は単節LRを地文とする。40～46は多段に沈線や紐線文が巡る。51は注口土器の注口部、54は無文の把手である。52、53は底面に網代痕が観察される。55は口縁部破片で、波頂部に突起が付される。

1～8、13、15、16は堀之内1式土器、9、17～26、34は堀之内2式土器、10～12、14は堀之内式土器の



第24図 北部12次調査B区西出土土器 (1)



第25図 北部12次調査B区西出土土器 (2)

範疇で捉えられる。27、28は加曾利B 1式の精製の鉢形土器、29～33、35、37、39は精製の深鉢形土器、38、40～50、52、53は粗製土器である。55は曾谷式土器にあたろう。

B区東、B区東拡張出土土器（第26図）

1は20号住居跡から出土した前期中葉の黒浜式土器である。

2～41は後期前半の土器群である。2～9は20号住居跡から出土した。2、3は口唇部直下に沈線が巡り、波頂下には蛇行沈線が垂下する。4は横長の蛇行沈線が垂下する。5～7、9は口縁部に多段の横帯文が巡るもので、5～7は単節縄文LRを充填し、7は口唇部上にS字状の貼付文が付される。8は口唇部直下に刻目を持つ隆帯が巡る。

10～27は褐色土の遺物包含層から出土した。10は波頂部に突起を持ち、口唇部直下に沈線が巡り、沈線と刺突の区画文が垂下する。単節縄文RLを地文とする。10～15は単節縄文LRを地文とし、横長の蛇行沈線が垂下する。16～19は口縁部に多段の横帯文が巡るもので、19は鎖状の微隆帯を伴う。20は内面に多段の沈線が巡る。21は口縁部が単節LRの縄文帯、頸部が無文帯である。22～24は単節縄文RLを地文とし、口唇部直下に沈線や紐線文が巡る。25～27は単節縄文LRが器面を覆い、25は口唇部直下に沈線が巡る。

28～32は表土直下の黒褐色土の遺物包含層から出土した。28は口唇部上端に刻目をもつ。口縁部には8の字状の貼付文が付され、横長の蛇行沈線が垂下しよう。29は口縁部に対弧文を描出し、単節縄文RLが充填される。30、31は単節縄文LRを地文とし、30は鎖状の隆帯が、31は沈線が巡る。32は条線文が器面を覆う。

33～41は表土から出土した。33は口縁部に弧線文が、34は単節縄文RLを地文として三角文が横位に展開する。35～39は内面に多段の沈線が巡る。38は単節縄文LRが器面を覆い、39は底面に網代痕を止める。40は紐線文と沈線が巡り、41は条線文が器面を覆う。

2、3、10、33は堀之内1式土器、4、11～15、28、34は堀之内2式土器で、26、27、30、31、38は堀之内式土器の範疇で捉えられる。5～7、9、16～21、35～37は加曾利B 1式、29は加曾利B 2式の精製土器、8、22～24、32、40、41は加曾利B式の粗製土器である。

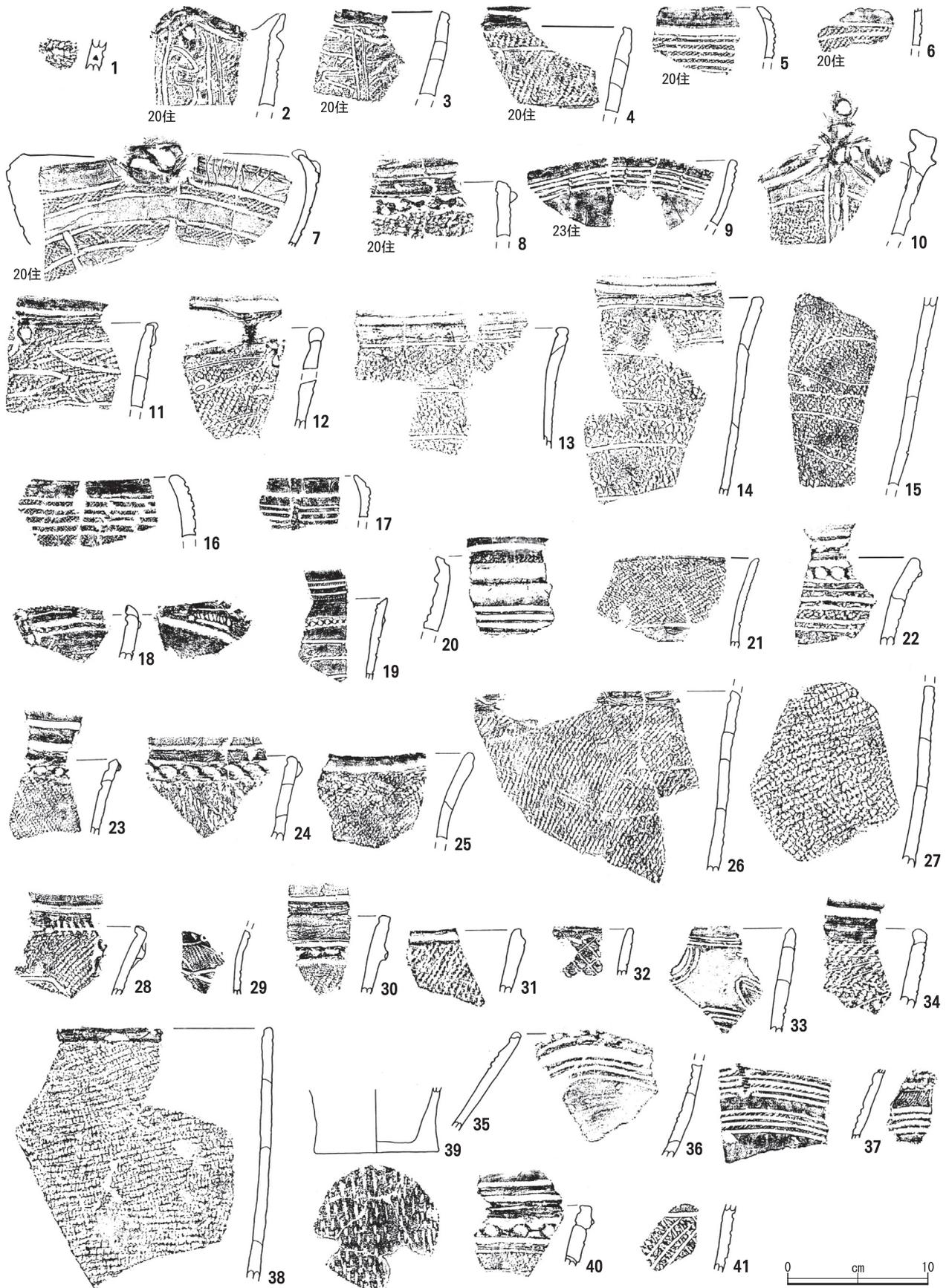
C区出土土器（第27、28図）

1～40は遺物包含層から出土した。1は浮島式土器で、貝殻腹縁文が器面を覆う。2～40は後期前半の土器群である。2は口縁部は無文帯をもち、刻目をもつ隆帯や沈線が巡る。3は刻目をもつ隆帯で頸部及び縦位に区画し、沈線で相対する弧線文が描出される。4～6は口縁部で三角文が横位に展開し、4、5は単節LRの地文縄文、6は充填縄文である。7は口唇部直下に幅狭な無文帯をもつ。8～10、13～20は横帯文が多段に巡る。沈線間には8、19、20が単節縄文LR、9、10、15、17が単節縄文RL、14、16が刻目を充填する。11、18は内面に巡る多条の沈線間に単節縄文LRが充填され、18は口唇部上端に刻目をもつ。12は小型の壺形土器で、21、23～25は胴部上半に対弧文、22は長楕円文を描出し、22は単節縄文LR、24、25は条線を充填する。26は波状縁で、口縁部は無文帯、胴部上半は条線帯である。27は把手である。28～30は単節縄文LRが器面を覆い、28、29は口唇部直下に幅狭な無文帯が巡る。30は口唇部上端に刻目が施される。31～33、35、36は口唇部直下に紐線文が巡り、31、32、36は頸部付近にも紐線文を伴う。また、31、34～38は条線文が器面を覆う。39、40は底面に網代痕を止める。

2、3は堀之内1式土器、4～6は堀之内2式土器、7、28～30は堀之内式土器の範疇で捉えられる。8～20は加曾利B 1式、21～26は加曾利B 2式の精製土器、31～38は加曾利B式の粗製土器である。

D～G区出土土器（第28図）

41～45はD区から出土した後期前半の土器群である。41は口唇部直下に刻目をもつ微隆帯が巡り、沈線が



第26図 北部12次調査B区東出土土器

垂下する。43、44は内面に受口状の隆帯と多条の沈線が巡る。43、44は加曾利B1式の精製土器、41、42は堀之内式土器の範疇で捉えられる。

46、47はE区から出土した後期前半の土器群である。46は単節縄文LRが器面を覆い、47は底面に網代痕を止める。

48～61はF区から出土した。48は前期中葉の黒浜式土器、49～63は後期の土器群である。52、53は台付き土器の頸部、底部の破片で、刻目をもつ隆帯が巡る。54は弧線文内に単節縄文LRが充填される。57～62は条線文が器面を覆い、57、58は口唇部直下に紐線文が巡る。49、52、53は加曾利B式の精製土器、55～63は粗製土器、54は曾谷式土器にあたろう。

64～68はG区から出土した後期の土器群である。64は堀之内式土器で口縁部に沈線が巡る。66は加曾利B1式土器で区切文を伴う横帯文が巡る。67は東北地方の影響を受けたものであろう。

(森山)

出土石器・その他の遺物 (第29～33図)

馬蹄形貝塚の北部、及び中央部、そして開口部を対象とする5、9、12次の計3次にわたる調査で石器ならびに土製品は総数110点が出土した。内訳は貝塚形成期以前にあたる旧石器時代のナイフ形石器をはじめ、当該期を代表する石鏃、加工具では磨製石斧や石匙、砥石が、植物採集具の打製石斧、植物加工具では多種の機能と形態にある石皿・凹石・磨石・敲石が、漁具では浮子や石錘、土錘、さらに装身具類の石製、土製、貝製品が挙げられる。また剥片石器の素材となる石核は2点に止まり、礫核素材の石器、殊に植物加工具が主体となる特徴にある。その中で全容が判別する計75点を掲載した。

①旧石器時代の遺物 (第29図1)

馬蹄形貝塚の中央部から出土した珪質頁岩製のナイフ形石器である。縦長の上位剥片を素材とし、左側縁上位から右側縁基部にかけての二側縁にブランチング加工が巡り、右刃を呈す。基部付近には稜上調整剥離が施される。平面形態ならびに調整加工からはナイフ形石器後半にあたる砂川期に帰属する。

②石鏃 (2～9)

本調査域からは8点が出土し、その全てを図示する。総じて基部に挟りをもつ、凹基無茎の形態を呈し、深い挟りの3～5、浅い挟りの2、6に大別できる。完形は後者の2、6に限られ、欠損率が高い。7、8は器厚や主要剥離面を残すことから未製品と捉えたもので、共に貝層から外れた中央部と開口部からの出土である。素材石材の偏重はなく、黒耀石とチャートが各3点、瑪瑙、黒色頁岩が各1点となる。

③石匙 (10)

これまでの調査で器種が判別するのは本資料が唯一である。基部にあたる摘み部は欠損するが、縦型の石匙である。体部中央には広い剥離面と器厚も厚みを残すが、先端部には微細な調整剥離が巡る。

④削器 (11、12)

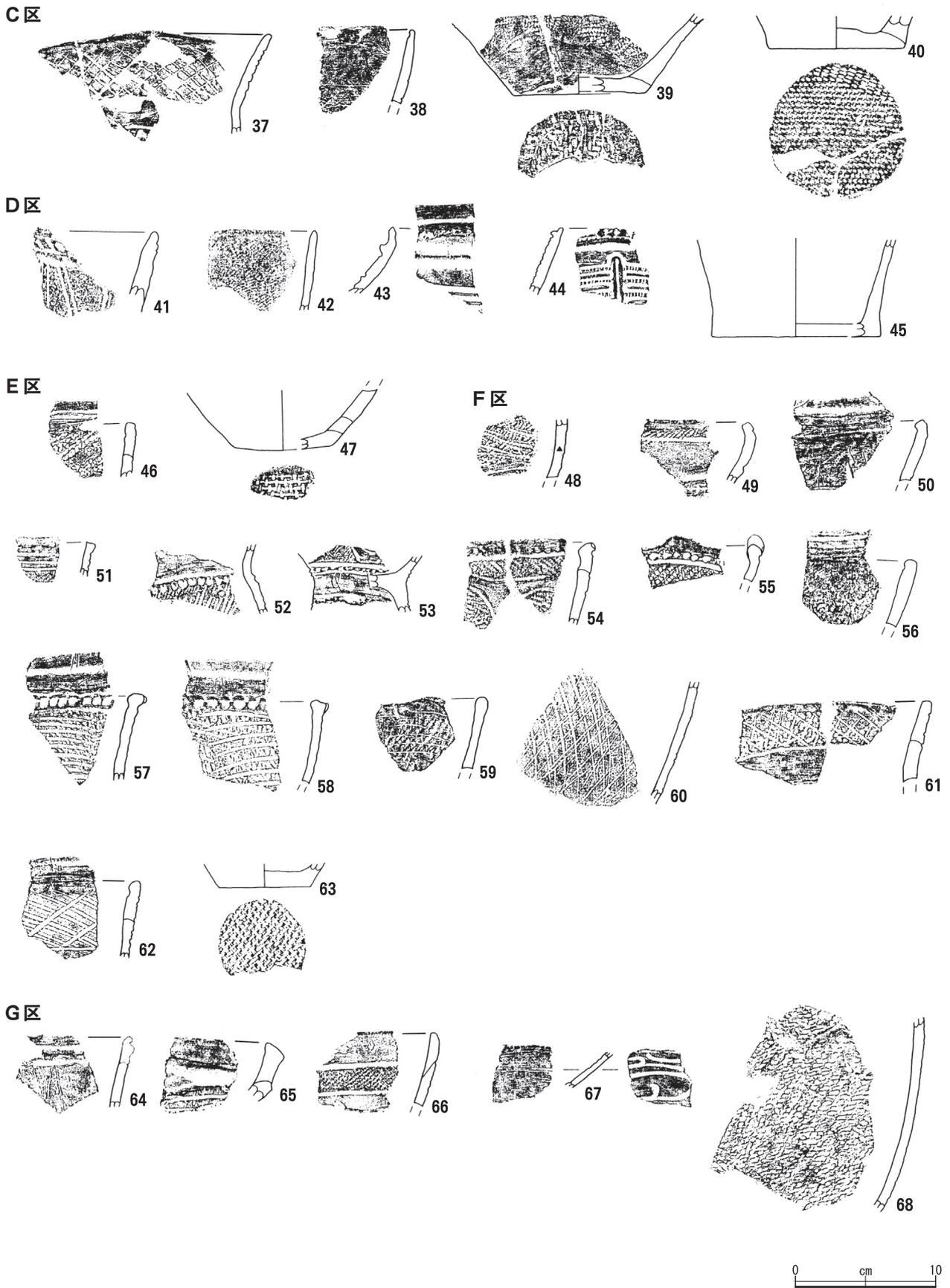
明確に刃部を作出する2点を図示する。共に盤状剥片を素材とし、11は背面周縁からの調整剥離で、特に左縁下位にスクレイパーエッジを施し、腹面には打瘤が残置される。12は素材節理面を残すものの、右縁辺には鋭利なエッジが両面加工によって作出される。

⑤石核 (13、14)

いずれも角柱状を呈すチャートの石核である。13は両頭部の打面調整は乏しく、側面を主に90°の打面転移により拇指状、あるいは盤状剥片の剥離作業が展開されている。14は主要打面を素材の節理面とし、当初は縦長剥片を、石核の消費が進行に伴い拇指状剥片の剥離と、目的剥片の形状変化が窺える。なお、本地



第27図 北部12次調査C区出土土器



第28図 北部12次調査C～G区出土土器

点から出土した剥片素材の石器群に加え、全ての剥片、細片の石材種の集計では、チャート石材への依存率は72.9%と高率を占め、チャート石核の出土と併せて同石材の依存の高さが窺える。

⑥磨製石斧（第31図28）

貝塚全体でも散在的な出土の器種ではあるが、本地域唯一の完形品である。小型定角式で、器面全体にわたって顕著な縦位方向への研磨整形が施され、両刃を呈し、基部頭頂部にはスレが観察される。その他の欠損品では乳棒状と定角式の基部が各1点あり、形態的な偏重は窺えない。

⑦打製石斧（29～31）

29は撥形、30、31は分銅形を呈すものである。29、30は共に背腹面に礫面を残すことから板状礫を素材とした周縁加工が窺える。また、30、31の分銅形は共に抉り部に顕著なスレが観察される。図示外の欠損品のうち、その器形が判別できるものは、分銅形、撥形共に各1点である。

⑧石皿・凹石・磨石・敲石（32～第33図62）

植物を対象に加工する機能にある礫核石器群を一括し、多種にわたる形態や機能がみられるために細分する。1類として大型石器、殊に石皿や凹石、台石にあたる。本調査域では大型石器は乏しく、32、33の石皿に限られる。32は左縁辺から中央にかけて緩やかな傾斜が、33は偏平角礫の中央で研磨と敲打がなされている。上部欠損後は手持ちでの磨石にも転用されたようである。2類として手持ちでの利用が推測される中型程度の大きさで、研磨や敲打の外に幾つかの機能を併用するものを本類とした。34～37は楕円礫や角礫を素材とした凹石、あるいは縁辺には研磨や敲打と複数の機能を併せ持ち、石材が乏しい当該地の特徴としても揭示できよう。34は背面中央に広い窪みが、腹面には凹部が2ヵ所で作出される。35、37は背腹面に加え、側面に浅い凹部と端部には敲打が、36は大型石皿の端部にあたる。3類は円礫や楕円礫を素材に、主に研磨や敲打が観察される38～50である。総じて器面全体にわたって使用痕が観察され、特に側面端部には磨る・敲く痕跡が顕著である。49は円礫の半割後に分割面にも研磨と敲打が施され、再利用と捉えられる。50は円礫の一端を敲打によって刃部を作出した礫器ではあるが、右側縁の剥離面にも研磨がおよんでおり、磨石への転用が窺える。51～54は楕円礫や棒状礫を素材としたもので4類とする。その端部に研磨と敲打が観察される。特に敲打が主たる機能となったためか、器面剥落が伴っている。5類は偏平礫を素材とするもので、55～62があたる。平坦面への使用痕は乏しいが側面、端部に敲打や研磨が集中し、56や59では側面が鋸歯状に歪む強い敲打が観察される。61は右側縁の剥離後に、平坦面を磨り潰す様な研磨が顕著である。各形態を呈す磨石や敲石の出土地点は貝塚が分布する北部縁辺を中心とし、貝層が途切れる内側や中央部にも散在するが、本機能を有す石器では7.5：1.5：1の比率となる。

⑨砥石（63、64）

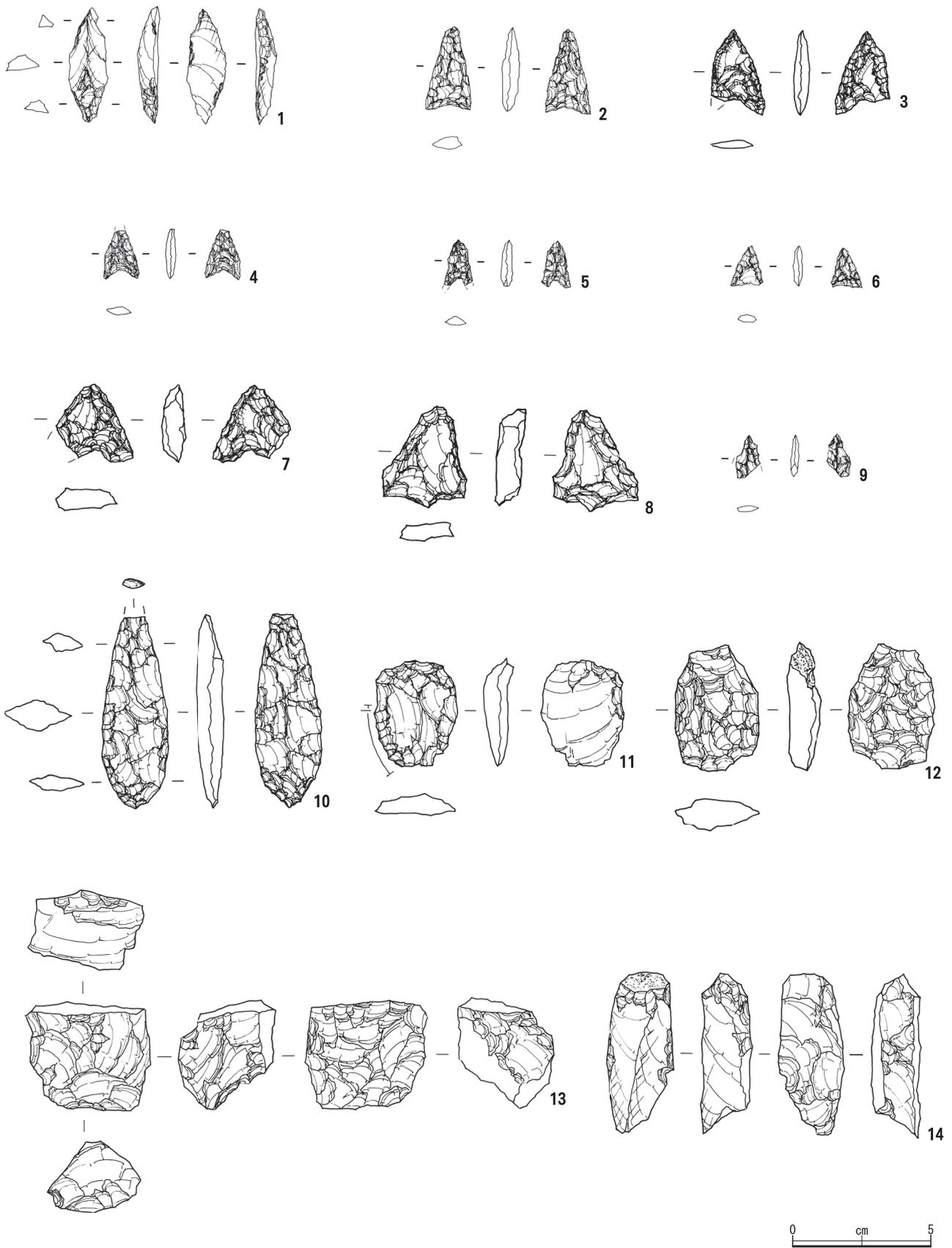
偏平礫を素材とする砥石端部が2点出土している。器面全体にわたって著しく研磨がおよんでおり、63は剥離面である上端部と右側縁にも引き続き使用面に供されている。

⑩浮子（65）

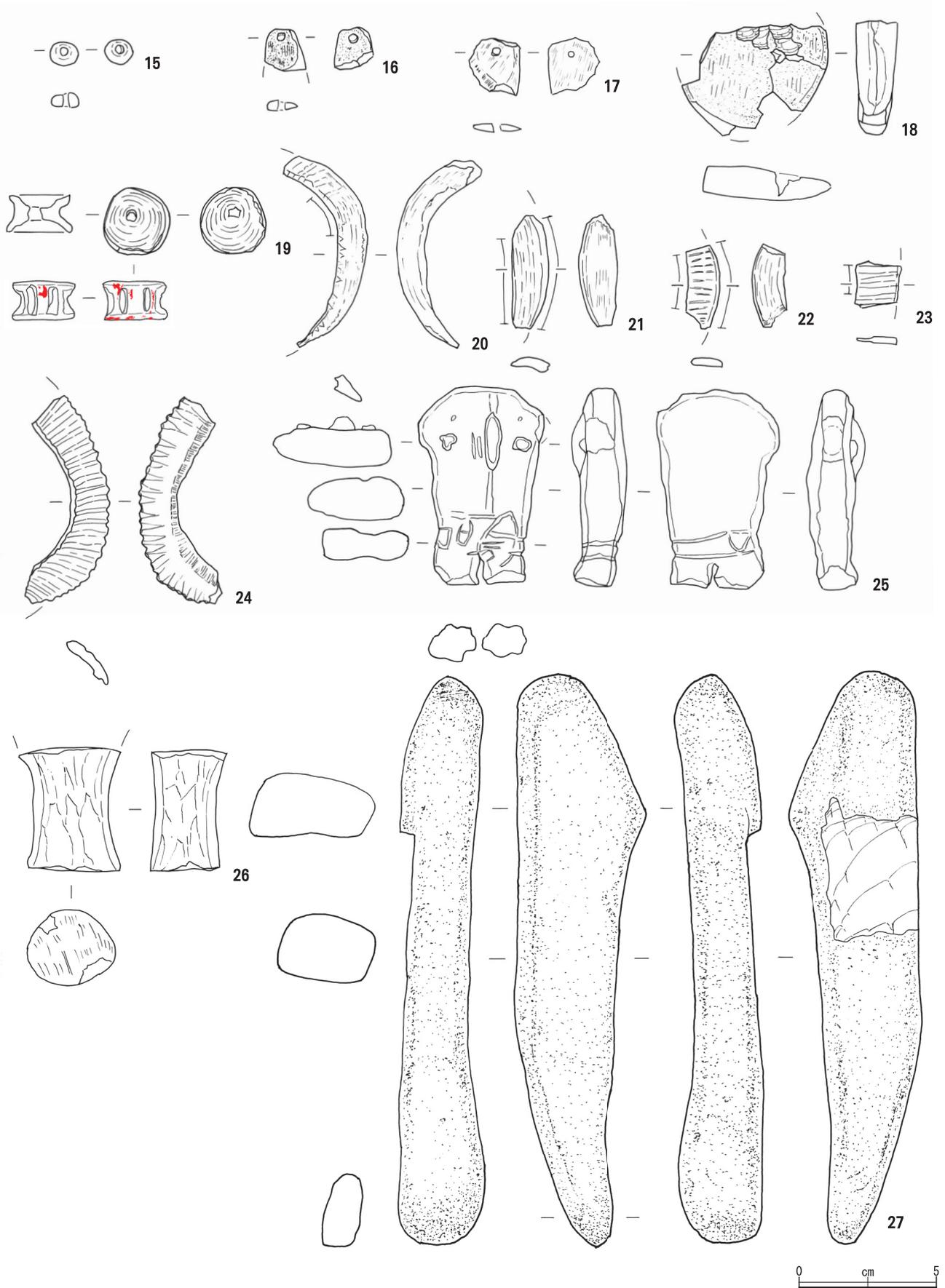
およそ円礫の軽石を素材としたもので、残存部では側面から背面にかけて一条のシャープな線状痕が器面を巡るようである。周縁は粗雑な研磨整形が施されている。

⑪石錘（66～68）

貝塚北部からは偏平楕円礫を素材とした石錘が3点出土している。66は器面に研磨整形が施され、長辺両端に敲打で抉り込みが作出されている。67は腹面を上部からの加撃で剥落するが、66同様に長辺両端に、68は長辺、短辺の四辺に敲打の抉り込みと研磨が観察される。



第29図 北部出土石器 (1)



第30図 北部出土石器 (2)、その他の出土遺物 (1)

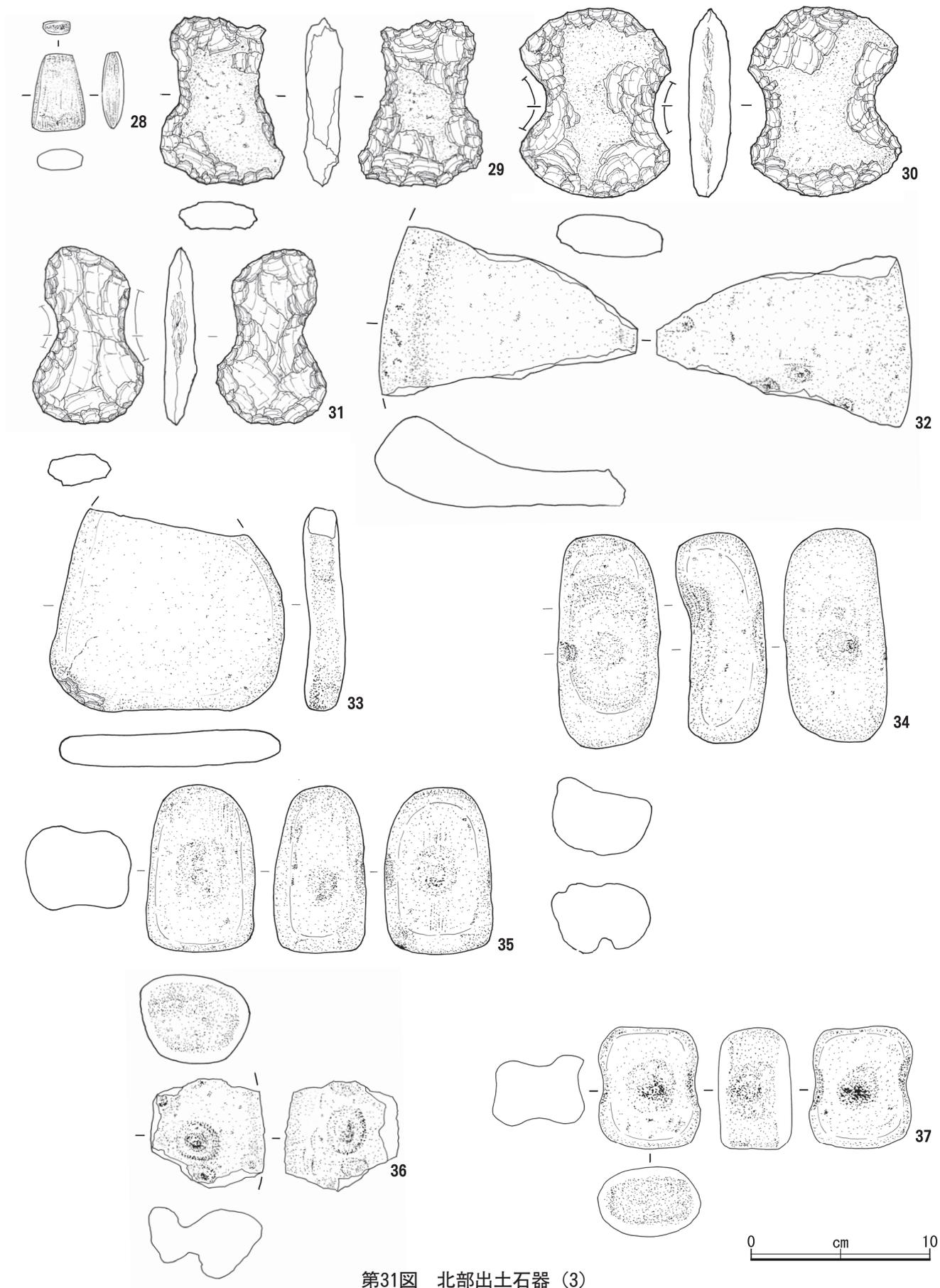
⑫土錘・土製円盤（69～75）

貝塚が分布する北部と馬蹄形の中央から縄文時代後期前半の土器破片を素材とした土製品が計7点出土している。69～72は土器片錘で、縁辺は敲打と研磨から整形される。69は長辺両端、70は短辺に明瞭な挟り込みが作出され、71は土器底面を素材としている。73～75は縁辺が研磨された土製円盤で、いずれも馬蹄形の中央からの出土である。

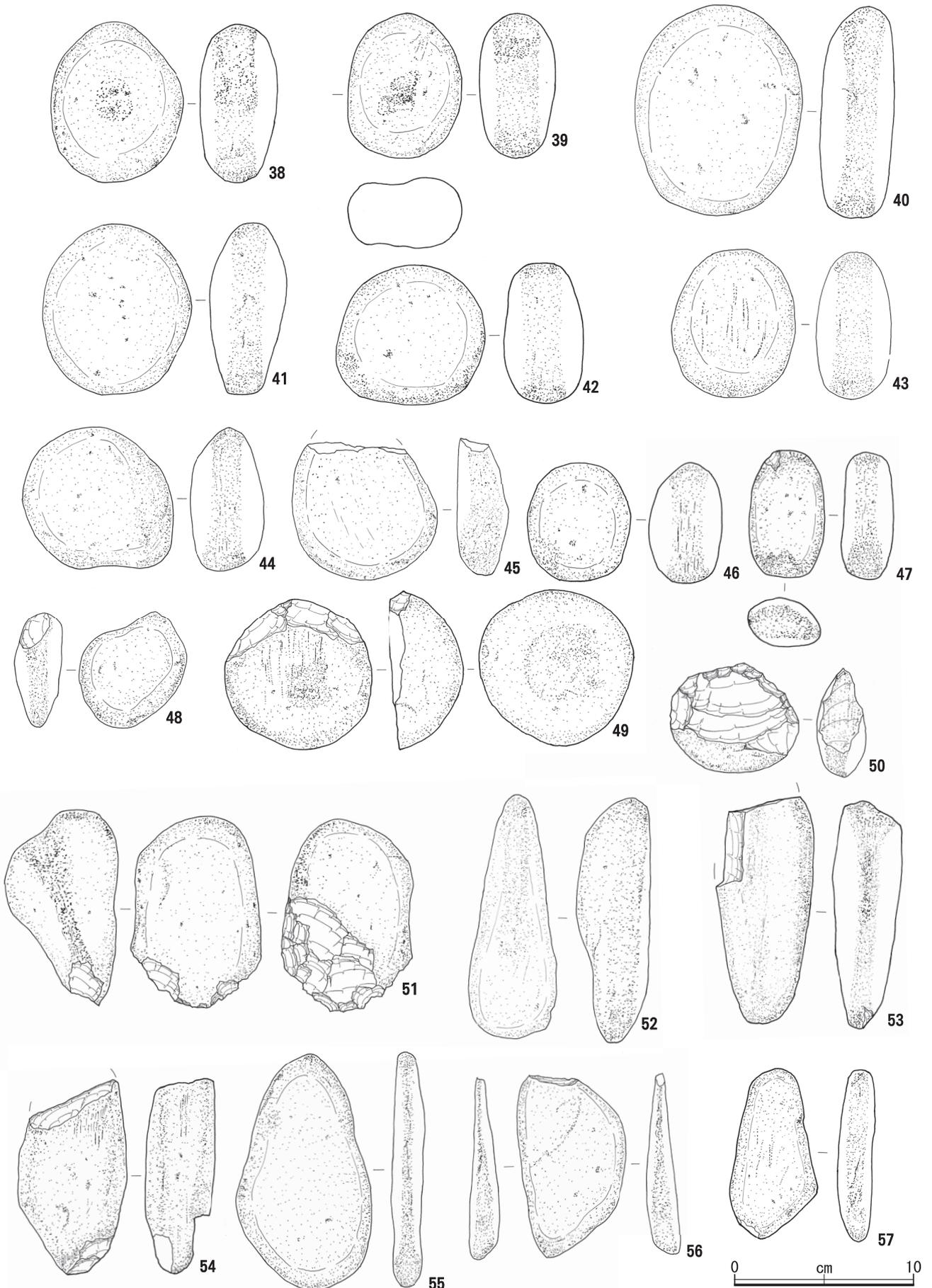
⑬その他の遺物（第30図）

貝塚北部では、様々な素材のその他の遺物が出土している。15は翡翠製の丸玉で、やや歪んだ球体を呈す。穿孔は背面側から開始され、腹面側の穿孔で貫通されている。器面は滑らかでやや乳白色が混じる緑色である。16は薄材の軽石を素材に撥形に研磨され、上部には両面穿孔の孔をもつ垂飾である。17も小孔をもつ獣骨片で両端を欠くために全容は不明である。器面には擦痕を止める。18は黒色頁岩の偏平円礫の一端で、器面は研磨整形後に中央右寄りの穿孔行為で貫通には至らず、四分割されている。19は5号人骨頭骨の復元作業時に検出されたサメ椎骨製の耳栓である。臼状の窪み中央に両面穿孔が施され、また、側面にはベンガラによる赤彩が斑点状に点在する。縁辺を含め、研磨などの器面調整は見受けられず、穿孔と塗彩のみの整形に限られる。20～24は貝輪の断片である。20は5号人骨右手首に装着されたサトウガイ製で、殻表は研磨が著しく、内縁部は局部に止まる。21は殻表の研磨が、22は両縁の研磨が施されることから製品と捉えた。共にベンケイガイ製である。23は内縁側には研磨が、24は敲打による粗割り後の細部整形で終えており、いずれもサトウガイ製の未製品である。25は板状を呈す土偶で、5号人骨の脚部付近の出土位置にあることから副葬品と捉えられる。平面形態は脚部に向かって窄まる撥形であり、顔面には粘土貼付で目鼻が表現されている。また、顔面付近の両側縁には摘み上げによって膨らみが作出され、手をモチーフしたものと推測される。さらに短い脚部上部にはヘラ状工具による平行沈線が腰部を巡り、背腹面には緩い三角文が加えられている。その付近には指頭圧痕が起因して、器面がやや窪み、脚部が前方へ傾いている。器面整形は施されておらず、細粒の含有物を含む胎土で黄褐色を呈す。26は円柱状を呈す土偶脚部であろう。ヘラ状工具によって縦位方向のナデや磨きが顕著である。上方は胴部の接着面から剥落している。27は3号人骨右膝の下層から出土した棒状礫である。出土状況はあたかも右膝を支えるような状態であったため、副葬品として捉えられる。石材が砂岩ではあるが、素材の肥厚部を残し、器面全体にわたって研磨整形が施され、特に下端はヘラ状へと整形され、基部や体部、先端部といった器形構成が見出せることから石棒と捉えた。

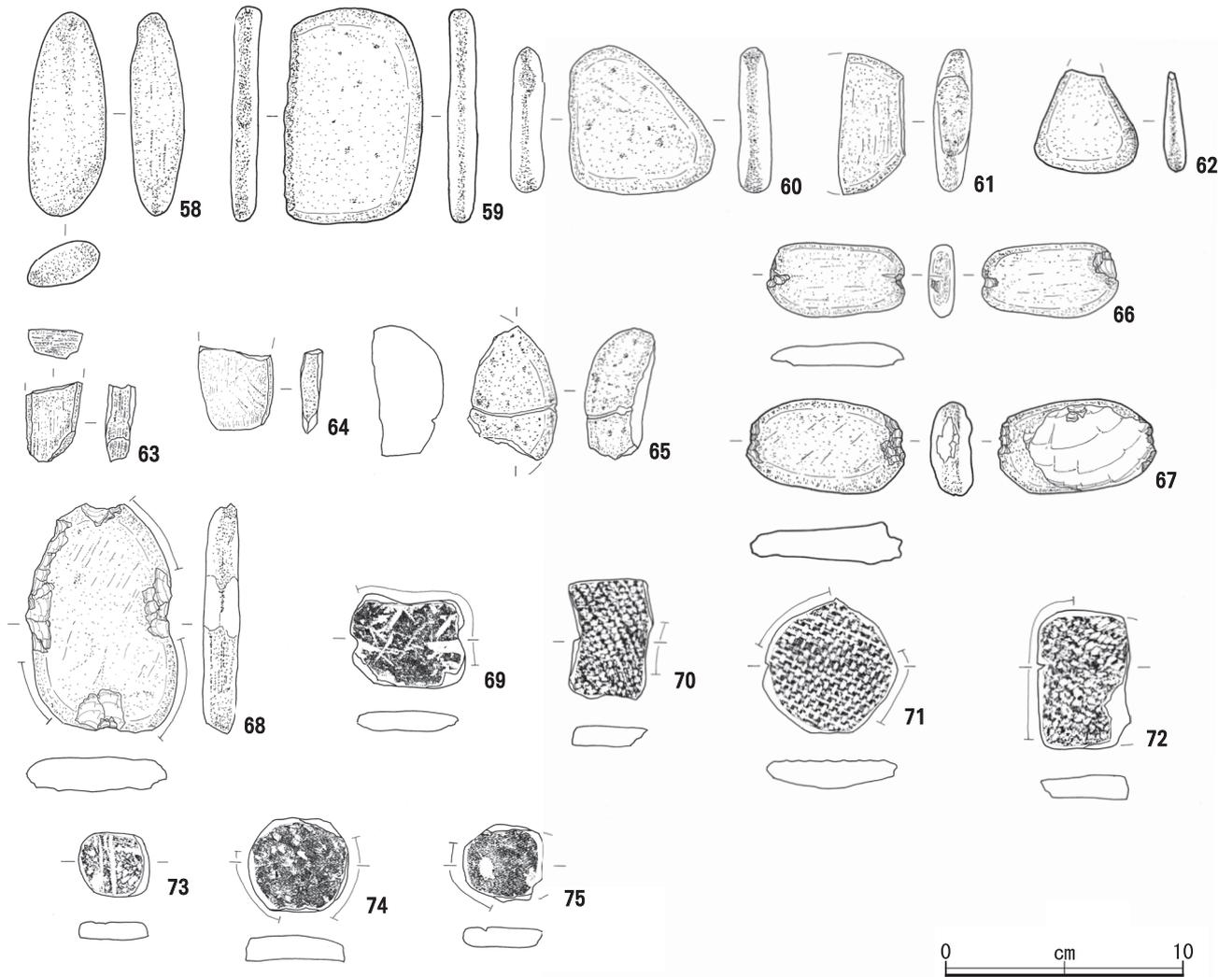
（中野）



第31図 北部出土石器 (3)



第32図 北部出土石器 (4)



第33図 北部出土石器 (5)、その他の出土遺物 (2)

第2表(1) 貝塚北部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 次数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
29-1	5	広場	4252-2448	ナイフ形石器	42	14	5	3.3	—	珪質頁岩	縦長剥片、二側縁調整加工、稜上調整剥離、右刃(砂川期)。
2	5	北西1	4222-2418	石鏃	30	16	5	1.9	弱凹基無茎	黒色頁岩	微細な押圧剥離が器面を覆う。
3	12	北西1	A区西	石鏃	30	16	3	1.6	凹基無茎	黒耀石	一脚部欠損、周縁調整加工、背腹面に主要剥離面。
4	12	北西1	A区西	石鏃	(18)	11	3	0.6	凹基無茎	チャート	先端部欠損、左側縁部に張出、左右非対称。
5	12	北西2	C区	石鏃	17	10	3	0.6	凹基無茎	黒耀石	脚部欠損、左側縁部に張出。
6	5	北西2	4232-2414	石鏃	14	12	3	0.4	弱凹基無茎	チャート	周縁調整加工、腹面に主要剥離面を残す。
7	5	広場	4252-2460	石鏃	28	24	8	5.3	凹基無茎	瑪瑙	器厚が厚く、器面調整の途上に脚部を欠損した未製品。
8	9	開口部	4302-2386	石鏃	33	31	5	9.1	—	チャート	器厚が厚く、器面調整も粗雑なために製作途上の未製品。
9	12	北西2	C区	石鏃	(15)	8	2	0.2	—	黒耀石	基部、先端部欠損。
10	12	広場	F区拡張	石匙	(70)	23	11	17.8	縦型	チャート	基部欠損、周縁調整加工。
11	12	北西1	A区西	削器	39	30	7	9.6	拇指状	凝灰岩	背面：左縁に連続的なスクレイパーエッジ、腹面：打瘤、主要剥離面。
12	12	北西1	A区東	削器	47	30	12	19.0	方形	チャート	節理面、両面加工、右側縁にスクレイパーエッジ作出。
13	5	北西1	4288-2484	石核	39	43	34	80.4	角柱状	チャート	両端側の頭部調整は乏しが、90°の打面転移により拇指状剥片の剥離作業。
14	12	北西2	B区東	石核	57	24	18	25.7	角柱状	チャート	主要打面は節理面、90°打面転移、縦長板状剥片を剥離。
30-15	12	北西1	A区東	丸玉	8	10	6	0.6	円形	翡翠	背面?腹面への両面穿孔。器面は研磨整形。
16	12	北西2	C区	垂飾	(16)	(15)	3	0.2	—	軽石	撥形か、研磨整形、両面穿孔。
17	12	北西1	P12	垂飾	(19)	(19)	2	0.8	—	獣骨	不整形、下端欠損、線状痕を残す研磨整形、両面穿孔。
18	12	北西1	P9	垂飾	(41)	(49)	11	39.0	円形	黒色頁岩	残存約1/2、研磨整形、片面穿孔の途上で破損の製作途上。
19	12	北西1	5号墓	耳栓	25	22	15	1.4	白形	サメ椎骨	側面にベンガラ塗彩、研磨整形は乏しい。臼状部の中央を両面穿孔。
20	12	北西1	5号墓	貝輪	(69)	11	7	4.3		サトウガイ	残存約1/2、殻表は研磨整形が顕著で、側縁は乏しい。
21	12	北西2	C区	貝輪	(41)	14	4	3.5		ベンケイガイ	破片、殻表と側縁に研磨整形。
22	12	北西2	C区	貝輪	(31)	11	3	1.4		ベンケイガイ	破片、側縁に研磨整形。
23	12	北西1	A区東	貝輪	(17)	16	2	1.1		サトウガイ	破片、内縁は研磨整形、外縁は敲打痕を止める。未製品。
24	12	北西1	B区西	貝輪	(76)	18	4	12.3		サトウガイ	残存約1/3、研磨整形は乏しい。未製品。
25	12	北西1	A区東	土偶	74	(45)	19	41.4	板状	土製	板状土偶。左肩付近を欠き、器面整形は乏しい。粘土瘤の貼付で目鼻を表現し、浅い沈線が腰回りをめぐる。黄褐色を呈す。
26	12	北西1	B区西	土偶(脚部)	(45)	(37)	27	46.1	丸棒状	土製	体部接合面で剥落、縦位への研磨整形。黒色を呈す。
27	12	北西1	3号墓	石棒	208	47	31	308.4	棒状	砂岩	1号人骨右膝を支える出土状況。棒状礫を素材に研磨整形され、先端部が肥厚する素材から石棒と捉える。
31-28	12	北西2	B区東	磨製石斧	43	29	12	23.2	定角式	凝灰岩	小型擦切形の両刃。頭部にスレ、器面全域に研磨整形。
29	5	北西1	4292-2480	打製石斧	92	67	20	147.6	撥形	黒色頁岩	背腹面に礫面、周縁調整加工。
30	12	北西1	25号焼土跡	打製石斧	106	83	23	299.8	分銅形	石英斑岩	背・腹面に礫面、両側縁の括れにスレ。
31	12	北西1	A区東	打製石斧	100	62	16	108.3	分銅形	泥岩	両側縁の括れにスレ。風化による器面剥落が著しい。
32	12	北西1	B区西	石皿・凹石	(95)	(142)	46	543.0	円礫	石英斑岩	残存約1/8、背面：中央へ傾斜、腹面：小凹部3ヵ所。
33	5	北西1	4292-2480	石皿	(110)	128	20	557.9	偏平角礫	砂岩	残存4/5、背面：緩く皿状、側縁：研磨と敲打。
34	12	北西1	A区西	磨石・凹石	120	56	46	379.7	楕円礫	砂岩	背面全体と腹面2ヵ所に凹部。器面全体に研磨。
35	12	北西1	32号土坑	磨石・凹石・敲石	94	59	49	478.4	楕円礫	石英斑岩	三面に浅い凹部、各面に敲打・研磨が顕著。
36	12	北西2	C区	石皿・凹石	(63)	(64)	38	159.6	—	石英斑岩	断片、背腹面に深い凹部作出。
37	12	北西2	20号住居跡	磨石・凹石・敲石	68	56	40	236.0	角礫	石英斑岩	四面に凹部、各面に敲打・研磨が顕著。
32-38	5	北西1	4286-2476	磨石・敲石	90	74	42	436.7	円礫	安山岩	器面及び側縁研磨、敲打。

第2表(2) 貝塚北部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 次数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
39	5	北西1	4289-2487	凹石・磨石・敲石	81	64	40	296.3	円礫	石英斑岩	背腹面に浅い凹部、側縁研磨、敲打。
40	5	北西1	4289-2487	磨石・敲石	119	93	40	676.9	円礫	凝灰岩	側縁研磨、敲打。
41	5	北西1	4289-2487	磨石	96	84	43	505.8	円礫	凝灰岩	側縁研磨。
42	5	北西2	4282-2468	磨石・敲石	79	82	44	407.4	円礫	砂岩	側縁研磨、敲打。
43	5	北西1	4286-2480	磨石・敲石	83	69	42	356.2	楕円礫	安山岩	器面、側縁研磨。
44	12	北西1	B区西	磨石・敲石	79	84	41	416.1	円礫	石英斑岩	側縁に研磨、末端平坦面に敲打。
45	12	広場	F区	磨石	(76)	81	27	196.7	円礫	砂岩	上端欠損、側縁部に研磨が顕著。
46	12	北西1	26号土坑	磨石	68	57	40	223.8	円礫	安山岩	側縁に研磨。
47	5	北西1	4288-2484	磨石・敲石	72	42	27	125.1	楕円礫	凝灰岩	両端及び側縁に研磨、敲打。
48	12	北西1	A区東	磨石	64	59	26	97.8	偏平円礫	砂岩	側縁に研磨。
49	12	北西1	A区東	磨石・敲石	(40)	85	86	385.5	円礫	凝灰岩	残存約1/2、半割後、剥離面を磨石に、下端を磨石・敲石と両機能併用。
50	12	広場	F区	磨石・敲石	61	71	28	152.4	円礫	ホルンフェルス	礫面の外に右側縁の剥離面に縦位の研磨があり、礫器からの転用か。
51	5	北西2	4282-2476	磨石・敲石	108	74	62	572.4	楕円礫	砂岩	側縁末端に研磨・敲打、被熱。
52	12	北西1	A区東	磨石・敲石	138	49	42	299.7	棒状礫	凝灰岩	体部稜線と末端に敲打、側面は研磨。
53	12	北西2	C区	磨石・敲石	(129)	(55)	38	302.3	棒状礫	砂岩	側縁及び器面に敲打・研磨が顕著。
54	12	北西1	A区西	磨石	(106)	59	38	331.6	楕円礫	泥岩	残存1/2、背面・側面に研磨が顕著。
55	12	北西1	A区西	磨石	133	74	17	200.8	偏平楕円礫	泥岩	側縁を主に研磨。
56	12	北西1	A区東	磨石・敲石	(101)	60	16	120.1	偏平楕円礫	砂岩	側面に敲打と研磨が顕著。被熱。
57	5	広場	4252-2452	磨石	97	48	19	105.7	偏平楕円礫	泥岩	側縁研磨。
33-58	12	北西1	4号墓	磨石	85	32	23	66.2	楕円礫	砂岩	末端、側面部に研磨。
59	5	北西1	4285-2483	磨石・敲石	90	58	12	97.0	偏平楕円礫	砂岩	側縁研磨、敲打によって長辺一辺は鋸歯状を呈す。
60	12	北西1	A区東	磨石	62	61	13	67.8	偏平楕円礫	砂岩	側縁に顕著な研磨。
61	12	北西1	B区西	磨石	(60)	(27)	15	29.7	偏平円礫	砂岩	1/3残存、右剥離面に研磨がおよび再利用。
62	12	北西1	13号住居跡	磨石	(42)	43	9	16.5	偏平礫	砂岩	側縁に研磨。
63	5	広場	4252-2448	砥石	(32)	(22)	(12)	11.6	板状	チャート	器面全体に研磨、折断面にも横位の擦痕。
64	5	北西2	4282-2472	砥石	(35)	(32)	(8)	11.0	板状	粘板岩	上半部欠損、器面全体に研磨。
65	5	北西1	4286-2480	浮子	(54)	(43)	28	13.6	円礫	軽石	残存1/4、背面・側縁に一条の線状痕を施す。
66	12	北西1	B区西	石錘	31	58	10	31.2	偏平楕円礫	砂岩	長辺両側に敲打で挟り込み作出。器面は研磨整形。
67	12	北西1	15号焼土跡	石錘	40	64	17	60.8	偏平楕円礫	ホルンフェルス	長辺両側に敲打による挟り込み作出。
68	12	北西1	P10	石錘	97	60	15	144.4	偏平楕円礫	砂岩	器面の研磨が著しく、長短辺の4辺に敲打で挟り込み作出、被熱。
69	12	北西2	C区	土錘	37	46	9	-	隅丸長方形	土製	研磨・敲打整形、短辺両側に括れ。
70	12	北西1	B区西	土錘	48	32	8	-	隅丸長方形	土製	敲打整形、一辺研磨整形・長辺片側に括れ。
71	12	北西1	B区西	土錘	55	55	11	-	略円形	土製	底部片を敲打・研磨整形、一辺に浅い括れ。
72	12	北西1	P8	土錘	59	(38)	10	-	隅丸方形	土製	残存1/2、敲打整形、一辺研磨整形・浅い括れ。
73	12	広場	G区	土製円盤	28	29	7	-	隅丸方形	土製	研磨整形。
74	12	広場	G区	土製円盤	39	42	10	-	隅丸方形	土製	敲打・研磨整形。
75	12	広場	G区	土製円盤	33	(34)	8	-	楕円形	土製	研磨・敲打整形。

第3節 貝塚東部の調査

(1) 調査の概要 (第34図)

貝塚東部は東の谷に最も近く、貝層は南部から続いて広範囲に分布する。4次調査では貝塚の東端をかすめるように、市道1017号線上で南北160mにわたり19ヵ所の試掘坑を設定し、遺構の確認調査を行った。その結果、貝塚の東端で、貝塚形成期にあたる堀之内1式の住居跡1軒(4号住居跡)、土坑2基(6、7号土坑)を検出し、発掘調査を行った。

5、7、9次調査では、ボーリング調査で得られた貝層範囲の検証と、貝殻の散布が疎らな地点での遺構の所在の有無を確認するため、試掘調査を行った。その結果、7次調査では貝層の外周部で円形の住居跡3軒を検出し、遺構確認面上の出土遺物からは4号住居跡と同様に堀之内1式期と推定される。9次調査では、貝層の内周部で貝殻の散布が疎らな地点から5軒の住居跡を検出し、遺構確認面上の出土遺物からは、加曾利B1式期と推定される。

また、5～9次の各地点で、灰層を伴う焼土跡9基を、灰を収納した深鉢形土器を検出した。

出土遺物は貝塚の外周部は堀之内1～2式土器、内周部は堀之内2式～加曾利B式土器が主体であり、集落が外側から内側へと移行する様子が窺える。(森山)

(2) 住居跡

4号住居跡 (第35図)

4次調査の中央やや北側に位置し、貝塚の東端にあたる。西壁の一部は調査区外へと伸びるが、その平面形態は南壁が膨らむ円形を基調とし、調査し得た規模は東西620cm、南北690cm、確認面からの深さは30cm前後を測る。西側には住居跡が埋積する過程で一括廃棄されたと推察される混土貝層が、南北270cm、東西200cmの範囲で堆積する。貝層は全量採取し、同定を行ったところ、ヤマトシジミが大半を占め、マガキ、オキシジミ、フトヘタナリ、ハイガイ、ハマグリが僅かに含まれる。内部施設は7号土坑の覆土上面に掘り込まれた炉跡と、壁際と炉の際を巡る計22本の柱穴を検出した。柱穴の配置や南壁際の覆土の三角堆積からは、住居跡の重複や建て替えが推測される。炉跡は床面のほぼ中央にあり、長軸123cm、短軸72cmの隅丸長方形を呈し、深さは50cmを測る。播鉢状で、底面は顕著な火床面が広がる。覆土は下層に赤褐色土、上層に灰層が堆積する。出土遺物は堀之内1式が主体を占め、該期に帰属する。

(3) 土坑

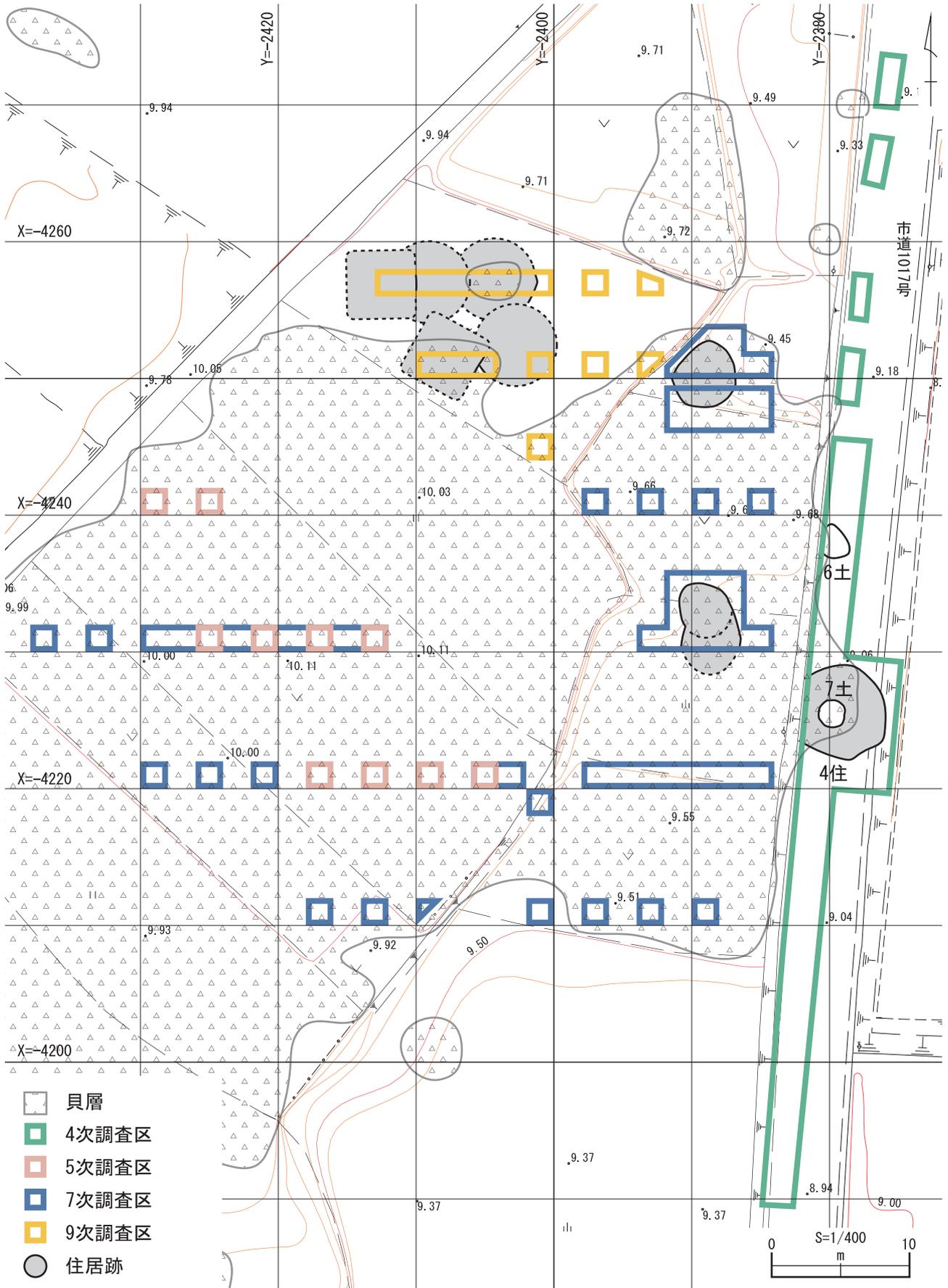
6号土坑 (第36図)

4次調査の北側に位置する。西側一部は調査区外へと伸びるが、楕円形を呈し、長軸250cm、短軸200cm、確認面からの深さ67cmを測る。覆土上層はヤマトシジミを主体とする混土貝層である。遺物は堀之内1式土器が出土した。

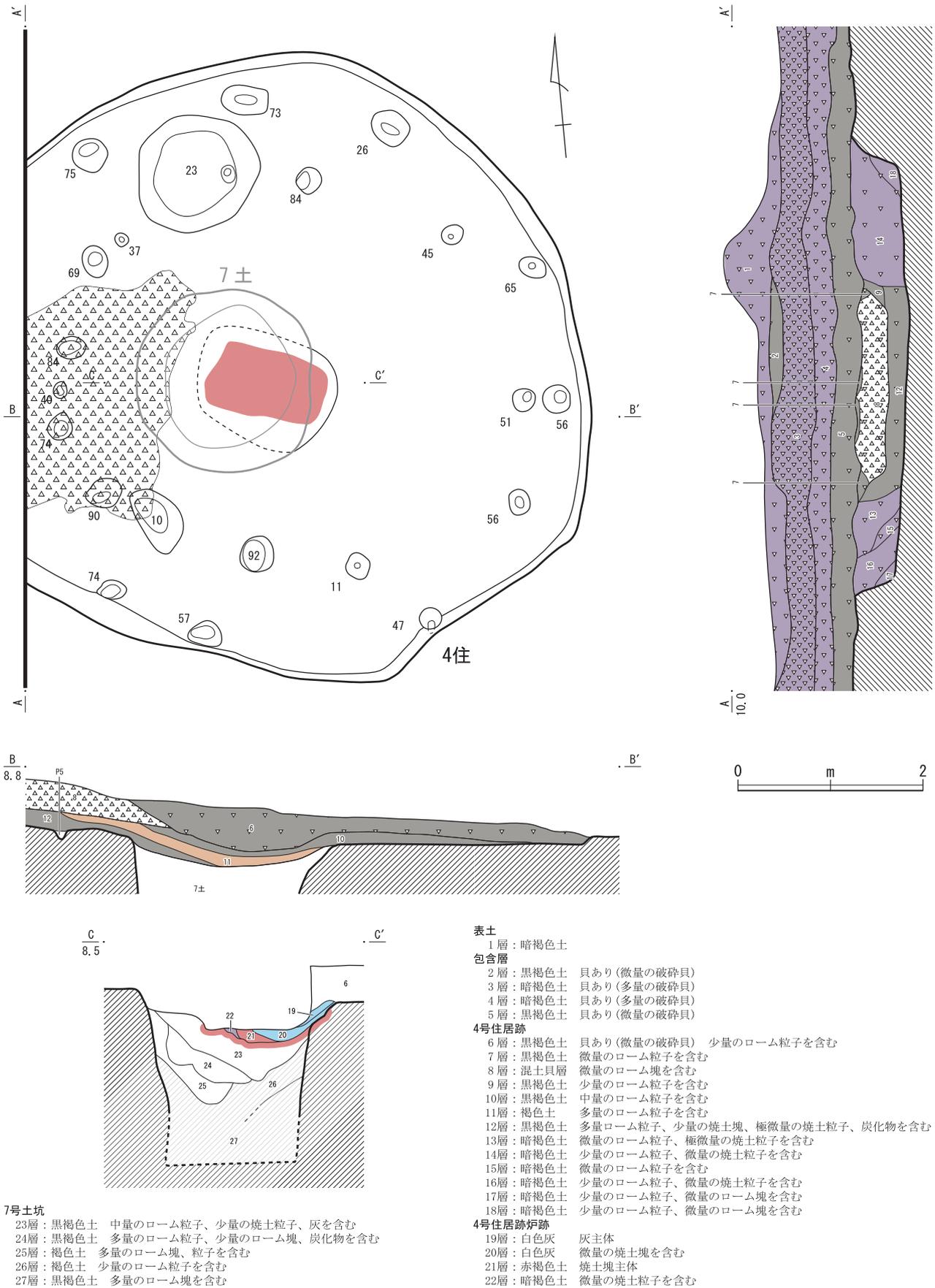
7号土坑 (第35図)

4号住居跡炉跡に切られる新旧関係にある。平面形態は円形を呈し、径約200cmを測る。湧水により住居跡床面から深さ190cmで調査を断念した。遺物は縄文土器の細片が僅かに出土したに止まる。

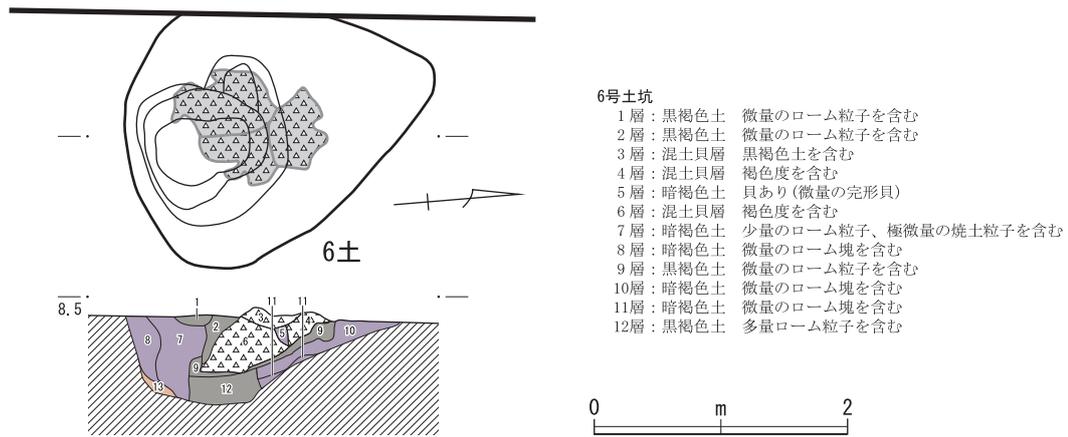
(岡本・中野・森山)



第34図 東部調査区全体図



第35図 4号住居跡及び炉跡、7号土坑



第36図 6号土坑

(4) 遺物

4号住居跡出土土器 (第37図)

1～9は堀之内1式土器である。1は口縁部に無文帯をもち、胴部には渦巻文が横位に展開しよう。2、6は蕨手文、3は蛇行沈線、4、5は相対する多条の弧線文が波頂下に垂下する。7は波頂部に半円筒状の突起をもち、沈線が密に施され、刺突が加えられる。口縁部は沈線や鎖状の隆帯で区画され、条線が充填される。8は口唇部直下に指頭を押捺が巡り、口縁部には多条の沈線で描出する三角文が横位に展開する。9は波頂部に8の字状貼付文を付し、口唇部直下に沈線が巡る。口縁部から胴部上半には単節縄文LRが充填された菱形文や三角文が横位に展開する。10はヘラナデが器面を覆う。割れ口には輪積みを補強するための刺突がみられる。11、12は加曾利B1式の精製土器で、口縁部に刺突が加えられた微隆帯と、単節縄文LRが充填された横帯文が巡り、弧線の区切文をもつ。13、14は加曾利B式の粗製土器で、単節縄文LRを地文とし、口唇部直下に紐線文が巡る。

6号土坑出土土器 (第37図)

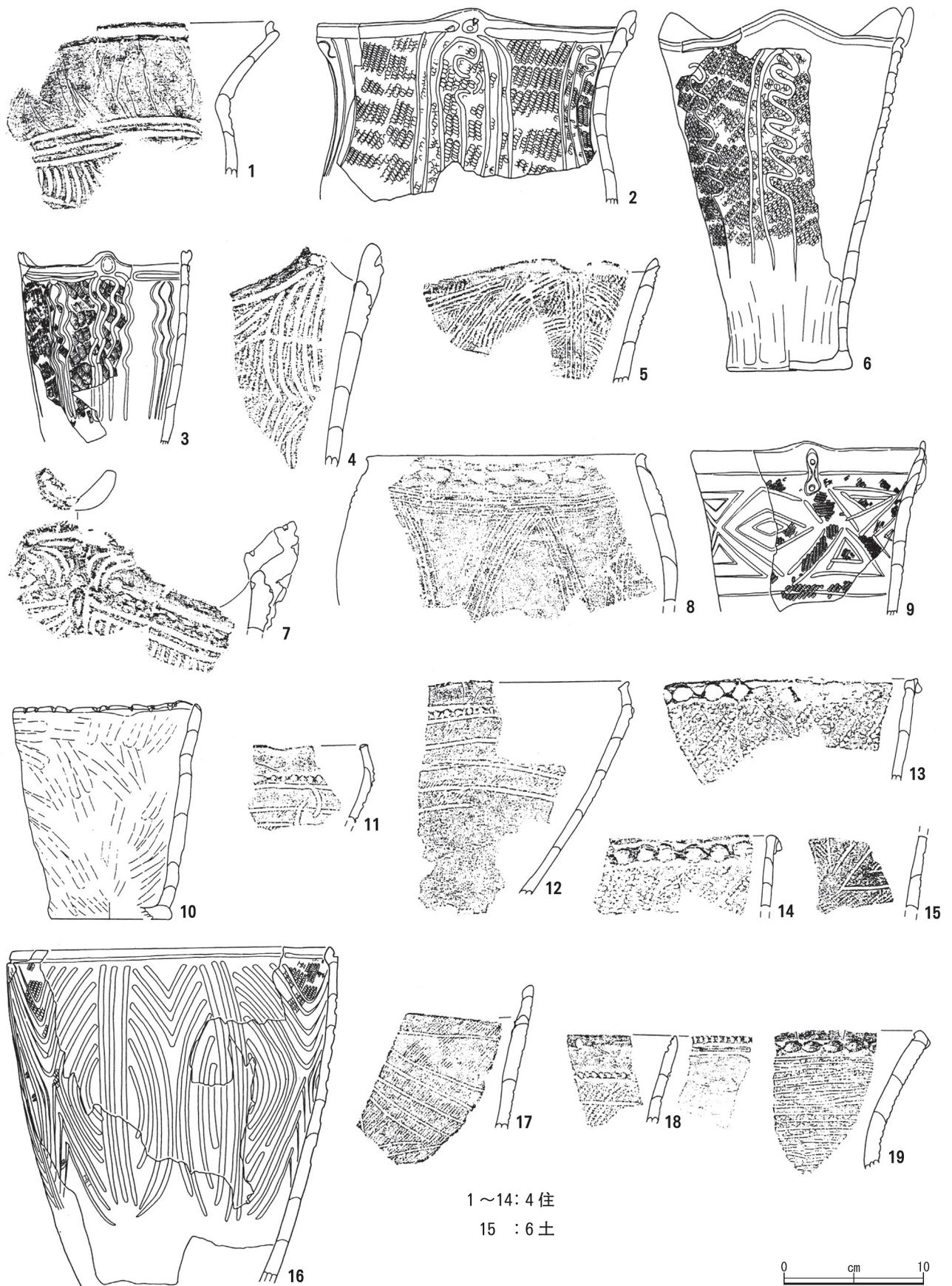
15は堀之内2式土器で、単節縄文LRが充填された三角文が横位に展開する。

貝塚外周部(4次調査遺構外)出土土器 (第37図)

16は堀之内1式土器で、単節縄文LRを地文とし、垂下する沈線を挟んで相対する弧線文が描出される。17は堀之内2式土器で、単節縄文LRを地文とし、三角文が横位に展開する。18は加曾利B1式の精製土器で、外面には鎖状の微隆帯と単節縄文LRが充填された横帯文が、内面には刻目と沈線が巡る。19は口唇部直下に紐線文が巡り、条線が器面を覆う。

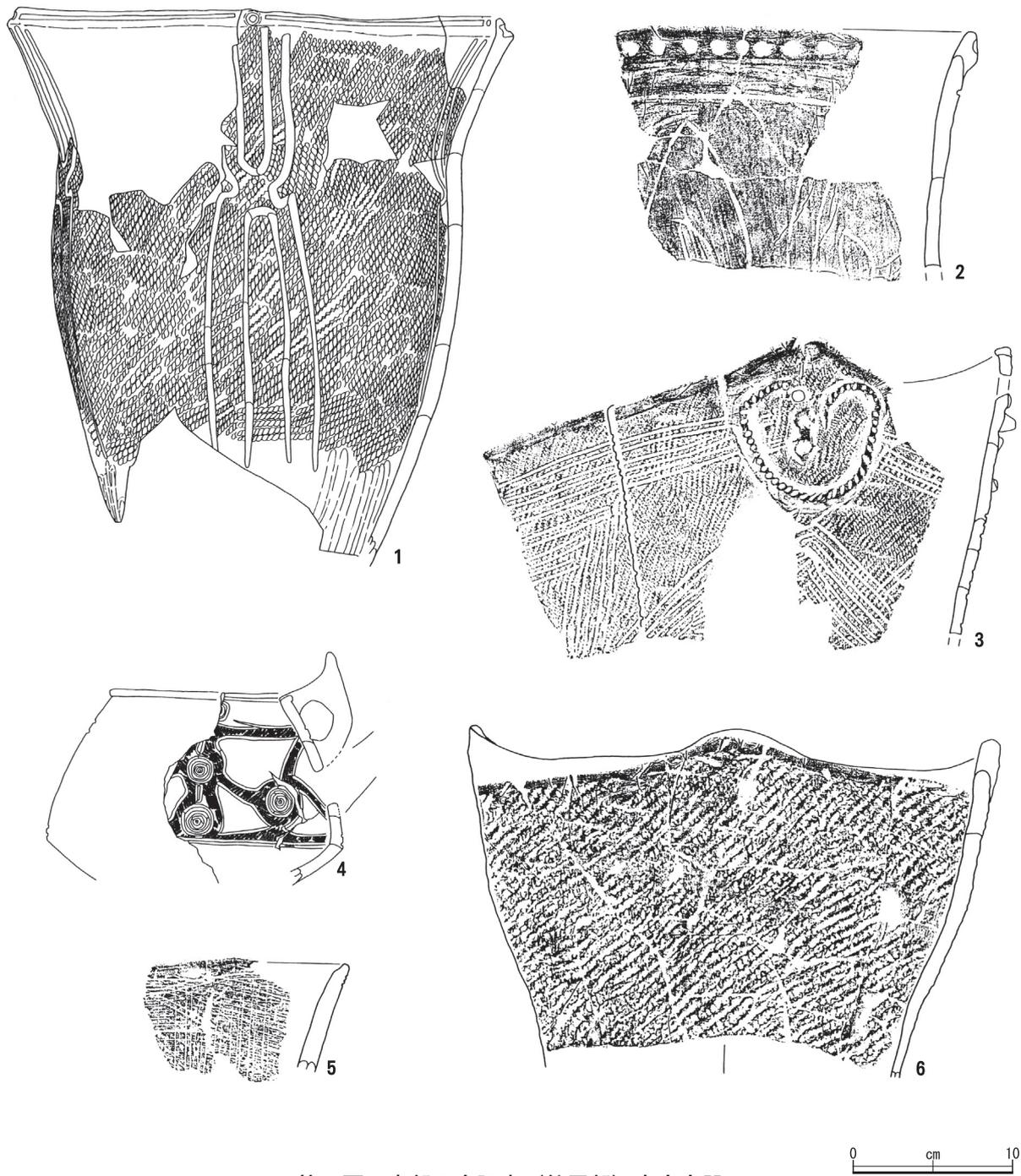
貝塚外周部(7次調査)出土土器 (第38図)

1は口縁部で最大径32cm、残存器高35cmを測る深鉢形土器で、胴部が膨らみ、口縁部が直線的に開く器形である。口唇部直下に沈線が巡り、U字状文が垂下する。地文は単節縄文LRで、底部付近は縦位のミガキが施される。2は口唇部直下に指頭を押捺が巡り、紡錘形に近い楕円文を描出し、列点を加える。3は口縁部で最大径25.5cmを測る直線的に開く器形の深鉢形土器である。波頂部には透孔と8の字状の貼付文を付し、刻目のある隆帯でハート形に囲う。単節縄文LRを地文とし、多条の平行沈線による三角文が横位に展開する。4は口径11.6cm、胴部で最大径18.5cmを測る注口土器である。口縁部から胴部上半は多条の円文が連結し、単節縄文LRが充填された三角文が横位に展開する。5は口唇部直下に押捺が巡り、楕描による条線が



1~14: 4住
15 : 6土

第37図 東部4次調査（外周部）出土土器

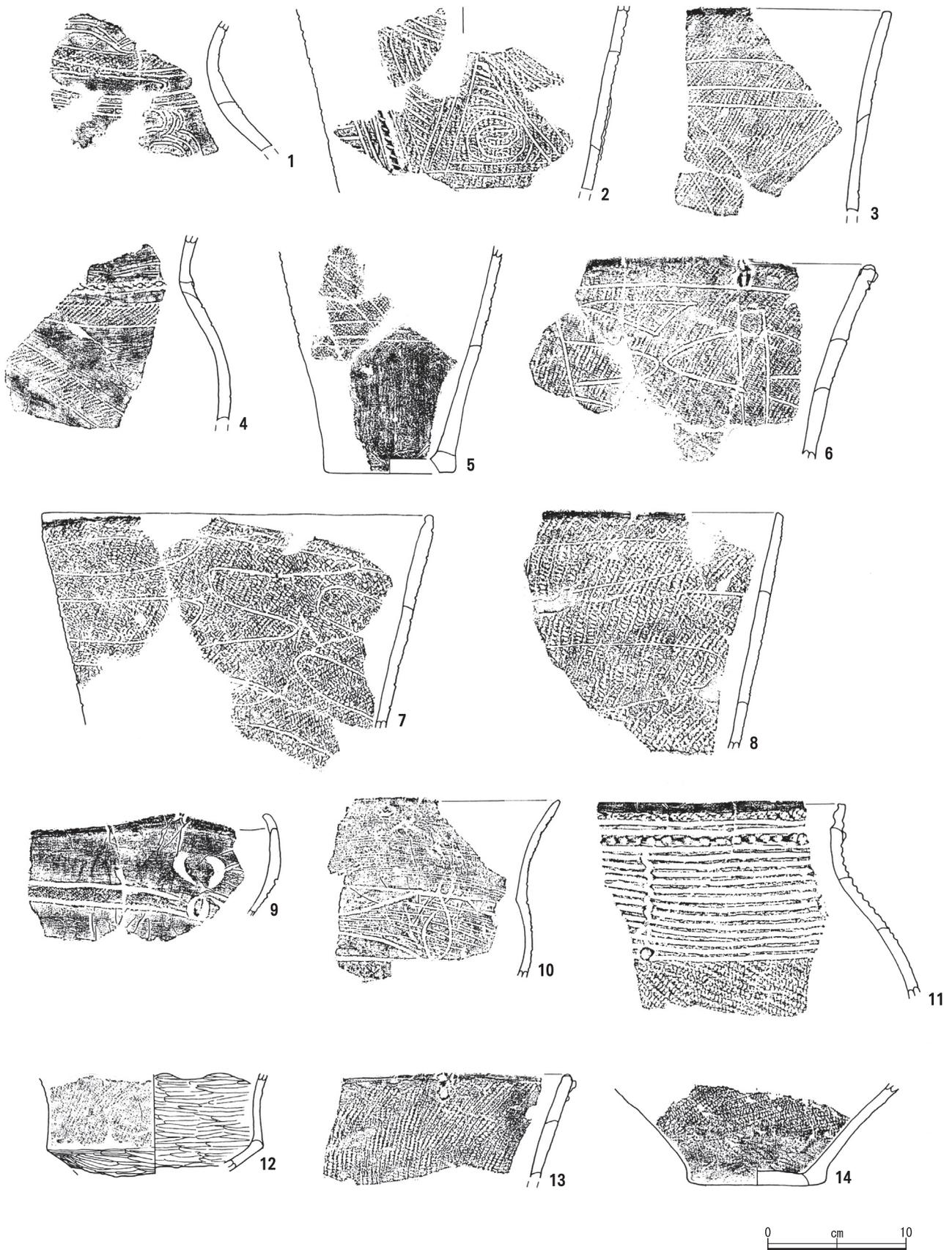


第38図 東部7次調査（外周部）出土土器

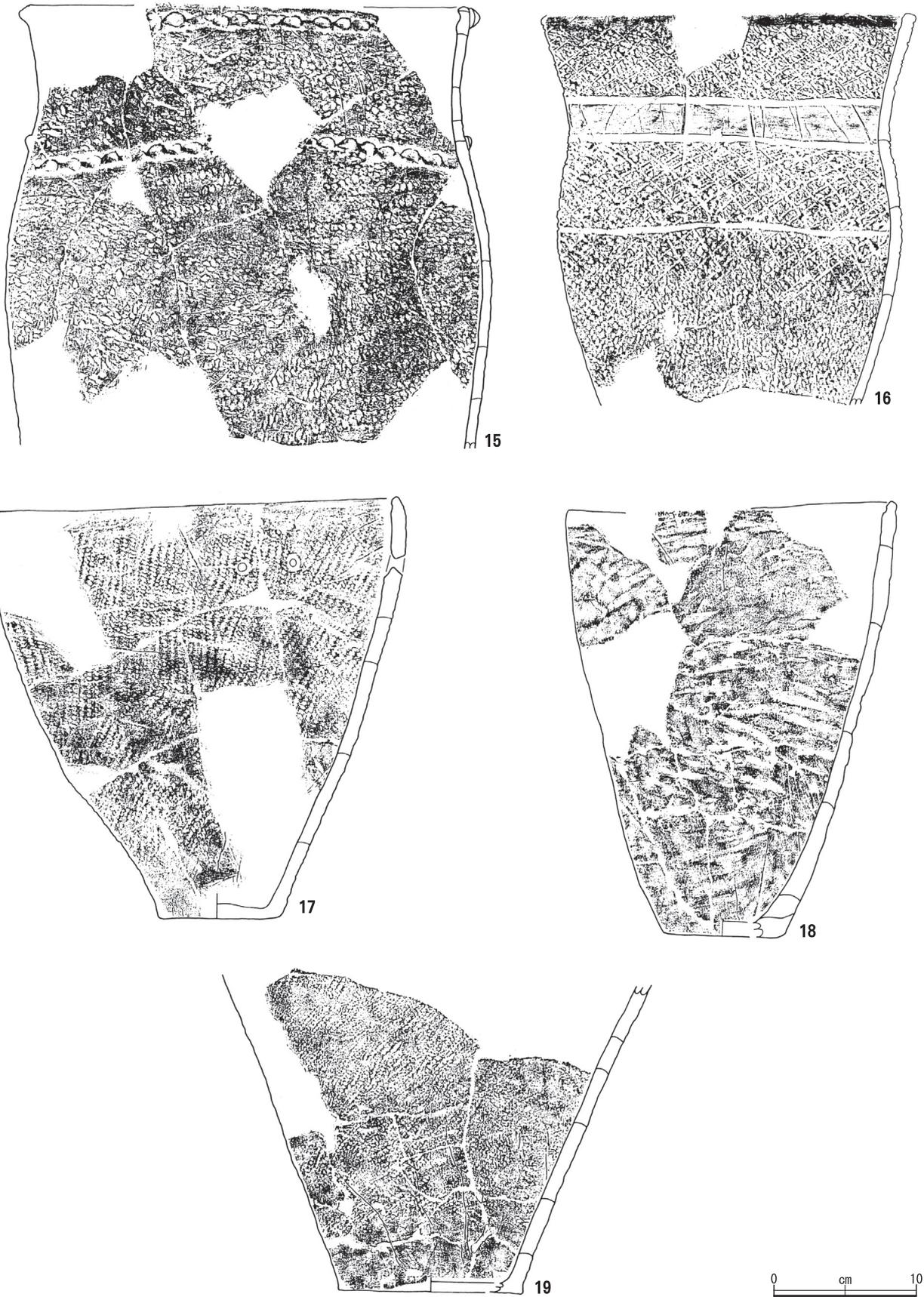
器面を覆う。6は口縁部で最大径33.5cmを測る深鉢型土器で、単節縄文LRが器面を覆う。1、5は堀之内1式、3、4は堀之内2式、6は堀之内式の範疇で捉えられる。2は称名寺式終末段階から堀之内1式にかけてのものであろう。

貝塚内周部（5、7次調査）出土土器（第39、40図）

1～8、12～14は5次調査出土土器である。1は頸部付近に弧線文、単節縄文LRや列点が充填される横帯文が巡り、胴部上半には8の字状に連結した円文が描出される。2～5は三角文が横位に展開するもので、2は単節縄文LRを地文とし、刻目のある隆帯や沈線による三角文の間に渦巻文が充填される。3は単節



第39図 東部5・7次調査（内周部）出土土器



第40図 東部7次調査（内周部）出土土器

L Rの地文縄文、4、5は充填縄文である。6は口唇部直下に8の字状貼付文を配し、垂下する長方形のモチーフを中心に相対する横長の弧線文を描出する。7、8は横長の蛇行沈線が垂下する。12は胴部が屈曲する器形で、上半は単節縄文L Rが器面を覆い、下半及び内面はミガキが顕著である。13、14は単節縄文L Rが器面を覆い、13は8の字状の貼付文を付す。15、16は単節縄文R Lを地文とし、15は口唇部直下と頸部に紐線文、16は頸部に無文帯、口縁部及び胴部上半に格子目上の条線帯が巡る。17、19は単節縄文L R、18は指頭によるナデが器面を覆う。口径は15が32cm、16が26.5cm、17が29cm、18が23cm、19が最大径30cmを測る。

9～11、15～19は7次調査出土土器である。9は単節縄文L Rが充填された横帯文が巡り、波頂下には弧線による区切文を配す。10は器面を細い条線が覆い、胴部上半には対弧文が横位に展開する。11は単節縄文R Lを地文とし、口縁部から頸部にかけて紐線文と多条の沈線が巡り、蛇行沈線が垂下する。

1は堀之内1式土器、2～5、7、8は堀之内2式土器、6は縦位区画がある点で堀之内1式とするが、7、8のように本貝塚で多くみられる横長の蛇行沈線が垂下する一群の前段階に位置付けられよう。9は加曾利B1式の精製土器、10、11、15、16は加曾利B式の粗製土器で、11は加曾利B1、10は加曾利B2式にあたろう。このように貝塚内周部では、5次調査で堀之内2式土器が主体となり、5次調査よりも中央部寄りの7次調査では加曾利B式土器が主体となる。

貝塚内周部（9次調査）出土土器（第41図）

貝塚内周部の中でも貝層が疎らで、住居跡群を検出した9次調査の出土土器である。1は口径28.5cmを測る堀之内1式の深鉢形土器で、単節縄文L Rを地文とし、口唇部直下には沈線が巡り、波頂部には刺突が加えられる。2は加曾利B2式の粗製土器で、口径23cmを測る。口縁部及び胴部上半に矢羽根状の条線帯が巡る。22は単節縄文L Rが器面を覆う。原体からは堀之内式土器の範疇で捉えられる。23は加曾利B式の粗製土器で、口径24cmを測り、単節縄文R Lが器面を覆う。24は加曾利B2式の精製土器で、沈線や刻目をもつ隆帯で区画された口縁部文様帯には弧線文が横位に展開し、単節縄文L Rが充填される。25は三叉文と単節縄文L Rが充填される弧線文が描出され、安行3a式土器に比定されよう。

（森山）

出土石器・その他の遺物（第42～45図）

馬蹄形貝塚の東部を対象とする4、7、9次の計3次にわたる調査で石器ならびに土製品は計115点が出土した。内訳は貝塚形成期以前にあたる旧石器時代に帰属するナイフ形石器等をはじめ、石鏃や磨製石斧、石錐、削器、植物採集具の打製石斧、植物加工具の石皿・凹石・磨石・敲石、漁具では土錘が、さらに装身具や土製品が3点を数える。また、剥片石器の素材となる石核は5点となるが、貝塚北部と同様に、礫核素材の石器、殊に植物加工具が主体となる特徴にある。その中で全容が判別する計72点を掲載した。

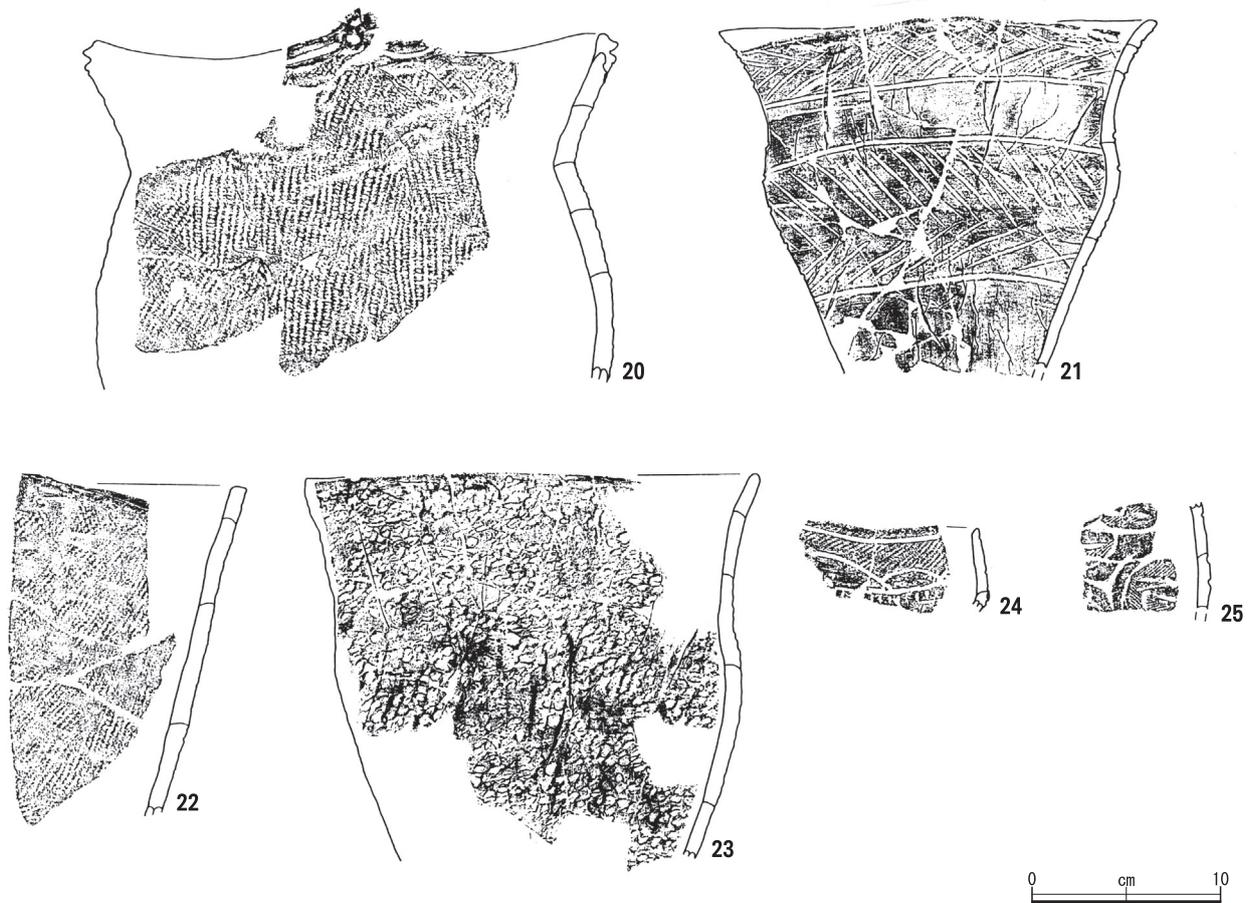
①旧石器時代の遺物（第42図1、2）

1は貝塚東端から出土した珪質岩製のナイフ形石器である。縦長の下位剥片を素材とし、右側縁上位から中位にかけての側縁にブランディング加工が巡り、左刃を呈す。素材剥片の形状を大きく改変し、打瘤部は除去されている。平面形態や調整加工より、ナイフ形石器後半期の砂川期に帰属する。2は該期の石器石材として多用されるガラス質黒色安山岩製の盤状剥片である。背面左側縁には礫面を残し、上端には打瘤を、腹面は扇状にヒンジ・フラクチャーを止める。

②石鏃（3）

調整剥離は先端部に限られ、基部は素材となる拇指状剥片の主要剥離面を残す石鏃未製品である。

③石錐（4～6）



第41図 東部9次調査（内周部）出土土器

いずれもチャート製の縦長剥片を素材とする未製品である。4は腹面に主要剥離面を残し、背面は周縁加工で先端部を鋭利に作出する。5は腹面に打瘤を残置し、背面は周縁加工を施すが、器厚を厚く残す。6は背面に礫面を残した周縁加工が、腹面は粗雑な鋸歯状の調整剥離が観察される。

④削器（7～9）

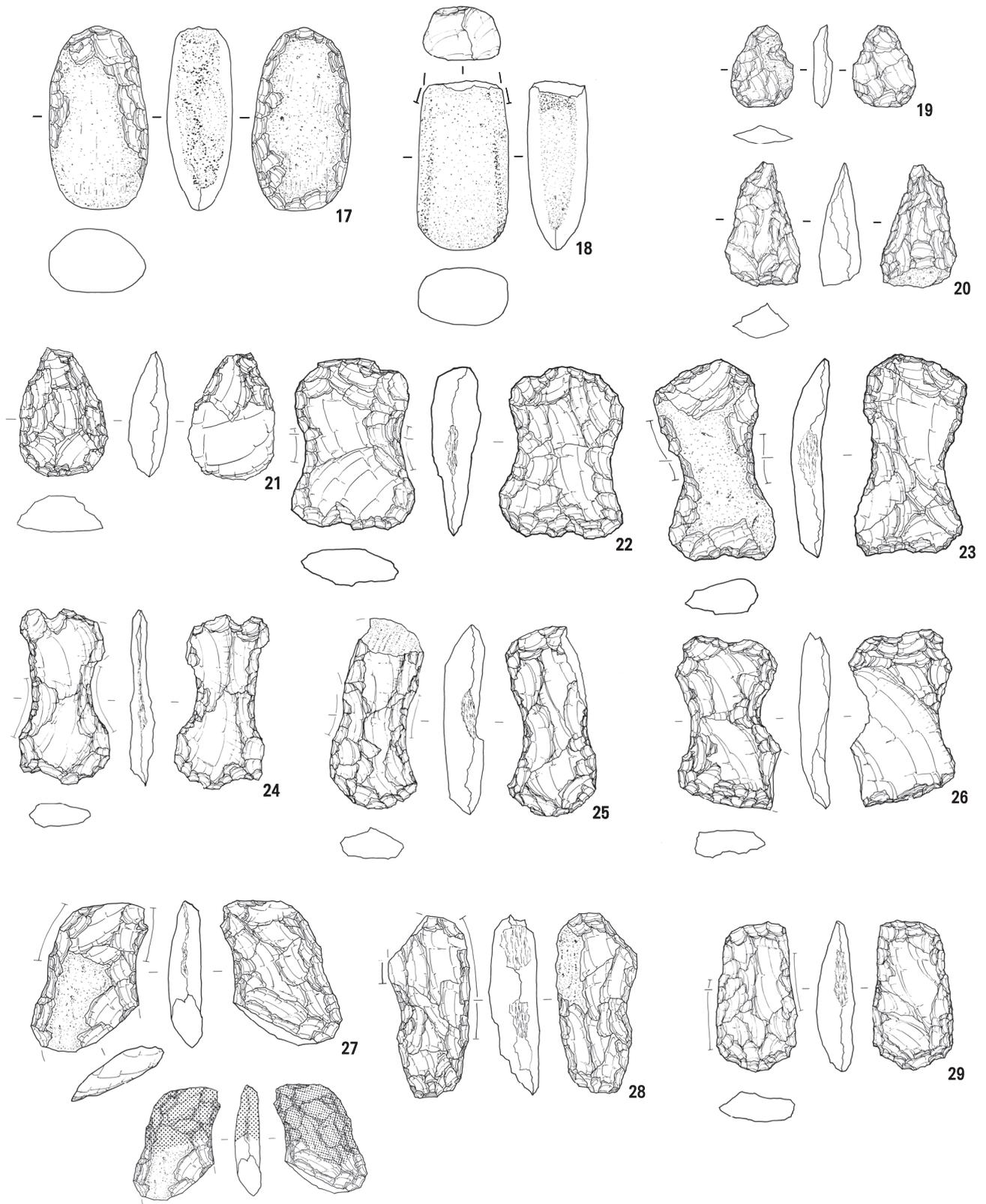
7は主要剥離面を残し、右側縁にノッチ状にスクレイパーエッジを施す。下端は折断されている。8は背面に礫面を止め、四辺に周縁加工を施すために糸巻状の平面形態を呈す。腹面には中央に素材剥片の主要剥離面を残す。9は扁平な硬砂岩の表皮剥片の三辺に調整剥離が加えられ、腹面右側縁にはリタッチが連続的に施される。

⑤石核（10～14）

10は節理面を頭部に残す黒耀石製の石核である。盤状を呈し、90°の打面転移を頻繁に繰り返したものである。11は小型角錐状の石核で、頭部には礫面を残し、打面転移が行われ、小型盤状剥片を剥離されている。12は礫面を広く止める円礫素材である。チャート石材の節理も混じり、打面調整は乏しい。13も節理を含む素材で、角柱状を呈し、総じて下端からの加撃によって縦長板状剥片を剥離する。14は頻繁な90°打面転移によって盤状剥片を剥離するもので、打面調整は残されておらず、廃棄に至ったものと判断される。11共に4号住居跡からの出土である。なお、本地点から出土した剥片素材の石器群に加え、全ての剥片、細片の石材種を集計すると、チャート石材への依存率は89.3%と貝塚各地区の中でも最も高い割合を示し、チャート石核の出土と併せて同石材の依存の高さが窺える。



第42図 東部出土石器 (1)、その他の出土遺物 (1)



第43図 東部出土石器 (2)

⑥磨製石斧（第43図17、18）

貝塚東部からは3点の磨製石斧が出土し、うち器形が判明する2点を掲載する。17は楕円礫を素材とし、背面は基部から側縁下位まで、腹面は全周する周縁加工が施される短冊形を呈す定角式である。刃部は研磨整形によって鋭利に仕上げられ、側縁には柄部の装着が起因して剥離面が敲打様となる。18は基部を欠く定角式で、背腹面の礫面、特に刃部付近は顕著な研磨が広がる。残存する側縁上位にはスレが観察される。

⑦打製石斧（19～29）

本地点からは総数13点の打製石斧が出土し、器形が判明する11点を掲載する。出土量は他地域を凌駕し、形態的にもバラエティに富む特徴にあり、またさらに出土地点は貝塚外縁側にあたる堀之内1式期が主体となる地域に相当し、居住空間が時期と共に内側へと移行する貝塚後半期には数量も減じる傾向にある。なお、時期の推移に伴う器形変化は捉えられず、貝塚形成期間をとおして撥形、分銅形、短冊形の三形態が共存する。19、20は小型撥形を呈し、19は背面に、20は腹面刃部周辺に礫面を止める。共に周縁加工を主とする。21も平面形態は撥形を呈すが、腹面は素材剥片の主要剥離面を残す、礫石斧にあたる。22～26は分銅形を呈すもので、両側縁の抉りにはスレが顕著に観察される。22は背面の刃部付近を広く剥離した後、刃部再生剥離が施され、基部や体部は従前の形状を保持し、器体の側面観は刃部付近で括れが確認できる。23は背面に礫面を、24は背腹面に広く主要剥離面を止める周縁調整である。25～27は基部や刃部の一端を欠く。いずれも周縁調整が主体である。27は刃部を欠く撥形であろうか。背面に礫面を止め、基部付近にはスレが、体部下半は赤化しており、柄部装着のままの焼損が推察される。28、29は短冊形を呈し、28は腹面に礫面を止め、背面側の側面観からは刃部破損後の再生剥離が窺える。29は主要剥離面を広く残し、側縁部のスレが顕著に観察される。

⑧石皿・凹石・磨石・敲石（第44図30～第45図62）

植物を対象に加工する機能にある礫核石器群を一括する。大型石器は貝塚北部同様に乏しく、多機能を複合した石器が主体となった。30～38は2類にあたり、棒状礫や楕円礫等を素材に、石皿や凹石、そして磨石などの複数機能をもつ。30は背面、側面に複数の凹部が縦位に立ち並び、端部に研磨や敲打が観察される。31も棒状礫で凹部は緩やかではあるが、端部に研磨と敲打が、32、33は楕円礫を素材に背面、側面、腹面と、各面で使用痕跡が展開する。34は偏平の片岩で残存部中央に凹部が、また、35にも狭い範囲で凹部が連続的に作出される。36、37は緩い凹部に加え、側面は手持ちによる敲打と縦位の研磨が観察される。38はチャートの角礫を素材とし、縁辺の敲打が主たる機能と窺える。3類では39、40が比較的大型の部類となる偏平楕円礫で、縁辺に研磨と敲打が広がる。また、48～55はやや小振りの楕円礫や円礫を含み、特に側縁を主に研磨や敲打が観察される。小型円礫の54には器面に縦位、斜位の線状痕が施されている。4類の41～47は角礫や棒状礫の素材で、両端部には顕著な敲打が、43は棒状礫の剥離面端部を主要面とし、44の楕円礫では末端の折断面に赤色のベンガラが鮮明に残存する。ただし、剥離面への研磨や敲打は側面に比べて乏しく折断面の剥離方向が観察できることから、ベンガラの粉碎が主たる用途であったと推察される。45～47は棒状礫の端部に研磨と敲打が集中し、47は剥離面にも研磨がおよんでいる。5類は56～59は器厚が薄い偏平礫の素材で、いずれも側面に使用痕が認められる。58は4次報告に際して形態から石製品と捉えたが、各地点で研磨や敲打が認められる偏平礫の出土例が蓄積され、普遍的な植物加工具と改めて捉えた。さらに本地域では6類として小型棒状礫の素材が認められる。60～62はいずれも端部に研磨や敲打が見受けられ、61、62では剥離や欠損が生じている。各形態を呈す磨石や敲石の出土地点は貝塚が分布する東部外縁を中心とするが、貝層が途切れる内側には偏平礫や棒状礫の素材が増加する傾向にあり、貝層範囲と貝層が疎らな分布にある内

側での植物加工具の出土比率は7：3となる。

⑨砥石（63）

偏平礫の断片を素材とし、背腹面全体にわたって素材形状が著しく変化する研磨がおよんでいる。

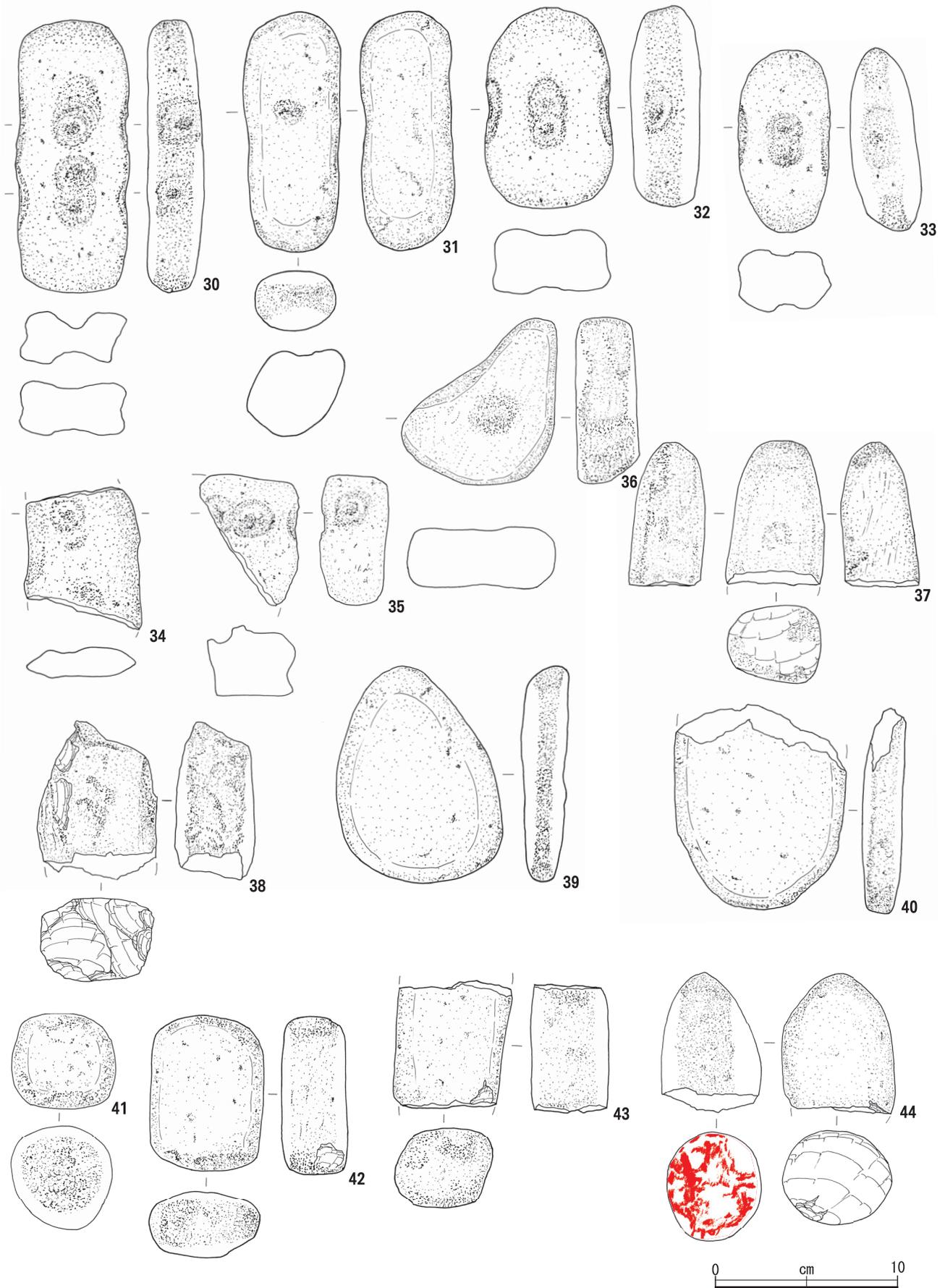
⑩土製品・土錘・土製円盤（64～72）

64は形状不明の土製品である。器面には緩い沈線で入組み文が描出され、内面側は中空を呈すものと推測される。土偶、あるいは動物等を表徴する土製品であろうか。65～70は土器片錘で、縁辺は敲打と研磨から整形される。65～67は長辺片側に、約半分を欠損する68、69は敲打による深い抉りが作出される。71、72は縁辺が研磨された土製円盤で、円形、もしくは楕円形に整形されている。これら土製品はいずれも貝層が広がる東部外縁からの出土である。

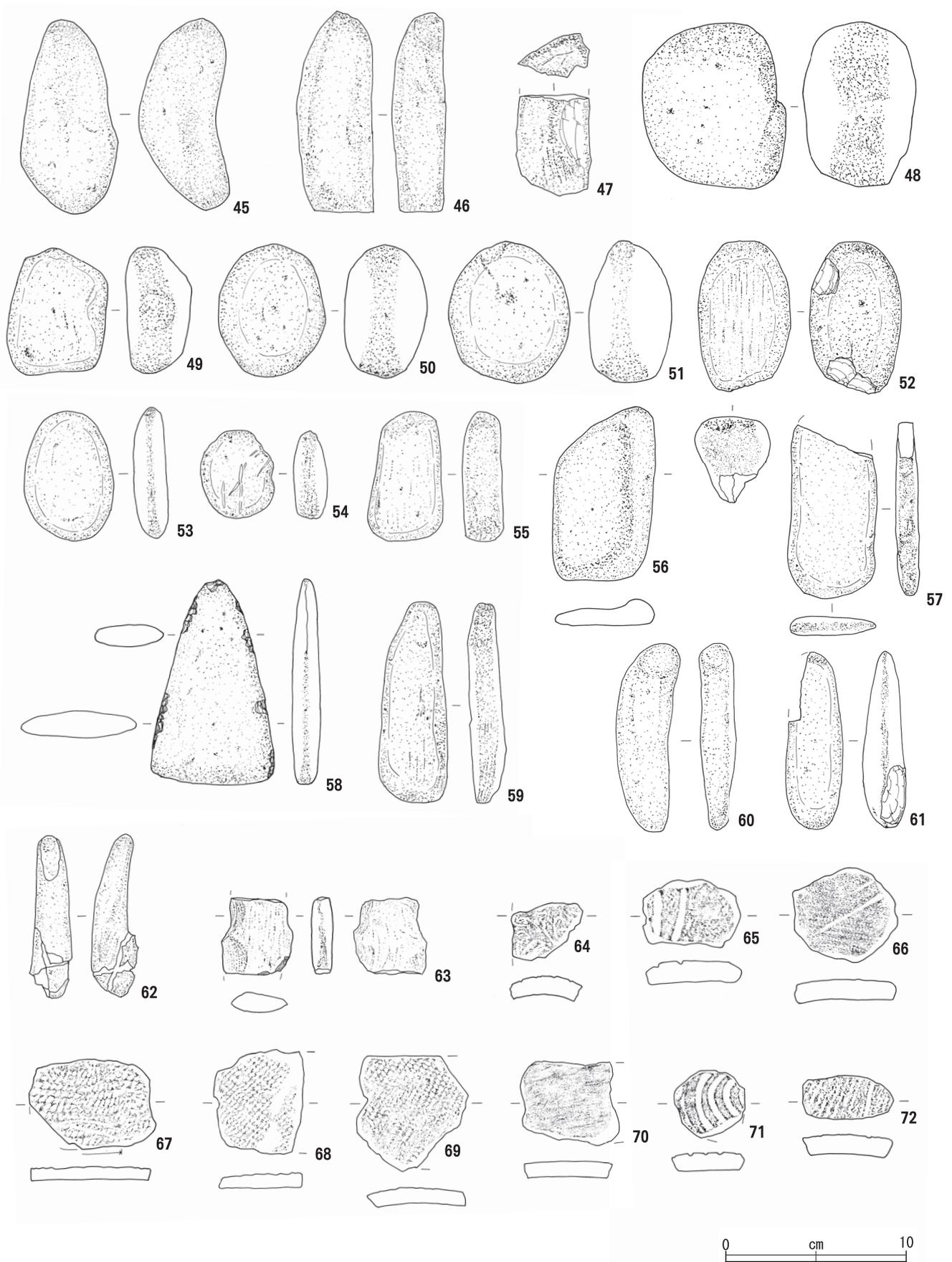
⑪その他の遺物（第42図15、16）

15は小型撥形の器形が推測されるもので、器面全体にわたって研磨整形が施されている。穿孔等の装飾的要素は残存部には見受けられないが、蛇紋岩という特化した石材から垂飾と捉えられる。貝層が広がる東部外縁からの出土である。16はサトウガイ製の貝輪である。約1/4程度の残存であるが、殻表裏面、さらに内外縁共に顕著な研磨整形からは完成品にあたる。

（中野）



第44図 東部出土石器 (3)



第45図 東部出土石器 (4)、その他の出土遺物 (2)

第3表(1) 貝塚東部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 回数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
42-1	4	東部	A-26	ナイフ形石器	(36)	12	4	2	—	珪質岩	縦長剥片、一側縁調整加工、左刃(砂川期)。
2	7	北東1	4242-2388	剥片	46	20	14	12	—	ガラス質黒色安山岩	板状横長剥片、礫面・打面・打痕残存。
3	4	北東1	B-27	石鏃	22	17	6	2.0	—	黒耀石	背腹面に主要剥離面、先端部調整剥離、基部未加工の未製品。
4	4	北東1	4号住居跡	石錐	31	13	5	2	縦型	チャート	腹面主要剥離面、背面：基部及び先端部に調整剥離。
5	7	北東2	4232-2426	石錐	36	15	10	3.6	縦型	チャート	背面：周縁調整剥離、腹面：打痕残存、先端部の調整剥離が乏しく未製品。
6	4	北東1	B-7	石錐	39	26	7	9	縦型	チャート	背面礫面残存、周縁調整加工、未製品か。
7	4	北東1	C-15	削器	25	15	3	2	—	チャート	側縁にノッチ状の刃部作出、両端は折断。
8	7	北東2	4202-2434	削器	27	29	5	7.9	板状	凝灰岩	表皮剥片、周縁加工により側縁に抉れ。
9	5	北東2	4232-2418	削器	49	32	9	17.2	板状	硬砂岩	表皮剥片、側縁調整加工により刃部作出。
10	4	北東1	A-15	石核	33	34	23	21	盤状	黒耀石	頭部は素材節理面、90°打面調整、板状剥片の剥離作業。
11	4	北東1	4号住居跡	石核	20	27	13	7	角錐状	チャート	頭部は礫面とし、90°打面調整。
12	7	北東2	4232-2428	石核	36	51	32	77.3	半円状	チャート	円礫端部を素材、打面調整、折断面を頭部に打面転移。礫面残存。
13	5	北東1	4202-2390	石核	42	25	23	35.1	角柱状	チャート	礫面残存、節理面での剥離もみられるが、総じて下端礫面側からの縦長板状剥片の剥離作業。
14	4	北東1	4号住居跡	石核	35	37	26	26	角柱状	チャート	頭部打面調整、90°打面転移、板状剥片の剥離作業。
15	4	北東1	B-15	垂飾	(22)	(19)	8	5	撥形	蛇紋岩	器面研磨整形、体部下半から末端欠損。
16	5	北東2	4232-2418	貝輪	(70)	10	9	6.5	—	サトウガイ	約1/4残存、殻表裏ともに研磨整形が顕著。
43-17	7	北東2	4232-2430	磨製石斧	99	52	35	270.4	短冊形	凝灰岩	周縁は敲打整形、礫面、特に刃縁部付近に研磨が顕著。
18	4	北東1	4号住居跡	磨製石斧	(90)	48	29	236.2	定角式	凝灰岩	基部欠損、研磨整形。
19	4	北東1	4号住居跡	打製石斧	43	33	10	1.4	撥形	ホルンフェルス	背面：礫面残存、周縁加工。
20	4	北東1	B-30	打製石斧	66	40	22	50.2	撥形	ホルンフェルス	腹面：礫面残存、刃部付近に器厚を残し、製作途上か。
21	5	北東1	4202-2398	打製石斧	68	46	20	66.2	撥形	ホルンフェルス	礫石斧、腹面は主要剥離面を残す。
22	5	北東2	4232-2414	打製石斧	92	66	26	124.5	分銅形	ホルンフェルス	刃部欠損により刃部再生剥離、体部中央に括れ部にスレ。
23	5	北東1	4232-2414	打製石斧	106	57	17	125.7	分銅形	黒色頁岩	背面：礫面、腹面：主要剥離面、体部中央の括れ部にスレ。
24	4	北東1	4号住居跡	打製石斧	93	(47)	12	51.0	分銅形	ホルンフェルス	基部一部欠損、背腹面：主要剥離面、抉れ部にスレ。
25	4	北東1	C-11	打製石斧	102	(46)	21	109.3	分銅形	片岩	背面：礫面残存、基部一部欠損、抉れ部にスレ。
26	4	北東1	C-7	打製石斧	90	(53)	16	85.6	分銅形	ホルンフェルス	刃部一部欠損後、腹面に調整剥離を切る大型剥離により刃部再生剥離。
27	9	北東2	4252-2402	打製石斧	(77)	(56)	15	100.9	撥形	ホルンフェルス	刃部欠損、背面礫面、抉り部にスレ顕著。基部側にスレ、体部下半に被熱による赤化があり、着柄の状態での焼損か。
28	7	北東2	4232-2430	打製石斧	97	(42)	26	102.8	短冊形	緑泥片岩	基部端部欠損、腹面礫面、刃部破損後に器体再生、側縁にスレ。
29	4	北東1	4号住居跡	打製石斧	81	42	16	69.5	短冊形	ホルンフェルス	背腹面：主要剥離面、側縁：スレ。
44-30	4	北東1	C-16	凹石・磨石・敲石	151	63	32	368.8	棒状礫	多孔質安山岩	背腹面・側面に複数の凹部、末端は研磨・敲打。
31	5	北東2	4232-2414	磨石・敲石	133	53	50	623.2	棒状礫	石英斑岩	端部研磨、敲打、背面に浅い凹部を作出。
32	4	北東1	A-40	凹石・磨石	110	71	38	516.5	楕円礫	石英斑岩	背腹面・側面に凹部、末端は研磨。
33	4	北東1	4号住居跡	凹石	100	49	36	227.7	楕円礫	多孔質安山岩	背腹面・側面に凹部、側面に研磨・敲打。
34	4	北東1	A-9	凹石・磨石	(74)	(60)	16	99.8	棒状礫	片岩	上下端欠損、背面に凹部、被熱。
35	7	北東2	4232-2424	石皿・凹石	(73)	(52)	40	158.5	角礫	多孔質安山岩	断片、背面：凹部2ヵ所、側縁：凹部1ヵ所。
36	7	北東1	4222-2394	台石・凹石	(91)	(83)	34	373.0	角礫	泥岩	残存1/2、背腹面に緩い凹部、右側縁は敲打。

第3表(2) 貝塚東部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 次数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
37	7	北東1	4232-2388	磨石・敲石	(80)	(54)	43	321.4	楕円礫	凝灰岩	残存1/2、側面・末端部に研磨・敲打、下端折断面に敲打。
38	7	北東2	4232-2428	磨石・敲石	(85)	65	47	382.3	角礫	チャート	残存1/4、側縁研磨・敲打、下端は敲打による折断。
39	5	北東1	4222-2410	磨石・敲石	122	90	27	382.6	扁平楕円礫	凝灰岩	側縁研磨、敲打。
40	9	北東2	4252-2408	磨石・敲石	(116)	95	22	366.8	扁平楕円礫	石英斑岩	残存2/3、側縁研磨、局部敲打、被熱。
41	5	北東2	4232-2426	磨石・敲石	53	57	46	229.1	角礫	石英斑岩	全面研磨、下端面敲打。
42	5	北東2	4232-2422	磨石・敲石	87	63	38	392.3	楕円礫	石英斑岩	両端・側面研磨、敲打。
43	5	北東1	4202-2394	磨石	(71)	(63)	44	363.9	棒状礫	石英斑岩	両端欠損、折断面にも敲打がおよぶ。側面研磨、スス付着。
44	7	北東1	4236-2390	磨石・敲石	(76)	(62)	54	416.1	楕円礫	礫岩	残存1/2、側縁研磨・敲打、末端折断面にベンガラが付着。
45-45	7	北東1	4242-2388	磨石・敲石	109	55	44	312.0	楕円礫	石英斑岩	側縁研磨、両端面敲打。
46	9	北東2	4258-2414	磨石・敲石	113	41	30	228.5	棒状礫	砂岩	側面研磨、両端敲打。
47	5	北東1	4182-2394	磨石・敲石	(57)	(42)	(24)	49.4	棒状礫	泥岩	断片、剥離面に研磨・敲打。
48	4	北東1	C-37	磨石・敲石	78	93	62	640.5	角礫	ホルンフェルス	側縁に研磨、敲打。
49	4	北東1	4号住居跡	磨石・敲石	69	50	36	217.1	角礫	粘板岩	側縁に研磨、敲打。
50	4	北東1	4号住居跡	磨石・敲石	74	60	46	301.5	楕円礫	石英斑岩	側縁に研磨、敲打。
51	4	北東1	B-26	磨石・敲石	79	67	46	349.3	円礫	石英斑岩	側縁に研磨、敲打。
52	4	北東1	A-29	磨石・敲石	83	52	48	305.6	楕円礫	安山岩	側縁に研磨、敲打。
53	9	北東2	4252-2406	磨石	74	49	18	90.2	扁平楕円礫	安山岩	側縁に研磨。
54	5	北東1	4222-2418	磨石・敲石	50	41	19	48.2	円礫	凝灰岩	側縁研磨、線状痕が器体中央から側縁に伸びる。
55	7	北東2	4232-2424	磨石・敲石	74	42	22	87.6	小型棒状礫	砂岩	側縁研磨、両端部敲打、被熱。
56	4	北東1	試掘	磨石	94	56	14	113.3	扁平楕円礫	砂岩	背面に研磨、被熱。
57	5	北東1	4222-2414	磨石	(95)	(48)	13	82.0	扁平楕円礫	砂岩	残存2/3、側縁研磨、被熱。
58	4	北東1	6号土坑	磨石	114	68	16	117.3	扁平楕円礫	石英斑岩	器面、末端に研磨。被熱で器面赤化。
59	5	北東1	4222-2406	磨石・敲石	108	44	20	103.9	扁平棒状礫	砂岩	側縁研磨、敲打。
60	7	北東2	4232-2426	磨石・敲石	106	29	20	86.8	小型棒状礫	凝灰岩	側縁研磨、末端部敲打。
61	7	北東2	4232-2434	磨石・敲石	102	31	23	83.9	小型棒状礫	チャート	側縁研磨、両端部敲打、被熱、端部のみスス付着。
62	7	北東2	4232-2426	磨石・敲石	92	26	22	61.5	小型棒状礫	凝灰岩	棒状礫、側縁研磨、末端敲打により分割・接合。
63	7	北東2	4232-2424	砥石	42	40	11	21.4	板状	砂岩	扁平礫の断片を素材に、素材形状が変化する側縁からの研磨。
64	4	北東1	包含層	土製品	(29)	(39)	11	—	—	土製	土偶、もしくは動物を表徴する土製品か。細沈線による入組み文施文。中空か。
65	4	北東1	4号住居跡	土錘	33	53	11	—	楕円形	土製	研磨整形、短辺片側に挟り。
66	4	北東1	4号住居跡	土錘	52	55	11	—	不整形	土製	敲打整形、短辺片側に挟り。
67	4	北東1	包含層	土錘	49	(67)	7	—	隅丸長方形	土製	研磨整形、短辺片側に浅い挟り。
68	4	北東1	包含層	土錘	57	(50)	7	—	楕円形	土製	残存1/2、敲打整形、短辺に挟り。
69	4	北東1	4号住居跡	土錘	(64)	(57)	9	—	不整形	土製	敲打により長辺片側に挟り、口縁部素材。
70	4	北東1	4号住居跡	土錘	(50)	(46)	9	—	隅丸長方形	土製	敲打整形、短辺に浅い挟り。
71	4	北東1	4号住居跡	土製円盤	(37)	(39)	9	—	円形	土製	研磨整形。
72	4	北東1	包含層	土製円盤	24	49	10	—	楕円形	土製	研磨整形。

第4節 貝塚南部の調査

(1) 調査の概要 (第46図)

貝塚南部は貝層が最も広範囲に分布する地点であり、黎明期の調査(1、2次)である。1次調査の位置は不明ではあるが、2次調査の東方とされ、円形と方形の住居跡4軒を検出した。2次調査では貝層を横断するように幅2m、長さ38mのAトレンチを、それと平行するBトレンチ(11m長)、Cトレンチ(7m長)、さらに南側にDトレンチ(9m長)を設定し、遺構の所在を確認した。その結果、Aトレンチで堀之内1式期の1号住居跡、2号墓、Bトレンチで1号墓、Cトレンチで1～3号土坑を検出した。6次調査ではボーリング調査で得られた貝層範囲を検証するため、貝塚南部のほぼ全域で試掘調査を行い、2次調査の1号住居跡の位置を再確認した。

10次調査は2次調査のBトレンチ付近を対象に貝層確認調査を行い、貝殻が最も密に堆積する地点に南北14m、幅1mの中央トレンチと直交する西トレンチ(1×5.5m)を設定して、貝層を掘り下げ、2軒の住居跡(7、8住)を検出した。11次調査はこの住居跡の全容と貝層との関係を明らかにするため、中央トレンチを中軸に東西14m、南北12mの範囲を発掘調査した。調査区は東西に二分割、南北に三分割し、中央トレンチの西側を北からA区、B区、C区、東側をD区、E区、F区と呼称した。表土掘削は人力で行い、層位的に遺構確認を繰り返し、貝層及び遺物包含層を掘り下げた。

(2) 貝層

調査区全域に広がり、暗褐色土を基調とし少量の破碎貝を含む表土貝層が層厚20～60cmで堆積する。表土貝層下では、暗褐色土、黒褐色土、褐色土を基調とする貝層がモザイク状に堆積する様相が確認されたため、これを第1面とし(第47図)、調査区全体を層位的に掘り下げ、第1面から約5cmの深さの第2面(第48図)、さらに5～10cm掘り下げた第3面(第49図)の各面で、貝層の分布と貝層中に構築された土坑や焼土跡を確認した。最終的にソフトローム上面(第4面)まで掘り下げ、住居跡群を検出した(第50図)。

第1面(第47図)

調査区の中央のB区東側からE区西側、F区北側にかけての東西700cm、南北670cmの範囲に黒褐色土を基調とする貝層(第II、IV層群)が広がり、その北側のA、D区には暗褐色土を基調とする貝層(第VII、VIII、IX、XII層群)、東側のE区には暗褐色土を基調とする貝層(第VII、XIV層群)、褐色土を基調とする貝層(第XVI層群)、南側のC、F区には黒褐色土を基調とする貝層(第III層群)、暗褐色土を基調とする貝層(第VII、XIV層群)、褐色土を基調とする貝層(第XV、XVI層群)、西側のB区には暗褐色土を基調とする貝層(第VII層群、5号住居跡覆土)、褐色土を基調とした貝層(9号住居跡覆土)が堆積する。また、B区では3号焼土跡、C区では4、11号焼土跡、D区では8号焼土跡に堆積した灰、焼土の混合層を検出し、それら焼土跡との関連性が窺われる3号灰溜りや灰塊(A、C、D、E区)を確認した。

第2面(第48図)

貝層の分布状況に変化はないが、A区では北東隅の第VIII層群中で1号灰溜り、B区では北西隅の第XVI層群中で1号焼土跡、5号住居跡覆土中で2号焼土跡、C区では第XV層群中で5号焼土跡、第XVI層群中で2号灰溜り、D区北部で7号焼土跡、南部で9号焼土跡、F区西部の第VII層群中で灰塊を新たに検出した。また、第1面で確認した3、4号焼土跡は灰と焼土の境が明瞭となり、8号焼土跡は炭化物が散布する火床面と掘り方を検出した。E区第XIV層群では土器群が集中して出土した(第65図53～59)。

第3面(第49図)

黒褐色土、暗褐色土の貝層は範囲を縮小し、その分布範囲はソフトローム面で確認した住居跡のプランに近似する。C区では貝層は北東隅の第IV層群に限られ、大半が褐色土の遺物包含層となる。A区では第IX層群中で1号灰溜りの第2、3段階、C区では北東隅の第IV層群中で6号焼土跡、第XV層群中で灰塊、D区南西隅で4号灰溜りの第1面、E区南西隅の第II、IV層群中で灰層、灰塊、F区北西隅の第XVI層群中で灰塊を新たに検出した。1～5、7、9号焼土跡では火床面を検出した。

第4面（第50図）

ソフトローム上面で住居跡7軒、土坑17基を検出した。また、6号住居跡の床面上で1号灰溜りの第4段階を検出した。2次調査と異なり、住居跡は重複が著しく、ソフトローム上面から掘り込まれている5号住居跡を除き、壁面を確認し得たのは7、9号住居跡の一部に止まる。

貝層の形成（第51、52図）

貝層の堆積は平面分布のみならず、調査区断面の観察からも、その形成過程は複雑であった。11次調査における貝塚形成期の生活面は、遺物が希少な第XVI層群の下層の褐色土、いわゆるローム漸移層の上層と考えられる。調査区南のC、F区の生活面廃棄の層を除き、ローム漸移層を掘り込む住居跡や土坑が埋積する過程で、墓、焼土跡、灰溜りが構築される。

貝層と遺構の新旧関係は、最下層の8～15、17、19、20号の土坑群が形成され、続いて、D、E区で10号住居跡が構築、廃絶され、遺物を伴う第XVI層群の上層が埋積する。そこへ、調査区中央の7号住居跡が構築、廃絶されるが、埋積が完了しない段階で9号住居跡が構築され、堆積状況の確認に止まり住居跡とは認定できなかった第XII層群によって切られることが確認された。9号住居跡では、土屋根が焼け落ちたと推定される床面直上の赤褐色土層の上層は、褐色土を基調とする貝層で、その埋積の過程で3号焼土跡が構築されている。

9号住居跡の埋積後は、A、D区では6号住居跡、B区西では5号住居跡が構築される。これ以降の住居跡の埋積は複雑化し、5号住居跡では床面直上及び壁際には褐色土が、その上には暗褐色土の第VI層群が埋積する。第VI層群の範囲は5号住居跡のプランを越えて広範囲にある。6号住居跡は西側の床面直上には褐色土、南側の床面直上には暗褐色土と複雑に埋積し、第VIII層群は6号住居跡の東側壁面を切って広範囲に分布する。加えて、第VI層群中には2号焼土跡が構築され、第VIII層群中には1号灰溜りが4面にわたって形成される。したがって、第VI、VIII層群は住居跡の覆土に位置付けるのではなく生活面廃棄の層と認識され、5、6号住居跡の埋積過程で生じた窪地に厚く溜まったものと判断できる。

第VIII層群はその後、7号住居跡覆土、第XII層群とともに第VII層群に切られ、さらに第VII層群を切り、B、C、E、Fに跨がる8号住居跡が構築される。8号住居跡も床面直上や壁際の覆土は褐色土であるが、その上層には黒褐色土を基調とする第Vb、Va、IV、III、II層群が堆積する。

出土遺物は大半が堀之内1式土器であるが、第III層群の下層の、8号住居跡を切る第XV層群からは堀之内2式土器が出土した。

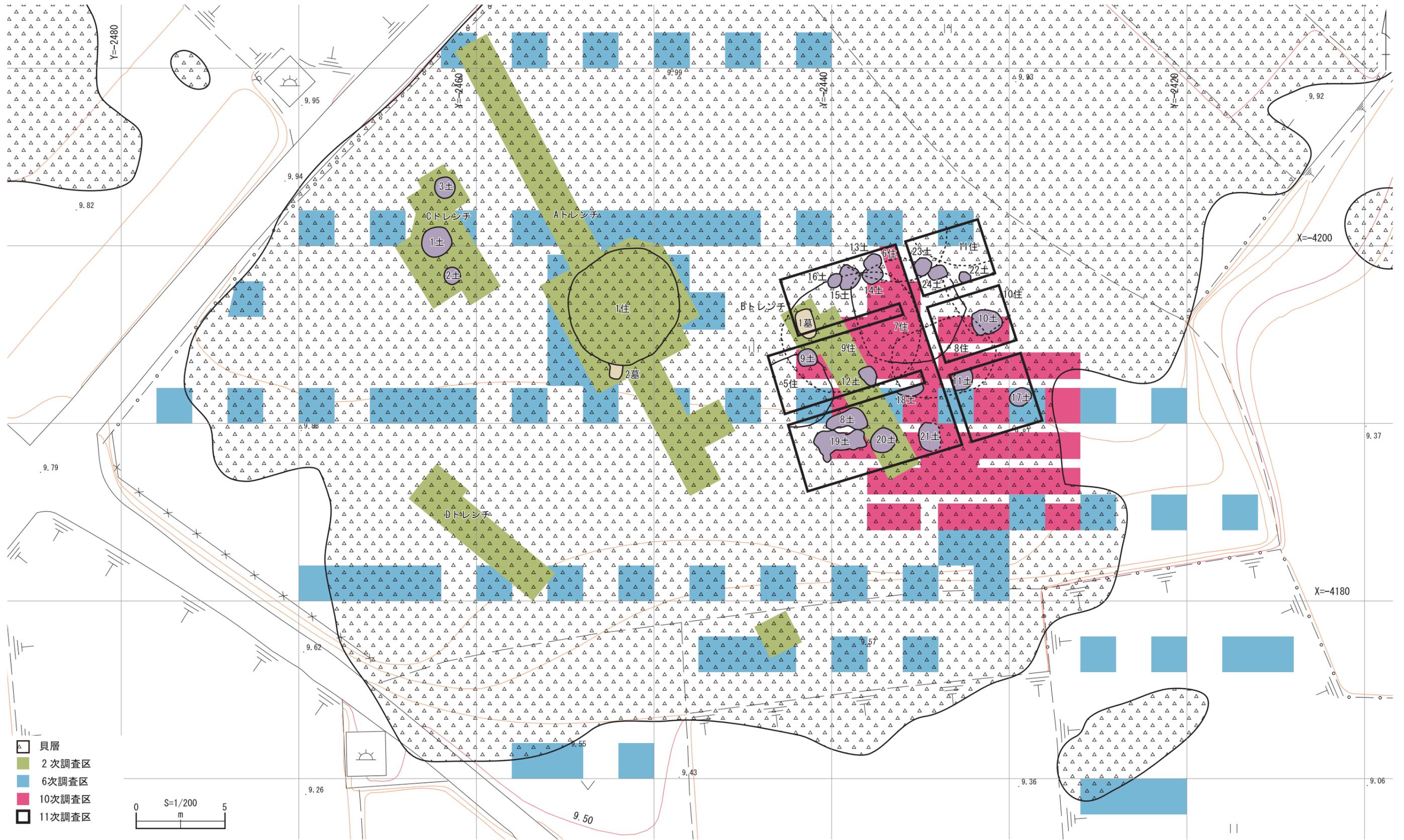
（森山）

（3）焼土跡

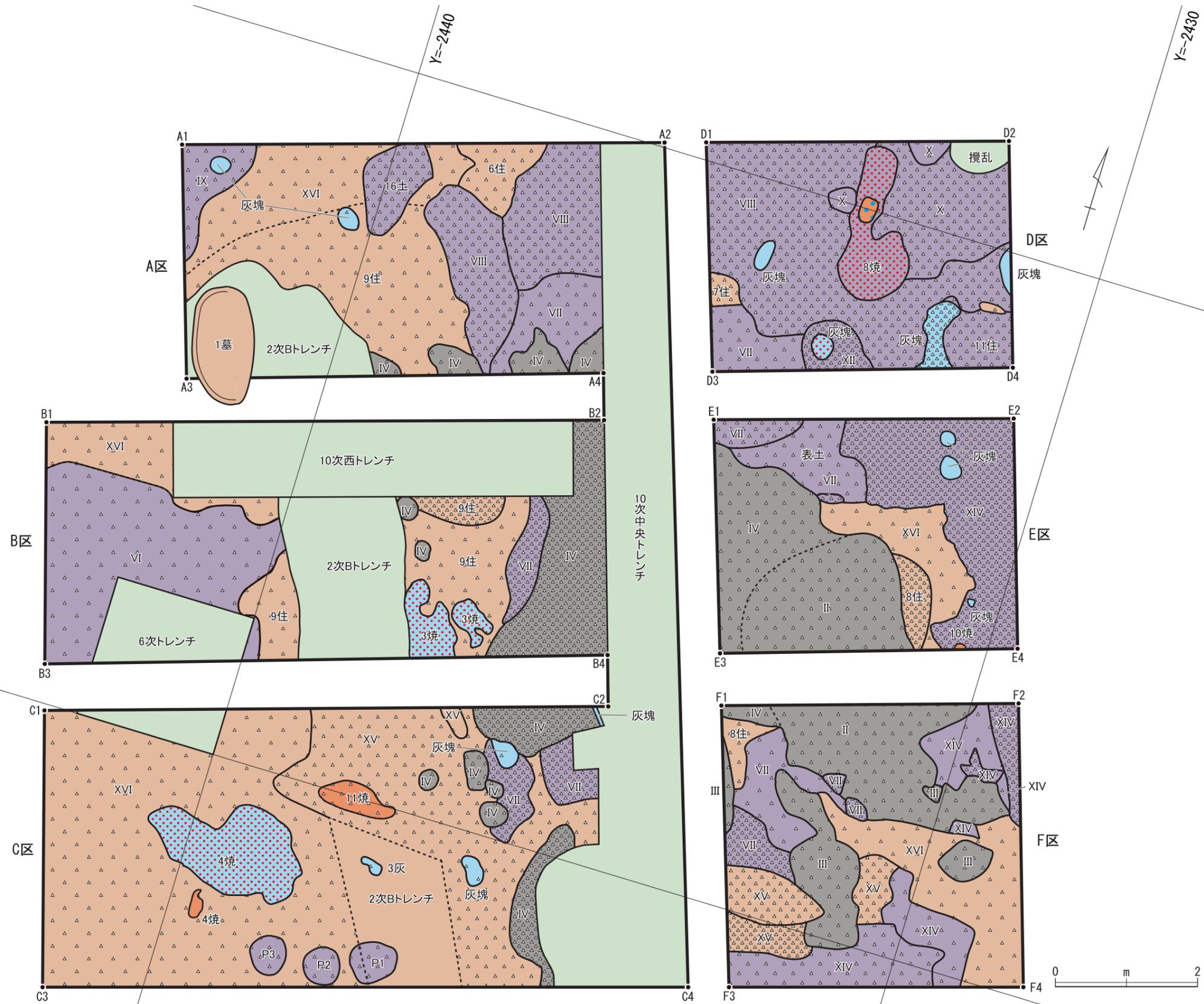
11次地点では計11基の焼土跡が検出され、うち10基では灰層が伴う特徴にある。

1号焼土跡（第53図）

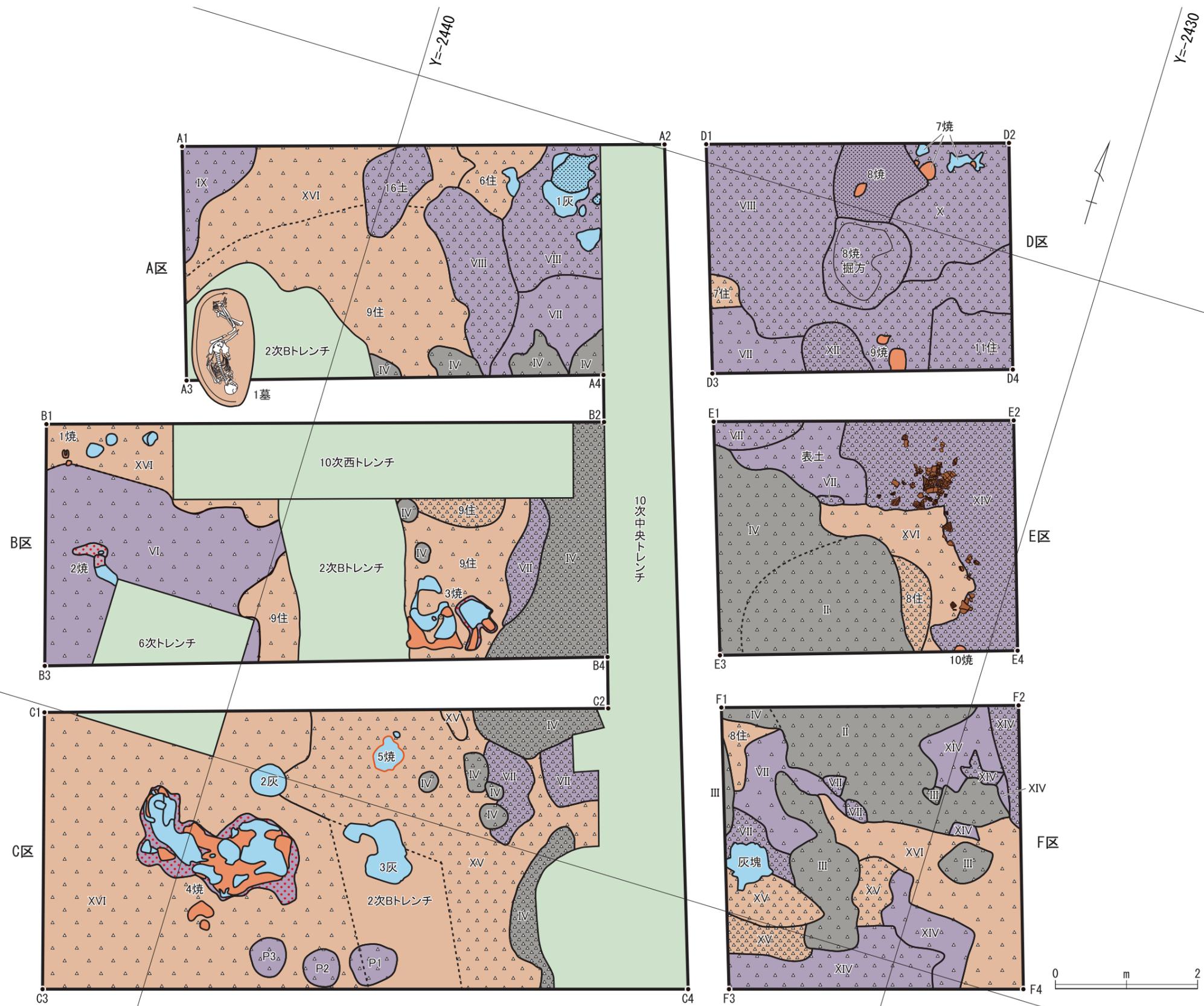
B区北西隅に位置し、第XVI層群上に構築される。第2面で焼土塊と灰塊を、第3面で火床面を確認した。平面形態は長楕円形を呈し、長軸97cm、短軸27～35cm、深さ6cmの浅い皿状にある。底面に顕著な火床



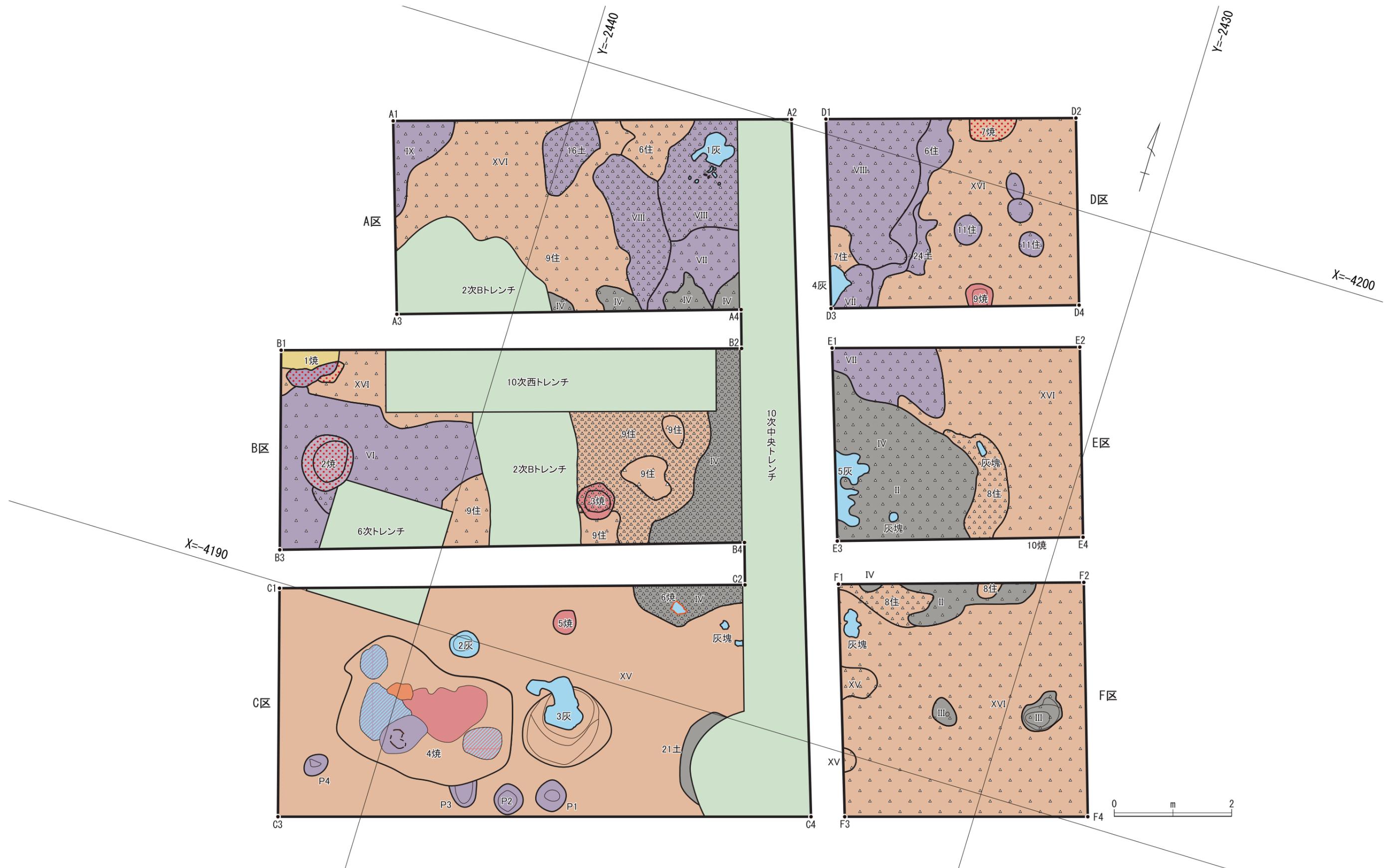
第46図 南部調査区全体図



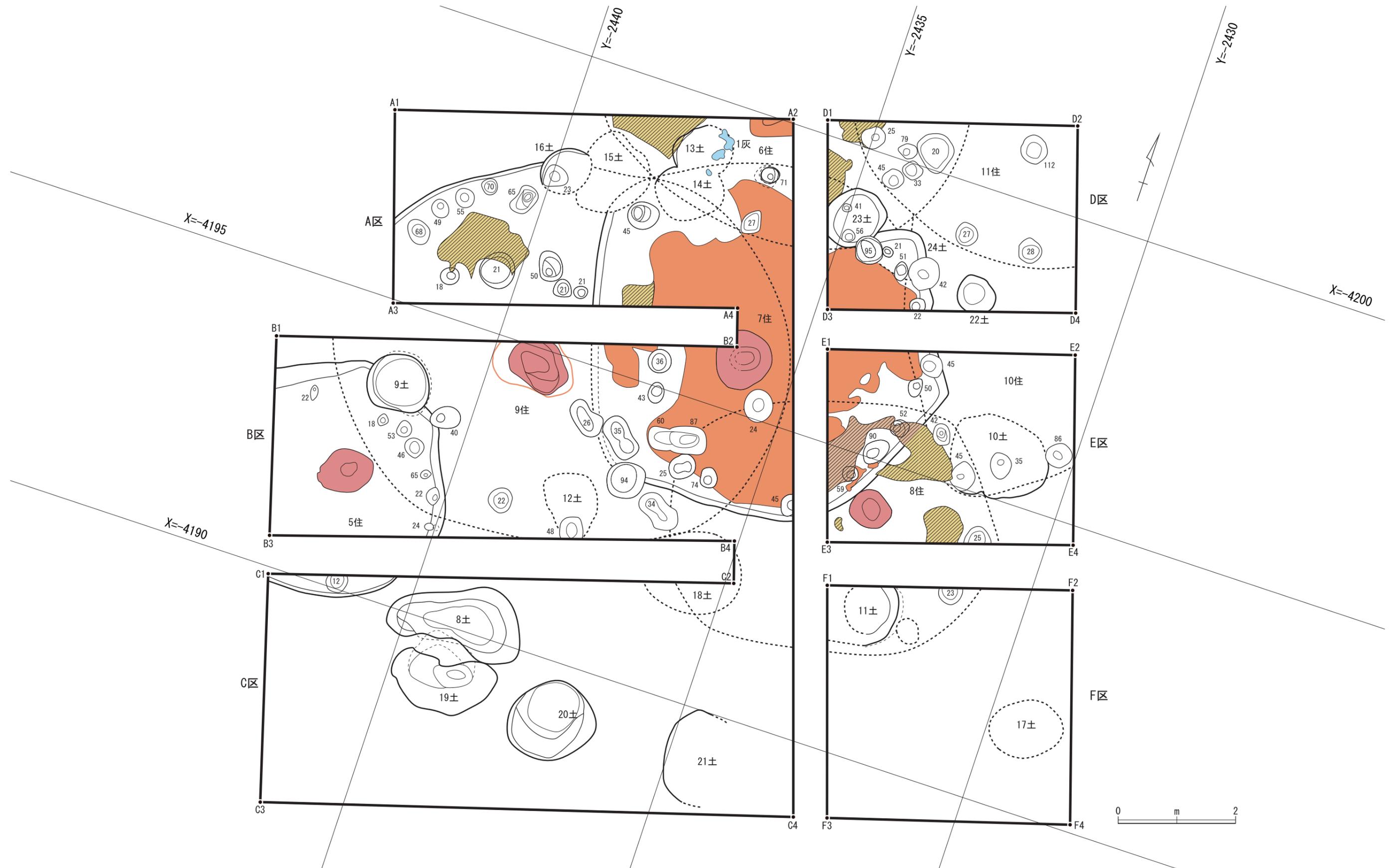
第47図 11次調査第1面遺構配置図



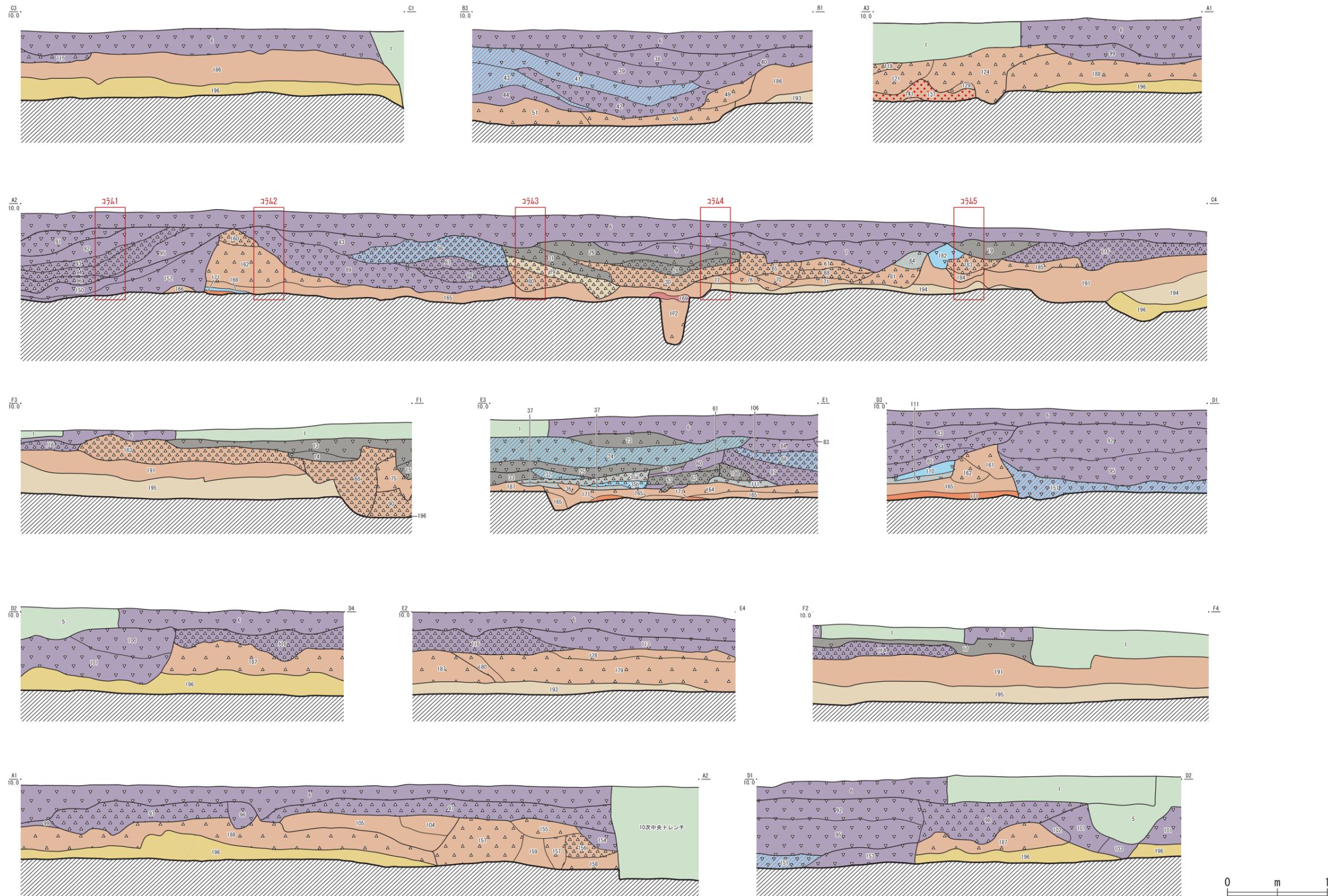
第48図 11次調査第2面遺構配置図



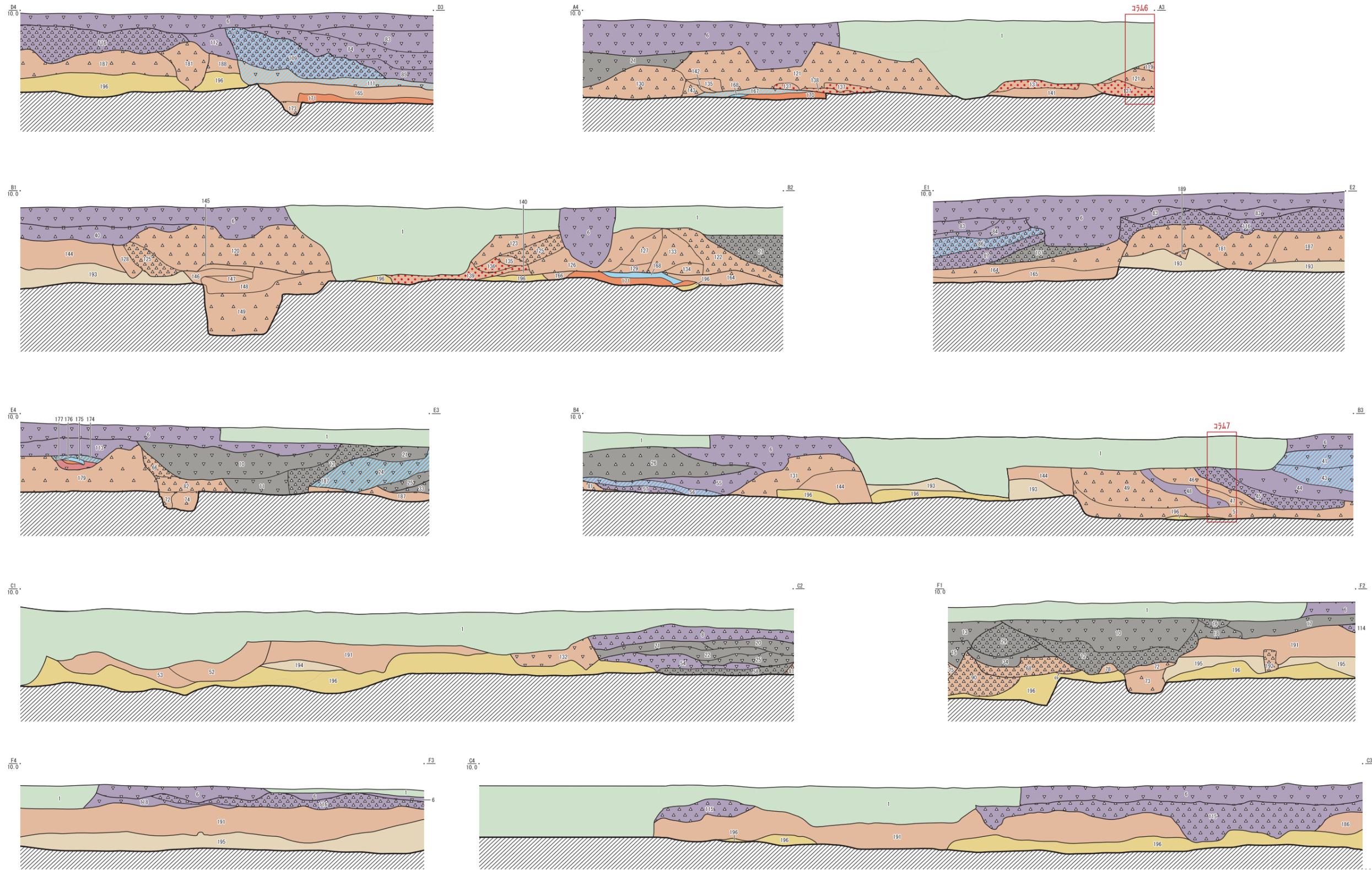
第49図 11次調査第3面遺構配置図



第50図 11次調査第4面遺構配置図



第51図 11次調査基本土層(1)



第52図 11次調査基本土層(2)

11次調査基本土層

埋戻土

1層：埋戻土	貝あり
5層：暗褐色土	貝あり

表土

6層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量のローム粒子を含む
---------	-------------	-------------

第I層群

7層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	中量のローム粒子、少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
8層：暗褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量のローム粒子を含む
9層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量のローム粒子を含む

第II層群

10層：黒褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量のローム粒子を含む
11層：黒褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
12層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の炭化物、ローム粒子を含む
16層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	
17層：黒褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	少量のローム塊を含む
18層：黒褐色土	貝あり(中量の完形貝)	微量のローム粒子を含む

第III層群

13層：黒褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量のローム粒子を含む
14層：黒褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	微量の灰粒子を含む
15層：黒褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	中量のローム塊を含む
19層：黒褐色土	貝あり(少量の完形貝)	

第IV層群

20層：黒褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	少量のローム粒子を含む
21層：黒褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
22層：黒褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
23層：黒褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム粒子を含む
24層：灰黒色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量の焼土粒子を含む
25層：黒褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
26層：黒褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
27層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の焼土粒子を含む
28層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の炭化物を含む
29層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の灰粒子を含む
30層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	
31層：黒褐色土	貝あり(中量の完形貝)	微量のローム粒子、灰粒子を含む

第Va層群

32層：灰黒色土	貝あり(微量の破砕貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
33層：黒褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量の灰粒子を含む
34層：黒褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム塊、微量の灰粒子を含む
35a層：灰褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の灰粒子、微量の焼土粒子、炭化物を含む
35b層：灰褐色土	貝あり(多量の完形貝)	多量の灰塊、少量の炭化物、微量の焼土粒子を含む
36層：褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	多量の炭化物、少量の焼土粒子を含む
37層：灰褐色土	貝なし	中量の焼土塊、少量の灰粒子、微量の炭化物を含む

第VI層群

38層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量の焼土粒子を含む
39層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量の焼土粒子を含む
40層：暗褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の炭化物を含む
41層：暗灰褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む
42層：暗褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	微量の焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む
43層：暗灰褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	少量の焼土粒子を含む
44層：暗褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	少量の焼土粒子を含む
45層：暗褐色土	貝あり(多量の破砕貝)	

5号住居跡

46層：褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量のローム塊を含む
47層：褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	中量のローム塊を含む
48層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	中量のローム粒子、微量の炭化物を含む

第IV章 貝塚の調査

49層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	
50層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム粒子を含む
51層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量のローム塊、微量の炭化物を含む
52層：褐色土	貝なし	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
53層：褐色土	貝なし	少量のローム塊を含む
18号土坑		
54層：暗褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	少量のローム粒子を含む
55層：暗褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム塊を含む
56層：灰褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量の灰粒子、微量の焼土粒子を含む
57層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の灰粒子を含む
58層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の炭化物を含む
第Vb層群		
59層：黒褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量の灰粒子を含む
60層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量の炭化物を含む
61層：黒褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の炭化物を含む
62層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の炭化物を含む
63層：暗褐色土	貝あり(微量の破砕貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
8号住居跡		
64層：灰褐色土	貝あり(少量の完形貝)	多量の灰塊、少量の炭化物、微量の焼土を含む
65層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量のローム粒子を含む
66層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
67層：褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
69層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の灰粒子を含む
70層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
71層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	
72層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量のローム粒子を含む
73層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
74層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、ローム粒子、微量の炭化物を含む
75層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
76層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	中量の炭化物、少量の焼土粒子を含む
77層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の焼土粒子を含む
78層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の炭化物を含む
79層：明褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物、灰粒子を含む
80層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	
81層：褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
82層：褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
第VII層群		
83層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量の焼土粒子を含む
84層：暗褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	微量の焼土粒子、灰粒子を含む
85層：暗褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
86層：暗灰褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の炭化物を含む
87層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	
88層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の焼土粒子を含む
89層：暗褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	
11号土坑		
90層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の炭化物を含む
第VIII層群		
91層：暗褐色土	貝あり(中量の破砕貝)	微量のローム粒子を含む
92層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	微量のローム粒子を含む
93層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	中量のローム粒子、少量の焼土粒子、炭化物を含む
94層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
95層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
96層：暗褐色土	貝あり(多量の破砕貝)	
第IX層群		
97層：暗褐色土	貝あり(中量の完形貝)	
98層：暗褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量の焼土粒子を含む
99層：暗褐色土	貝あり(少量の破砕貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む

第X層群

100層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
101層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
102層：暗褐色土	貝なし	少量の焼土塊、炭化物を含む
103層：暗褐色土	貝なし	中量の焼土塊、少量の灰塊、微量の炭化物を含む

第IX層群

104層：褐色土	貝なし	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
105層：褐色土	貝なし	少量の焼土塊、微量の炭化物を含む

第XII層群

106層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	微量の灰粒子を含む
107層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の灰粒子を含む
108層：黒褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の焼土粒子を含む
109層：暗灰褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
110層：白色灰	貝あり(微量の破碎貝)	多量の灰塊、少量の焼土粒子、炭化物を含む
111層：灰褐色土	貝あり(微量の破碎貝)	中量の灰粒子、少量の炭化物、微量の焼土粒子を含む

第XIII層群

112層：暗褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の炭化物を含む
-----------	-------------	-----------

第XIV層群

113層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	微量のローム粒子を含む
114層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の灰粒子を含む
115層：暗褐色土	貝あり(中量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
116層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
118層：暗褐色土	貝あり(微量の破碎貝)	少量のローム粒子を含む

第XV層群

68層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の焼土塊、炭化物を含む
132層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の炭化物、ローム粒子、微量の焼土粒子を含む
181層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の焼土塊、炭化物を含む
182層：赤白色灰	貝あり(少量の破碎貝)	多量の焼土粒子、灰塊を含む
183層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の灰粒子、微量の焼土粒子を含む
184層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の焼土粒子、ロームを含む
185層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量のローム粒子を含む

9号住居跡

119層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	
120層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の炭化物を含む
121層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物、ローム粒子を含む
122層：褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の焼土粒子、炭化物を含む
123層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の焼土塊を含む
124層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
125層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
126層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の炭化物、ローム粒子を含む
127層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の炭化物、ローム粒子を含む
128層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
129層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
130層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
131層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
133層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の炭化物、ローム粒子、微量の焼土粒子を含む
134層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
135層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の炭化物、微量の焼土粒子を含む
136層：赤褐色焼土	貝あり(微量の破碎貝)	中量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
137層：赤褐色焼土	貝あり(微量の破碎貝)	多量の焼土塊、少量の炭化物を含む
138層：赤褐色焼土	貝なし	多量の焼土塊、中量の炭化物、微量のロームを含む
139層：赤褐色焼土	貝なし	多量の焼土塊、少量の灰粒子を含む
140層：褐色土	貝なし	多量の炭化物、少量の焼土粒子を含む
141層：褐色土	貝なし	多量の焼土粒子、炭化物を含む
142層：褐色土	貝なし	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
143層：褐色土	貝あり(中量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
144層：褐色土	貝なし	少量のローム粒子を含む

9号土坑

145層：褐色土	貝なし	多量の炭化物、少量の焼土粒子を含む
146層：褐色土	貝なし	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
147層：褐色土	貝なし	多量の炭化物、少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む
148層：褐色土	貝なし	微量の焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む
149層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む

6号住居跡

150層：暗褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物、灰粒子を含む
151層：暗灰褐色土	貝あり(中量の破碎貝)	中量の焼土粒子、少量の灰粒子、微量の炭化物を含む
152層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物、ローム、灰粒子を含む
153層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	少量のローム粒子を含む
154層：暗褐色土	貝あり(少量の破碎貝)	少量の灰粒子、微量の炭化物を含む
155層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
156層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の炭化物を含む
157層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
158層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の炭化物を含む
159層：褐色土	貝なし	微量の焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む

7号住居跡

160層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量のローム粒子を含む
161層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む
162層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	微量の焼土粒子、炭化物を含む
163層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の焼土粒子、炭化物を含む
164層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の焼土粒子、炭化物、灰粒子を含む
165層：褐色土	貝なし	少量の焼土粒子、ローム粒子、微量の炭化物を含む
166層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
167層：灰褐色土	貝あり(微量の破碎貝)	少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
168層：青色灰	貝なし	硬質で粗粒の青灰色の灰主体。層厚は極めて薄く、170、171層を被覆する。
169層：赤褐色焼土	貝なし	中量の焼土塊を含む
170層：朱色焼土	貝あり(微量の破碎貝)	多量の焼土塊、微量の炭化物、灰粒子を含む
171層：朱色焼土	貝なし	多量の焼土塊、微量のロームを含む
172層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	中量の焼土粒子を含む
173層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量のローム粒子を含む

10号焼土跡

174層：暗灰褐色土	貝あり(微量の破碎貝)	少量の炭化物、灰塊、微量の焼土粒子を含む
175層：白色灰	貝あり(微量の破碎貝)	多量の灰塊、少量の焼土粒子、炭化物を含む
176層：朱色焼土	貝あり(微量の破碎貝)	多量の焼土塊を含む
177層：暗赤褐色焼土	貝あり(微量の破碎貝)	少量の焼土塊、炭化物、灰塊を含む

第XVI層群

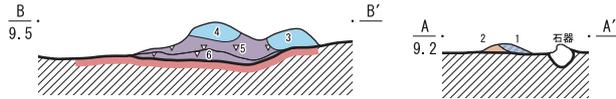
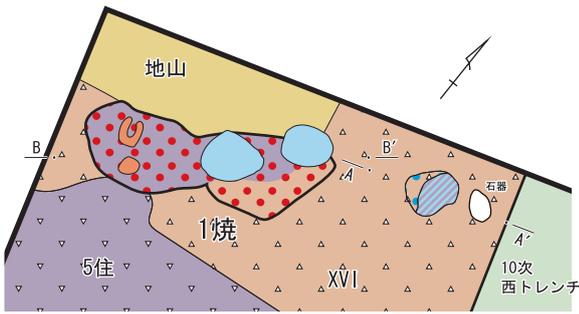
178層：褐色土	貝あり(中量の完形貝)	微量の焼土粒子を含む
179層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の焼土粒子、炭化物を含む
180層：褐色土	貝あり(少量の完形貝)	少量のローム粒子、微量の焼土粒子、炭化物を含む
186層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量のローム粒子を含む
187層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、ローム粒子、微量の炭化物を含む
188層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	微量の炭化物、ローム粒子を含む
189層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	微量の焼土粒子を含む
190層：褐色土	貝あり(微量の完形貝)	少量の焼土粒子、炭化物を含む
191層：褐色土	貝なし	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
192層：褐色土	貝あり(多量の完形貝)	少量の灰粒子を含む

ローム漸移層

193層：明褐色土	貝なし	少量のローム粒子、微量の炭化物を含む
194層：明褐色土	貝なし	中量のローム粒子を含む
195層：明褐色土	貝なし	少量のローム塊を含む

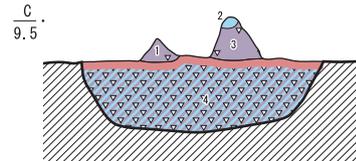
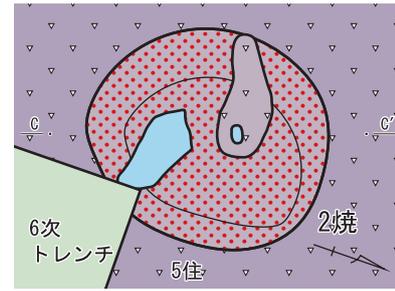
ローム層

196層：黄褐色土	貝なし	多量のローム塊を含む
-----------	-----	------------



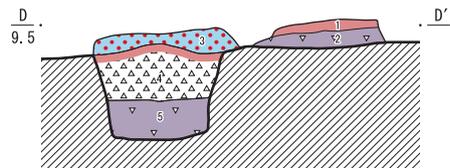
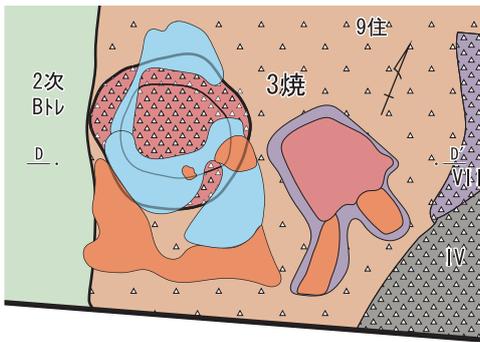
1号焼土跡

- 1層：暗灰褐色土 貝あり(中量破砕貝) 多量の灰、焼土塊を含む
- 2層：褐色土 貝あり(中量完形貝) 少量の灰、焼土粒子を含む
- 3層：灰塊 貝なし 少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む
- 4層：灰塊 貝なし 少量の焼土粒子、炭化物を含む
- 5層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 微量の焼土粒子を含む
- 6層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の焼土粒子を含む



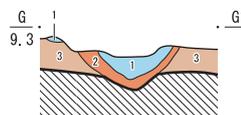
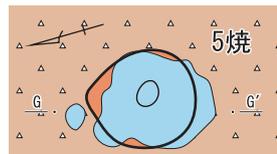
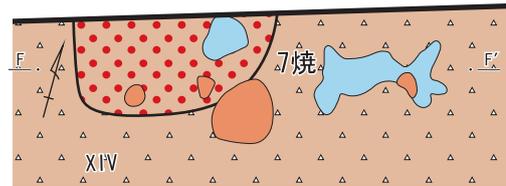
2号焼土跡

- 1層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 2層：白色灰 貝なし 少量の焼土粒子を含む
- 3層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰塊、微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 4層：暗褐色土 貝あり(多量の破砕貝) 少量の灰塊、焼土粒子を含む。上面が被熱



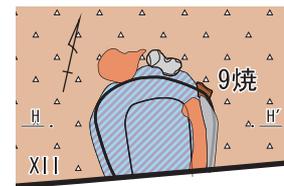
3号焼土跡

- 1層：暗赤褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 多量の焼土塊、少量の灰塊を含む
- 2層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の焼土粒子、灰塊、炭化物を含む
- 3層：赤灰色土 貝あり(微量の破砕貝) 灰、焼土主体。微量の炭化物を含む
- 4層：混土貝層 少量の焼土粒子、炭化物、赤褐色土を含む。上面は被熱
- 5層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の焼土粒子、灰塊、炭化物を含む



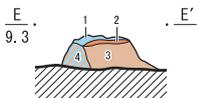
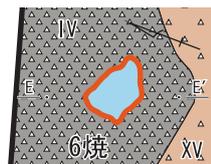
5号焼土跡

- 1層：白色灰 貝なし
- 2層：朱色焼土 貝なし
- 3層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む



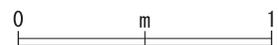
9号焼土跡

- 1層：暗灰褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰、焼土粒子、炭化物を含む
- 2層：朱色焼土 貝なし 微量の炭化物を含む
- 3層：炭化物 貝なし
- 4層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 多量の炭化物を含む



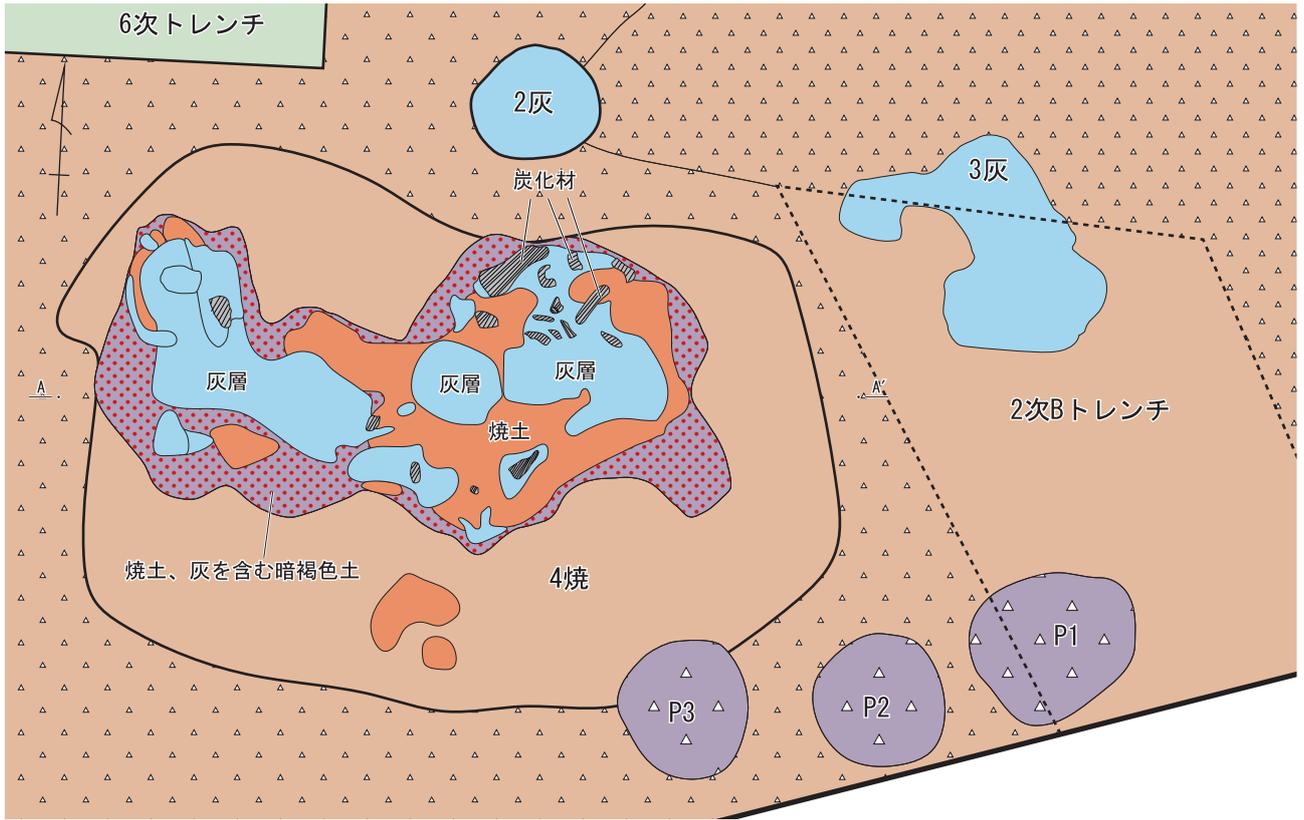
6号焼土跡

- 1層：白色灰 貝あり(微量の破砕貝) 多量の炭化物を含む
- 2層：朱色焼土 貝あり(微量の破砕貝) 上部が明るく、下部が暗い色調
- 3層：褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量のローム粒子、微量の炭化物を含む。XV層群に相当
- 4層：灰褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 多量の灰、少量の炭化物を含む

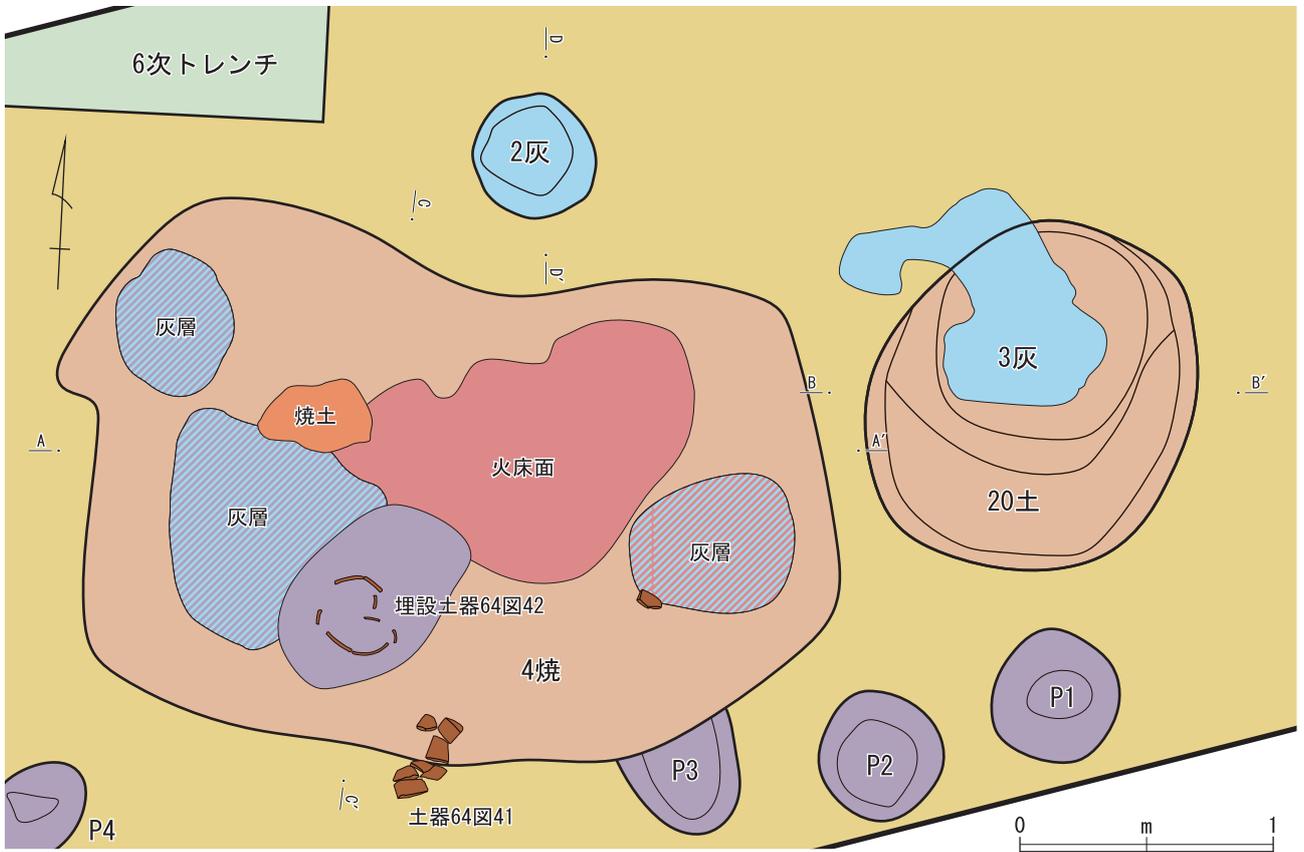


第53図 11次調査焼土跡(1)

4号焼土跡、2、3号灰溜り検出状況

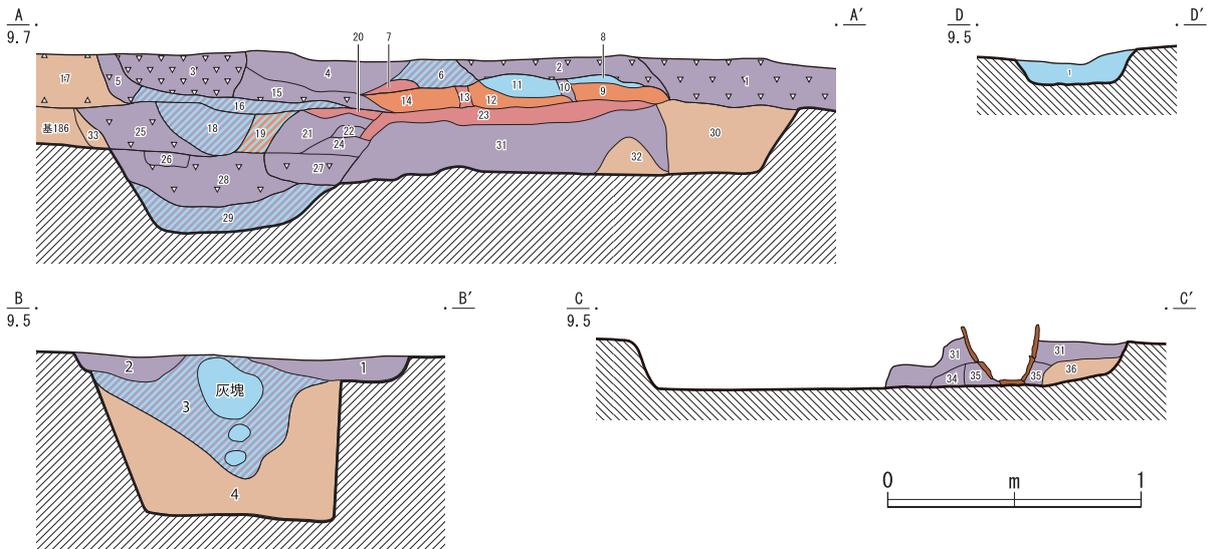
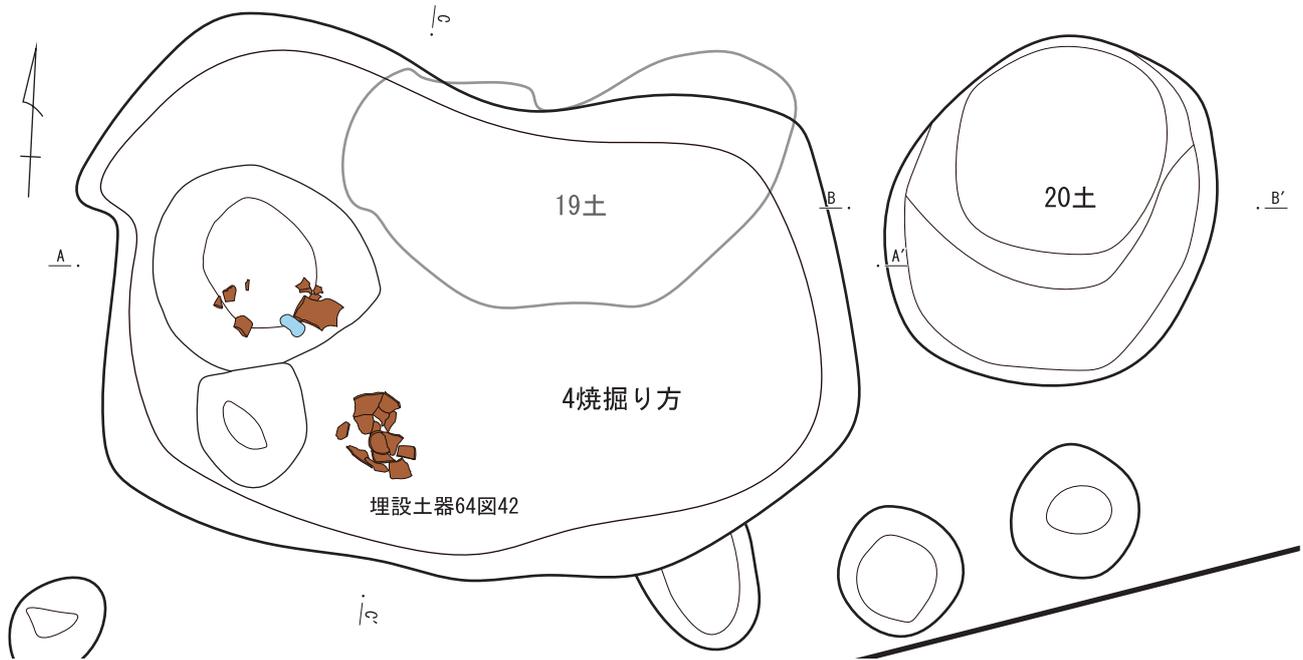


4号焼土跡火床面



第54図 11次調査焼土跡(2)

4号焼土跡、20号土坑



4号焼土跡

- 1層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝)
- 2層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝)
少量の焼土粒子、灰粒子、炭化物を含む
- 3層：暗褐色土 貝あり(中量の破砕貝) 少量のローム粒子を含む
- 4層：暗褐色土 貝なし 微量の焼土塊、少量の灰を含む
- 5層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量のローム塊を含む
- 6層：暗灰褐色土 貝なし 多量の灰塊、少量の炭化物を含む
- 7層：赤褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 多量の焼土塊、少量の灰を含む
- 8層：白色灰 貝なし 少量の焼土粒子、炭化物を含む
- 9層：朱色焼土 貝なし 微量の灰を含む
- 10層：暗褐色土 貝なし 微量の焼土粒子を含む
- 11層：白色灰 貝なし 少量の焼土粒子、炭化物を含む
- 12層：朱色焼土 貝なし 微量の炭化物を含む
- 13層：赤褐色土 貝なし 少量の焼土粒子を含む
- 14層：朱色焼土 貝なし 微量の灰、炭化物を含む
- 15層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 16層：暗灰褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 多量の灰塊、少量の炭化物を含む
- 17層：褐色土 貝あり(微量の完形貝) 微量のローム粒子、炭化物を含む
- 18層：暗灰褐色土 貝なし(少量の破砕貝)
多量の灰、炭化物、微量の焼土粒子を含む
- 19層：灰、焼土 貝なし 微量の炭化物を含む
- 20層：暗赤褐色土 貝なし 多量の焼土、少量の炭化物を含む

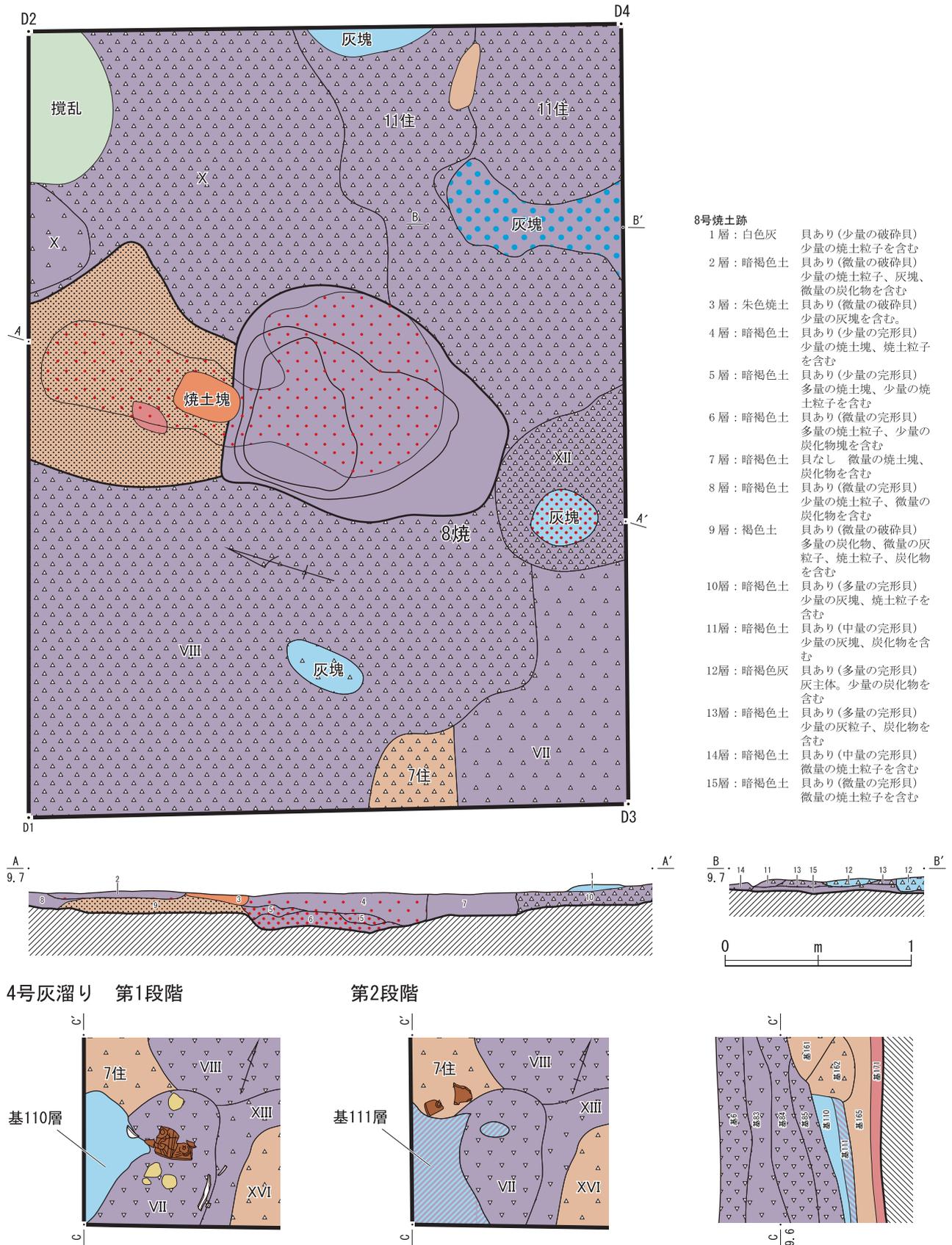
- 21層：暗褐色土 貝なし 少量の焼土粒子、炭化物、灰を含む
- 22層：暗褐色土 貝なし 少量の焼土塊を含む
- 23層：赤褐色土 貝なし 焼土を主体とする層。少量の灰、炭化物を含む
- 24層：暗褐色土 貝なし 少量の焼土粒子、炭化物を含む
- 25層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の灰、炭化物を含む
- 26層：暗褐色土 貝なし 多量の炭化物、少量の灰を含む
- 27層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 少量の焼土粒子、灰を含む
- 28層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の焼土粒子、炭化物を含む
- 29層：暗灰褐色土 貝あり(微量の破砕貝)
少量の灰塊、炭化物、微量の焼土粒子を含む

2号灰溜り

3号灰溜り

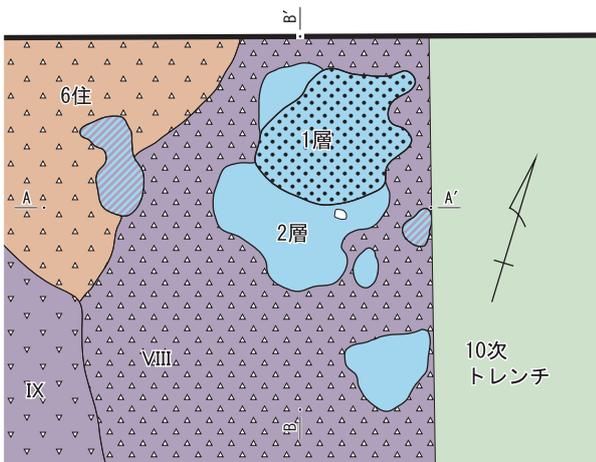
- 30層：褐色土 貝なし 少量の灰を含む
 - 31層：暗褐色土 貝なし 微量の焼土粒子、ローム粒子を含む
 - 32層：褐色土 貝なし 多量のローム粒子、少量のローム塊を含む
 - 33層：褐色土 貝なし 多量のローム塊を含む
 - 34層：暗褐色土 貝なし 径の大きい焼土粒子、炭化物、極微量の灰を含む
 - 35層：暗褐色土 貝なし 微量の焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む
 - 36層：茶褐色土 貝なし 微量のローム粒子、炭化物を含む
- 2号灰溜り
- 1層：白色灰 貝なし 少量の炭化物を含む
- 3号灰溜り
- 1層：暗褐色土 貝あり(少量の破砕貝) 少量の焼土粒子、炭化物を含む
 - 2層：暗褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 微量の灰、焼土粒子を含む
 - 3層：暗灰褐色土 貝あり(微量の破砕貝) 多量の灰、少量の炭化物、焼土粒子を含む
 - 4層：褐色土 貝なし 多量のローム塊、少量の炭化物を含む

第55図 11次調査焼土跡(3)

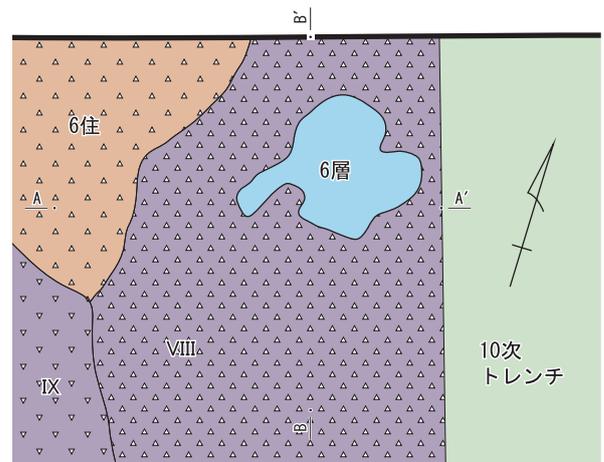


第56図 11次調査焼土跡(4)、灰溜り(1)

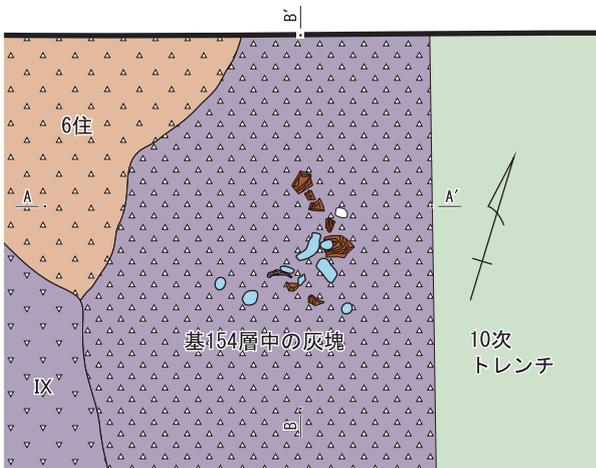
1号灰溜り 第1段階



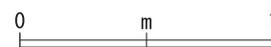
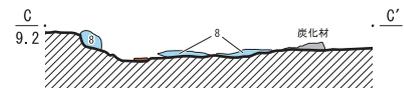
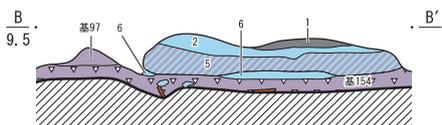
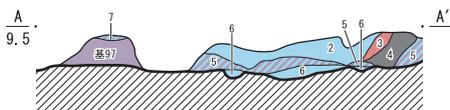
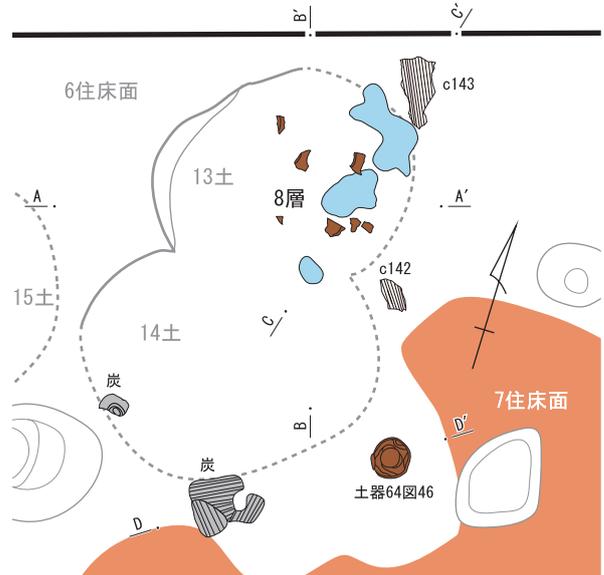
第2段階



第3段階



第4段階



1号灰溜り

- | | | |
|----------|-------------|--------------------|
| 1層：黒色土 | 貝あり(微量の破砕貝) | 多量の炭化物、微量の灰を含む |
| 2層：白色灰 | 貝あり(微量の破砕貝) | 少量の焼土粒子、炭化物を含む |
| 3層：赤褐色土 | 貝あり(微量の破砕貝) | 多量の焼土塊を含む |
| 4層：黒色土 | 貝あり(微量の破砕貝) | 多量の炭化物、微量の焼土粒子を含む |
| 5層：暗灰褐色土 | 貝あり(少量の破砕貝) | 微量の灰を含む |
| 6層：白色灰 | 貝あり(微量の破砕貝) | 少量の焼土粒子を含む |
| 7層：暗灰褐色土 | 貝あり(微量の破砕貝) | 灰が5割を占める。少量の炭化物を含む |
| 8層：黄色灰 | 貝なし | |

第57図 11次調査灰溜り(2)

面が広がり、灰層は覆土上面に塊状に散在する。

2号焼土跡（第53図）

1号焼土跡の南側0.9mに位置し、第VI層群中に構築される。第2面で焼土塊と灰塊を、第3面で火床面を検出した。火床面の下は楕円形の掘り方にあり、長軸97cm、短軸87cm、深さ29cmを測る。覆土上層に灰塊が散在する。

3号焼土跡（第53図）

B区中央に位置し、9号住居跡の覆土中に構築される。第1面で焼土と灰の混合層を検出し、第2面では焼土と灰の境が明瞭となり、第3面で火床面を検出した。火床面の下は径60cm、深さ35cmを測る掘り方で、覆土は完形のヤマトシジミの純貝層である。

4号焼土跡（第54、55図）

C区西側に位置し、第XVI層群の下層の、遺物が希少なローム漸移層上に掘り込まれる。第1面で焼土と灰の混合層を検出し、第2面では焼土と灰の境が明瞭となり、第3面で火床面を検出した。火床面の下は、長楕円形の掘り方で、長軸298cm、短軸207cm、最深部71cmを測る。焼土と灰が重畳する様相から、初期段階は赤褐色の火床面（23層）で燃焼し、西側の掘り方へ灰を集積するが、燃焼を繰り返すうちに火床面上に焼土と灰が厚く堆積した様相が窺える。火床面の南には埋設土器（第64図42）が設けられ、土器内部にも灰塊が観察されることから、埋設土器は灰を収納する機能を有していたと推測される。4号焼土跡の北方0.3mに2号灰溜り、東方0.2mには3号灰溜りが隣接し、遺構相互の有機的関連性が窺える。

5号焼土跡（第53図）

C区北側に位置し、第XVI層群中に掘り込まれる。第2面で灰層を、第3面で搗鉢状の火床面を検出した。長軸42cm、短軸38cm、深さ13cmを測る。顕著な火床面上に灰層が充満する。

6号焼土跡（第53図）

C区北東に位置し、第IV層群の直下、第XVI層群上に構築される。第3面で検出し、南北22cm、東西27cmの四辺形の範囲に、火床面と灰層が広がる。

7号焼土跡（第53図）

D区北壁沿いで、第XVI層群上に構築される。第2面の第X層群中で灰や焼土を検出し、第3面で南北15cm、東西50cmの不整形の火床面を検出した。

8号焼土跡（第56図）

D区のほぼ中央、7号焼土跡の西方に隣接し、第VIII、X層群中に構築される。第1面では南北320cm、東西30～108cmの楕円形状に焼土が、第2面では南北100cm、東西135cmの範囲に炭化物が拡散する様子を確認した。また、第2面では炭化物の拡散範囲の南側に、南北150cm、東西120cm、深さ13cmの火床面を検出し、燃焼の場が移設される。

9号焼土跡（第53図）

D区南壁沿いで、第XVI層群上面に掘り込まれる。第2面で焼土の散布を、第3面で火床面を検出した。火床面の下は掘り方で、南北38cm、東西50cm、深さ10cmの皿状を呈す。底面には炭化物層、その上層には火床面である焼土層が広がり、覆土には灰層が充満する。

10号焼土跡（第48図）

E区南壁面で僅か20cm程の範囲で検出し、第XVI層群上から掘り込まれる。深さ15cmの浅い掘込みであるが、火床面上には灰層がレンズ状に堆積することから現地性の生成であろう。

11号焼土跡（第47図）

C区第1面、楕円形の長軸112cm、短軸38cmの範囲に焼土層が広がる。掘込みはなく、唯一、灰層を伴わない焼土跡である。

（4）灰溜り

11次調査では、遺構掘込み内に堆積した灰溜り5基と、灰塊14ヵ所の計19ヵ所で確認した。焼土跡には概ね灰層を伴うことから、4号焼土跡に近接する2、3号灰溜りは、4号焼土跡で生成した灰を集積した遺構と捉えられる。また、灰塊は拳大のブロック状を呈し、焼土との共伴もないことから、東部検出の深鉢形土器内に充填された灰のように、土器や有機質容器に納められ、焼土跡から持ち出されたものと推測される。

1号灰溜り（第57図）

A区北東に位置し、6号住居跡及び第VIII層群の埋積過程に伴って、4段階の灰投棄がなされる。第1段階は第VIII層群の底面、6号住居跡の床面に相当し、堀之内1式土器（第64図46）や9号住居跡から流れ込んだ炭化材と共伴して灰が検出された。第2段階は基本土層154層中に堀之内1式土器（第64図47）とともに検出された。第3、4段階は灰が面的に拡散し、第4段階最上面には炭化物を多く含む特徴にある。

2号灰溜り（第54図）

C区に位置し、8号土坑の覆土上面に灰が堆積する。第2面で検出した。円形を呈し、径60cm、深さ11cmを測る。南側の4号焼土跡から生成された灰の集積が窺える。

3号灰溜り（第54図）

C区中央に位置し、20号土坑の覆土中に灰が堆積する。第1面で検出し、主たる灰層が埋積された範囲は、南北144cm、東西125cm、深さ62cmを測る。

4号灰溜り（第56図）

D区南西壁際に位置し、第3面で検出した第VII層群と7号住居跡の覆土の間の第XII層群に相当する。長軸70cmの楕円形の範囲に灰が分布し、灰の多い上層（基本土層110）と少ない下層（基本土層111）に分かれる。

5号灰溜り（第49図）

E区南西壁際に位置し、第3面で検出した第IV層群と7号住居跡の覆土の間の第Va層群に相当する。長軸115cmの不整形の範囲に灰が分布する。

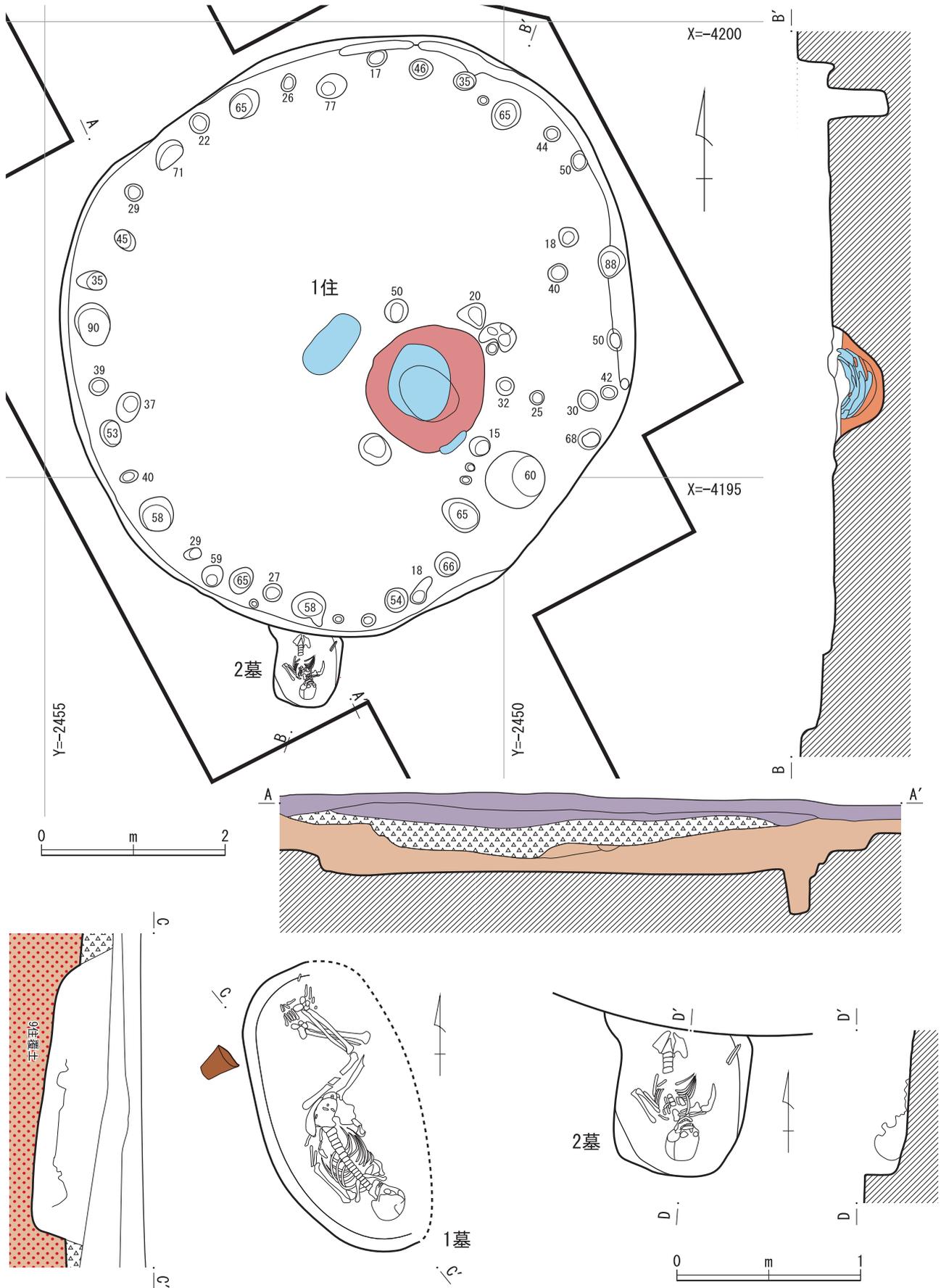
（5）墓（第58図）

1号墓

2次Bトレンチで検出した墓である。報文及びトレンチの位置関係からは11次A区南西隅にあたり、報文中の墓が掘り込まれる焼土とは、9号住居跡の焼土と推定される。混貝土層及び褐色土を僅かに掘り込むために明確なプランを検出しておらず、排土を直ちに埋め戻されたことにより、東壁は不詳であると報告されている。長軸は南北方位を示し168cm、短軸は埋葬人骨の状態から推定するならば80cm前後の楕円形を呈し、堆積土層からは深さ33cmを測る。底面は脚部から頭部に向けて傾斜が認められ、その比高差は12cm程度が読み取れる。人骨の埋葬状態は頭位を南東とし、脚部の屈曲は弱いが仰臥屈葬にある。

2号墓

1号住居跡と重複する部分で下半身の骨が散逸しているが、1号住居跡の廃絶後に南西壁を切り込んで構築されたと報告されている墓である。住居跡中の平面形態は不詳であるが、検出し得たプランは半楕円形を呈す。調査し得た規模は、長軸は南北方位を示し84cm、短軸72cm、深さ8cm程を測る。底面は概ね平坦をな



第58図 2次調査住居跡、墓

し、人骨の埋葬状態は頭位を南とし、脚部の大部分を欠くが伸展葬と推定される。

(6) 住居跡

1号住居跡 (第58図)

2次調査Aトレンチで検出され、平面形態は円形を呈し、長軸660cm、短軸620cm、確認面から床面までの深度は30~40cmを測る。北東壁沿いの一部には周溝が巡る。柱穴は概ね壁沿いを巡り、大小の計46本を確認し、2ないし3本おきに太く深い柱穴が掘り込まれる特徴にある。炉跡は中央南東寄りに設けられ、搗鉢状を呈し、径130cm、床面からの深さ50cmを測る。焼土及び白色灰が厚く堆積する。また、南西壁に接して2号墓が設けられる。出土遺物は床面直上で堀之内1式の組合せ土器(第71図1)1点を検出したに止まり、廃絶時の片づけ行為が窺われる。

5号住居跡 (第50、61図)

B、C区の西側にあり、9号住居跡、9号土坑を切る新旧関係にある。西壁は調査区外へと伸びるが、その平面形態は円形を呈すと推定され、調査し得た規模は東西297cm、南北396cm、確認面からの深さは20~24cmを測る。床面は平坦で踏み固められた良好な固床面が広がる。内部施設は壁際に柱穴が巡り、中央東側には楕円形を呈し、長軸97cm、短軸75cm、床面からの深さ29cmを測る炉跡を検出した。断面形態は搗鉢状を呈し、焼土や灰が厚く堆積する。炉跡上場には灰塊が散乱することから、灰層の掘り出しが窺われる。出土遺物は床面直上の褐色土の覆土からは堀之内1式土器(第62図1)、その上層の第VI層群からは加曾利B式土器(第62図3~5)が出土した。

6号住居跡 (第50図)

A、D区に位置し、7、9、11号住居跡を切る新旧関係にある。調査区壁面で立ち上がりを確認するに止まり、調査し得た規模は東西約620cm、南北約220cm、5本の柱穴と床面の固床化により円形を呈す住居跡と判断した。出土遺物は堀之内1式土器を主体とし、床面直上の褐色土の覆土から第62図6、その上層の第V III層群からは第62図9~12が出土した。

7号住居跡 (第59図)

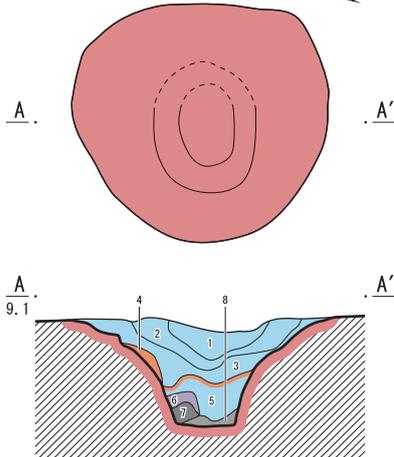
A、B、D、E区に跨り、10号住居跡を切り、6、9号住居跡に切られる新旧関係にある。平面形態は略円形プランを呈し、東西600cm、南北620cmで、確認面からの深さは12~15cmを測る。本住居跡の最大の特徴として、被熱により赤色硬化が顕著な床面である。赤色硬化した床面の下は、炉跡や古代のカマドの火床面下のように暗赤褐色に変色した顕著な被熱ローム面であり、床面直上には極薄の青灰色の灰層が被覆していたこと、覆土最下層には焼土粒子の飛散が観察されないことから、赤色硬化した床面は現地性の燃焼と捉えた。内部施設は壁際を巡る16本の柱穴を確認し、その中でも四隅に径の大きい柱穴が主柱穴にあたろう。中央南西に炉跡が構築され、長軸101cm、短軸94cmを測る円形を呈し、その断面形態は中央部がやや深く掘り窪められる漏斗状で、床面からの最深部は42cmを測る。最深部は被熱が著しい火床面で、その上層には灰層と焼土主体層が数枚重畳し、灰層堆積以降も燃焼と灰層の生成が繰り返されている。なお、覆土上層の灰層からは微小生物が検出され、第V章で詳述するが、灰塩行為が指摘されている住居跡である。

8号住居跡 (第50、61図)

B、C、E、F区に跨り、7、9、10号住居跡を切る新旧関係にある。調査区壁面で立ち上がりを確認するに止まり、平面形態は楕円形プランを呈し、東西570cm、南北410cmを測る。床面は総じて固床化が顕著であり、北側では7号住居跡の覆土が強く踏み固められている。内部施設は東壁を主に4本の柱穴が巡り、中央東部に楕円形を呈し、長軸69cm、短軸64cm、床面からの深度29cmを測る炉跡を検出した。断面形態は搗鉢



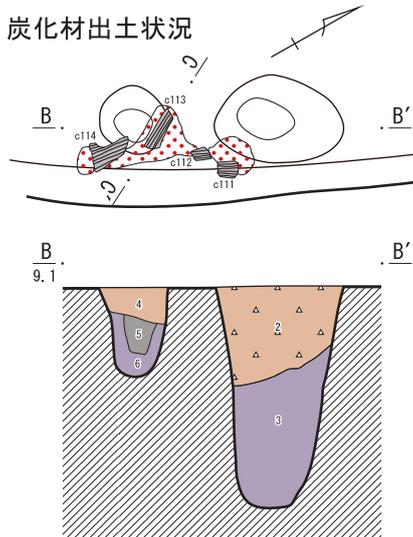
炉跡



7号住居跡炉跡

- | | |
|---------|---|
| 1層：白色灰 | 少量の焼土塊、焼土粒子を含む |
| 2層：白色灰 | 微量の焼土粒子を含む |
| 3層：白色灰 | 少量の焼土塊、焼土粒子を含む。
下部は被熱により固化し、亀裂が生じている |
| 4層：朱色焼土 | 焼土粒子主体 |
| 5層：白色灰 | 少量の焼土塊、焼土粒子を含む。
被熱により固化し、上下に亀裂が生じている |
| 6層：暗褐色土 | 少量の破砕貝、微量の灰塊を含む |
| 7層：黒色土 | 炭化物主体 |
| 8層：黒褐色土 | 多量の黒色帯塊、焼土塊を含む |

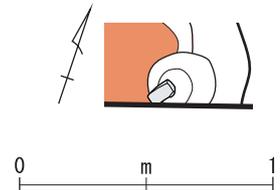
炭化材出土状況



7号住居跡炭化材

- | | |
|---------|----------------------------------|
| 1層：褐色土 | 貝あり(微量の完形貝)
中量の焼土粒子、炭化物を含む |
| 2層：褐色土 | 貝あり(微量の完形貝)
少量の焼土粒子、微量の炭化物を含む |
| 3層：暗褐色土 | 貝なし 少量のローム粒子を含む |
| 4層：褐色土 | 貝なし 微量の焼土粒子、炭化物を含む |
| 5層：黒褐色土 | 貝なし 微量の焼土粒子を含む |
| 6層：暗褐色土 | 貝なし 少量のローム粒子を含む |

磨石(第81図62)出土状況



第59図 7号住居跡

状を呈し、焼土層と灰層が互層をなすことから、焼土が複数面において繰り返されたものと推定される。遺物は堀之内1式土器（第62図13～18）が出土した。

9号住居跡（第60図）

A、B区に跨り、7号住居跡を切り、5、6、8号住居跡に切られる新旧関係にある。壁面の残存が一部に止まるが、その平面形態は楕円形を呈し、東西780cm、南北640cmの大型で、確認面からの深さは7～10cmを測る。概ね壁沿いを巡る柱穴を24本検出し、壁から内側には径の大きい柱穴が主柱穴となろう。床面は顕著に固床化し、7号住居跡の覆土が強く踏み固められている。炉跡は住居跡中央に位置し、長軸105cm、短軸90cmの略円形プランである。床面からの深さは35cmを測り、断面形態は擂鉢状を呈す。西側は含有物が異なる複数枚の灰層が重畳し、東側は灰層の上面に焼土層が堆積し、炉跡の平面プランが歪むことから、炉跡の作り替えが窺われる。また、本住居跡は床面直上から炭化材と焼土層を広範囲に検出したことが特徴である。特に北壁際に多くの炭化材が遺存し、焼土層に覆われる状況からは土屋根構造の焼失住居跡と捉えた。なお、第V章で後述するが、炭化材の樹種を同定したところ、その大半がクリであった。床面から焼土層の間で出土した遺物は、北壁際のピット付近で磨石や石棒が出土したが、土器は堀之内1式土器が僅かである（第63図21、23、27、29）。またB区の焼土層上面からは鹿角製の腰飾（第77図17）が、焼土層の上層の褐色土からは堀之内1式土器（第63図22、25、26、28、30、32、34～37、第64図38、39）が出土した。

10号住居跡（第50図）

D、E区に跨り、7、8号住居跡に切られる新旧関係にある。掘込みが残存せず、5本の柱穴と固床化の範囲から、総じて楕円形プランと推定した。調査し得た規模は東西約290cm、南北約480cmを測る。

11号住居跡（第50図）

D区北東隅に位置し、6号住居跡に切られる重複関係にある。弧状に巡る4本の他、1本の柱穴を検出した。平面形態は堆積土層も含め円形プランと推定し、調査し得た規模は東西約380cm、南北約240cmである。第XVI層群上面を床面とし、床面上には焼土粒子や炭化物の広がりが顕著であった。

（7）土坑

南部からは20基の土坑を検出した。2次の1～3号土坑は近接し、他遺構の重複もなく、深度も深い共通性にある。

1号土坑（第61図）

1号住居跡から北西6mの距離を測るCトレンチに位置する。平面形態は円形を呈し、長軸170cm、短軸160cm、深さ120cmを測り、断面形態は壁面が垂直に立ち上がる円筒形となる。覆土中層にはレンズ状に純貝層が堆積する。鹿骨や魚骨を含み、出土遺物からは堀之内1式期の所産にある。

2号土坑（第61図）

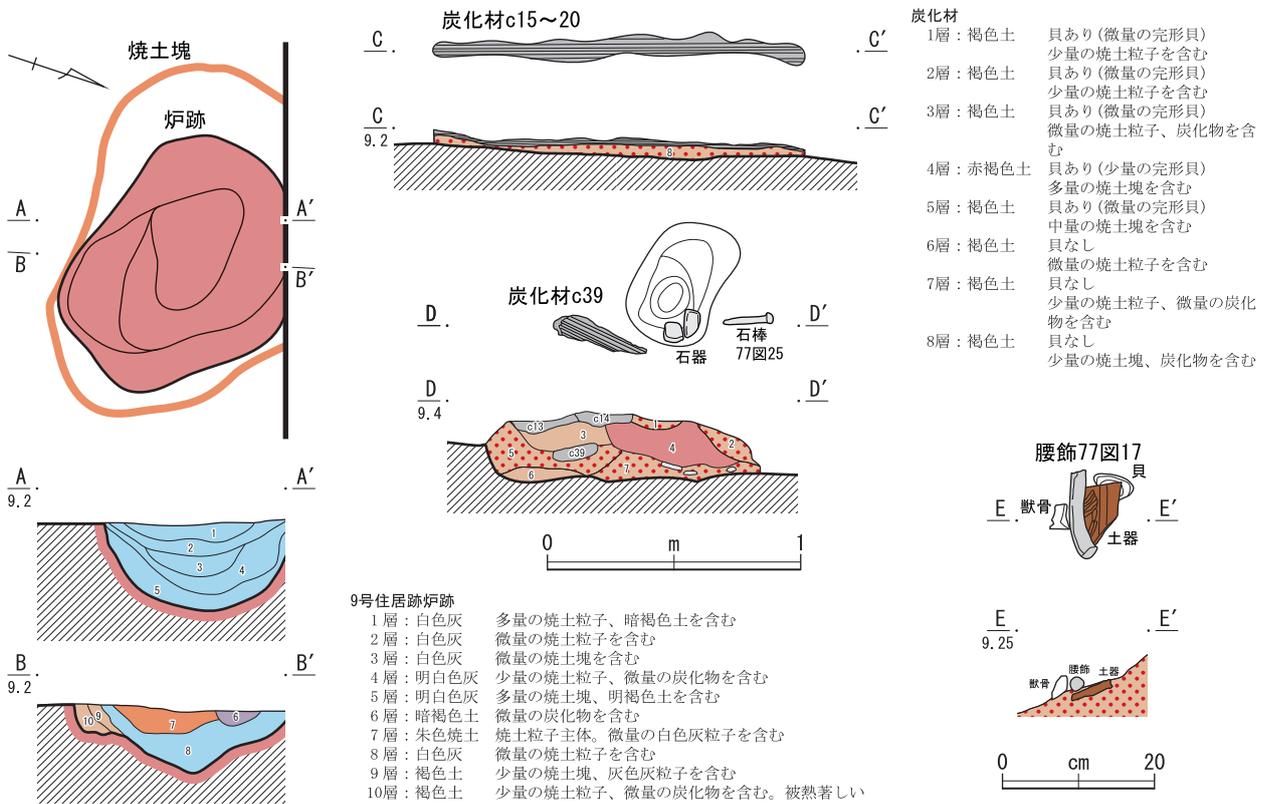
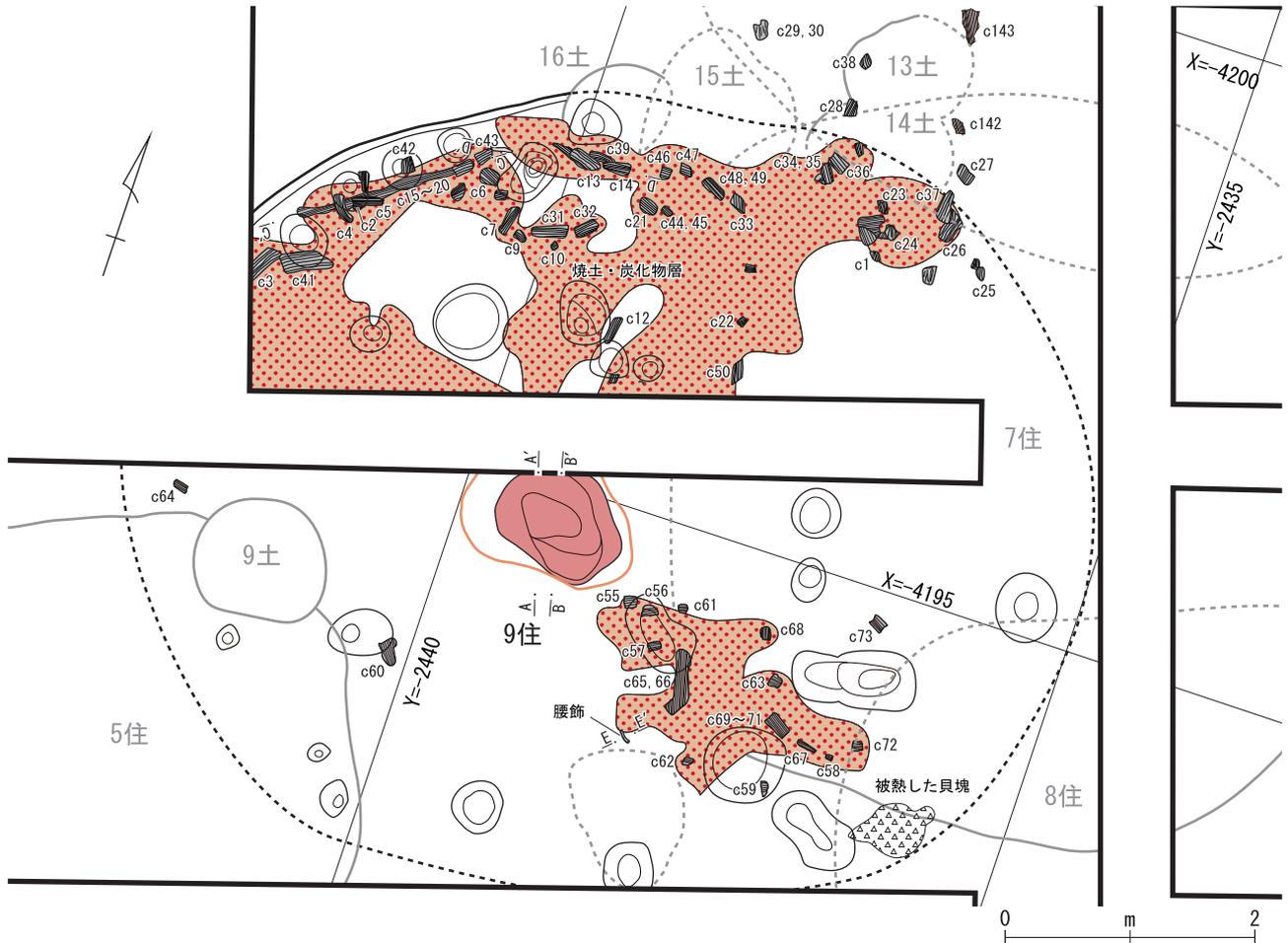
1号土坑の南方0.8mに位置し、径100cmを測る円形プランを呈す。確認面からの深度は80cmを測り、その断面形態は1号同様に円筒形である。

3号土坑（第61図）

1号土坑の北東1.5mに位置し、径130cmを測る。平面形態は円形を呈し、確認面からの深度は140cmを測り、1、2号土坑同様に壁面が垂直に立ち上がる円筒形の断面形態である。

8号土坑（第50図）

11次C区に位置し、19号土坑に切られる新旧関係にある。平面形態は長楕円形を基調とし、長軸222cm、短軸112cm、検出面からの深さは77cmを測る。本土坑の覆土上面に2号灰溜りが構築される。



第60図 9号住居跡

9号土坑（第61図）

B区に位置し、5号住居跡の北東コーナーを切る新旧関係にある。10次試掘坑により上部が削平されるが、平面形態は円形を呈し、径は101cmを測る。深さは110cmまで掘り下げたが、著しい湧水により未完掘である。北壁や東壁でオーバーハングする断面形態から、フラスコ形土坑と捉えられる。

10号土坑（第50図）

E区に位置し、8号住居跡と重複し、10号住居跡に切られる新旧関係にある。平面形態は略円形を呈し、径165cm、検出面からの深さは92cmを測る。

11号土坑（第50図）

F区に位置し、8、10号住居跡と重複関係にある。平面形態は略円形を呈し、調査し得た規模は径145cm、検出面からの深さ118cmを測る。底面立ち上がりや壁面の一部が膨らむフラスコ形土坑である。

12号土坑（第50図）

B区に位置し、9号住居跡に切られる新旧関係にある。楕円形プランを呈し、確認規模は長軸120cm、短軸90cmを測る。

13号土坑（第50図）

A区に位置し、6、7号住居跡と重複し、14号土坑に切られる新旧関係にある。平面形態は円形を呈し、径102cm、検出面からの掘下げは23cmに止まり、未完掘にある。覆土上面には灰塊が広がり、1号灰溜りが本土坑上面にまで継続されていたことが窺える。

14号土坑（第50図）

A区に位置する。6、9号住居跡と重複し、13号土坑を切り、7号住居跡に切られる新旧関係にある。平面形態は楕円形を呈し、長軸119cm、短軸94cm、検出面からの掘下げは51cmに止まり未完掘である。

15号土坑（第50図）

A区に位置し、7、9号住居跡、16号土坑と重複する。確認規模は長軸140cm、短軸120cmを測る楕円形プランである。

16号土坑（第50図）

A区に位置し、15号土坑と重複、9号住居跡を切る新旧関係にある。第1面で検出し、平面形態は円形を呈し、径90cm、深さ8cmの浅い皿状の断面形態である。

17号土坑（第50図）

F区に位置し、平面形態は楕円形を呈し、確認規模は長軸130cm、短軸100cmを測る。

18号土坑（第50図）

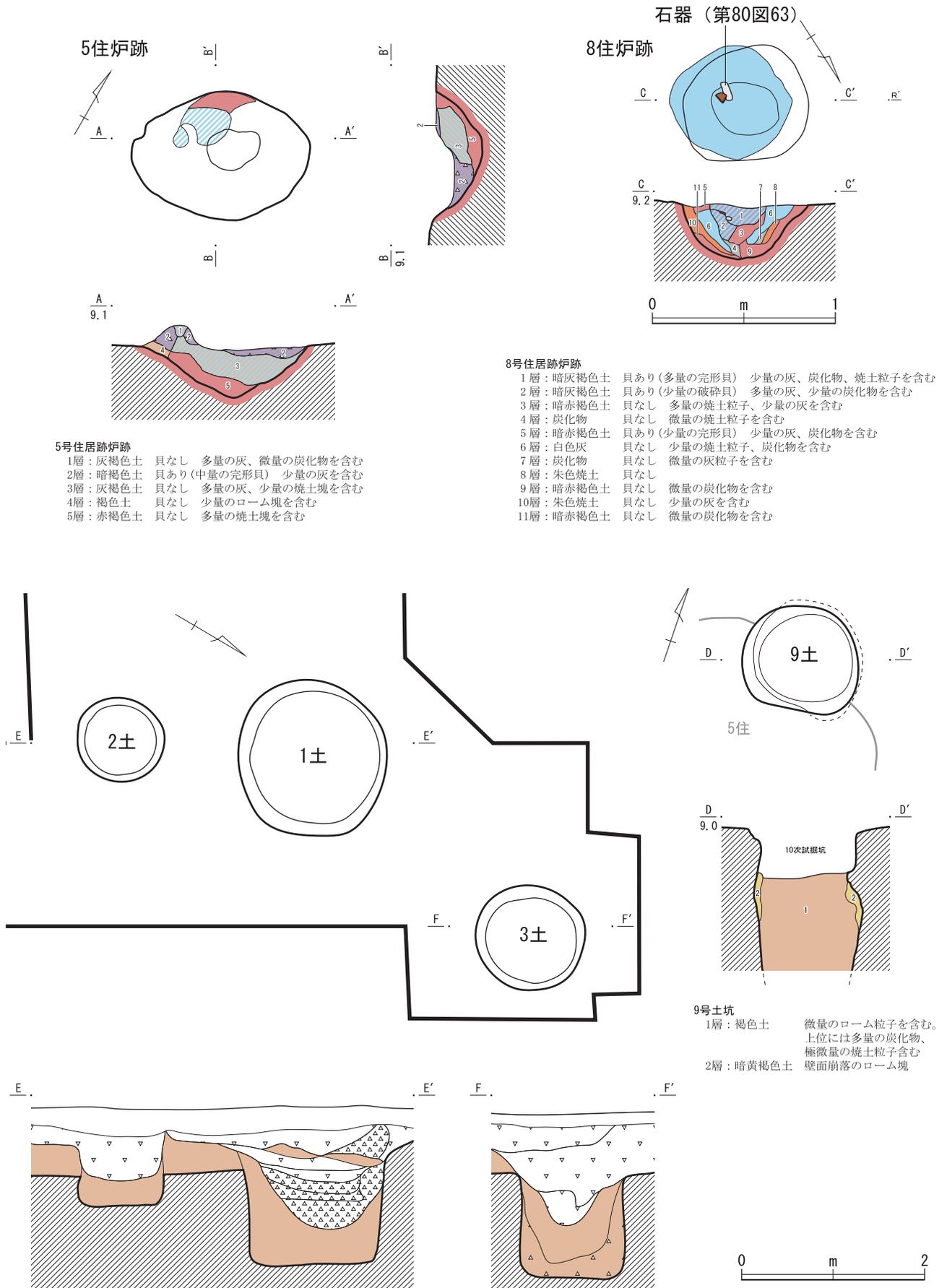
B区南東部及びC区北東部に跨り、8号住居跡と重複関係にある。平面形態は楕円形を呈し、確認規模は直軸160cm、短軸50cmを測る。

19号土坑（第50図）

C区東側に位置し、8号土坑を切る新旧関係にある。平面形態は歪な楕円形を呈し、長軸286cm、短軸116cm、確認面からの深さは66cmで、南東にはテラス部をもち、北東側はフラスコ状の掘込みとなる。本土坑の埋積過程で4号焼土跡が構築された。

20号土坑（第50図）

C区中央に位置する。平面形態は円形を呈し、長軸152cm、短軸138cm、確認面からの深さは69cmを測る。埋積過程で3号灰溜りが構築され、灰層の集積が観察された。



第61図 5、8号住居跡炉跡、1~3、9号土坑

21号土坑（第49図）

C区南東部に位置する。平面形態は楕円形を呈し、確認規模は長軸163cm、短軸20cmを測る。

22号土坑（第50図）

D区中央南側に位置し、10号住居跡と重複関係にある。平面形態は円形プランで、調査し得た規模は長軸66cm、短軸64cm、確認面からの深さを23cmを測る。

23号土坑（第50図）

D区西側に位置し、7号住居跡を切る新旧関係にある。6号住居跡の内部施設とも推定され、平面形態は円形を呈す。長軸96cm、短軸81cm、確認面からの深さ22cmを測る。

24号土坑（第50図）

D区西側に位置し、7号住居跡を切る新旧関係にある。平面形態は楕円形を呈し、長軸100cm、短軸72cm、確認面からの深さ13cmを測る。

（岡本・中野・森山）

（8）遺物

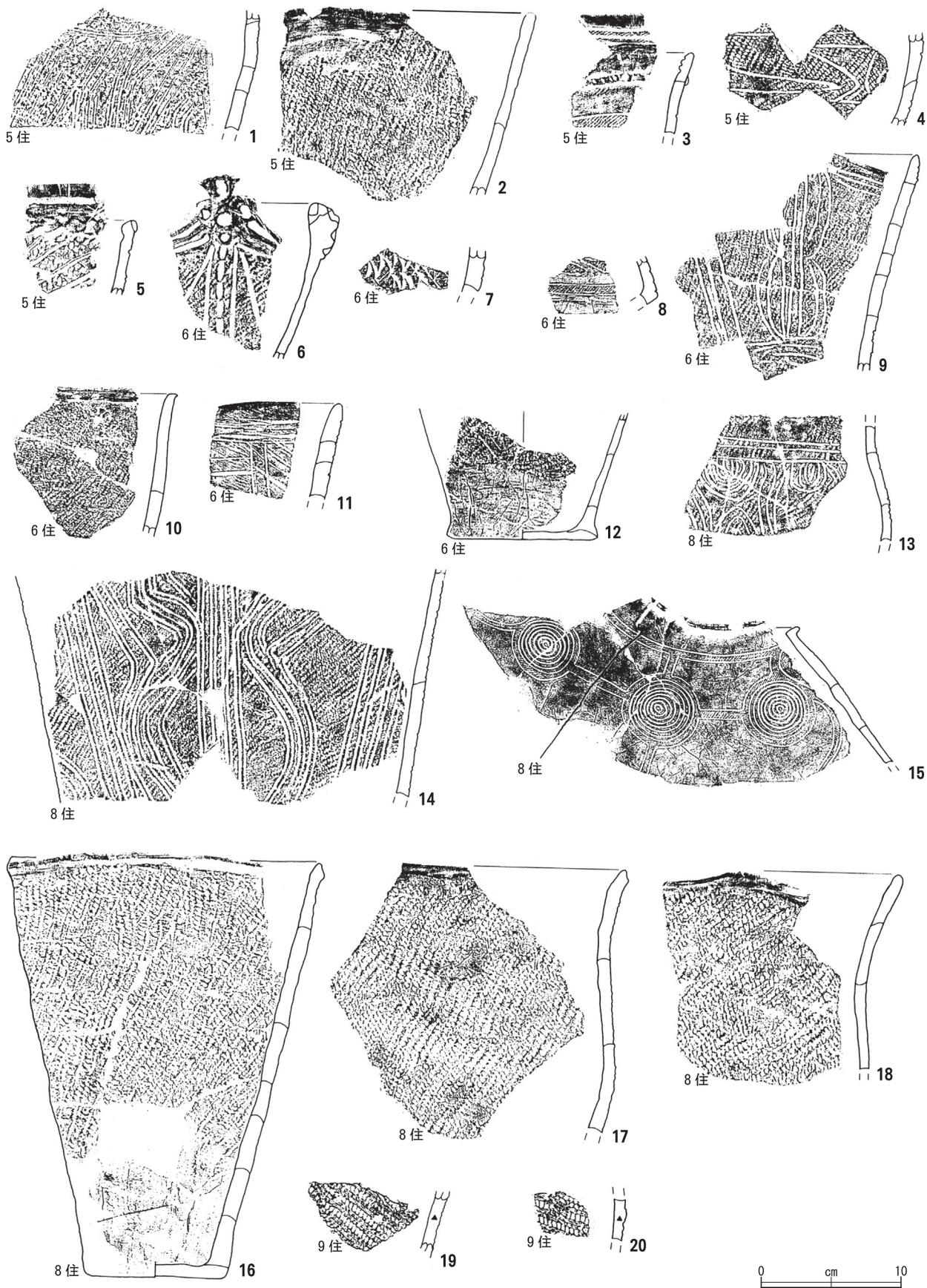
11次調査出土土器（第62～68図）

1は5号住居跡、2～5は5号住居跡覆土上層の第VI層群から出土した。1は堀之内1式土器で、単節縄文LRを地文とし、多条の弧線文が垂下する。2は単節縄文LRが器面を覆う。3は加曾利B1式の精製土器で、外面は鎖状の隆帯と単節縄文LRが充填された横帯文、内面は多条の沈線が巡る。4は単節縄文LRを地文とし、対弧文が描出されることから、加曾利B式土器にあたろう。5は加曾利B式の粗製土器で、口唇部直下に紐線文が巡り、単節縄文RLを地文として条線文が器面を覆う。

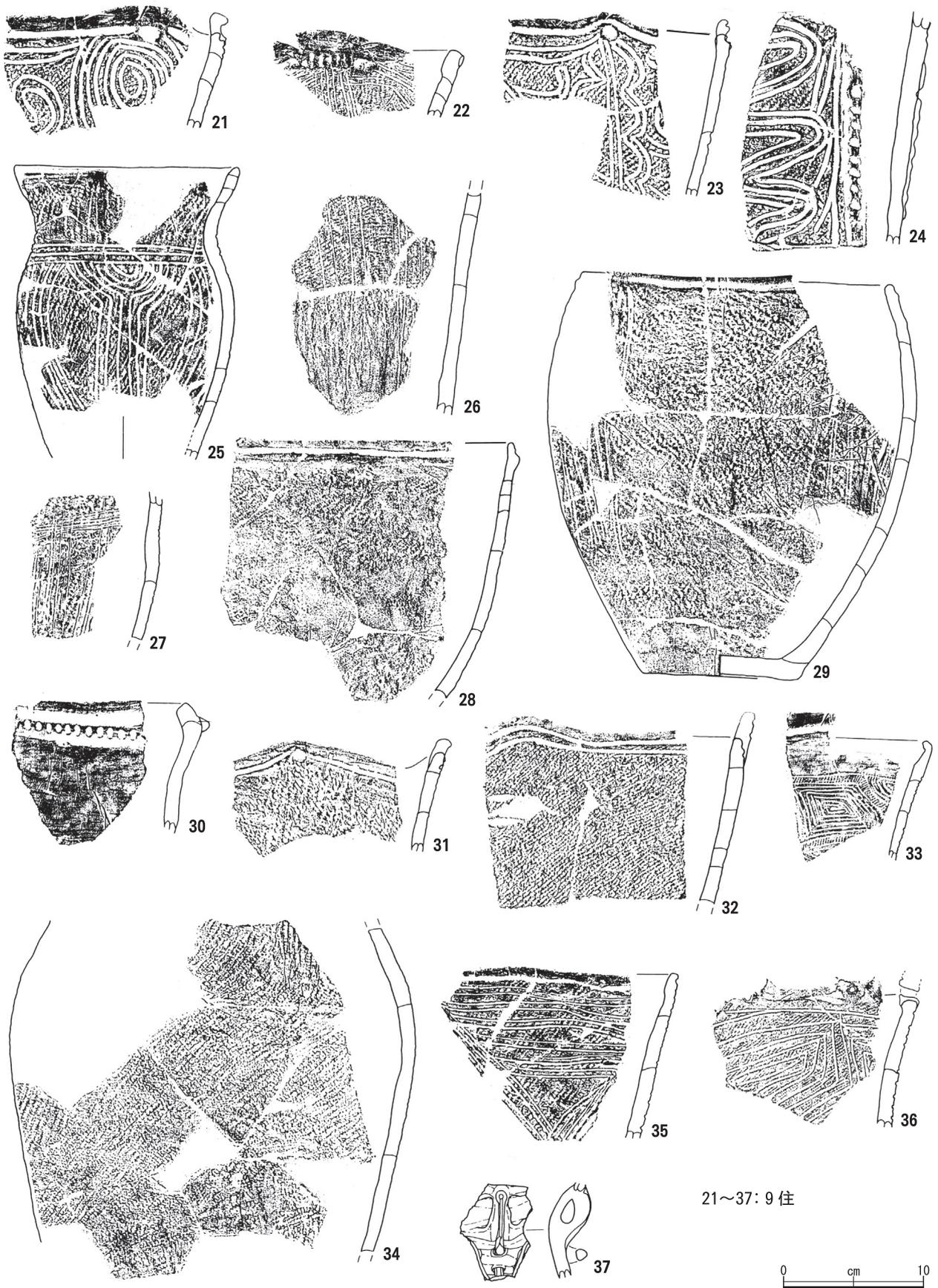
6、8は6号住居跡、7、9～12は6号住居跡覆土上層の第VIII層群から出土した。7は前期後半の浮島式土器で、貝殻腹縁文が器面を覆う。6、9、11は堀之内1式土器で、刺突や平行沈線、レンズ状文が垂下する。8は堀之内2式の注口土器の胴部上半部で、単節縄文LRが充填された三角文が横位に展開する。10、12は単節縄文LRが器面を覆い、堀之内式土器の範疇で捉えられる。

13～18は8号住居跡から出土した。13～15は堀之内1式土器で、13は胴部に多条の弧線文や蛇行沈線が描出される。14は平行沈線による縦位区画内に蛇行沈線が垂下する。15は注口土器の口縁部付近で、単節LRが充填された縄文帯が、多条の円文を連結する。16～18は単節縄文LRが器面を覆うもので、堀之内式土器の範疇で捉えられる。16は口径22.5cm、器高30cmを測る。

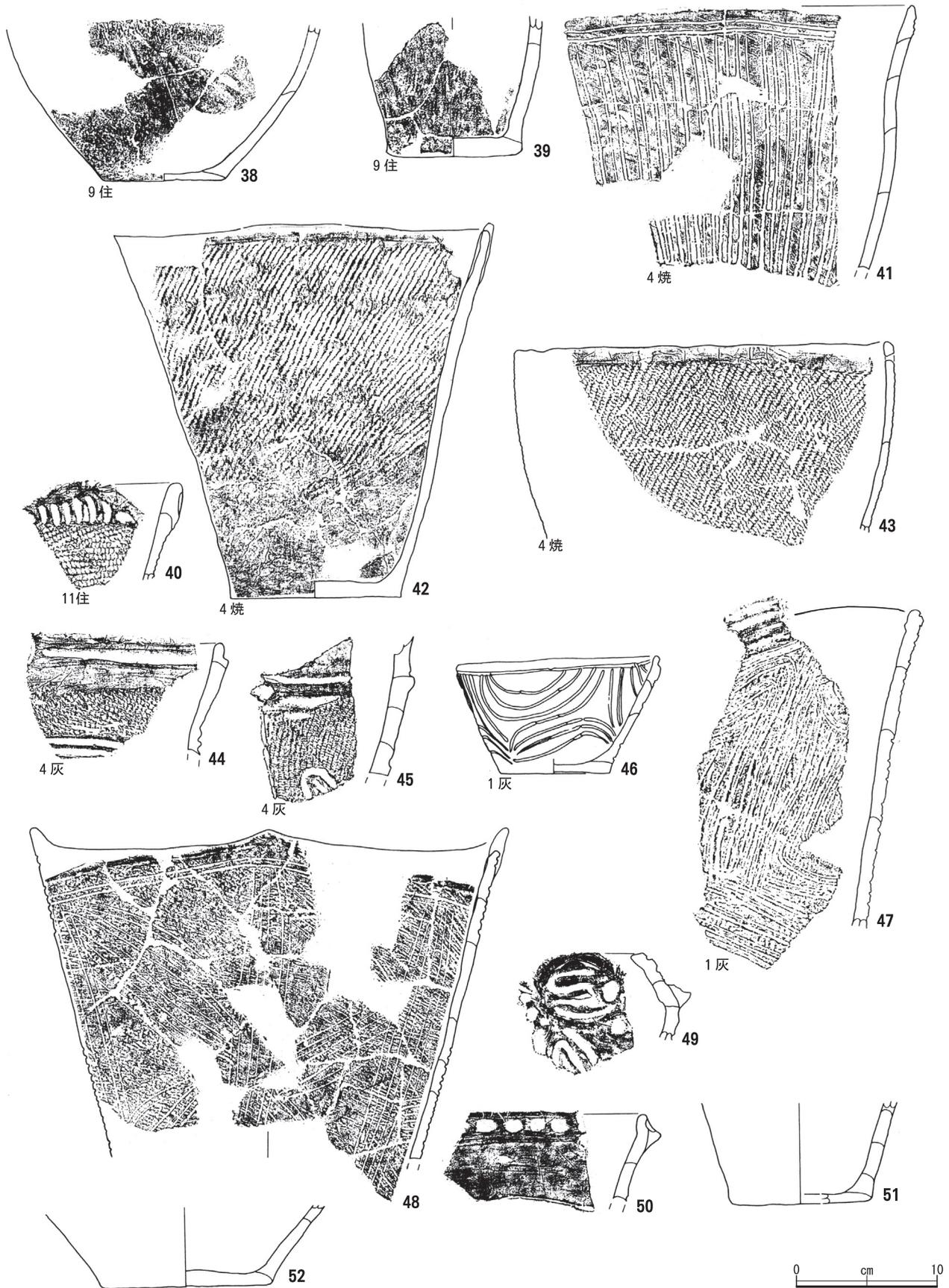
19～21、23、27、33は9号住居跡、22、25、26、28、30、32、34～36、38、39、67は9号住居跡焼土層の上層の褐色土、24、31、37は褐色土を掘り込む第VIII層群から出土した。19、20は黒浜式土器で、原体は単節LRとRLをRに燃った正反の合である。21～39は堀之内式土器である。21～24、26、29は単位文や区画文が口縁部から垂下し、21は渦巻文、22、26、29は多条の平行沈線、23は平行沈線と相対する蛇行沈線、24は刻目をもつ隆帯を描出する。29は口径22cm、胴部で最大径25.5cm、器高28.5cmである。25は口径16cm、残存器高21cmを測り、単節縄文LRを地文とし、頸部を巡る沈線から弧線文が垂下する。27は櫛描文が描出される。28、30～32は単節LRの地文縄文もしくは無地文の土器で、口唇部直下に沈線や刺突をもつ隆帯が巡る。33、35、36は口縁部から胴部上半にかけて、三角形や四角形の幾何学文が横位に展開するものである。33、36は単節RLの充填縄文、35は地文縄文である。34は29と同様に胴部中央で最大径28.5cmを測り、単節RLの斜縄文が器面を覆う。37は把手である。67は胴部上半に単節縄文LRを地文とし、弧線文で描く三角文が横位に展開する。21～32は堀之内1式、33、35、36、67は堀之内2式、他は堀之内式土器の範疇と捉え



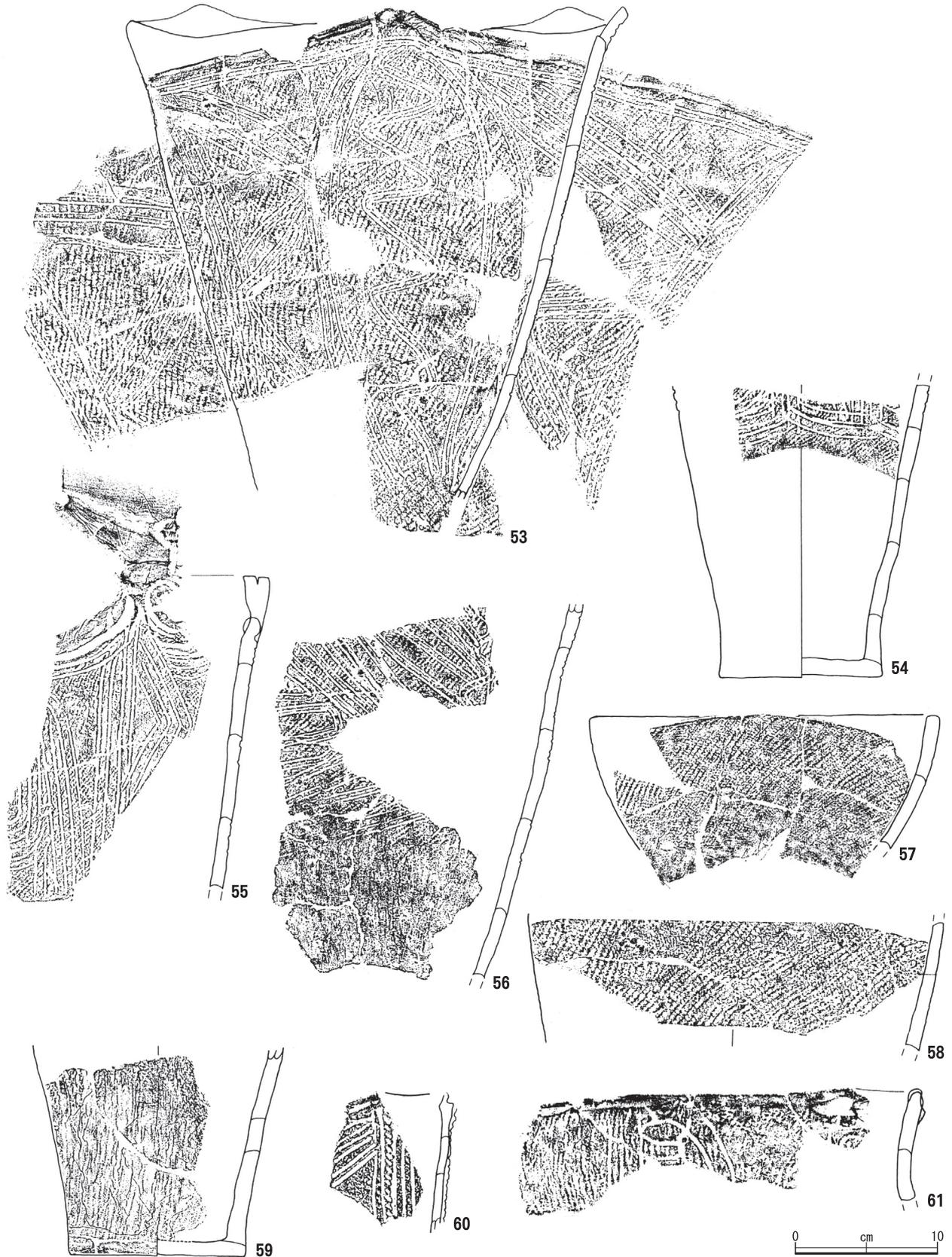
第62図 南部11次調査出土土器 (1)



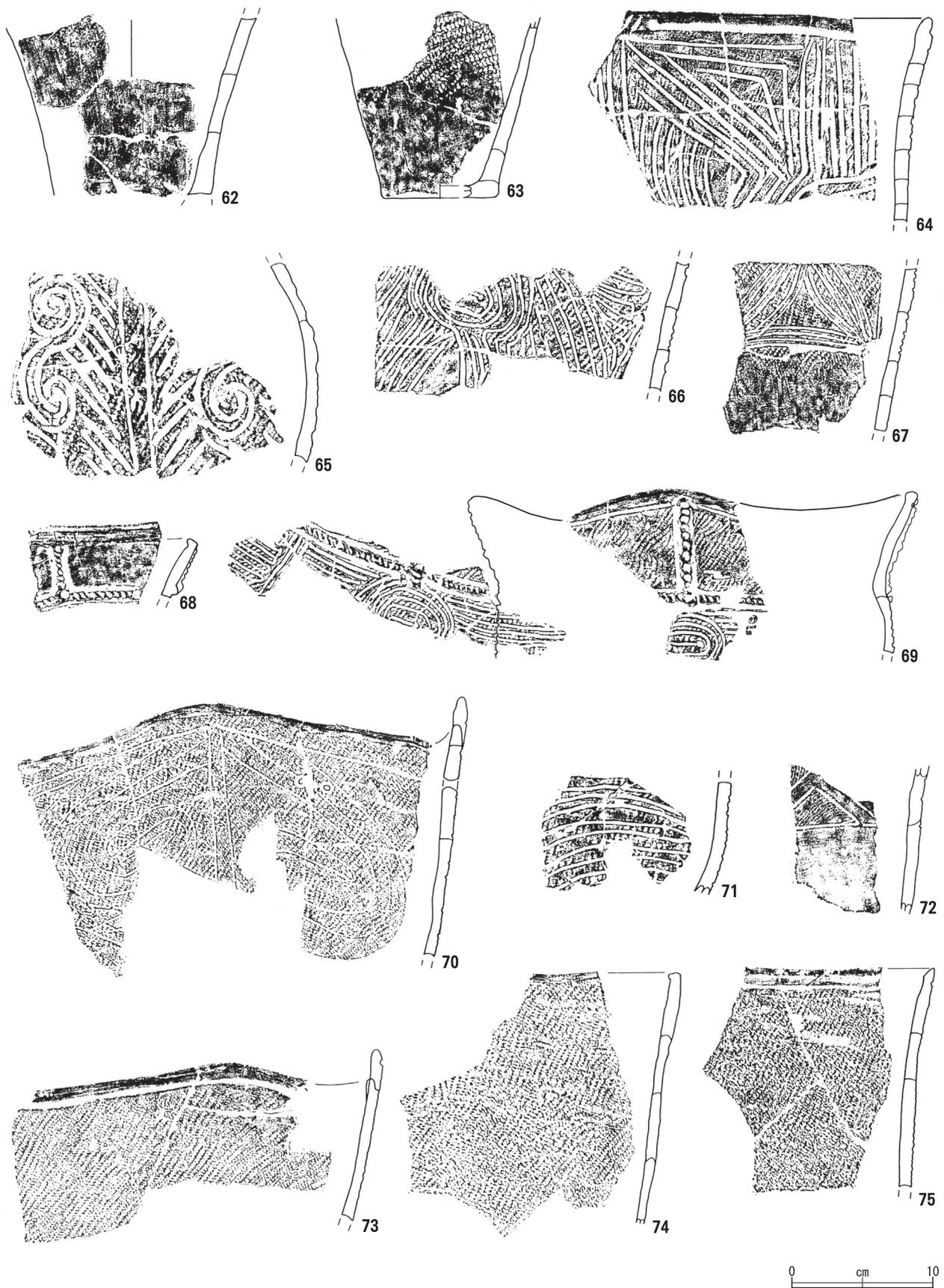
第63図 南部11次調査出土土器 (2)



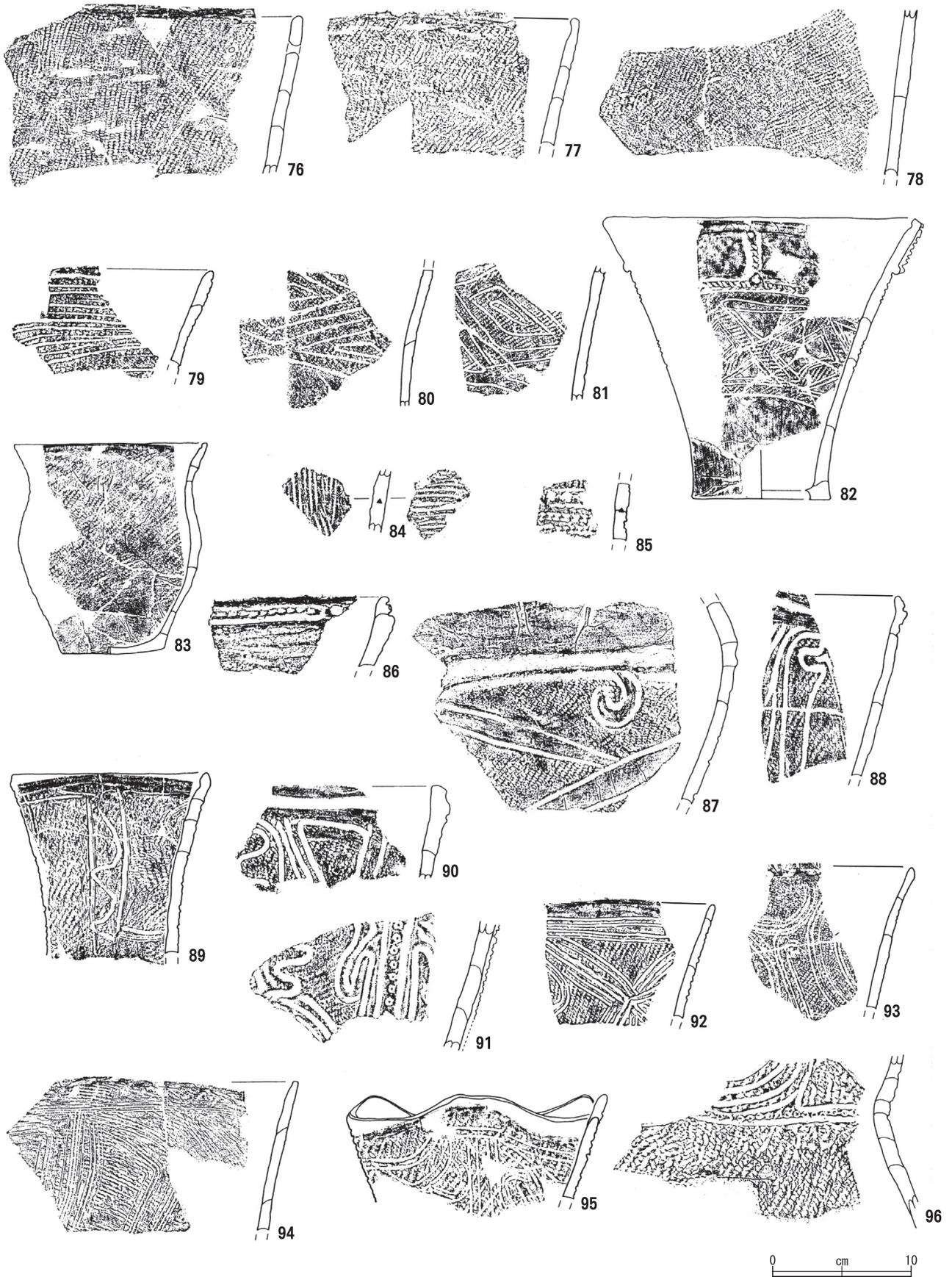
第64図 南部11次調査出土土器 (3)



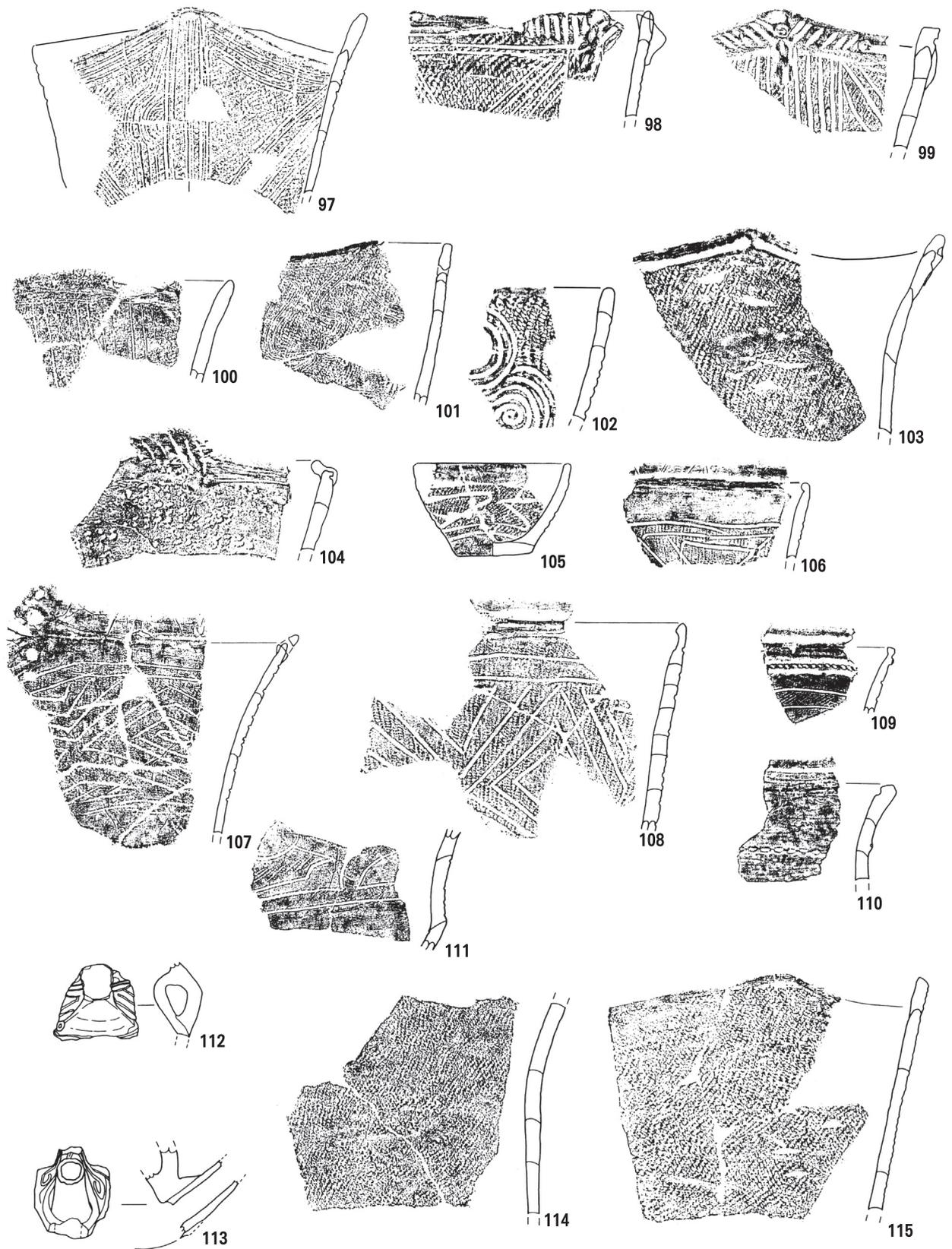
第65図 南部11次調査出土土器 (4)



第66図 南部11次調査出土土器 (5)



第67図 南部11次調査出土土器 (6)



0 cm 10

第68図 南部11次調査出土土器 (7)

られる。40は11号住居跡から出土した堀之内式土器で、波頂部には条線が加えられる。

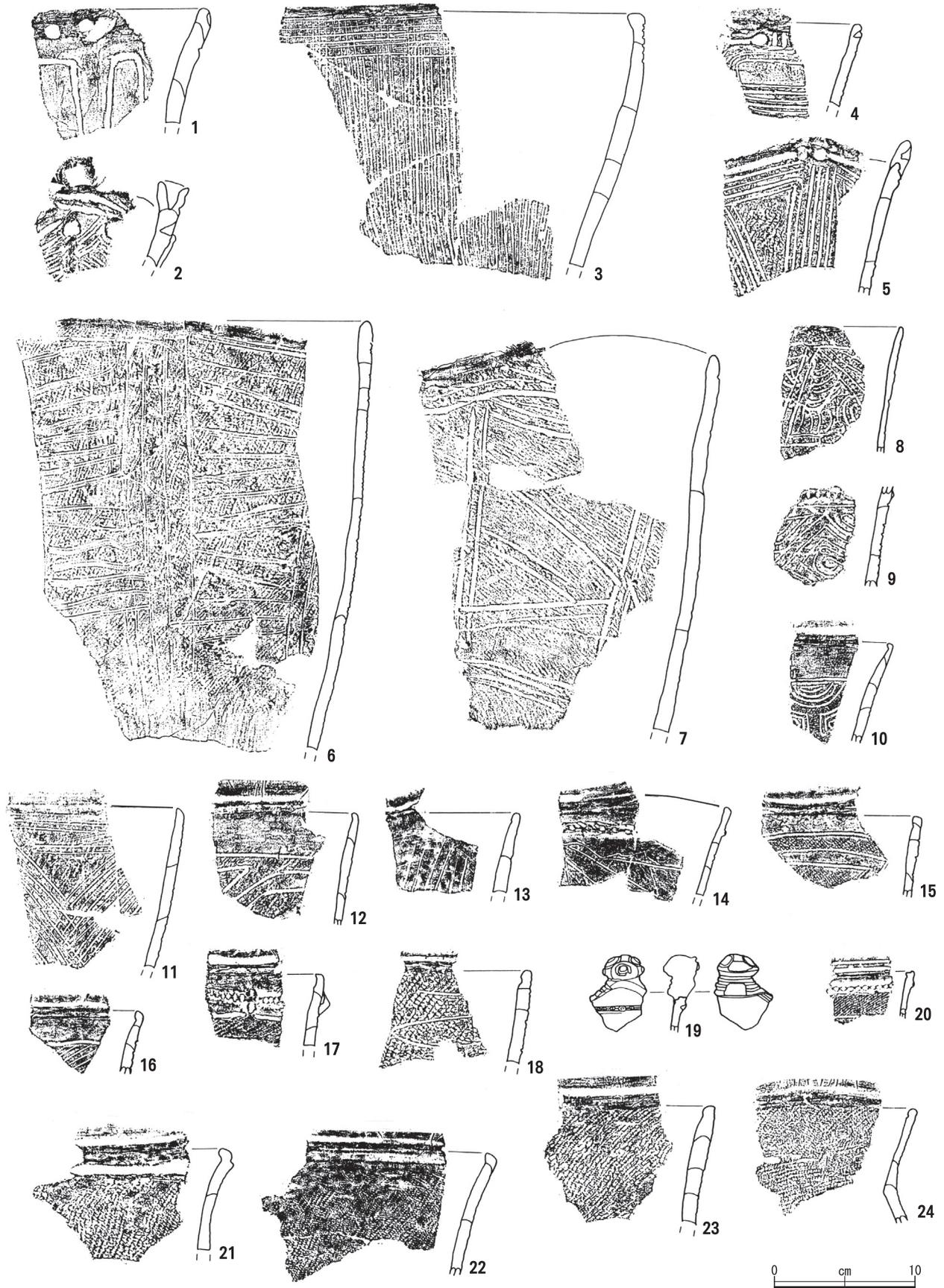
41～43は4号焼土跡から出土した。41は堀之内1式土器で、櫛描状に多条の沈線が器面を覆う。42、43は堀之内式土器で、単節縄文LRが器面を覆う。42は4号焼土跡火床面付近に埋設された深鉢形土器、口径26.5cm、器高27cmを測る。44、45は4号灰溜り、46、47は1号灰溜りから出土した堀之内1式土器である。44は単節縄文RLを地文とし、口唇部直下に凹線状の沈線と幅狭な無文帯、頸部に沈線が巡る。45は口縁部に無文帯、頸部に沈線と隆帯が巡り、胴部には蛇行沈線が垂下する。46は口径14cm、器高8cmを測る小型の鉢形土器で、上下に対向する弧線文を描出する。幾何学文が横位に展開する堀之内2式とも考えられるが、口唇部直下に巡る沈線の存在や、文様帯の下端が区画されていないことから、堀之内1式の深鉢形土器にみられる、口縁部から胴部下半に多条の弧線文が垂下する文様が上下に圧縮されたものと捉え、堀之内1式の範疇に含めた。47は多条の蛇行沈線が器面を覆う。

48～52はE区の第XVI層群から出土した。48～50は堀之内1式土器で、48は口径33.5cm、残存器高23cmを測り、単節縄文LRを地文とし、波頂下に垂下する沈線間を蛇行沈線が連結する。49はS字状のモチーフが描出され、刺突が加えられる。50は口唇部直下に押捺が巡る。53～59はE区、60～63はF区の第XIV層群から出土した。53は口径35cm、残存器高33.5cmを測る。53～56、60、61は堀之内1式土器で、53～56、60は垂下する単位文や区画文間を蛇行沈線や渦巻文等で連結する。55は波頂部に突起をもち、61は蕨手文が垂下する。57～59、62、63は堀之内式土器の範疇で捉えられ、57～59、63の地文は単節LRの斜縄文である。64はD区第XII層群から出土した堀之内1式土器で、縦位区画文間を蛇行沈線が連結し、間隙に弧線文が充填される。65はD区第VII層群から出土した堀之内1式土器で、縦位区画内には渦巻文が連結し、間隙に斜位の条線を充填する。66、68～78はB、E区を中心に堆積する第II～IV層群から出土した。66、68～70は堀之内1式土器で、66は垂下する多条の弧線文等の単位文を蛇行沈線が連結する。68、69は口縁部に無文帯をもち、刻目をもつ隆帯が波頂部と頸部を連結し、69は胴部上半には渦巻文を描出し、間隙に条線を充填する。70は波頂下に平行沈線が垂下し、区画文には渦巻文が描出される。71は条線が器面を覆う。72は堀之内2式土器で、胴部上半に三角文が横位に展開し、単節縄文LRが充填される。73～78は堀之内式土器の範疇で捉えられ、単節縄文LRが器面を覆う。79～80はF区第XIV層群、82、83はC区第XV層群と、本調査区の南側で出土した。79は条線が器面を覆う。80～82は堀之内2式土器で、単節縄文LRが充填された三角文や菱形文が胴部上半に展開する。82は口径29cm、器高20cmを測り、口縁部に無文帯をもつ。83は口径13.7cm、器高15cmを測り、単節縄文LRが器面を覆う。

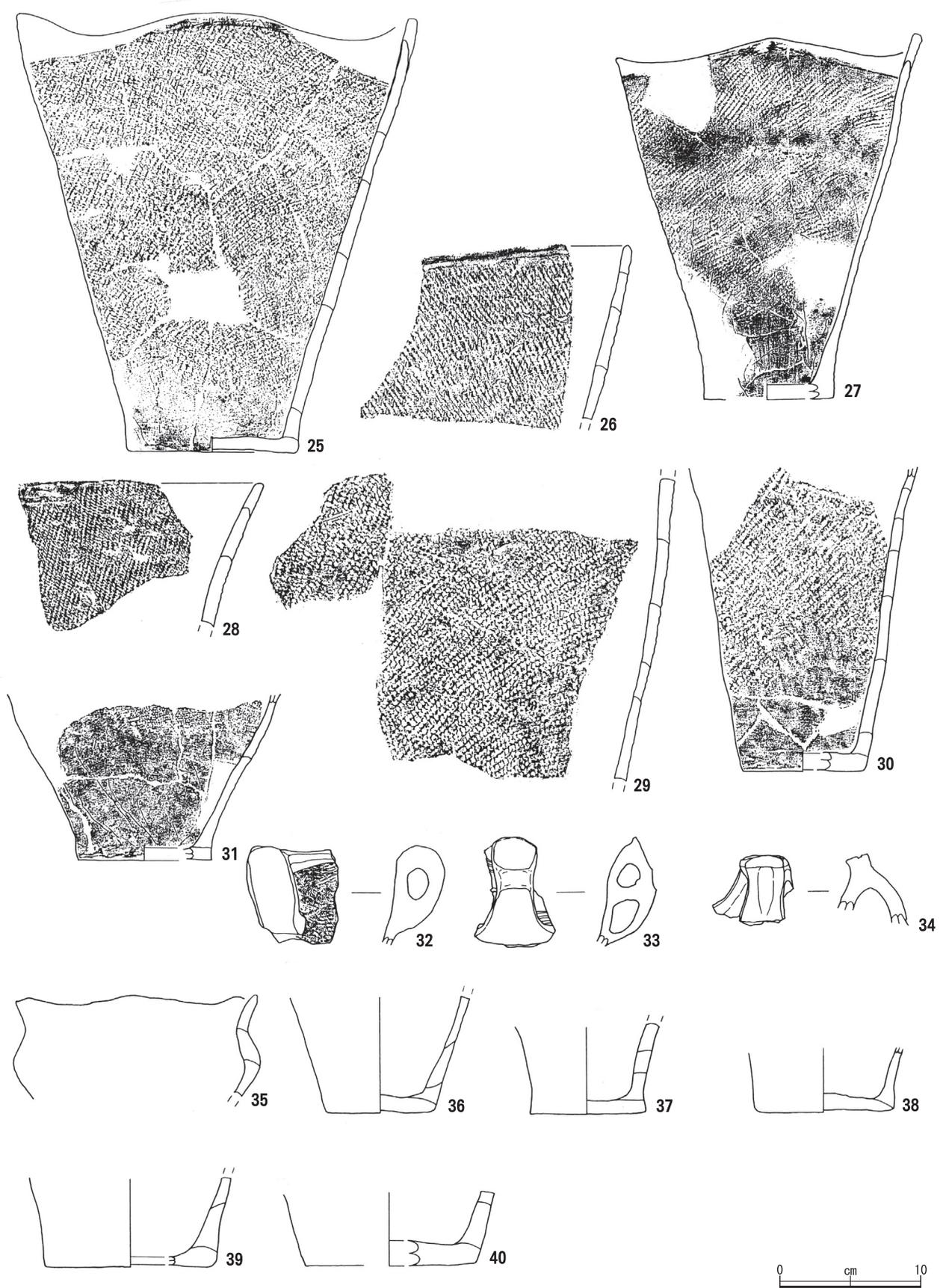
84～115は表土から出土した土器を一括する。84は早期末葉の条痕文系土器、85は前期中葉の黒浜式土器である。86～104は堀之内1式土器である。86、87は口縁部に無文帯をもち、86は口唇部直下に刺突が巡る。87は胴部に渦巻文が展開する。88～94は口縁部から単位文が垂下し、88、90、91は蕨手文、89～94は蛇行沈線が垂下する。95、97～99は波頂下に区画線が垂下し、斜位沈線で連結する。100、101は櫛描文、102は渦巻文が施文される。104は波頂部に突起をもつ。105～110は堀之内2式土器である。105は口径11cm、器高6.5cmを測るミニチュア土器で、Z字状の文様が横位に展開する。106～109、111は口縁部から胴部上半にかけて、三角文や菱形文が横位に展開する。112は把手、113は注口土器の注ぎ口、114、115は単節縄文LRが器面を覆う。

10次調査出土土器（第69、70図）

1～7は堀之内1式土器である。1は口唇部直下に指頭が巡り、逆U字状文が垂下する。2は波頂部に突起をもち、刺突が加えられる。3は櫛描文が器面を覆い、4は口縁部に無文帯をもつ。5～7は縦位の区画



第69図 南部10次調査出土土器 (1)



第70図 南部10次調査出土土器 (2)

文を斜位沈線が連結する。8～15は口縁部から胴部上半に三角文が横位に展開するもので、16、17も同様となる。18は幅広の蛇行沈線が垂下する。19、20は加曾利B式土器の精製土器で、19は波頂部の把手、20は鎖状の沈線と単節縄文LRが充填された横帯文が巡る。21～31は堀之内式土器の範疇で捉えられるもので、単節縄文LRが器面を覆う。25は口径28cm、器高31cm、27は口径21cm、器高25.5cmを測る。

2次調査出土土器（第71～73図）

1は1号住居跡床面から出土した、身と蓋を組み合わせる堀之内1式土器である。身、蓋ともに、口縁部には6ヵ所の紐孔が穿たれる。蓋は上部を欠損しており、外面は二条一組の隆帯が2ヵ所で垂下し、その上下端は橋状突起により連結される。隆帯による区画内は渦巻文を中心にし、その両脇に波頭状の三角形のモチーフが描出される。身は碗形で平底を呈し、内外面ともにミガキが顕著で黒色に研磨される。蓋は口径10.8cm、残存器高6.2cm、身は口径10.6cm、底径4.0cm、器高5.2cmを測る。

2～18はA、C、Dトレンチの遺構外から出土した。2～11は堀之内1式土器である。2は渦巻文が横位に展開し、3～5は口縁部に無文帯をもち、頸部から弧線文等の単位文が垂下する。6～9、11は口縁部から単位文や区画文が垂下し、6はH字状のモチーフ、7は蕨手文、8、11は沈線と刺突の区画文、9は多条のレンズ状文である。10は口縁部に菱形文を描出するが、口唇部直下に巡る沈線の存在と、文様帯下端が区画されないことから、堀之内1式の範疇で捉えた。12～15は堀之内2式土器で、12、13、15は口縁部から胴部上半にかけて三角文や菱形文が横位に展開する。14は幅広の蛇行沈線が垂下する。16、18は単節縄文RL、17は単節縄文LRが器面を覆い、16は口径31cm、残存器高20.5cm、17は口径18cm、器高29.5cm、18は26.5cm、残存器高38.5cmを測る。

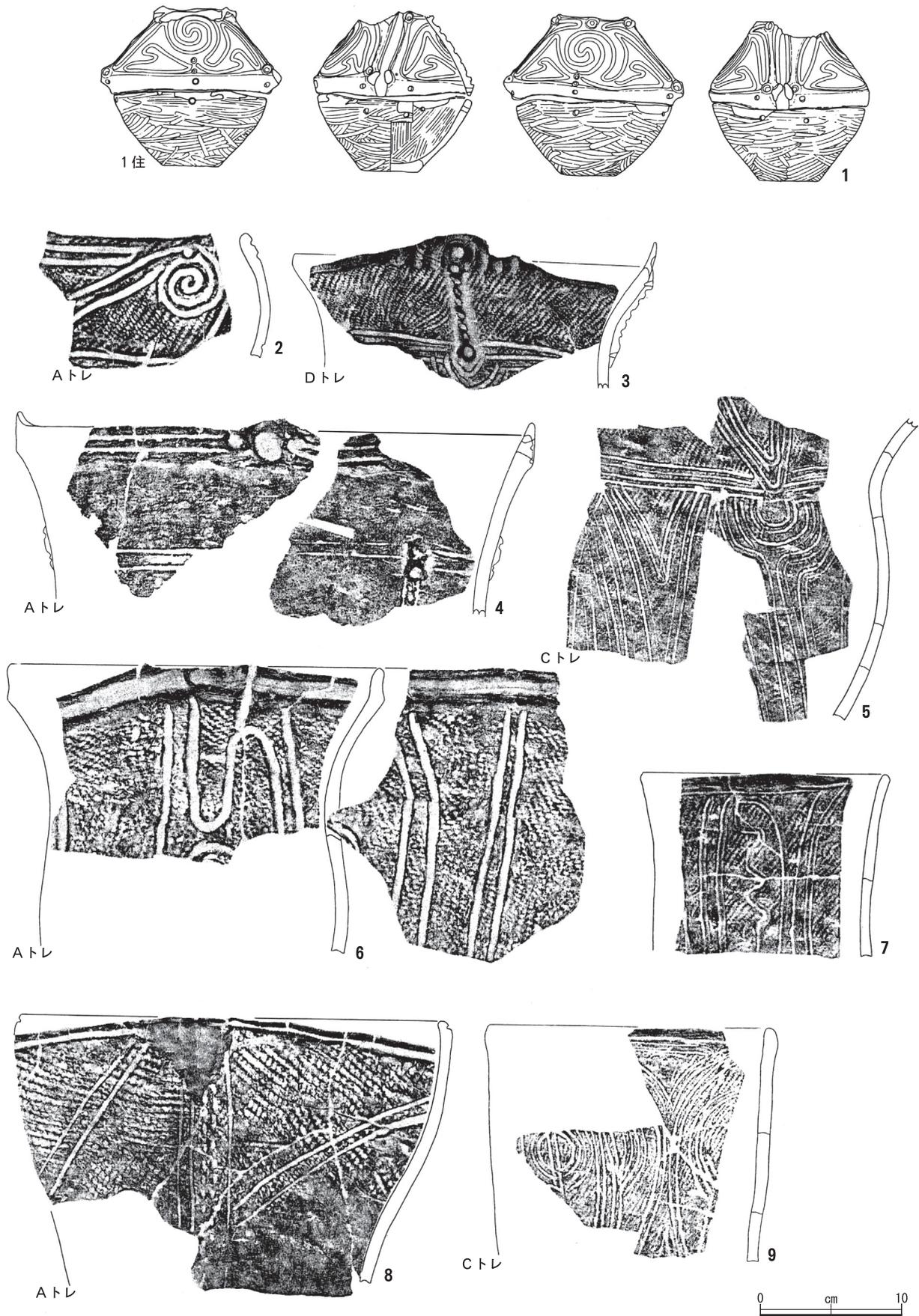
19～28はDトレンチからまとめて出土したもので、19～22は加曾利B1式、23～26は加曾利B2式土器である。19、20、23は精製の浅鉢形土器で、19は外面に単節縄文LRが充填された横帯文が多段に巡る。20は内面の口唇部直下に刺突や多段の沈線が巡り、沈線間には単節縄文LRや刻目が充填される。23は横帯文で上下を区画された文様帯にトの字文を描出し、単節縄文LRを充填する。21、22は精製の深鉢形土器で、口唇部上端に刻目が加えられ、21は外面に単節縄文LRが充填された横帯文、22は多条の沈線が巡る。内面はともに多条の沈線が巡り、刻目が加えられる。24～26、28は鉢形土器で、24、25は口縁部に刻目をもつ隆帯が巡り、胴部上半は矢羽根状の条線文が巡る。26は口縁部に格子目状、胴部上半に弧状の条線文が巡る。28は胴部に単節縄文LRが施文される。27は加曾利B式の粗製の深鉢形土器で条線文が器面を覆う。19は口径26.5cm、残存器高10cm、20は口径33.5cm、残存器高14.5cm、21は口径12cm、器高19.5cm、22は口径16cm、残存器高11cm、23は口径23cm、残存器高9cm、24は口径22.5cm、残存器高11cm、25は口径24cm、器高22.5cm、26は口径24cm、残存器高9cm、27は口径23cm、残存器高17.5cm、28は口径13cm、器高8.5cmを測る。

6次調査出土土器（第74図）

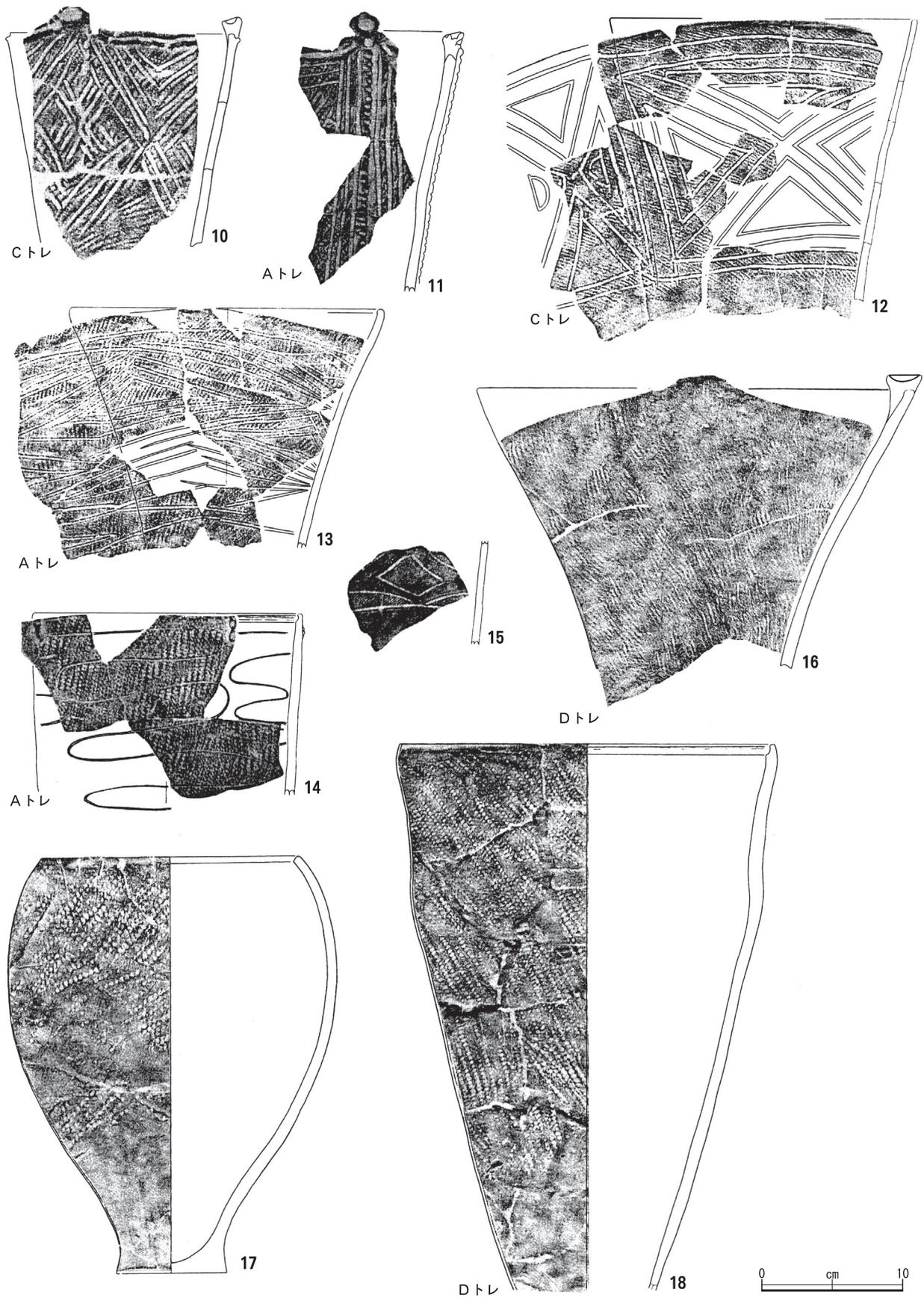
1、5は堀之内1式土器で、1は波頂部から蛇行沈線と平行沈線が垂下し、渦巻文を伴う。5は二条の縦位区画線が垂下し、区画内には蛇行沈線や三角文が描出される。2は堀之内2式土器で、口縁部は無文帯で刻目をもつ貼付文を付し、胴部上半は集合沈線による鋸歯状文が横位に展開する。7は鉢形土器で、胴部上半に単節縄文LRを充填した横帯文が巡る。1は口径24.5cm、残存器高28cm、2は口径35cm、残存器高22.5cm、3は最大径29.5cm、残存器高29.5cm、4は口径23.5cm、器高34cm、6は口径28cm、器高18.5cm、7は最大径26cm、残存器高13.5cmを測る。

1次調査出土土器（第75図）

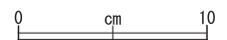
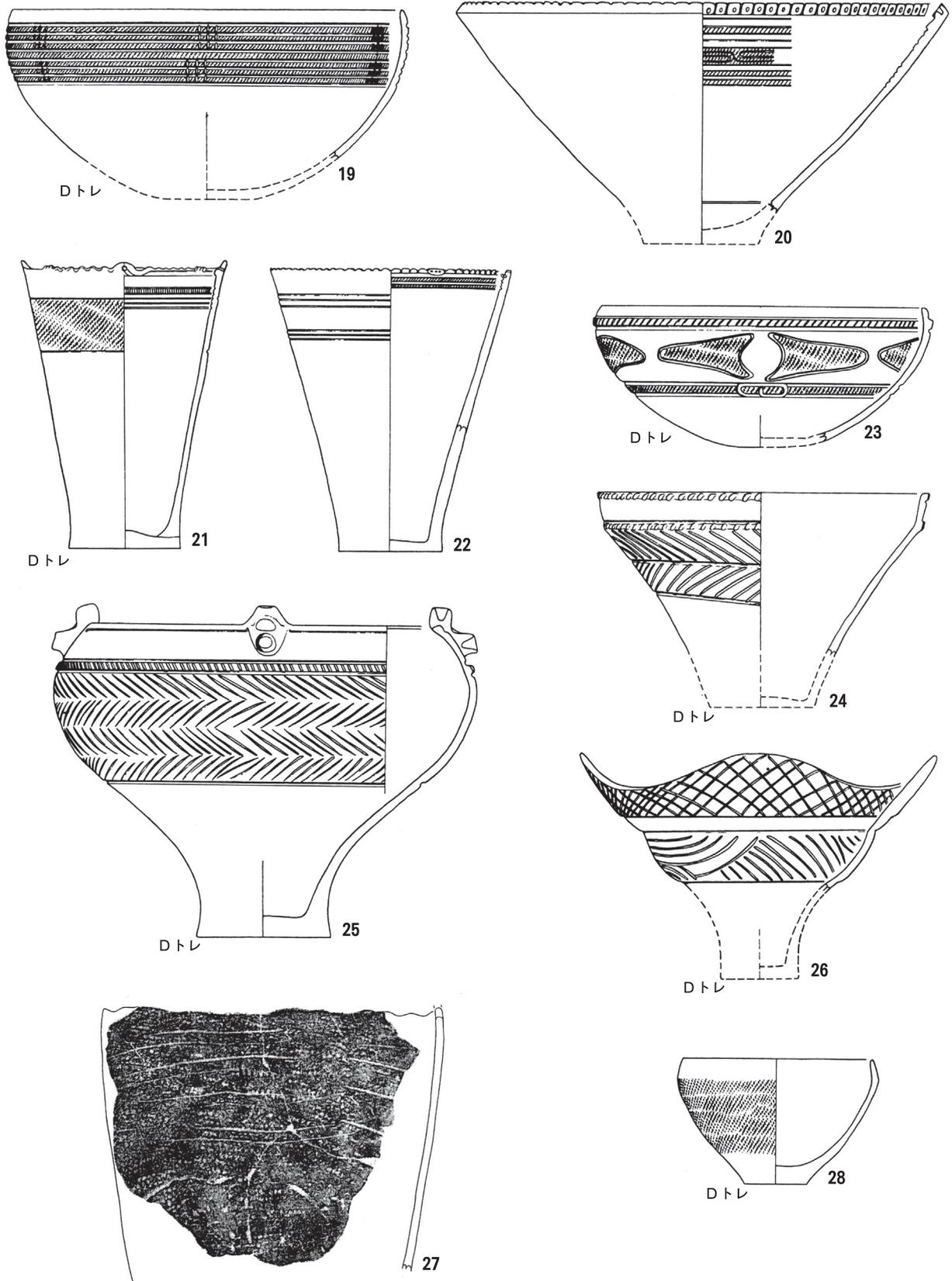
1～3、5は堀之内1式土器である。1は口縁部に無文帯をもち、胴部は単節縄文RLを地文として蕨手



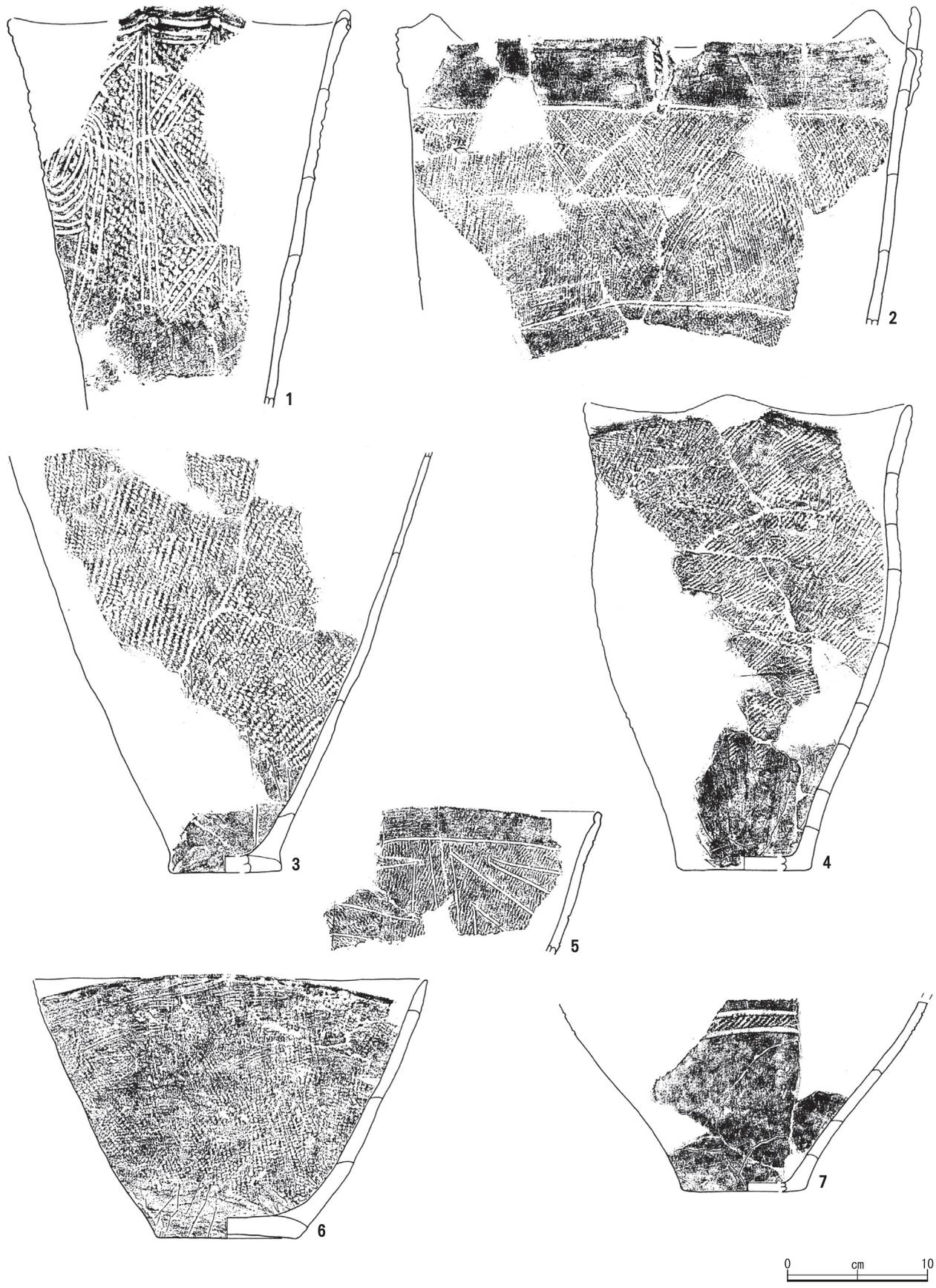
第71図 南部2次調査出土土器 (1)



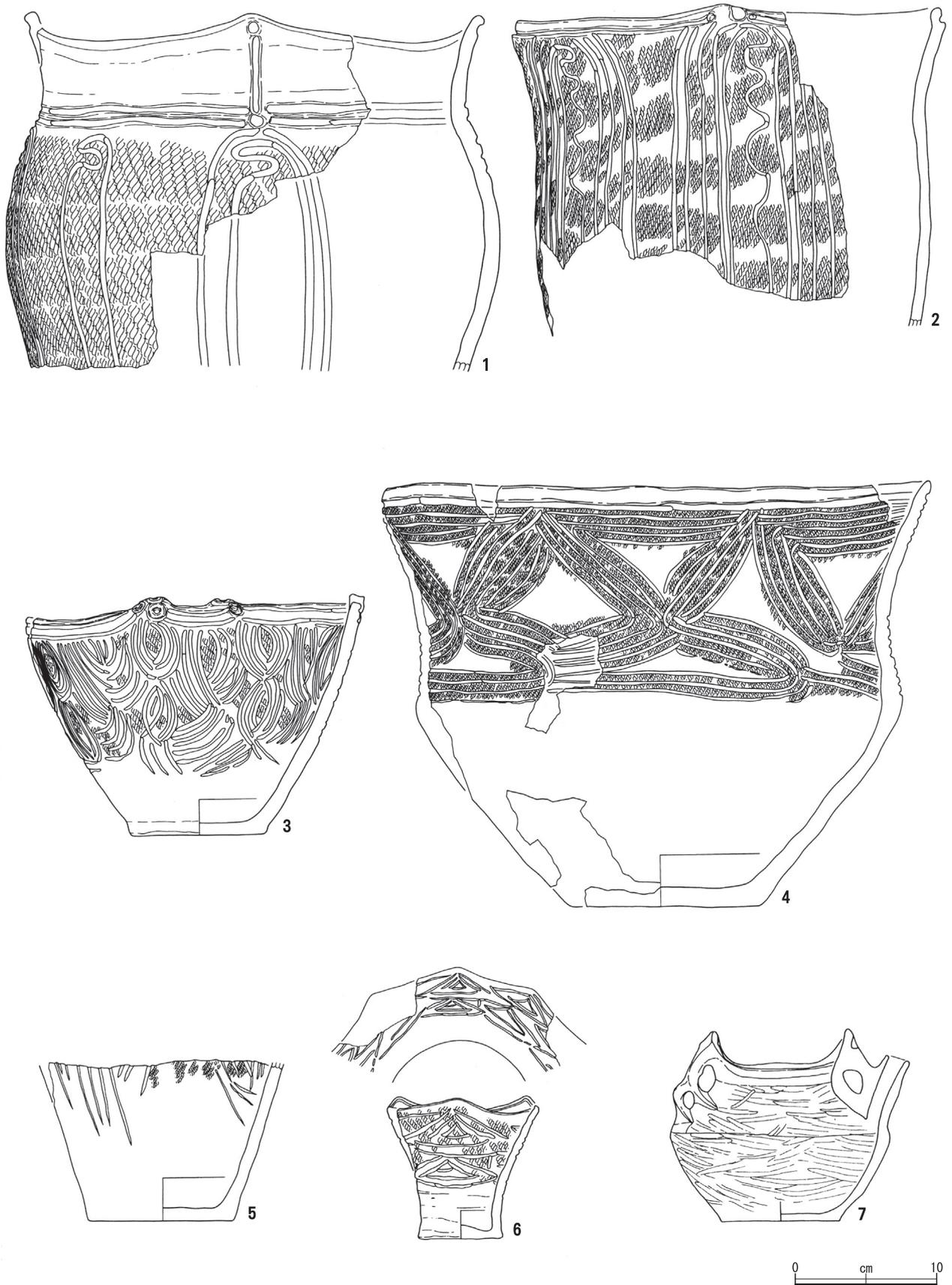
第72図 南部2次調査出土土器(2)



第73図 南部2次調査出土土器(3)



第74図 南部6次調査出土土器



第75図 南部1次調査出土土器

文が、2は単節縄文LRの地文に、蕨手文が垂下する。3は単節縄文RLを地文とし、多条のレンズ状文が垂下する。4、6は堀之内2式土器で、口縁部には三角文や菱形文が横位に展開する。4は単節LRの磨消縄文、6は単節RLを地文縄文とする。7は堀之内式の注口土器である。無文で、丁寧にミガキが施こされる。1は口径32.3cm、残存器高25cm、2は口径30.5cm、残存器高21cm、3は口径24cm、器高17cm、4は口径39cm、器高29.5cm、5は最大径17cm、残存器高11cm、6は口径10.5cm、残存器高10cm、7は最大径15.5cm、器高13.5cmを測る。

(森山)

2. 出土石器・その他の遺物 (第76～82図)

貝塚南部を対象とする2、6、10、11次の計4次にわたる調査で石器ならびに土製品は計153点が出土した。その内訳は、石鏃や磨製石斧、石錐をはじめ、植物採集具では打製石斧が18点、植物加工具の石皿・凹石・磨石・敲石が79点、漁具の浮子や土錘が16点、さらに装身具や骨角器、貝製品が19点を数える。また、剥片石器の素材となる石核は2点に止まり、前節の貝塚北部や東部と同様に、礫核素材の石器、殊に植物加工具が主体となる特徴が見出されるものとなった。その中で全容が判別する計98点を掲載した。

①石鏃 (第76図1～8)

計8点を図示するが、5点は器形特徴を提示するために表面採集資料も加えた。1は特に基部の抉りが深い凹基無茎にあり、背腹面共に細かな押圧剥離が器面を覆う。器体中軸からは左右非対称となる。2、3はやや浅い基部にあり、4は唯一の凸基有茎を呈す。基部の作出は左右非対称で断面形もやや歪む周縁調整が施されている。5は弱凹基、6は小型の平基、7は基部を欠損し、体部中央の左側縁に肩部が張る形状で主要剥離面を止める。8は片面加工で腹面に主要剥離面を残す製作途上である。今回の調査でまとまった点数が出土した北部では、凹基あるいは弱凹基の形態に限られたが、本地点では全てチャート製と同一の石材種でありながらも、器長や形態的にもバラエティに富む特徴にある。

②石錐 (9、10)

表面採集資料で、共に基部はやや歪む弱凹基の形態を呈すものである。9は体部中央が肥厚するものの、先端部には細かな押圧剥離が施される。10は左側縁を欠損し、基部が器長に比して幅広の形態にある。背腹面共に主要剥離面を止め、周縁加工が巡る。

③石核 (11、12)

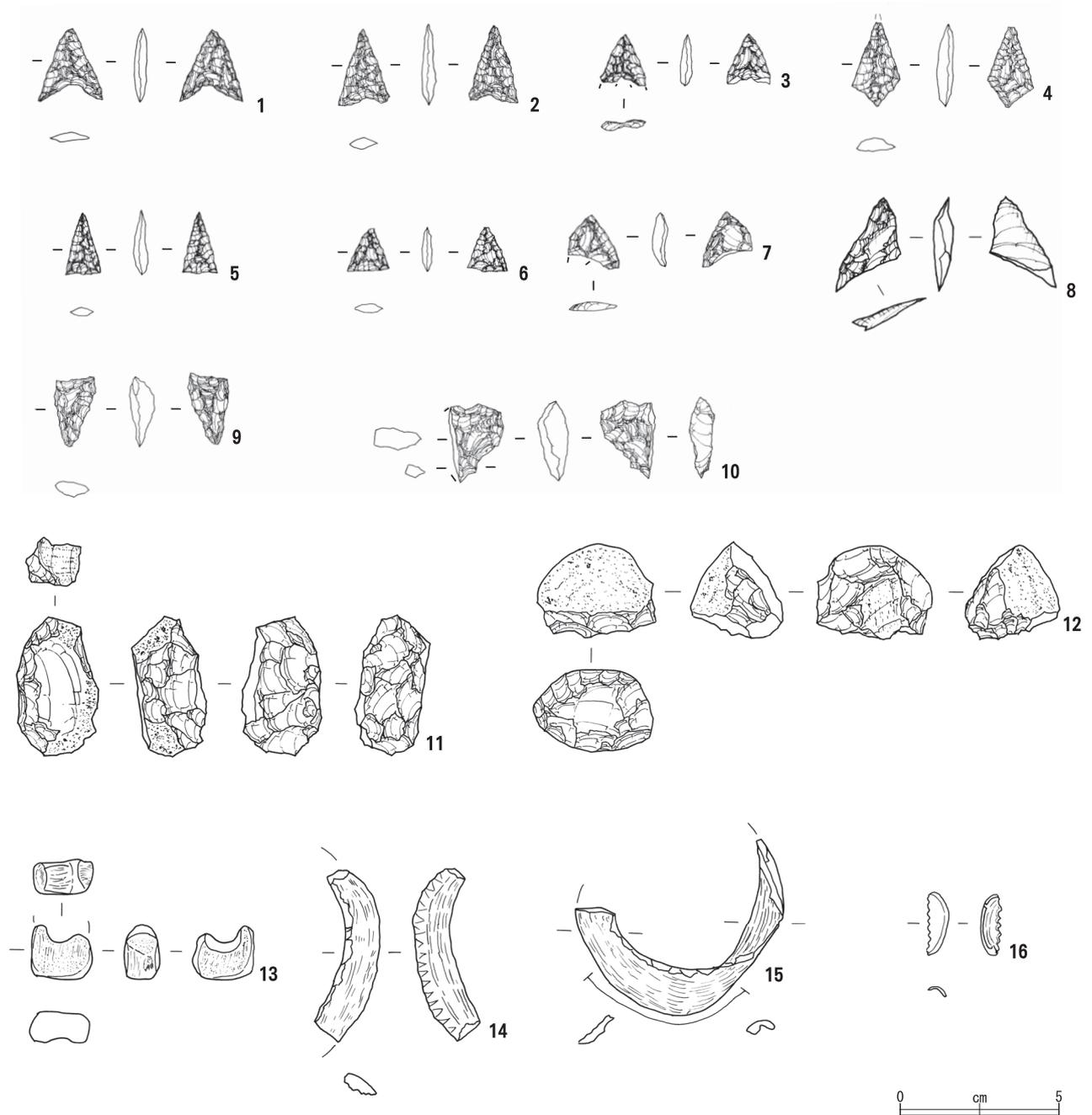
いずれもチャート素材で礫面を残す石核である。11は角柱状を呈し、頭部には節理面が、背面と右側縁に礫面を残す。その礫面の広がりからは小型の角礫を素材としたことが窺える。概ね長辺を軸に90°の打面転移を繰り返し、各面には頭部調整を止める。12も節理面と礫面を残す半円状を呈す。礫面の形状からは小型円礫を素材とし、半割面を頭部とする剥片剥離作業が観察される。なお、本地域から出土した剥片素材の石器群に加え、全ての剥片、細片の石材種を集計すると、チャート石材への依存率は76%と東部に次ぐ高率を示し、チャート石核の出土と併せて同石材の依存への高さが窺える。

④磨製石斧 (第78図32、33)

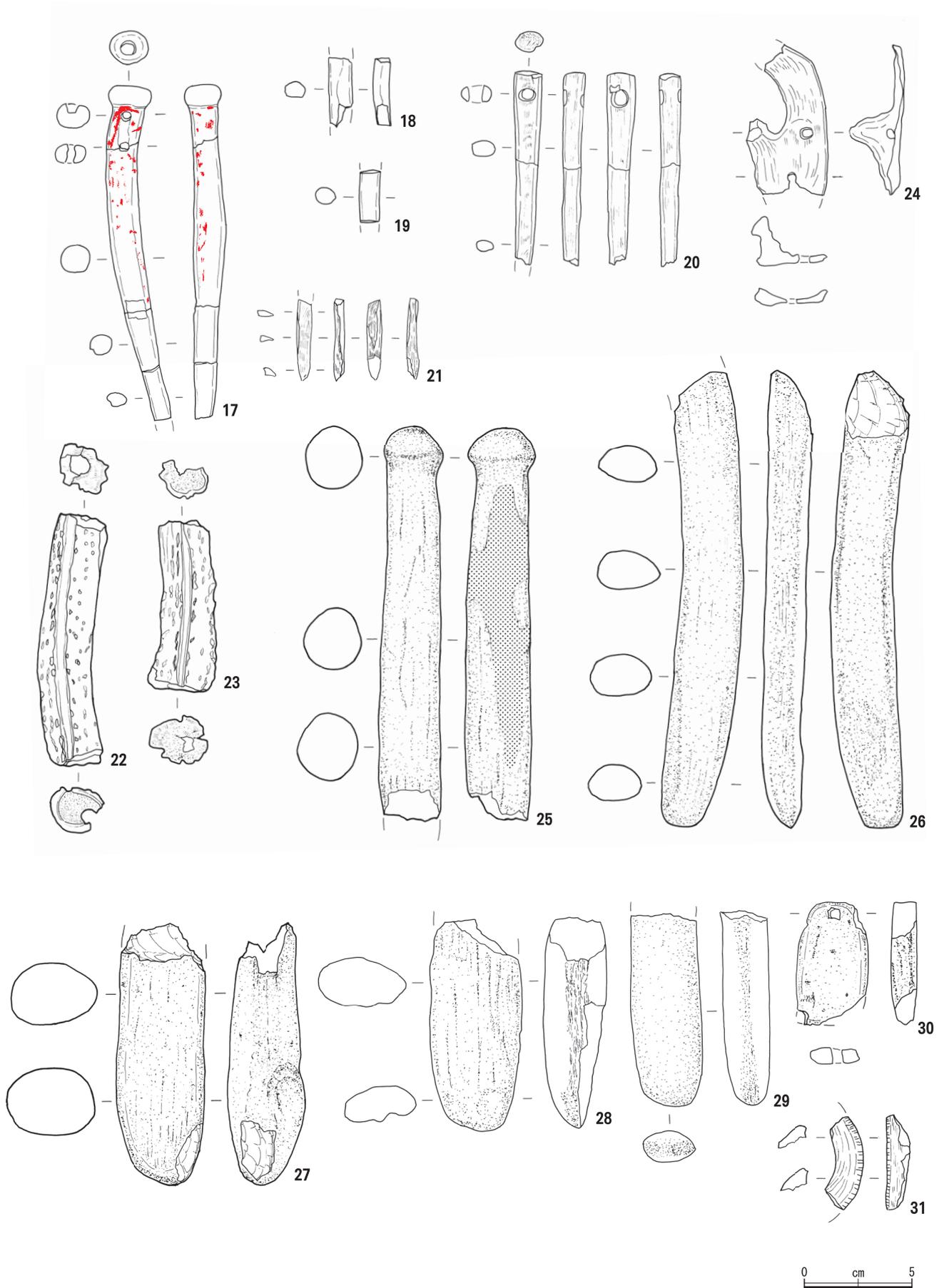
南部からは3点の磨製石斧が出土し、うち全容が判明する2点を掲載する。32は凝灰岩製の偏平礫を素材とした短冊形を呈す。刃縁部を主に研磨整形が、また、右側縁の背腹面には連続した敲打が施され、体部中央にスレが観察される。33は体部から基部にかけて大きく剥落する蛤刃を呈す定角式である。背腹面の礫面への研磨は顕著であり、右側縁にはスレを止める。

⑤打製石斧 (34～41)

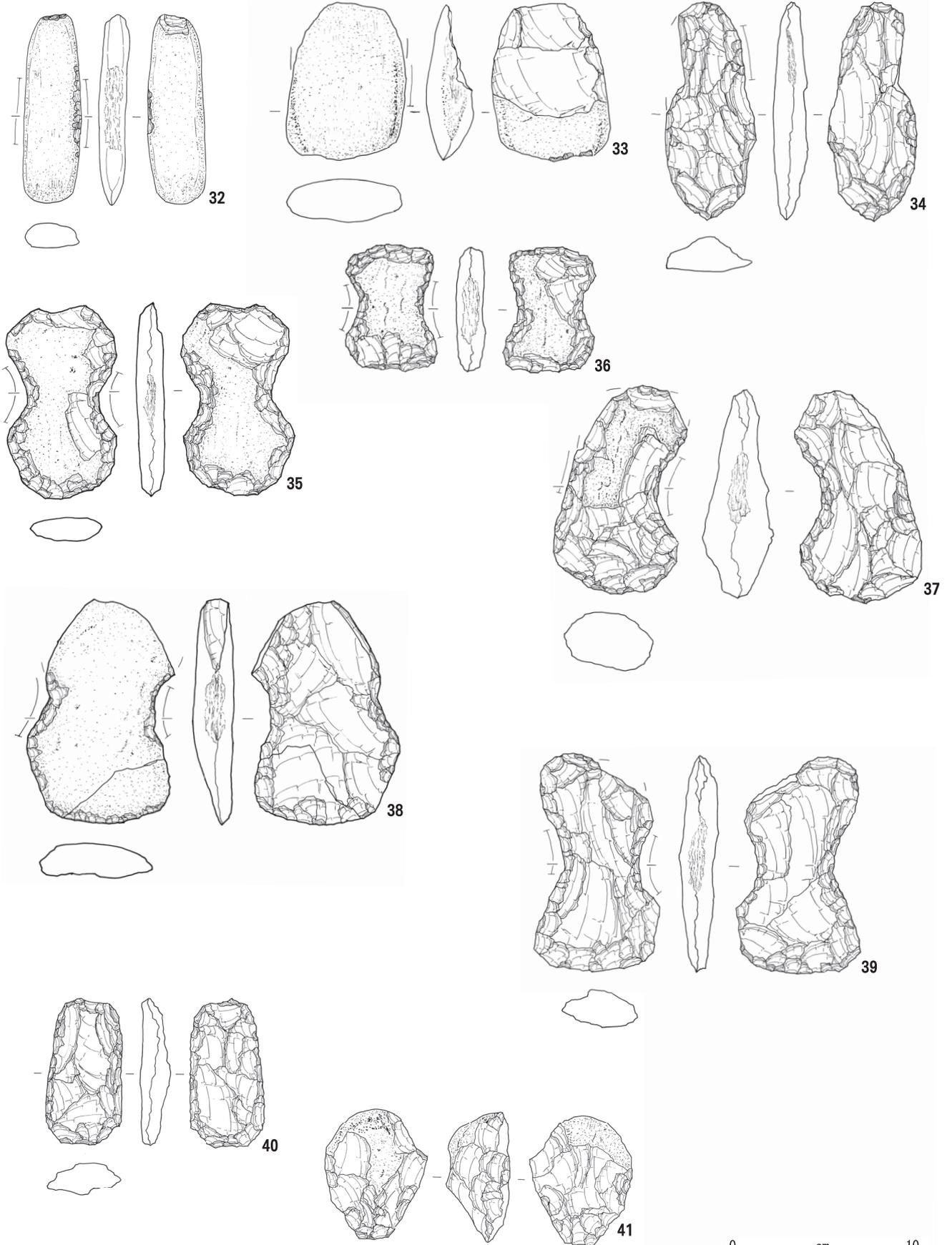
南部からは総数19点の打製石斧が出土し、器形全容が判明する8点を掲載する。なお、欠損品を含め、形態的には分銅形が主体を占め、撥形や短冊形は客体的となる。34は図示し得る中で唯一の撥形である。細身の体部で円刃を呈す。背面は周縁加工が、腹面には主要剥離面を残す粗雑な剥離である。右側縁上部にはスレが観察される。35、36は背腹面に礫面を残す分銅形で、いずれも偏平礫を素材とし、周縁加工、さらには側縁部抉りには顕著なスレが観察される。特に36の寸詰まりの分銅形は本貝塚でも特異性のある平面形態である。37、38は背面に礫面を止め、腹面は主要剥離面を大きく残す、粗製の範疇で捉えられる。37は基部の器厚が薄く、刃部付近で最大厚を測る。38は刃部付近で分割し、そのまま廃棄に至ったものであろう。39も背腹面に主要剥離面を広く残し、周縁加工を施す。分銅形については、礫面や主要剥離面を残す特徴が窺え



第76図 南部出土石器 (1)、その他の出土遺物 (1)



第77図 南部出土石器 (2)、その他の出土遺物 (2)



第78図 南部出土石器 (3)

る。40は小型の短冊形であるが、他形態と同様に背腹面に主要剥離面を止め、周縁加工となる。41は楕円磔を素材に刃縁部を作出した磔器である。背腹面の頭部には磔面を止める。

⑥石皿・凹石・台石・磨石・敲石（第79図42～第82図83）

植物を対象に加工する機能にある磔核石器群を一括する。遺構内の調査を行ったこともあり、最大長15cm超の大型石器も出土し、多機能を複合した石器が主体となった。1類の大型石器は42～50の石皿・凹石・台石である。42は約1/4が残存する石皿・凹石で、背面右側縁に一段高い縁が作出され、中央に向かって緩やかな傾斜となる。背面には2ヵ所、腹面には11ヵ所の凹部が点在する。43は楕円磔に敲打が広がり、末端や側縁には研磨が観察される台石である。背面中央には小径の凹部が伴う。44は方形磔を素材とした石皿・凹石で、背面には深く明瞭な縁が、側面や腹面、さらには頭部にも凹部が作出される使用頻度の高いものである。45は43同様に楕円磔を用いた台石で上半部を欠く。46は右側縁から側面にかけて敲打が、左側縁には研磨が広がり、手持ちの磨石としての機能を併用した台石である。47～52は破片資料で、47は中央に凹部が、またさらに折断された上端面には横位への研磨が顕著である。48、49は石皿や台石としての痕跡が窺え、49は折断面にも縦位への研磨がおよぶ。47、49共には欠損後に手持ちへと転用したものであろう。50は楕円磔の下端と側縁に敲打が観察される。2類のやや中型の部類では51～53がある。51、52は背腹面、及び側面に凹部が広がり、側面には研磨や敲打が付随することから複数機能がみられる。53は器厚のある楕円磔で、背面には縦位の研磨と両側面には敲打が顕著にある。3類では54～61、69～71が該当し、2類に比べやや小振りの楕円磔を素材に磨石や敲石に加え、凹石も含み、多機能にある。54の背腹面には著しい研磨が、また、周縁には敲石としての機能が起因した剥離痕が巡る。55～58は主として側面や末端に研磨や敲打が、59～61は凹部が研磨や敲打と共に残る。69～71は小型楕円磔を素材とし、円磔同様に側面や末端に研磨と敲打が観察される。4類では62～67が棒状磔、68は角磔を素材とし、末端や側面に顕著な痕跡がみられる。62は7号住居跡のピット覆土上面に埋設され、5類の磨石同様の廃棄事例と共通する。5類では72～83の偏平の楕円磔や円磔素材が特徴的である。他地域同様に、多種の形状にあり、その中で72は9号住居跡のピット上面で石棒と、76は8号住居跡出土の石剣と、また、73、81についても炭化材と共にピット上面に置かれた出土状態にあり、いずれも本類の偏平磔素材の磨石・敲石でかつ被熱が見受けられるといった特異性のある廃棄にある。75や80は折断面にも使用痕が観察され、欠損後の再利用であろう。

⑦浮子（84、85）

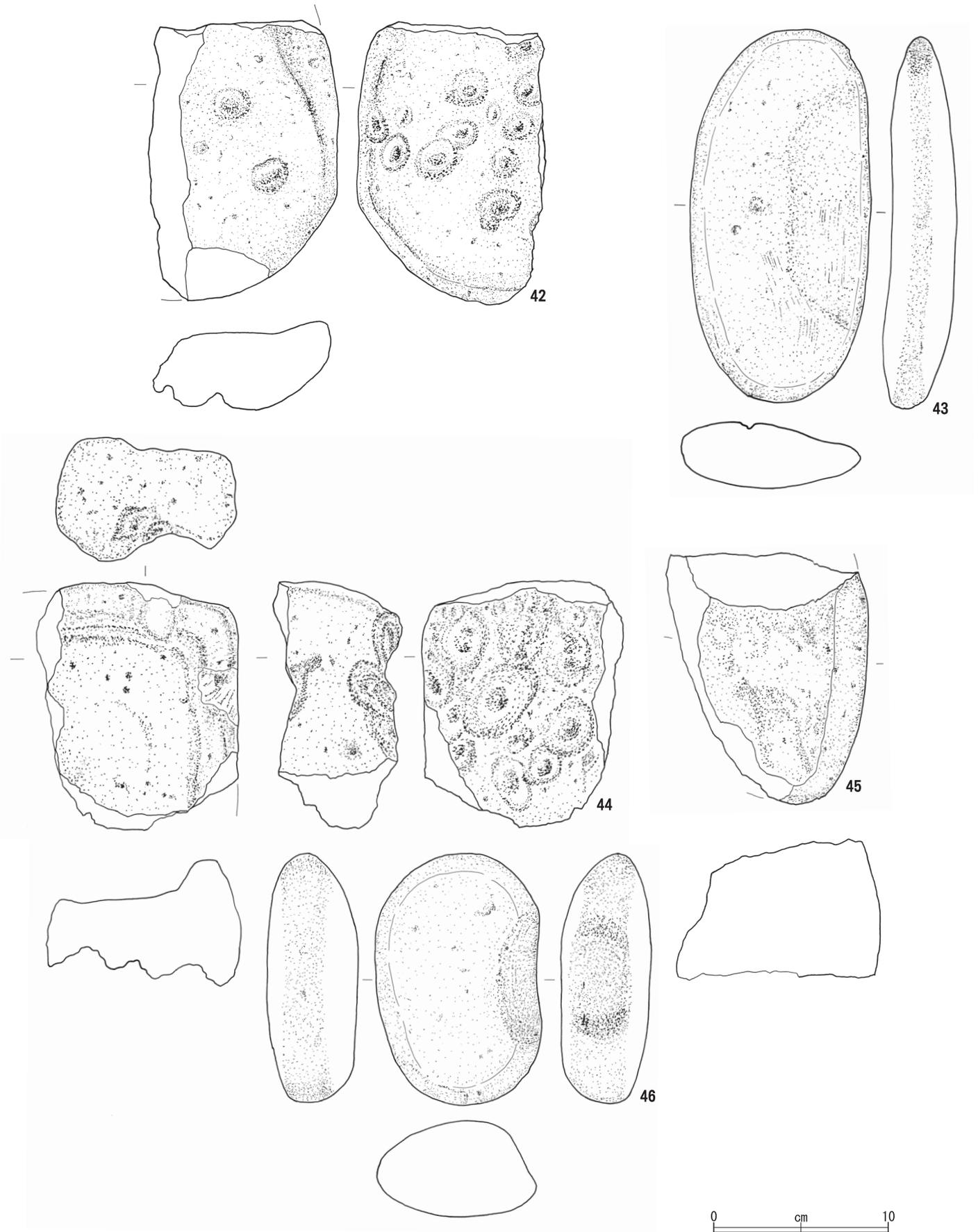
軽石素材の浮子である。84は撥形を呈し、上部に両面穿孔された孔があり、器面は粗雑な研磨整形にある。85は上半部を欠損し、背面片側からの穿孔途上で廃棄へ至っている。84に比べて縁辺への顕著な研磨が観察されるため、製品として利用し、欠損後に再度の穿孔を試みたが、廃棄に至ったと推察される。

⑧石錘（86）

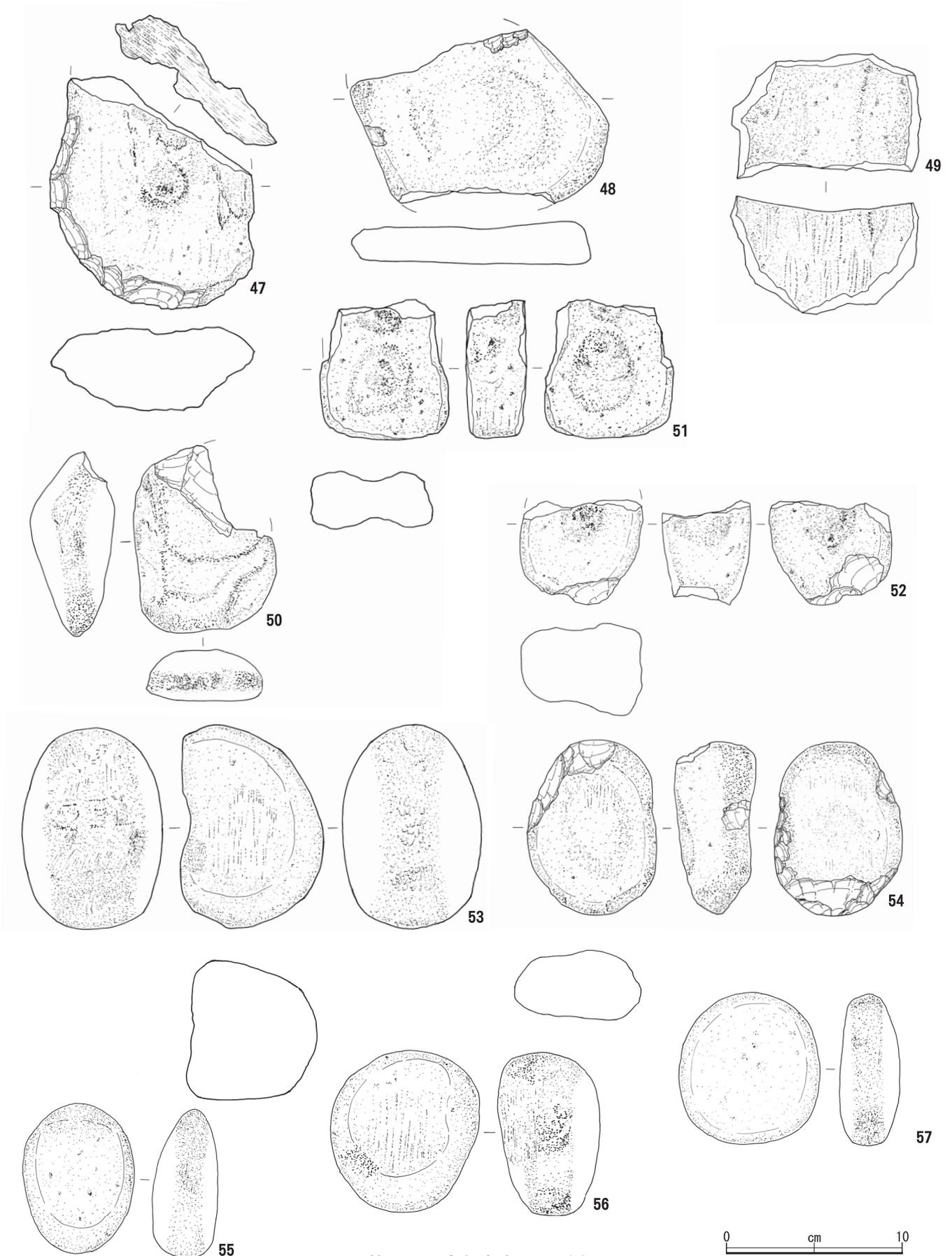
楕円磔を素材に体部中央には一条の線状痕が、下端には敲打と研磨による挟り込みが作出される。器面には研磨や敲打が広がるために、磨石・敲石からの転用であろうか。

⑨土錘・土製円盤（87～98）

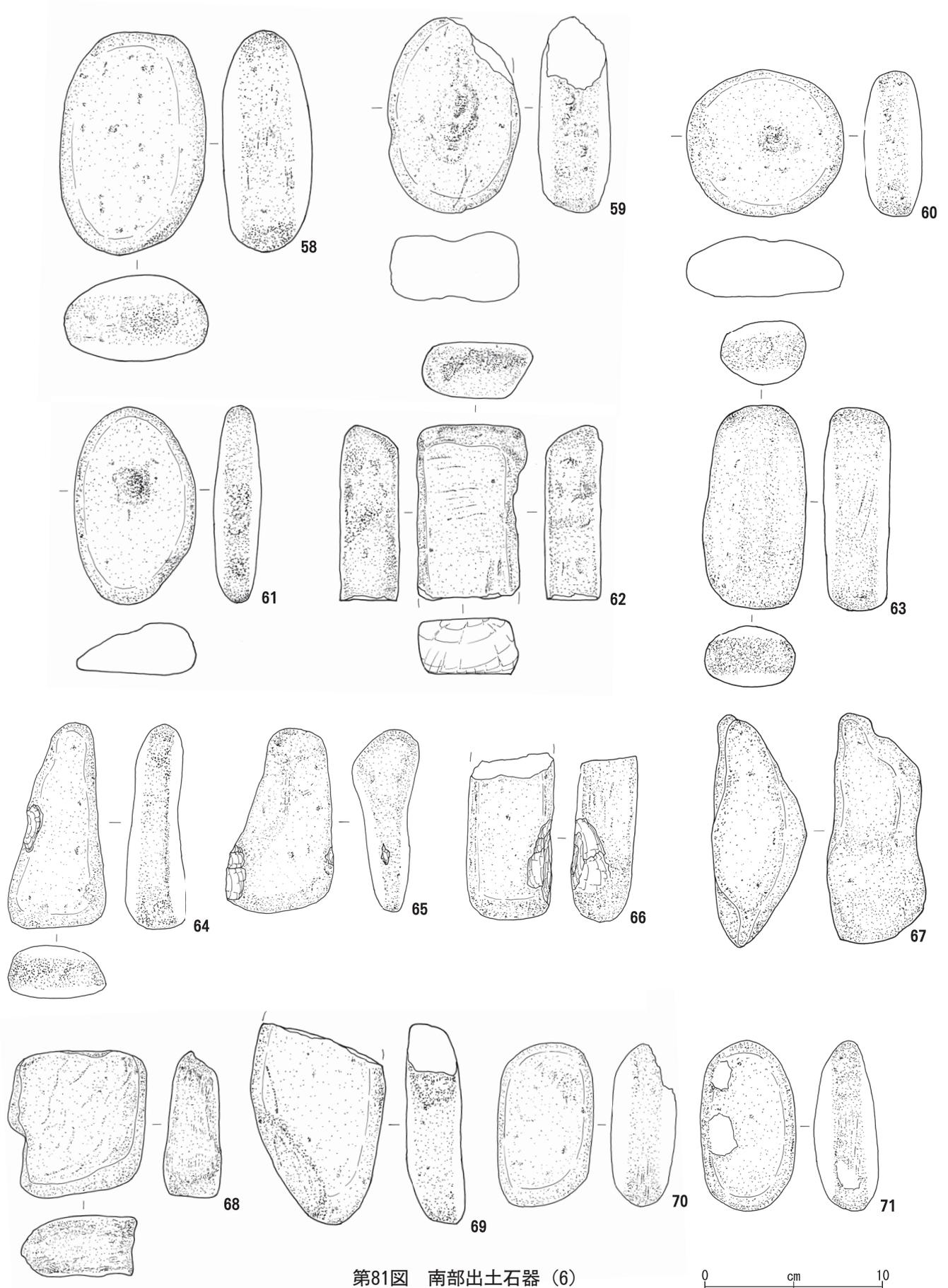
遺構内調査の2、11次調査で計12点が出土した。87は長楕円形の後期前半の土器破片の側面に入念な研磨後、一条の挟り込みが作出され、特異性のある土器片錘である。88も顕著な研磨が、89～93は短辺両端に挟り込みが施され、研磨整形が優勢となる。他地域では長辺、そして片側に挟り込みを作出する例が主体となる中、特に2次調査では短辺側に両側への挟り込みが主体となる。94～96は敲打整形を残し、局部で研磨が施され、特に片側だけの挟り込みとなる。このように11次調査では87、88のように、入念な研磨や凹線状の



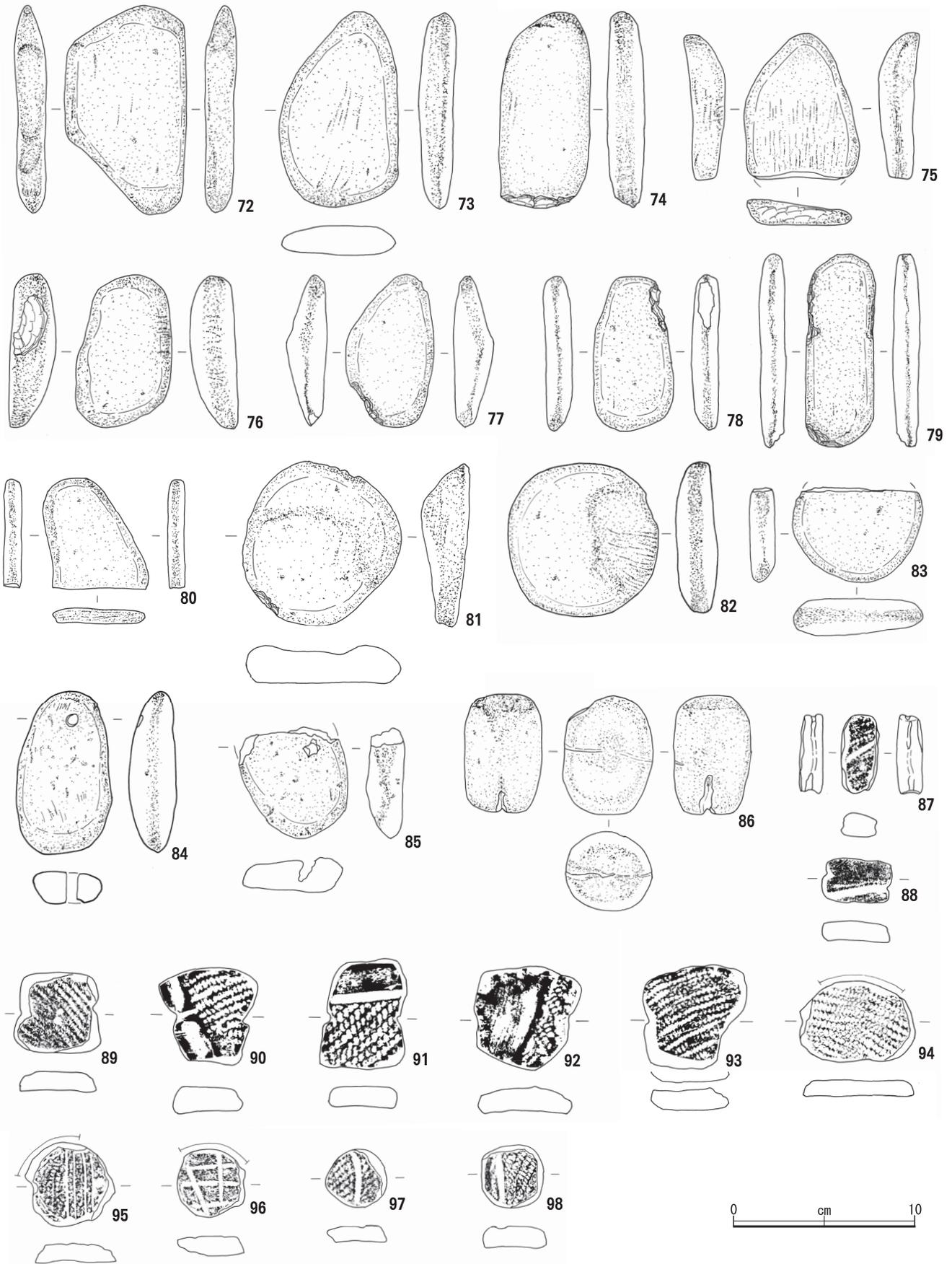
第79図 南部出土石器 (4)



第80図 南部出土石器 (5)



第81図 南部出土石器 (6)



第82図 南部出土石器 (7)、その他の出土遺物 (3)

挟り込み作出と、手の込んだ土錘製作と反した粗雑な製作も混同する特徴がある。97、98は研磨によって円形に整形された土製円盤である。いずれも出土土器の主体にある後期前半の土器を素材とする。

⑩その他の遺物（第76図13～第77図）

土製や石製、さらには骨角器や貝製と様々な素材にある。13は滑石製の垂飾断片であろうか。およそ平面形態は板状の隅丸方形に復元され、器面全体に研磨が施されている。器体中央には両面穿孔で径8mmの孔を穿つ。14、15はベンケイガイを素材とした貝輪で、14は殻表及び内縁側に入念な研磨が施される。一方、15は約1/2程度の残存ではあるが、殻表及び外縁側の局部で研磨が観察され、内縁側は敲打を止める。そのため内縁の穿孔後、研磨整形の初期段階で破損が生じたことによる廃棄であろう。16はタカラガイを素材に、片側の殻口を残し、背面は縦位の半截加工が施される。折断面には線状痕を止めることから研磨整形によるものであろう。およそ垂飾と推測される。以上は2次調査の遺構内出土で、14～16の貝素材の製品はいずれも1号住居跡からである。17～21は鹿角素材の製品である。17は四分割された状態で9号住居跡の覆土下層から散在的に出土した腰飾である。頭部は肥厚した丸棒状を呈し、頭頂部からの穿孔が肥厚下の孔へとブリッジ状に連結する。また、その直下1cmに両面穿孔によって器体を穿つ孔が設けられている。なお、上下の孔間には縦位への浅い窪みが施されている。器体は緩やかに屈曲しており、素材となった鹿角の素材形状を反映したものであろうか、中央では断面円形、先端部は楕円形を呈す。局部で研磨時の擦痕を止めると共に被熱によるススが付着し、黒色化するが、器体中央から上部にかけてベンガラによる赤彩を残す。接合部は鋭利な切断面を呈すことから、意図的に切断し廃棄されたものであろう。18、19も近接した位置から出土した鹿角断片で、いずれも被熱によってススが付着し、黒色化している。18上端は平坦、19は両端共に平坦を呈し、切断行為が窺える。器体には研磨整形が施される。20の器体は素材形状によって緩やかに屈曲する形状を呈すが、先端部を欠損する。総じて縦位の研磨整形が覆い、上端は平坦で、研磨は乏しいために切断のままで未調整である。頭部は体部に比べ器厚を増し、両面穿孔にて円孔を穿つ。体部中央、先端部共に楕円形の断面形を呈す。2次調査の報告では有孔鹿角製品とされたが、器面整形や穿孔により装身具として捉えた。21は鹿角片を素材に先端鋭利に研磨された骨角器で、基部を欠く。突く、刺すといった機能が推測される。被熱により、ススが付着し、黒色化している。22、23は鹿角で、共に上下端は切断以降の調整がなされず、平坦のままである。24はニホンジカの下顎枝骨を素材に、その中位から切断し、2ヵ所で穿孔された、およそ垂飾であろう。上部、下端を欠損するため全容は不明であるが、素材となる下顎枝骨そのものを利用し、器面は粗雑な研磨整形にある。25～29は石棒、石剣である。25は頭部に肥厚部が作出された石棒上半部で、研磨整形による頭部作出と器面整形が顕著である。器体は総じて断面円形を呈し、腹面側のみは住居の焼却行為により被熱し、ススが付着する。26は石器石材として本遺跡での出土例が稀有な黒色頁岩製の石剣である。頭部を欠くが、器体は緩やかに内湾し、総じて断面楕円形に研磨整形されている。非常に緻密な石材を利用しており、特記遺物として製作されたものと窺える。27～29は先端部の残存にあるために全容は不詳ではあるが、直線的な形状や前掲した棒状を呈す磨石とも異なる研磨整形によって石棒の先端部と捉えた。いずれも縦位方向の研磨整形にあり、断面楕円形を呈す。30は下端を欠くが、撥形を呈す軽石製の垂飾である。第82図84に図示した軽石製の浮子同様に1号住居跡からの出土ではあるが、器面整形が精緻であることから垂飾と扱った。穿孔は方形の両面穿孔が穿たれ、孔周囲にも研磨がおよんでいる。31は土製の耳栓である。約1/6程度の残存で、胎土には微量かつ細粒の含有物である。器面は研磨整形が施され、外縁には先端鋭利なヘラ状工具による密な間隔で刻目が巡る。明茶褐色を呈す。

（中野）

第4表(1) 貝塚南部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 次数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
76-1	11	南東1	XVI層群	石鏃	22	18	3	0.8	凹基無茎	チャート	器体が左右非対称を呈す。細かな押圧剥離が器体を覆う。
2	10	南東1	4198-2438	石鏃	25	15	3	1.0	弱凹基無茎	チャート	基部・脚部が左右非対称。
3	10	南東1	表採	石鏃	(16)	14	3	0.5	凹基無茎	チャート	基部欠損、周縁調整加工。
4	11	南東1	A区	石鏃	(26)	14	3	1.2	凸基有茎	チャート	先端部欠損、周縁調整加工。
5	10	南東1	表採	石鏃	20	11	3	0.4	弱凹基無茎	チャート	入念な押圧剥離。
6	10	南東1	表採	石鏃	14	13	3	0.2	平基無茎	チャート	入念な押圧剥離。
7	10	南東1	表採	石鏃	18	(16)	2	0.7	凹基無茎	チャート	周縁加工、主要剥離面の残存、脚部欠損、左側縁に張出。
8	6	南東1	4212-2458	石鏃	(28)	19	3	1.8	凹基無茎	チャート	背面：周縁調整加工、腹面：主要剥離面、縦長剥片素材。未製品。
9	6	南東1	表採	石鏃	22	13	7	1.3	弱凹基	黒耀石	基部周辺の器厚が厚く未製品か。
10	10	南東1	表採	石鏃	24	(17)	5	3.1	弱凹基	瑪瑙	器体半分を欠損、周縁調整加工。
11	6	南東1	表採	石核	44	24	20	27.4	角柱状	チャート	礫面残存から小形角礫を素材。長辺に沿って90°の打面転移。
12	6	南東1	4212-2446	石核	29	36	26	27.7	半円状	チャート	円礫素材、半割面に沿って90°の打面転移。
13	2	南東1	3号土坑	垂飾	(17)	19	10	5.2	方形	滑石	上端欠損、板状素材に8mm程度の孔を穿つ。全面研磨整形。
14	2	南東1	1号住居跡	貝輪	(55)	13	4	2.6		ベンケイガイ	残存約1/6。穿孔部周囲、殻表に研磨整形。
15	2	南東1	1号住居跡	貝輪	(56)	15	3	6.4		ベンケイガイ(左)	残存約1/2。外縁局部に研磨整形、内縁は敲打整形、穿孔後の研磨整形の初期段階か。
16	2	南東1	1号住居跡	垂飾	20	5	2	0.1		タカラガイ	片側の殻口を残し、背面は縦への半載加工を施す。折断面に線状痕のため研磨整形。
77-17	11	南東1	9号住居跡	腰飾	(153)	19	16	17.8		鹿角	器面は研磨整形で局部に整形時の擦痕を止める。計4点が接合し、緩やかに屈曲する。上部から中央にかけて断面円形、下端は楕円形を呈す。頭頂部上端から器体上部の孔へ「L」字状の穿孔、その下端には腹面へ貫通する穿孔あり。4点の接合面は平坦・鋭利であるため意図的な折断・廃棄。被熱により器面は黒色化するが、器面上部から中央にかけて局部でベンガラによる赤色塗彩あり。
18	11	南東1	9号住居跡	装身具断片	(31)	(10)	8	1.5		鹿角	上端折断、下端斜位に折れ。器面は研磨整形。被熱により黒色化。
19	11	南東1	9号住居跡	装身具断片	(24)	(9)	8	1.4		鹿角	両端折断、器面は研磨整形。被熱により黒色化。
20	2	南東1	1号住居跡	装身具	(92)	13	9	4.7		鹿角	先端部分を欠損。角幹を縦に切断、器面に入念な研磨整形を施す。基部側には円形の両面穿孔を穿つ。
21	2	南東1	A-5-4	刺突具	(38)	7	5	0.6		鹿角	研磨整形、基部及び先端部一部欠損、被熱により黒色化。
22	11	南東1	5号住居跡	鹿角	117	25	20	42.2		鹿角	上下端平坦に折断、スス付着。
23	11	南東1	II層群	鹿角	80	32	23	23.1		鹿角	上下端平坦に折断。
24	2	南東1	1号住居跡	垂飾	(69)	37	24	7.2		ニオンジカ下顎枝骨	下顎枝骨中位から切断し、2孔を上下に並べて穿孔。枝骨上部と下端が欠損するため全容は不明。
25	11	南東1	9号住居跡	石棒	(183)	(29)	30	287.8		緑泥片岩	頭部から体部が残存、研磨整形により頭部作出が顕著。器面は縦位の研磨整形。スス付着。
26	11	南東1	8号住居跡	石剣	(212)	(30)	19	194.0		黒色頁岩	頭部欠損、器面全体が研磨整形、緩く湾曲。器体断面は断面形を呈す。※扁平磨石と共存出土。
27	10	南東1	T33-170	石棒	(122)	42	32	241.1		凝灰岩	石材斑晶により肥厚部を基部側を残存と捉えた。研磨整形は顕著。
28	11	南東1	C区	石棒	(99)	(42)	23	134.5		絹雲母片岩	頭部欠損、器面全体に研磨整形、器体断面は楕円形を呈す、被熱。
29	11	南東1	B区	石棒	(91)	(33)	20	87.7		砂岩	頭部欠損、器面全体が研磨整形で直線的。器体断面は断面形を呈す。
30	2	南東1	1号住居跡	垂飾	57	33	8	4.1	撥形	軽石	両面穿孔、器面は研磨整形。
31	10	南東1		耳栓	(45)	13	(10)	5.2	円形	土製	残存1/6、研磨整形、縁辺に刻目が巡る。茶褐色を呈す。
78-32	2	南東1	A6-14-2	磨製石斧	107	32	14	78.0	短冊形	凝灰岩	扁平棒状礫の先端に研磨整形、側面中央にスレが顕著。
33	2	南東1	Aトレンチ1区	磨製石斧	(87)	64	24	183.8	定角式	凝灰岩	基部欠損、礫面に研磨整形が顕著、側面の一部にスレ。蛤刃。
34	2	南東1	2a 6-14-3	打製石斧	122	49	19	121.0	撥形	ホルンフェルス	体部上半の一部を欠損、右側縁にスレ。
35	11	南東1	9号焼土跡	打製石斧	109	61	15	126.3	分銅形	黒色頁岩	背腹面：礫面。挟れ部にスレ。
36	2	南東1	1号住居跡	打製石斧	70	49	14	74.0	分銅形	黒色頁岩	背腹面：礫面。挟れ部にスレ。
37	2	南東1	Sh-1-2	打製石斧	116	70	31	249.2	分銅形	ガラス質黒色安山岩	体部・基部の一部を欠損、背面：礫面残存、挟り部にスレ。
38	11	南東1	XII層群	打製石斧	128	(75)	23	264.7	分銅形	ホルンフェルス	基部一端を欠損、背面礫面、刃部で分割・接合。挟り部にスレ。
39	2	南東1	C-5-3	打製石斧	123	(66)	20	177.1	分銅形	片岩	基部の一部を欠損、挟り部にスレ、背腹面：主要剥離面。
40	2	南東1	C-14-4	打製石斧	83	42	19	65.5	短冊形	ホルンフェルス	背腹面：主要剥離面、刃縁部に調整剥離。
41	6	南東1	4170-2394	礫器	73	58	35	153.5	楕円	ホルンフェルス	楕円礫末端に周縁加工、礫面残存。
79-42	6	南東1	4192-2430	石皿・凹石	(158)	(107)	45	743.2	楕円礫	多孔質安山岩	残存1/4、背面皿状、腹面凹部11ヶ所。
43	2	南東1	Aトレンチ5区	石皿・台石	217	103	38	1163.1	楕円礫	多孔質安山岩	背面に緩く皿状の傾斜、側縁には磨滅。

第4表(2) 貝塚南部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 次数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
44	2	南東1	SB-2底面	石皿・凹石	(142)	(117)	72	416.1	方形	多孔質安山岩	残存約1/4、腹面・側縁・上端面に凹部が作出、破損面以外は使用面。
45	6	南東1	4186-2426	台石	(147)	(128)	79	1899.2	楕円磔	石英斑岩	大型楕円磔素材、側縁のみ磔面残存、器面に敲打。
46	6	南東1	4192-2470	台石・磨石・敲石	145	94	56	1229.6	楕円磔	石英斑岩	器面・側縁研磨、末端敲打。
80-47	6	南東1	4202-2470	台石	(125)	116	48	893.4	楕円磔	礫岩	残存2/3、背腹面敲打、折断面にも横位への研磨。
48	2	南東1	SA-4-2	台石・石皿	(95)	138	23	623.0	扁平楕円磔	泥岩	背腹面に研磨による浅い皿状と敲打。
49	11	南東1	XIV層群	石皿	(67)	(107)	60	548.2	角磔	多孔質安山岩	石皿平坦面の残存、緩い傾斜と折断面に研磨、スス付着。
50	6	南東1	4186-2422	敲石	107	(79)	48	434.2	角磔	ホルンフェルス	残存2/3、側縁研磨・敲打。
51	2	南東1	B444	凹石・磨石・敲石	(80)	73	33	206.9	角磔	多孔質安山岩	残存約1/2、背腹面共に凹部、側縁中央部が敲打で抉れる。
52	11	南東1	VI層群	磨石・敲石・凹石	(59)	68	52	300.3	楕円磔	石英斑岩	残存1/2、背腹面に浅い凹部、側縁研磨、敲打。
53	11	南東1	1号焼土跡	磨石・敲石	118	78	80	1162.1	円磔	石英斑岩	器面：研磨、側縁：研磨、敲打。※灰層出土
54	2	南東1	CトレンチNo.3	磨石・敲石	101	73	40	493.4	楕円磔	凝灰岩	器面全体に研磨・敲打。
55	11	南東1	C区	磨石・敲石	87	63	37	285.7	楕円磔	石英斑岩	側縁：研磨・敲打、被熱。
56	6	南東1	4212-2454	磨石・敲石	93	85	57	642.9	円磔	凝灰岩	器面、側縁研磨・敲打。
57	6	南東1	4212-2458	磨石・敲石	88	81	35	376.1	円磔	石英斑岩	側縁研磨・敲打。
81-58	6	南東1	4192-2470	磨石・敲石	126	82	50	769.5	楕円磔	石英斑岩	側縁研磨・敲打。
59	10	南東1	4196-2436	磨石・敲石・凹石	112	73	40	474.4	楕円磔	石英斑岩	側縁研磨、敲打、背腹面に複数の連続した浅い凹部を作出。
60	10	南東1	T66	磨石・敲石	83	88	34	345.4	円磔	石英斑岩	側縁全体に磨痕・敲打、背面に浅い凹部を作出。
61	11	南東1	9号住居跡	磨石・敲石・凹石	113	68	30	311.8	楕円磔	砂岩	背面に凹部、側縁研磨・敲打、被熱。
62	11	南東1	7号住居跡(P4)	磨石・敲石	(99)	61	33	390.2	角磔	砂岩	端部欠損、器面に研磨痕、側縁、末端に敲打痕、スス付着。※ビット上面に出土
63	11	南東1	8号住居跡(跡)	磨石・敲石	115	58	37	407.2	棒状磔	斑レイ岩	両端部に敲打・研磨、被熱。
64	6	南東1	4212-2454	磨石・敲石	117	55	30	273.2	棒状磔	斑レイ岩	側縁、端部研磨・敲打。
65	10	南東1	4198-2438	磨石・敲石	105	60	37	204.2	棒状磔	砂岩	側縁に研磨・敲打。側縁肥厚部に敲打が集中。
66	10	南東1	4190-2436	磨石・敲石	(95)	47	34	266.9	棒状磔	砂岩	残存1/2、側縁に研磨・敲打、被熱。
67	10	南東1	4196-2442	磨石・敲石	133	54	54	510.4	棒状磔	凝灰岩	側縁局部に研磨・敲打、スス付着。
68	6	南東1	4212-2454	磨石・敲石	83	78	35	358.9	角磔	チャート	側縁研磨・敲打。
69	2	南東1	S	磨石・敲石	(107)	75	32	348.1	楕円磔	砂岩	残存1/2、器面全体に研磨・敲打。
70	10	南東1	T30-150	磨石・敲石	93	53	37	246.1	楕円磔	石英斑岩	側縁に研磨、敲打、被熱。
71	11	南東1	IX層群	磨石・敲石	96	53	35	265.4	楕円磔	砂岩	側縁：研磨、敲打、被熱により器面剥落。
82-72	11	南東1	9号住居跡	磨石	117	68	17	216.9	扁平磔	砂岩	器面中央・側縁に研磨が顕著、被熱。※石棒とビット上面で共伴出土。
73	11	南東1	9号住居跡	磨石	110	65	17	176.8	扁平楕円磔	砂岩	側縁、器面平坦に研磨、被熱、スス付着 (No.14石棒共伴)。
74	6	南東1	4212-2458	磨石・敲石	110	50	21	163.3	扁平棒状磔	砂岩	側縁研磨、末端敲打。
75	11	南東1	E区	磨石・敲石	80	61	20	130.4	扁平楕円磔	砂岩	器面：縦位研磨、側縁：研磨と敲打、末端折断面に研磨。
76	11	南東1	8号住居跡	磨石	84	53	25	163.1	楕円磔	硬砂岩	側縁に研磨、被熱、※石剣共伴。
77	6	南東1	4198-2454	磨石・敲石	96	49	23	112.4	扁平楕円磔	砂岩	側縁研磨・敲打、器面に擦痕。
78	11	南東1	B区	磨石	86	45	15	63.3	扁平楕円磔	砂岩	側縁研磨、末端：敲打。
79	6	南東1	4192-2426	磨石・敲石	108	38	14	96.4	扁平棒状磔	粘板岩	側縁研磨、末端敲打。
80	6	南東1	4212-2450	磨石	61	52	10	43.9	扁平楕円磔	細粒砂岩	器面全体ならびに折断面にも研磨。
81	11	南東1	9号住居跡	磨石	92	87	26	223.1	扁平円磔	砂岩	器面・側縁に研磨、被熱 (No.14石棒共伴)。
82	11	南東1	9号住居跡	磨石	88	83	22	218.4	扁平円磔	砂岩	器面・側縁に研磨 (※炭化材と共伴出土)。
83	11	南東1	9号住居跡	磨石	(63)	72	21	89.6	扁平円磔	砂岩	残存2/3、側縁研磨、被熱。
84	2	南東1	1号住居跡	浮子	92	53	19	30.2	楕円磔	軽石	長軸上に6mmの孔を両面穿孔で穿つ。器面は粗雑な研磨整形。
85	2	南東1	SA-10-8	浮子	(62)	61	19	21.8	扁平楕円磔	軽石	残存1/2、背面側からの片面穿孔、未貫通。周縁は研磨整形。
86	10	南東1	表採	石錘	68	50	43	222.5	楕円磔	石英斑岩	側縁磨痕・敲打により、磨石から石錘への転用。末端に敲打による挟り込み、体部中央に一条の線状痕。
87	11	南東1	?層群	土錘	44	20	13	-	楕円形	土製	研磨整形、側縁全周に凹線が巡る。
88	11	南東1	C区	土錘	24	38	10	-	隅丸長方形	土製	研磨整形、短辺両側に挟り。
89	11	南東1	C区	土錘	44	47	9	-	隅丸台形	土製	一部研磨整形、両辺に浅い挟り。
90	2	南東1	不明	土錘	58	56	12	-	不整形	土製	長辺両側に挟り、研磨・敲打整形。
91	2	南東1	不明	土錘	55	43	10	-	隅丸長方形	土製	長辺両側に挟り、研磨整形。
92	2	南東1	不明	土錘	51	50	13	-	不整形	土製	長辺両側に浅い挟り、研磨・敲打整形。
93	2	南東1	不明	土錘	54	54	9	-	不整形	土製	長辺片側に浅い挟り、研磨・敲打整形。
94	11	南東1	XV層群	土錘	45	61	9	-	楕円形	土製	敲打整形、一部に研磨整形、短辺に浅い挟り。
95	11	南東1	IX層群	土錘	46	45	9	-	略円形	土製	敲打整形、一辺に挟り。
96	11	南東1	IX層群	土錘	38	37	10	-	略円形	土製	敲打整形、一部に研磨整形、浅い括れ部には擦れ。
97	11	南東1	XV層群	土製円盤	33	34	8	-	円形	土製	研磨整形。
98	11	南東1	9号住居跡	土製円盤	35	35	12	-	円形	土製	研磨整形。

第5節 貝塚西部の調査

(1) 調査の概要

本貝塚の中でも、貝塚西部は現地表面上で最も貝殻が密に散布する。5次調査では貝塚西部に2m四方の試掘坑を11ヵ所設定し、貝層の範囲確認を行ったところ、貝層範囲についてはボーリング調査と一致する結果が得られた。なお、貝塚を保存すべく、試掘坑の掘削は貝層の上面で止めたため、遺構の所在までは確認し得ていない。

(2) 遺物

1. 出土土器 (第84図)

1～3は堀之内1式土器で、1は縦位区画線を挟み多条のレンズ状文を描出する。2は口縁部から逆U地文が、3は頸部からレンズ状文が垂下する。4、6、7は堀之内2式土器で、4は胴部上半に三角文が横位に展開する。6は口縁文に鎖状の微隆帯が巡り、7は横長の蛇行沈線が垂下する。5は単節縄文RLが器面を覆うもので、堀之内式土器の範疇で捉えられる。

(森山)

2. 出土石器・その他の遺物 (第87図)

5次調査では計5点の石器の出土に止まり、その内訳は打製石斧、石皿・凹石・磨石類と、器種、量共に大変乏しい。貝塚各地点と同様に礫核素材の石器が主たる器種となり、その組成をはじめ形態的な特徴をも表層的には示すものとなった。

①打製石斧 (8)

刃部のみが残存である。緻密な黒色頁岩を素材に刃縁部に細かな調整加工が施され、円刃を呈す。

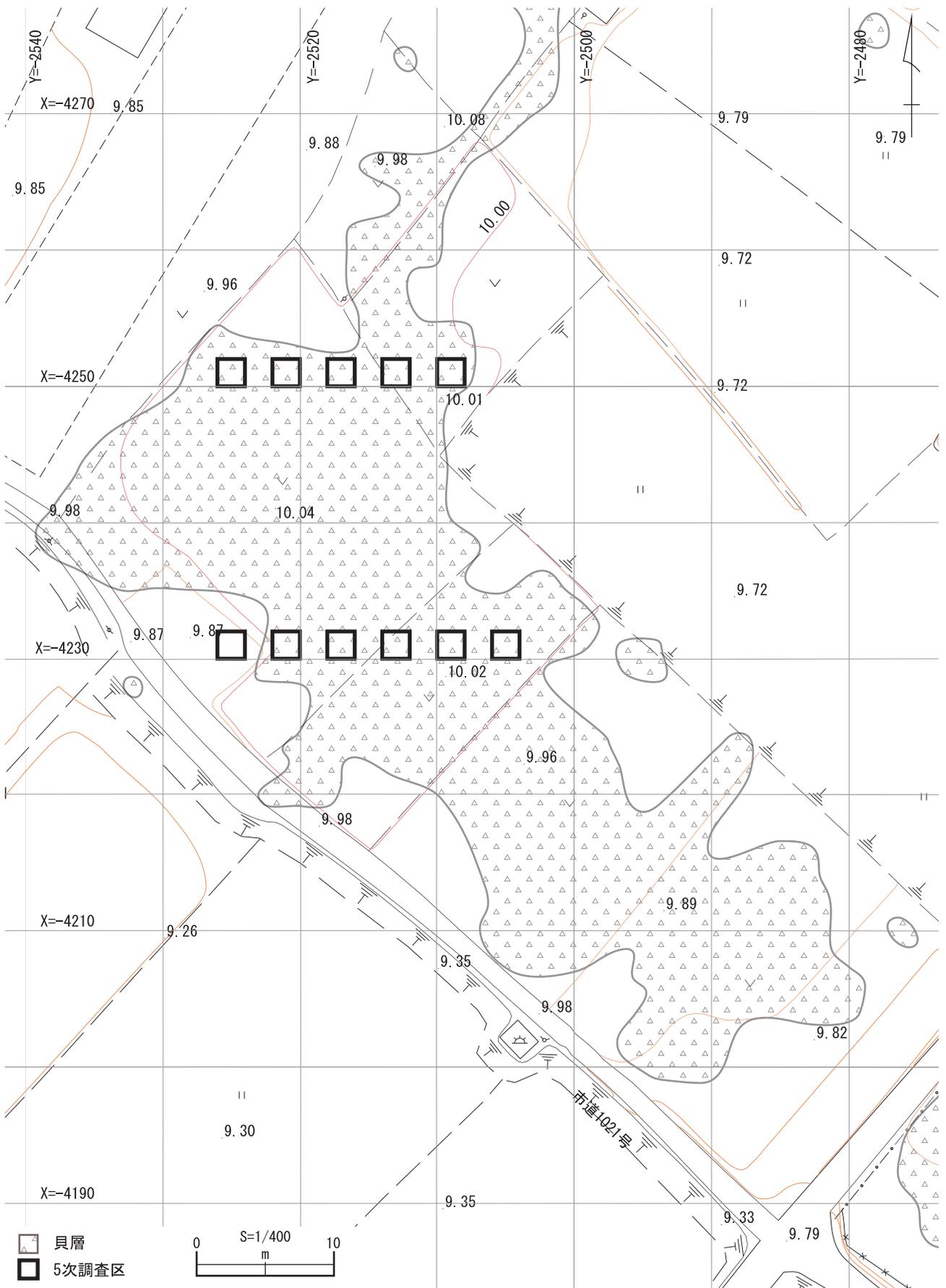
②石皿・凹石・磨石・敲石 (9～12)

僅か4点ではあるが、各地点で表徴する植物加工具が出土している。1類では9の円礫素材の石皿・凹石があり、背面は中央への傾斜が作出され、腹面には凹部が8ヵ所で並ぶ。また、側面にも凹部がみられ、使用頻度は高い。3類では10の楕円礫の体部や末端に研磨と敲打が広がる。そして5類の11、12は各調査でも出土した偏平礫を素材とした磨石である。4は器体及び右側縁が、5は縁辺が主たる使用面となる。この他、剥片石器ではチャート製の細片が1点に止まった。

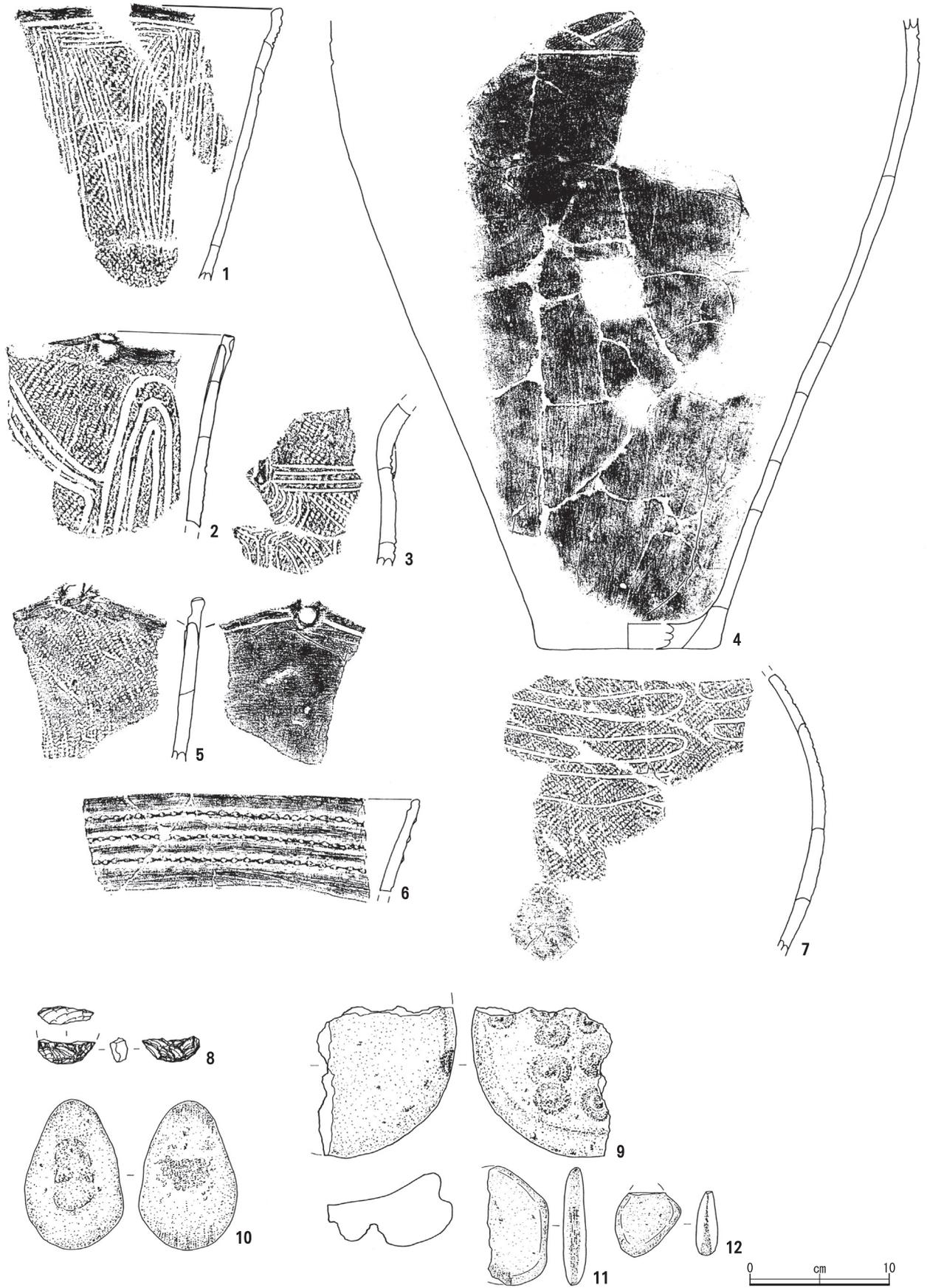
(中野)

第5表 貝塚西部 その他の出土遺物観察表

No.	調査 次数	位置	出土地点	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量	形態	素材	備 考
					(mm)						
84-8	5	西部	4252-2510	打製石斧	(18)	(40)	(13)	6.8	—	黒色頁岩	刃部のみ残存。細かな調整剥離。
9	5	西部	4252-2510	石皿・凹石	(107)	(99)	46	468.7	円礫	多孔質安山岩	残存約1/6、背面は皿状、腹面に凹部8ヵ所、側面にも凹部の作出。
10	5	西部	4232-2510	磨石・敲石	107	70	61	559.9	楕円礫	砂岩	器面全体に研磨、敲打。
11	5	西部	4232-2506	磨石	85	(43)	17	68.5	偏平楕円礫	粘板岩	残存1/2、周縁研磨、被熱。
12	5	西部	4232-2514	磨石	(46)	46	15	30.9	偏平楕円礫	粘板岩	端部欠損、縁辺研磨。



第83図 西部調査区全体図



第84図 西部5次調査出土遺物